

金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)

発掘調査報告書Ⅱ

1998年3月

石川県立埋蔵文化財センター

金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)

発掘調査報告書II

1998年3月

石川県立埋蔵文化財センター



金沢城遠景



調査区 全掘全景



上層遺構



S X01



SX01下部



平成6年度調査区全景



S X401

例 言

- 1 本書は、金沢城跡石川門前の発掘調査報告書 第2分冊である。同報告書第一分冊は、平成8年度に刊行している（平成9年3月刊行）。
- 2 発掘調査は、シンボルロード寺町今町線道路整備事業に伴うもので、平成4年度から同6年度にわたっておこない、石川県土木部の依頼を受けて県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。なお、石川橋建設にかかる埋蔵文化財発掘調査事業は、本報告の刊行をもって完了する。
- 3 発掘調査は、県立埋蔵文化財センター調査第一課が担当した。平成4年度は、調査第一課長 平田天秋の指導の下に主事 伊藤雅文と嘱託 四柳正彦が担当した。平成5年度は、調査第一課長 中島俊一の指導の下に伊藤と主事 金山哲也が担当した。平成6年度は、伊藤と主任主事澤田まさ子が担当した。詳しい調査経過については、第1分冊を参照されたい。
- 4 現地調査に際し、石川県土木部には街中の調査ということもあって種々の便宜を図って頂いたほか、工事平行の発掘調査なので工事側との調整もおこなっていただいた。工事請負業者にも発掘調査にご協力を頂いた。ともに感謝いたします。
- 5 遺物などの資料整理の多くは、社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。担当は、河村裕子を班長として小林直子、黒田和子、小屋玲子、川崎由紀子、竹内弘美、耕西由美子である。直営作業には、洪伸子、島崎博美、海野美香子、尾山隆範、竹田明弘の諸氏、諸嬢の補助を得て、伊藤が統括した。
- 6 本書の編集は伊藤がおこない、執筆分担は目次に明記した。広岡公夫（富山大学理学部教授）、大澤正己、鈴木三男（東北大学理学部教授）、四柳嘉章（漆器文化研究所）、濱岡伸也（県立歴史博物館）の諸先生には、出土品の分析や関連研究において玉稿を賜った。深謝する次第である。なお、広岡先生の熱残留磁気年代測定の結果は、本センター「年報15号」（1995）を再録した。
- 7 本報告書の構成は、第一分冊で報告した内容のうち、基本的な部分を再録編集した。特に基礎資料となるような遺物については、全て掲載し、挿図番号のあとに遺物番号をつけることで個体番号を明示する。また、図版挿図番号は第一分冊のそれを引き継いでいる。なお、第9章結語は、第1分冊と第2分冊をあわせて考察をおこなった。
- 8 本調査の概要報告を平成6年3月に刊行しており、概要の記述内容と本報告書と異なるところは、本報告書をもって訂正するものとする。また、報告書第1分冊と報告書内容の違いがある場合もまた、本報告をもって訂正するものとする。シンボルロード整備事業にかかる発掘調査報告書として車橋門跡発掘調査報告を平成8年3月に刊行しており、第1分冊と併せて参考にしていただきたい。
- 9 現地調査や資料整理、報告書作成にあたり、以下の方々にご教示いただいたりお世話になりました。深謝いたします。（順不同）

久保智康・小野正敏・中井 均・加藤理文・松井一明・福田弘光・中野節子・垣内光次郎・
藤田邦雄・増山 仁・滝川重徳・濱岡伸也・荒木澄子・田村昌弘・藤沢良祐・藤 則雄・
宮本直哉・宮田進一・久田正弘・木戸雅寿・芝田 悟

報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうあと いしかわもんまえどばし はくつちょうさほうこくしょ							
書名	金沢城跡 石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書							
副書名								
巻次	第2分冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	伊藤雅文・広岡公夫・鈴木三男・能城修一・四柳嘉章・大澤正巳・濱岡伸也							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921 石川県金沢市米泉4丁目133番地 (Tel076-243-7692)							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かなざわじょうあと 金沢城跡	かなざわしまるのうち 金沢市丸の内	17201	01215	36° 33' 42"	136° 39' 56"	1992. 10.2~ 1994、 8.4	3,100	都市計画道路 寺町今町線道 路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金沢城跡	城跡	安土桃山時代から江戸時代	鑄造遺構 鍛冶遺構 資材置場 工房の区画柵列	中国陶磁器 瀬戸美濃 志野 鑄造・鍛冶工具	<p>金沢城の前身は浄土真宗の加賀の本山である金沢御堂であったといわれているが、同時代の鑄造・鍛冶遺構を確認した。鑄造炉1基、鍛冶炉2基で、さらに資材置場を1箇所、工房のほぼ全容近くを発掘したことになる。豊富な陶磁器類とともに木製品と金属製品、その原材料など16世紀末の基準資料となる。</p> <p>検出遺構群は金沢御堂へ通じる土橋の背後の陰湿な土地に立地しており、遺構の状況から金沢御堂の工房的性格を想定している。</p> <p>また、理化学的分析を取録するとともに、第1分冊の内容も包括し、基準となるべき資料を再録しているほか、金沢城修築の文献からの考察や金沢における近世初頭の陶磁器の考察もある。</p>			

目 次

第1章 近世の調査概要	1
第1節 調査区の設定と百間堀の基本土層	1
a) 調査区の設定	1
b) 沈床園調査区の土層	3
第2節 盛土の構成と土橋の変遷	4
a) 盛土の構成	4
b) 金沢御堂期の土橋	6
c) 江戸初期の土橋	6
d) 江戸前期の土橋	7
e) 江戸後期の土橋	9
コラム—百間堀の石垣	9
第3節 木樋と辰巳用水	10
a) 木樋の構造	10
b) 木樋の年代と辰巳用水	12
第4節 主要出土遺物	15
a) 沈床園調査区出土遺物	15
コラム—わらじが出た	21
b) 石川門調査区表土等出土遺物	21
c) 石川門調査区盛土中出土遺物	25
コラム—発掘ニュース	39
第5節 小節	42
第2章 白鳥堀調査区の調査	52
第1節 白鳥調査区の土層関係	52
a) 調査区の設定と調査の経過	52
b) 基本土層と遺構面の状況	57
第2節 平成5年度調査	58
a) 遺構面の把握と遺物出土状況	58
b) 鑄造鍛冶遺構関係	60
c) 井戸	67
d) 調査区南端溝状遺構落ち込みと柵列	68
e) 溝	73
f) 土坑	74
第3節 平成6年度調査	74
a) 調査の概要	74
b) 第1遺構面	74
c) 第2遺構面	76
d) 第3遺構面	76
e) 第4遺構面	77
第4節 小結	78
第3章 白鳥堀調査区出土遺物	80
第1節 輸入陶磁器	80
a) 染付け	80

b) 青磁	8 0
c) 白磁	8 0
d) 陶器	8 0
第2節 国産陶磁器	8 2
a) 青磁・灰釉・鉄釉	8 2
b) 茶器	8 2
c) 鉄釉皿	8 2
d) 鉢・壺・甕	8 2
e) 播鉢	8 2
第3節 土器・土製品	8 5
a) 土器	8 5
b) 土製品	8 7
第4節 瓦類	8 7
第5節 漆塗製品	8 8
第6節 木製品	9 1
第7節 石製品	1 0 9
第8節 金属製品	1 1 2
a) 鉄製品	1 1 2
b) 銅製品	1 1 2
c) 鉄原材料	1 1 2
d) 銅原材料	1 1 2
e) 銭貨	1 1 7
f) 鍛冶関係遺物	1 1 7
第9節 小結	1 2 7
第4章 白鳥堀調査区検出炉跡考古地磁気年代測定	1 2 9
第5章 出土木製品の樹種同定と考察	1 3 7
第6章 出土漆塗製品の漆膜分析から見た研究	1 6 1
第7章 白鳥堀調査区出土鉍滓の理化学的分析	1 7 9
第8章 絵図、古文献から見た金沢城石川門前の研究	2 2 4
第9章 結語	2 3 4
第1節 問題の所在	2 3 4
第2節 遺物整理の方法と問題点	2 3 4
第3節 金沢における近世初頭の陶磁器	2 3 6
第4節 結語	2 4 7

図 版 目 次

- PL. 50 白鳥堀調査区 1 : 上層全体 / 上層全体 / SE01周辺
- PL. 51 白鳥堀調査区 2 : 上層SX02・03・04 / SE01・SX01 / 北側への地形の下がり
- PL. 52 白鳥堀調査区 3 : 下層全体 / 下総と北側の地形の下がり / SX02・03周辺
- PL. 53 白鳥堀調査区 4 : 上層SX01とSE01、溝 / SX01炉全景 / SX02たちわり土層
- PL. 54 白鳥堀調査区 5 : SX01と下部が炉の鉋滓SX01炉壁の杭 / SX 1 炉壁粘土の除去
- PL. 55 白鳥堀調査区 6 : SX01下部の炉 / SX01下部の炉 1 / SX01下部の炉 2
- PL. 56 白鳥堀調査区 7 : SX01下部の炉全景
- PL. 57 白鳥堀調査区 8 : SX02上面 / SX02と03
- PL. 58 白鳥堀調査区 9 : SX02全体 / SX02全体 / SX02全体
- PL. 59 白鳥堀調査区10 : SX02断面 / SX02断面 / SX02・03の断面 / SX02断面
- PL. 60 白鳥堀調査区11 : SX03上面 / SX03炉全景 / SX03炉全景
- PL. 61 白鳥堀調査区12 : SX03全景 / SX03全景 / SX03炉拡大
- PL. 62 白鳥堀調査区13 : SX03炉の断面 / SX03断面 / SX03断面 / SX03断面
- PL. 63 白鳥堀調査区14 : SX03断面 / SX03断面 / SX03遺物出土状況
- PL. 64 白鳥堀調査区15 : SX03断面 / SX03下面 / SX03下部
- PL. 65 白鳥堀調査区16 : 拡張区 / 土留め杭出土状況 / 土留め杭出土状況
- PL. 66 白鳥堀調査区17 : 調査区土層断面 / 調査区土層断面 / 調査区土層断面
- PL. 67 白鳥堀調査区18 : 調査区土層断面 / 調査区土層断面 / 調査区土層断面 / 調査区土層断面
- PL. 68 白鳥堀調査区19 : SE01とSX01 / SE01全景 / SE01石組み内の石臼
- PL. 69 白鳥堀調査区20 : SE01石組み / SE01半裁 / SE01掘り方
- PL. 70 白鳥堀調査区21 : SE02・03南の溝 / 土台石と柱 / SK01
- PL. 71 白鳥堀調査区22 : SD01とSD02 / SD01石列 / SD01石列 / SD01杭と石列
- PL. 72 白鳥堀調査区23 : 調査区東側整地土 / 東側整地土と杭列 / 土層断面
- PL. 73 白鳥堀調査区24 : 下駄 / 櫛 / 曲物 / 漆器椀 / 漆器椀 / 漆器皿 / 土鈴 / 金具 / 小柄
- PL. 74 白鳥堀調査区 (H 6) 1 : 金沢城遠景 / 完掘全景 / 調査区土層
- PL. 75 白鳥堀調査区 (H 6) 2 : 第 1 遺構面 / 第 1 遺構面 / SD01と土師器皿
- PL. 76 白鳥堀調査区 (H 6) 3 : 柱穴 / 落ち込み / 第 2 遺構面石列
- PL. 77 白鳥堀調査区 (H 6) 4 : 第 3 遺構面全景 / SX301 / SX401上面と第 3 遺構面の関係
- PL. 78 白鳥堀調査区 (H 6) 5 : 第 4 遺構面全景 / SX401検出上昇 / SX401
- PL. 79 白鳥堀調査区 (H 6) 6 : SX401 / SX401 / SX401土層
- PL. 80 白鳥堀調査区 (H 6) 7 : SX401の構造 / SX401の構造 / SX401下部
- PL. 81 白鳥堀調査区 (H 6) 8 : SX401土層 / SX401土層 / SX401完掘
- PL. 82 白鳥堀調査区 (H 6) 9 : SX402 / 卯辰山からの眺め
- PL. 83 沈床園調査区出土遺物 1
- PL. 84 沈床園調査区出土遺物 2
- PL. 85 石川門調査区表土・近代遺構出土遺物
- PL. 86 石川門調査区盛土 1・2 出土遺物
- PL. 87 石川門調査区盛土 3 出土遺物 1 : 染め付け / 陶器
- PL. 88 石川門調査区盛土 3 出土遺物 2 : 陶器
- PL. 89 石川門調査区盛土 3 出土遺物 3 : 陶器 / 土器
- PL. 90 石川門調査区盛土 3 出土遺物 4 : 土器
- PL. 91 石川門調査区盛土 3 出土遺物 5 : 土器
- PL. 92 石川門調査区盛土 3 出土遺物 6 : 瓦

- PL. 93 石川門調査区盛土3出土遺物7：瓦
- PL. 94 石川門調査区盛土3出土遺物8：瓦
- PL. 95 石川門調査区盛土4・5・木樋出土遺物
- PL. 96 白鳥堀調査区出土遺物1
- PL. 97 白鳥堀調査区出土遺物2
- PL. 98 白鳥堀調査区出土遺物3
- PL. 99 白鳥堀調査区出土遺物4
- PL. 100 白鳥堀調査区出土遺物5
- PL. 101 白鳥堀調査区出土遺物6
- PL. 102 白鳥堀調査区出土遺物7
- PL. 103 白鳥堀調査区出土遺物8
- PL. 104 白鳥堀調査区出土遺物9
- PL. 105 白鳥堀調査区出土遺物10
- PL. 106 白鳥堀調査区出土遺物銭貨

挿 図 目 次

Fig. 230	調査区の平面位置と土層断面位置図 (1/1000)	1
Fig. 231	沈床園調査区作業風景	1
Fig. 232	沈床園調査区江戸初期の堀底と金沢御堂の池底 (1/200)	2
Fig. 233	沈床園の堆積	3
Fig. 234	平成4年度調査区で検出した包含層	4
Fig. 235	シンボルロード整備事業関係発掘調査で出土した旧石器など	4
Fig. 237	石川門調査区沈床園調査区と白鳥堀調査区土層全体図 (1/200)	5
Fig. 238	兼六園調査区土層全体図 (1/200)	5
Fig. 239	金沢御堂の土橋と江戸初期の土橋 (1/400)	7
Fig. 240	石川門調査区盛土3土層模式図 (1/80)	8
Fig. 241	江戸前期の土橋 (1/400)	8
Fig. 242	百間堀石垣根石	9
Fig. 243	百間堀石垣胴木と杭	10
Fig. 244	石川門調査区木樋出土位置図 (1/200)	10
Fig. 245	石川門調査区木樋出土状況図 (1/40)	10
Fig. 246	木樋調査作業風景	11
Fig. 247	木樋横断面	11
Fig. 249	石川門調査区木樋遺構出土遺物	12
Fig. 250	辰巳用水石管下の土坑	12
Fig. 251	木樋と辰巳用水石管の平・断面模式図 (1/600、1/150)	13
Fig. 252	沈床園調査区第4層出土遺物	14
Fig. 253	沈床園調査区4～5層出土遺物	15
Fig. 254	沈床園調査区5層出土遺物(木器)	16
Fig. 255	沈床園調査区第6・7層出土遺物	17
Fig. 256	沈床園調査区第6層出土遺物(木器)	17
Fig. 257	沈床園調査区第7層出土遺物(漆器・木器)	18
Fig. 258	沈床園調査区第7層出土遺物	19
Fig. 259	沈床園調査区第7層出土のわらじ	21
Fig. 260	石川門調査区表土・近代遺構出土遺物	22

Fig. 261	石川門調査区表土出土遺物	2 3・2 4
Fig. 262	石川門調査区盛土1・2出土遺物	2 6
Fig. 263	石川門調査区盛土3出土遺物(染め付け)	2 7
Fig. 264	石川門調査区盛土3出土遺物(唐津1)	2 9
Fig. 265	石川門調査区盛土3出土遺物(唐津2)	3 0
Fig. 266	石川門調査区盛土3出土遺物(唐津3、瀬戸美濃他1)	3 1
Fig. 267	石川門調査区盛土3出土遺物(瀬戸美濃他2、焼塩壺)	3 2
Fig. 268	石川門調査区盛土3出土遺物(土師器皿1)	3 3
Fig. 269	石川門調査区盛土3出土遺物(土師器皿2)、盛土3・4出土遺物(金属器)	3 4
Fig. 270	石川門調査区盛土3出土遺物(軒丸瓦1)	3 5
Fig. 271	石川門調査区盛土3出土遺物(軒丸瓦2)	3 6
Fig. 272	石川門調査区盛土3出土遺物(軒平瓦)	3 7
Fig. 273	石川門調査区盛土3出土遺物(軒平瓦・特殊瓦)	3 8
Fig. 274	発掘ニュース 第7号	3 9
Fig. 275	石川門調査区盛土4出土遺物(染め付け)	4 0
Fig. 276	石川門調査区盛土4出土遺物	4 1
Fig. 277	石川門調査区盛土5出土遺物(染め付け)	4 1
Fig. 278	石川門前土橋と現地形合成図(1/600)	4 2
Fig. 279	石川門前土橋変遷図(1/400)	4 3
Fig. 280	百間堀通り試掘位置と土層柱状図(1/3000)	4 5
Fig. 281	崩落した調査区壁面	5 2
Fig. 282	白鳥堀調査区位置図(1/4,000)	5 2
Fig. 283	白鳥堀調査区土層断面図(1/80)	5 3・5 4
Fig. 284	白鳥堀調査区全体図(1/80)	5 5・5 6
Fig. 285	白鳥堀調査区遺物出土分布図	5 9
Fig. 286	白鳥堀調査区調査風景	6 0
Fig. 287	白鳥堀調査区SX01実測図(1/40)	6 1
Fig. 288	白鳥堀調査区SX01下部構造(1/40)	6 2
Fig. 289	白鳥堀調査区SX02・03上面実測図(1/40)	6 3
Fig. 290	白鳥堀調査区SX02・03完掘実測図(1/40)	6 4
Fig. 291	白鳥堀調査区SX02・03アゼ実測図(1/40)	6 5
Fig. 292	白鳥堀調査区SX02・04間締め土の範囲(アミカケ部分)	6 6
Fig. 293	白鳥堀調査区南端落ち込み実測図(1/40)	6 8
Fig. 294	白鳥堀調査区SE01上層遺構周辺図(1/40)	6 9・7 0
Fig. 295	白鳥堀調査区SE01下層遺構周辺図(1/40)	7 1・7 2
Fig. 296	SD01土層	7 3
Fig. 297	調査風景	7 4
Fig. 298	調査風景	7 4
Fig. 299	白鳥堀調査区(平成6年度)各遺構面全体図(1/80)	7 5
Fig. 300	白鳥堀調査区(平成6年度)SK301実測図(1/40)	7 6
Fig. 301	白鳥堀調査区(平成6年度)SX402実測図(1/40)	7 6
Fig. 302	白鳥堀調査区(平成6年度)SX401実測図(1/20)	7 7
Fig. 303	SX01炉内鉍滓	7 8
Fig. 304	白鳥堀調査区出土遺物(染付け、青磁、白磁)	8 1
Fig. 305	白鳥堀調査区出土遺物(陶器)	8 3

Fig. 306	白鳥堀調査区出土遺物 (播鉢)	8 4
Fig. 307	白鳥堀調査区出土遺物 (土師器皿・土製品)	8 5
Fig. 308	白鳥堀調査区出土遺物 (瓦 1)	8 6
Fig. 309	白鳥堀調査区出土遺物 (瓦 2)	8 7
Fig. 310	白鳥堀調査区出土遺物 (漆器 1)	8 9
Fig. 311	白鳥堀調査区出土遺物 (漆器 2)	9 0
Fig. 312	白鳥堀調査区出土遺物 (下駄 1)	9 2
Fig. 313	白鳥堀調査区出土遺物 (下駄 2)	9 3
Fig. 314	白鳥堀調査区出土遺物 (下駄 3)	9 4
Fig. 315	白鳥堀調査区出土遺物 (工具等)	9 7
Fig. 316	白鳥堀調査区出土遺物 (容器 1)	9 9
Fig. 317	白鳥堀調査区出土遺物 (容器 2、板材その他)	1 0 0
Fig. 318	白鳥堀調査区出土遺物 (板材 2、柱等)	1 0 3
Fig. 319	白鳥堀調査区出土遺物 (大型木器 1)	1 0 4
Fig. 320	白鳥堀調査区出土遺物 (大型木器 2)	1 0 5
Fig. 321	白鳥堀調査区出土遺物 (大型木器 3)	1 0 6
Fig. 322	白鳥堀調査区出土遺物 (石製品 1)	1 1 0
Fig. 323	白鳥堀調査区出土遺物 (石製品 2)	1 1 0
Fig. 324	白鳥堀調査区出土遺物 (金属器 1)	1 1 3
Fig. 325	白鳥堀調査区出土遺物 (金属器 2)	1 1 4
Fig. 326	白鳥堀調査区出土遺物 (金属器 3)	1 1 5
Fig. 327	白鳥堀調査区出土遺物 (金属器 4)	1 1 6
Fig. 328	白鳥堀調査区出土遺物 (鍛冶関係)	1 1 7
Fig. 329	白鳥堀調査区出土銭貨 1	1 1 8
Fig. 330	白鳥堀調査区出土銭貨 2	1 1 9
Fig. 331	白鳥堀調査区出土銭貨 3	1 2 0
Fig. 332	白鳥堀調査区出土遺物の数量	1 2 8
Fig. 333	西南日本の考古地磁気永年変化 (広岡、1977) と金沢城白鳥堀地区炉跡SX01、03、07の考古地磁気測定結果	1 3 5
Fig. 334	越前平等岳の谷 1・2 号窯の考古地磁気 (広村・吉村、1989による)	1 3 5
Fig. 335	樹種同定顕微鏡写真 (1)	1 5 1
Fig. 336	樹種同定顕微鏡写真 (2)	1 5 2
Fig. 337	樹種同定顕微鏡写真 (3)	1 5 3
Fig. 338	樹種同定顕微鏡写真 (4)	1 5 4
Fig. 339	樹種同定顕微鏡写真 (5)	1 5 5
Fig. 340	樹種同定顕微鏡写真 (6)	1 5 6
Fig. 341	樹種同定顕微鏡写真 (7)	1 5 7
Fig. 342	樹種同定顕微鏡写真 (8)	1 5 8
Fig. 343	樹種同定顕微鏡写真 (9)	1 5 9
Fig. 344	樹種同定顕微鏡写真 (10)	1 6 0
Fig. 345	金沢城白鳥堀・沈床園調査区出土漆器実測図	1 6 3
Fig. 346	北陸・中～近世漆器の編年 (2)	1 7 3
Fig. 347	北陸・中～近世漆器の編年 (3)	1 7 4
Fig. 348	漆器塗膜層顕微鏡写真	1 7 5
Fig. 349	漆器塗膜層顕微鏡写真	1 7 6

Fig. 350	漆器塗膜層顕微鏡写真	1 7 7
Fig. 351	漆器塗膜層顕微鏡写真	1 7 8
Fig. 352	鉄滓と含鉄滓の顕微鏡組織	1 9 5
Fig. 353	鉄滓の顕微鏡組織	1 9 6
Fig. 354	鉄滓の顕微鏡組織	1 9 7
Fig. 355	鉄滓の顕微鏡組織	1 9 8
Fig. 356	鉄滓の顕微鏡組織	1 9 9
Fig. 357	鉄器半製品の顕微鏡組織	2 0 0
Fig. 358	鉄器半製品の顕微鏡組織	2 0 1
Fig. 359	鉄器半製品の顕微鏡組織	2 0 2
Fig. 360	鉄器（釘）の顕微鏡組織	2 0 3
Fig. 361	再結合滓の顕微鏡組織	2 0 4
Fig. 362	鉄滓屑（黒鉛化木炭）の顕微鏡組織	2 0 5
Fig. 363	鉄滓屑、鉄塊屑の顕微鏡組織	2 0 6
Fig. 364	鉄滓屑、再結合滓屑、鍛造剥片の顕微鏡組織	2 0 7
Fig. 365	鉄器半製品のマクロ組織	2 0 8
Fig. 366	含鉄（KSJ-2）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 0 9
Fig. 367	鉄滓（KSJ-3）の鉱物相の特性X線像	2 1 0
Fig. 368	鉄製品（KSJ-12-1）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 1 1
Fig. 369	鉄製品（KSJ-12-2）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 1 2
Fig. 370	鉄器半製品（KSJ-13）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 1 3
Fig. 371	鉄器半製品（KSJ-14-1）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 1 4
Fig. 372	鉄器半製品（KSJ-14-2）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 1 5
Fig. 373	鉄器（釘）（KSJ-15-1）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 1 6
Fig. 374	鉄器（釘）（KSJ-15-2）鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値	2 1 7
Fig. 375	含鉄（KSJ-2）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 1 8
Fig. 376	鉄滓（KSJ-3）の鉱物相のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 1 8
Fig. 377	鉄製品（KSJ-12、その1）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 1 9
Fig. 378	鉄製品（KSJ-12、その2）鉄中非金属介在物（ヴスタイト：FeO）のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 1 9
Fig. 379	鉄製品（KSJ-13）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 2 0
Fig. 380	鉄製品（KSJ-14、その1）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 2 0
Fig. 381	鉄製品（KSJ-14、その2）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 2 1
Fig. 382	鉄製品：釘（KSJ-15、その1）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 2 1
Fig. 383	鉄製品：釘（KSJ-15、その2）鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	2 2 2
Fig. 384	加州金沢之城図（東京大学附属図書館）	2 2 6
Fig. 385	加州金沢城図（金沢市立図書館）	2 2 7
Fig. 386	寛文八年金沢町絵（金沢市立図書館）図	2 2 8
Fig. 387	金沢城図（金沢市立図書館）	2 3 0

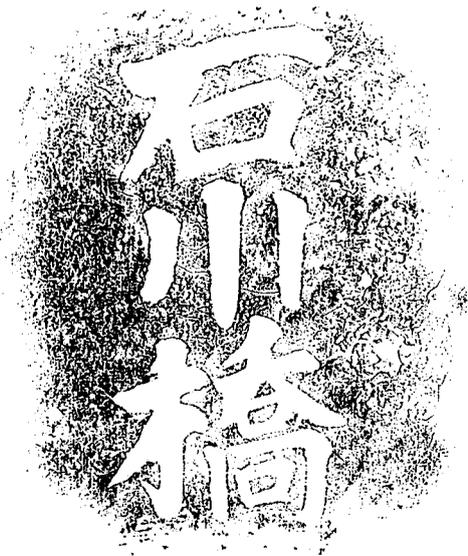
Fig. 388	金沢城中惣絵図（石川県立歴史博物館）	2 3 0
Fig. 389	白鳥堀調査区出土土器の構成	2 3 6
Fig. 390	沈床園調査区第6・7層出土土器の構成	2 3 7
Fig. 391	江戸町跡出土土器の構成	2 3 8
Fig. 392	車橋門跡出土土器の構成	2 4 0
Fig. 393	盛土3出土土器の構成	2 4 1
Fig. 394	盛土4出土土器の構成	2 4 2
Fig. 395	沈床園調査区4層出土土器の構成	2 4 3
Fig. 396	天正頃の土器組成比率	2 4 5
Fig. 397	寛永頃の土器組成比率	2 4 6

表 目 次

Tab. 1	沈床園調査区5層出土木器属性表	1 6
Tab. 2	沈床園調査区6層出土木器属性表	2 0
Tab. 3	沈床園調査区7層出土漆器・木器属性表	2 0
Tab. 4	沈床園調査区7層出土木器属性表	2 0・2 1
Tab. 5	石川門調査区・沈床園調査区出土土器観察表	4 0～5 1
Tab. 6	白鳥堀調査区出土漆器属性表 (Fig. 310)	8 8
Tab. 7	白鳥堀調査区出土漆器属性表 (Fig. 311)	9 0
Tab. 8	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 312)	9 5
Tab. 9	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 313)	9 5
Tab. 10	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 314)	9 5
Tab. 11	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 315)	9 8
Tab. 12	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 316)	1 0 1
Tab. 13	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 317)	1 0 2
Tab. 14	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 318)	1 0 7
Tab. 15	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 319)	1 0 8
Tab. 16	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 320)	1 0 8
Tab. 17	白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 321)	1 0 8
Tab. 18	白鳥堀調査区出土石器属性表 (Fig. 322)	1 0 9
Tab. 19	白鳥堀調査区出土石器属性表 (Fig. 323)	1 0 9
Tab. 20	古銭計測一覧	1 1 9
Tab. 21	白鳥堀調査区出土金属器属性表 (Fig. 324)	1 2 1
Tab. 22	白鳥堀調査区出土金属器属性表 (Fig. 325)	1 2 1
Tab. 23	白鳥堀調査区出土金属器属性表 (Fig. 326)	1 2 2
Tab. 24	白鳥堀調査区出土金属器属性表 (Fig. 327)	1 2 3
Tab. 25	白鳥堀調査区出土遺物観察表	1 2 4～1 2 6
Tab. 26	金沢城跡SX01のNRMの磁化測定結果	1 3 1
Tab. 27	金沢城跡SX01の25Oeの磁化測定結果	1 3 1
Tab. 28	金沢城跡SX01の50Oeの磁化測定結果	1 3 1
Tab. 29	金沢城跡SX01の75Oeの磁化測定結果	1 3 1
Tab. 30	金沢城跡SX03のNRMの磁化測定結果	1 3 2
Tab. 31	金沢城跡SX03の25Oeの磁化測定結果	1 3 2
Tab. 32	金沢城跡SX03の50Oeの磁化測定結果	1 3 2

Tab. 33	金沢城跡SX03の75Oeの磁化測定結果	1 3 2
Tab. 34	金沢城跡SX05のNRMの磁化測定結果	1 3 3
Tab. 35	金沢城跡SX05の25Oeの磁化測定結果	1 3 3
Tab. 36	金沢城跡SX05の50Oeの磁化測定結果	1 3 3
Tab. 37	金沢城跡SX05の75Oeの磁化測定結果	1 3 3
Tab. 38	金沢城跡SX07のNRMの磁化測定結果	1 3 3
Tab. 39	金沢城跡SX07の25Oeの磁化測定結果	1 3 3
Tab. 40	金沢城跡SX07の50Oeの磁化測定結果	1 3 3
Tab. 41	金沢城跡炉跡の考古地磁気測定結果	1 3 6
Tab. 42	金沢市石川橋・辰巳用水出土木材の樹種	1 4 4
Tab. 43	金沢城跡石川橋・辰巳用水遺跡出土木製品の樹種	1 4 5 ~ 1 4 9
Tab. 44	沈床園調査区における漆器の下地と上塗色・器形分類	1 7 0
Tab. 45	白鳥堀調査区における漆器の下地と上塗色・器形分類	1 7 1
Tab. 46	供試材の履歴と調査項目	1 8 0
Tab. 47	供試材の化学組成	1 8 2
Tab. 48	木炭の性状	1 8 2
Tab. 49	廃鉄器再生時の鍛冶滓成分変動	1 9 4
Tab. 50	日本木炭の性状の一例	1 9 4

調 查 報 告



第1章 近世の調査概要

第1節 調査区の設定と百問堀の基本土層

a) 調査区の設定

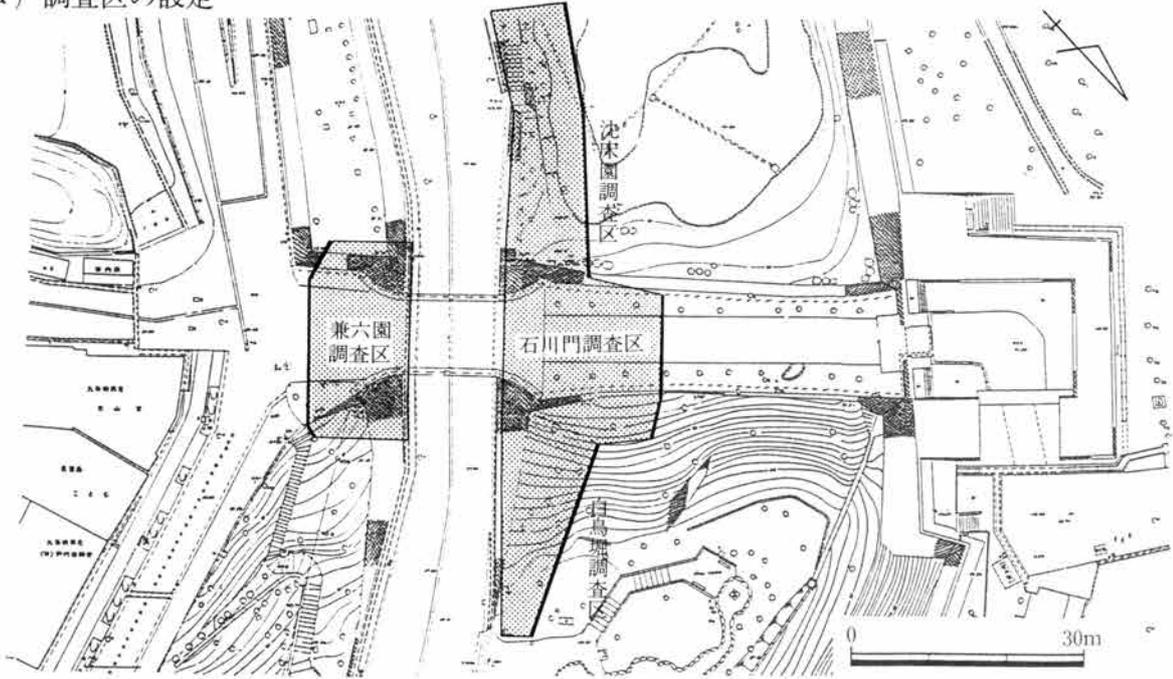


Fig. 230 調査区の平面位置と土層断面位置図 (1/1,000)

コンクリート製橋梁「石川橋」を挟んで、石川門側と兼六園側に分かれ、後者を兼六園調査区とした。前者は、工事に伴う掘削の関係から、沈床園、土橋通路部分、土手部分の3ヶ所に分かれ、それぞれ、沈床園調査区、石川門調査区、白鳥堀調査区とした。ただし、新石川橋橋梁掘削に伴う調査区域は石川門調査区とし、白鳥堀調査区として主としてあつかったのは、土手下部の道路拡張部分調査時のみである。

本報告書で第1分冊の報告を再録するのは、金沢御堂時代の遺構の時期と重ならないものの、土橋が金沢御堂の時代に構築されて江戸時代に継承される。そして、さらに発展的に使われており、金沢城そして金沢御堂で重要な施設であったことが推測される。したがって、本報告でもその歴史的展開をふまえる必要がある。また、先の第1分冊では遺物写真を載せることができなかったので、年代の指標となるような、そして問題となるような遺物は、本書でできる限り実測図面も再録した。

第1分冊の報告であつかったのは、沈床園調査区と、石川門調査区、兼六園調査区の3箇所、白鳥堀調査区は金沢御堂期の包含層直上、すなわち土橋の盛土までであった。なお、第1分冊は、近世近代編として編集したものの、沈床園調査区の6層以下、石川門調査区の盛土6が16世紀後半の金沢御堂期に属するものであるが、記述の便宜上そこで報告した。したがって、詳しい調査成果は第1分冊を参照していただきたい。



Fig. 231 沈床園調査区作業風景

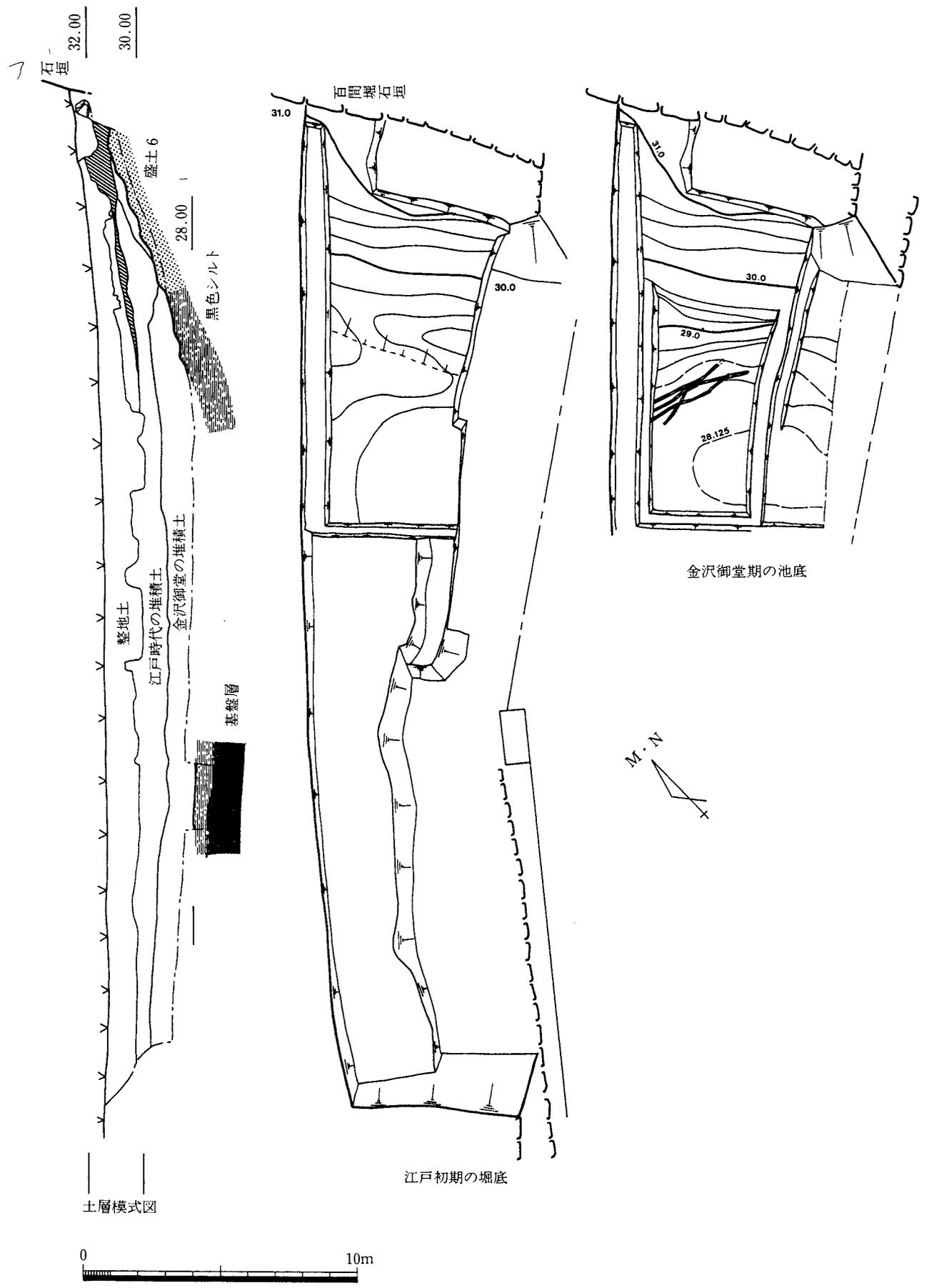


Fig. 232 沈床園調査区江戸初期の堀底と金沢御堂の地底 (1/200)

b) 沈床園調査区の土層

沈床園調査区では、近世百間堀の堆積土を確認した。そして、高さ2 mくらいの土層の中に16世紀から現代にいたるまでの土の堆積を知ることができ、ある意味で、石川門前の歴史を如実に示すものである。

整地土の下に百間堀の堆積層である泥土を2層確認した。石垣際には、石垣を外から保護する盛土層がみられ、百間堀堆積土の下層の上部にまで及んでいる。つまり、百間堀石垣際を埋め立てているのであり、石垣普請の足場の可能性がある。その下には灰色粘質土からシルト層があり第4層とし、金箔土師器皿をはじめとする多くの遺物が出土している。江戸初期の盛土層に対応する。土橋際には砂礫土を中心とした層があり、第5層とした。ここからの遺物は、第4層の遺物群よりも古い様相を示すが、これは年代的な古さでなくて、下層の遺物群が攪乱によって上層にあがってきた状況と考えられる。

これ以下の層は金沢御堂期の堆積土で、第6、7、7層下とした。土橋際の土層は複雑で層の把握が困難であるのに対し、2 m程離れると自然堆積状態となっている。つまり、黒灰色粘質土と灰色シルト土が2～3 cmの単位で互層になっており、夏場に葦などの植物が生い茂り冬場に枯れるというサイクルの堆積である。これは7層でみられ、その厚みが20cm強あるので、最低十数年の堆積となろうか。7層下には砂層が薄くみられ、土橋際で10 mm強、離れるにしたがって薄くなり線として確認できるにとどまる。それ以下は、地山としての谷の堆積土（黒色シルト）がみられる。谷の最下部は、調査区よりもやや南、すなわち現在の石川橋道路付近と考えられる。

盛土6の土橋では版築された板の痕跡を確認し、その下部に戸室石の採石層がある。7層下は、採石層によって遮断された谷水の最初の堆積土と考えられ、工事に流れ出た土砂かもしれない。それ以降急速に泥土の堆積が始まり、土橋際はその建設関係の足場として攪乱された結果と考えている。すなわち、意外と早い谷水の流れがあったのではないかと想像され、盛土作業と平行して水かさが増してくる様子が想像される。



Fig. 233 沈床園の推積

第2節 盛土の構成と土橋の変遷

a) 盛土の構成

近代以前の土橋の盛土は6つの段階を確認した。金沢御堂期の土橋の盛土を盛土6とした。織田方によって金沢御堂が落とされ、その土橋の上に嵩上げされたが、その時の盛土を盛土5とした。盛土5上面に木樋が埋め込まれ、その上に盛土2～4によって嵩上げされた。これは寛永頃の施工と考えている。その後、盛土1が更に盛り上げられたが、はっきりとした年代はわからない。概ね18世紀と19世紀の交わりの頃と考えている。

土橋は、金沢城と兼六園の間の谷地形を遮断する構造物である。谷地形は、原始古代から存在し、その埋積土中から、弥生時代の土器、古墳時代の管玉や古代の土器などの出土があった。また、盛土中からもナイフ形石器が出土していることからわかるように、周囲に旧石器時代の遺跡の存在も予想される。谷地形は、かなり湿潤な状況であったと思われ、チョコレート色のような黒色粘性土が厚いところで2m近くもボーリング調査によって確認されている。谷に繁茂する草木類の堆積土、有機質土と考えられる。白鳥堀調査区断面に見えていた黒色粘性土の花粉分析を金沢大学教授藤則雄先生（当時）がおこなった。その結果、ササ類・落葉系ドングリ＝コナラ類・常緑系ドングリ＝カシ類・シデ類・ハンノキ・スギ・サワグルミ・ヤナギ類・タデ・コウホネ類・ススキヨシ類・アカマツ・モミ、の花粉が確認されたという結果を頂いた。



Fig. 234 平成4年調査区で検出した包含層

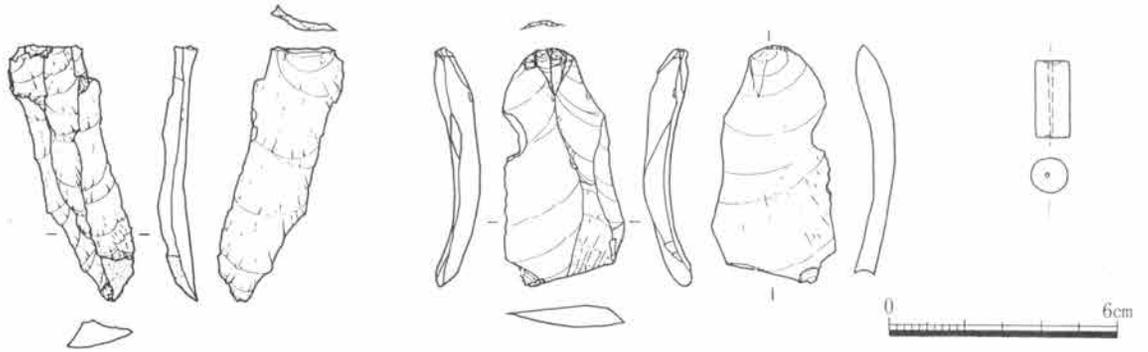


Fig. 235 シンボルロード整備事業関係発掘調査で出土した旧石器など

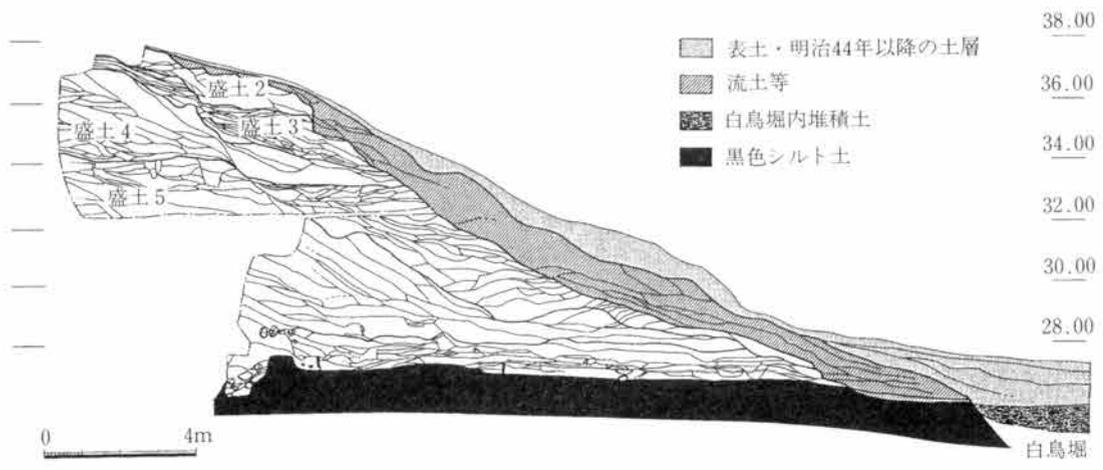
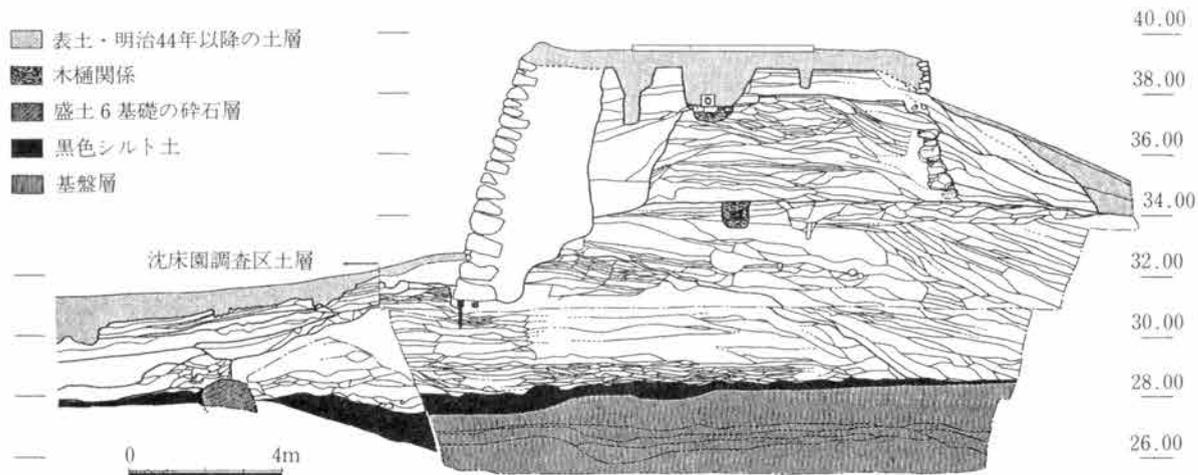


Fig. 237 石川門調査区白鳥堀調査区土層全体図 (1/200) と 石川門調査区沈床園調査区土層全体図 (1/200)

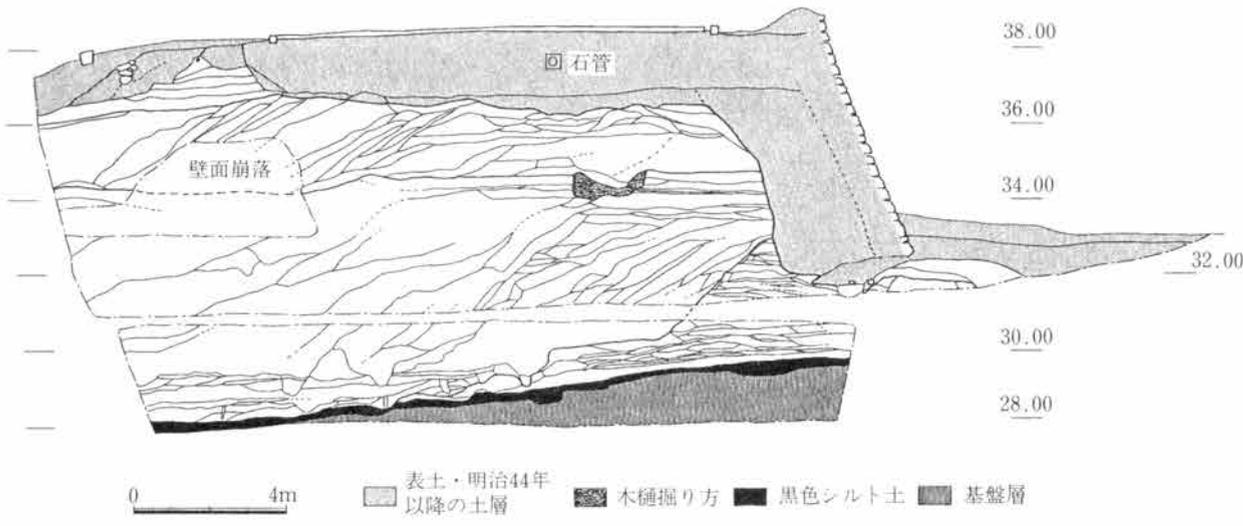


Fig. 238 兼六園調査区土層全体図 (1/200)

b) 金沢御堂期の土橋

本報告でいう金沢御堂期の創建年代は、天文15年(1546)の説に負っている。それは、最近この説が最も有力視されていることによる他、金沢城・金沢御堂の調査報告書でもこの説を支持しているからである。金沢御堂の土橋盛土は、これ以降の土橋盛土と全く異なって、版築技法で作られているという特徴ある盛土である。この下部には、戸室石の碎石層が確認され、軟弱地盤の基礎として機能しているが、沈床園調査区のみで確認できた。

戸室石の碎石は、谷筋の最も深い部分に入れられたと考えられ、しかも作業第1段階として、版築をおこなう部分の軟弱地盤部分に施されたと考えられる。沈床園調査区で確認できた層の厚みは90cmもあるが、谷の堆積土である黒色シルト土中にめり込んだ状態で、さらに厚いようである。層中に碎石以外の混ざりがないことから、一気に入れて作業地盤を強化したものである。版等の盛土は、碎石層から約70cmの高さで垂直に立ち上がる。これは版築作業のための土留め板の痕跡で、最下部で留め板の痕跡を確認した。

沈床園調査区で確認した版築は、非常に堅牢で作業単位も2～3cmと非常に小さく丁寧な作業である。黄色粘質土と黒色シルト土の混合土、および黄色粘質土が使われている。戸室石碎石の上の版築には黄色粘質土を多用している。これは南側からの漏水を防ぐ意図がある。盛土に使われている土は、この二つの他に黒色シルト土単独でも使われ、基本的に3種類の土を用いている。混合の割合によって、土質に変化をもたらしている。

それ以降の作業段階は、石川門調査区で観察した。第2段階は谷の堆積土上に小さな単位の3種類の土が入れられ、1m程の高さまで盛り上げられている。版築のように特別に突き固められた状態ではなく、モッコ単位でおかれて叩き締められたような状態である。第3段階のそれより上は、2m強の高さまで、黒色シルト中心の盛土で盛り上げられている。特に土橋でも背後にあたる白鳥堀側で顕著であるが、沈床園側の当該部分では反対に小さな単位の盛土となっているようである。また、石垣下も幅3mで黄色系の土が多用されて堅く作っており、盛土を行う作業路のような機能であろうか。

第4段階として、土橋通路部分となる土橋上面の盛土をおこない、少なくとも1mの高さを確認した。これは第1段階のような細かく突き固めたもので、黄色系の土でも粘質土と砂質土を使い分けながら版築をおこなっている。土留め板の痕跡はみられない。しかし、現在の石垣より内側で斜め方に走る不連続の薄い層がみられ、北側が壁になっている。これはある意味で版築作業の一形態を示すものであろう。第1分冊参照。

これら一連の作業によって、土橋上に人馬の通行を可能にし、南側に水をたたえることもできたのである。この土橋による沈床園調査区第7層が最も早い堆積土であり、その年代が16世紀後半の年代を示すので、この水の溜まりが伝説にある金沢御堂にあったといわれる「蓮池」に相当する可能性が極めて高い。土橋の背後には、大規模な雨落ち溝と柵列を白鳥堀調査区で確認した。しかし、兼六園調査区ではこれに対応するような遺構はみられず、小さな溝のみである。白鳥堀調査区の方が低いので、湧水の状態が異なっていたためであると同時に、白鳥堀調査区の性格にもよるであろう。

c) 江戸初期の土橋

天正8年(1580)に佐久間盛政によって金沢御堂が落とされ、天正11年(1583)に前田利家が入城している。江戸初期の土橋の築成は、この両者いずれかによっておこなわれたことは容易に理解でき、盛土5施工者に比定される。しかし、築造年代を知る手がかりは非常に少ない。

石川門前土橋の盛土の中で最も大規模な施工である。金沢御堂期の地表面から5mほども盛り上げ、北側の白鳥堀に広がっていた鍛冶遺構などを埋め込んでいる。白鳥堀調査区では、鍛冶遺構がなくなる部分まで埋め込んでおり、兼六園調査区では盛土5の端は全くわからない。兼六園に上る紺屋坂が盛土で作られている可能性が高くなり、当該部分にまで盛土5施工が及んでいるものと考えられる。つまり、土手状になっている白鳥堀側の土橋の原形が作られたと考えられる。

盛土に使われた土は、地山の礫層や粘質土を中心としており、単独で均質な土も若干みられるが、

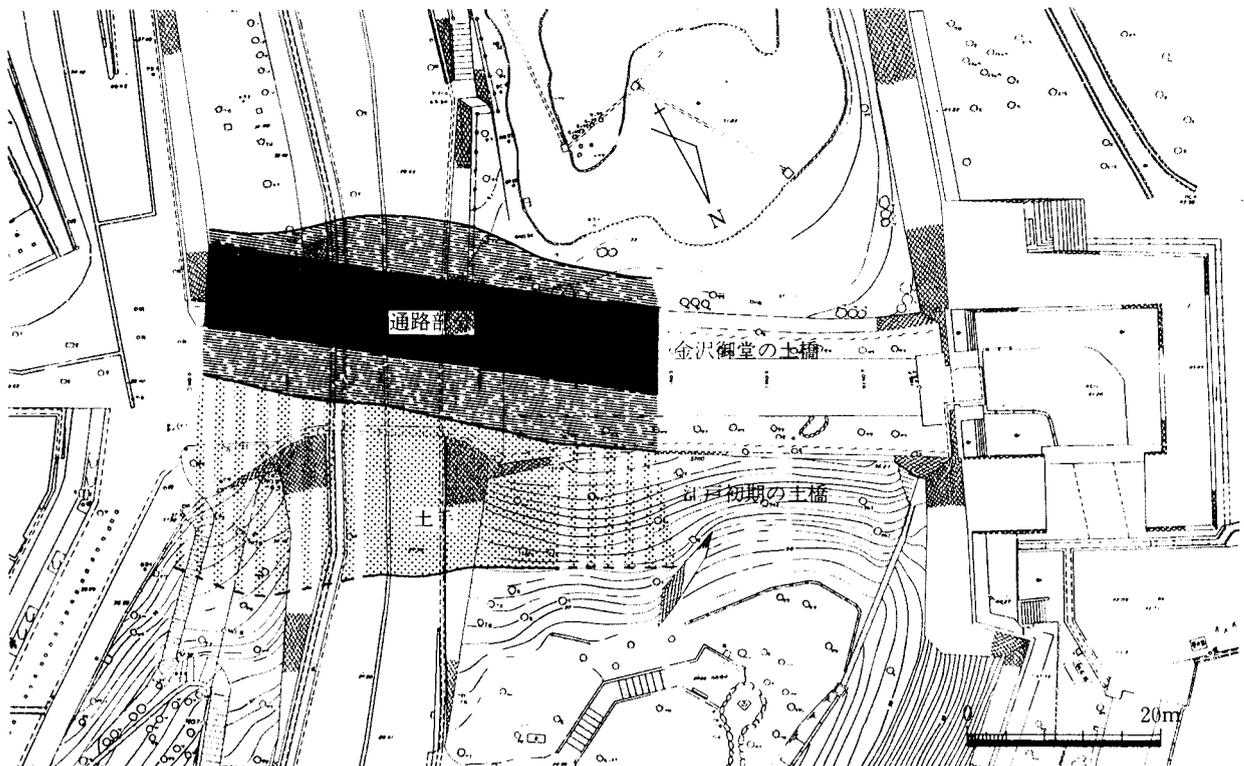


Fig. 239 金沢御堂の土橋と江戸初期の土橋 (1/400)

ほとんどは幾つかの土を混合したものをを用いている。盛土下部は、土の単位が大きく、上部に行くと小さく水平に盛り上げて土橋表面を整えている。兼六園側でも同じような施工方法であるが、土の種類が違うほか、土の混合される割合も小さいので、石川門側と兼六園側両方から盛土作業が行われたものと考えられる。

土橋表面にはいくつかの遺構がある。木樋はもちろんだが、その北側に土坑（溝かもしれない）とその底に柱穴がある。遺物の出土が多く、土橋表面に存在した遺構からの出土と考えられるので、天正・慶長年間にまで遡るものはない。むしろ兼六園江戸町跡から盛土3までの時期幅に収まる遺物である。土橋表面はほとんど平坦だが、北端から6mまでが1m程低くなってまた平坦になる。一段低くなる地点までの幅は、現状で15mを測るが、石垣付近までを考えると、幅18m程度になる。兼六園側でも1m近く下がる部分があるものの、それより北側も平坦であるので、これら両調査区の下がりに対応するかわからない。柱穴や断面に見える土坑状落ち込みから、土橋端を区画する施設や雨落ちの排水溝の存在を予想することができる。

なお、白鳥堀調査区北のSD01周辺にコビキA手法を持つ瓦が集中して出土しており、土橋上から転落したものであると考えている。これが、盛土5の年代の下限を示すと考えられる。

d) 江戸前期の土橋

江戸初期の土橋の上に、調査区北端の白鳥堀側が屈曲して10m程広がる形状で石垣で保護された土橋を構築した。この土橋は、盛土中の出土土器群から寛永年間頃（1630～1640年頃か）の構築年代を考えている。途中で広がる土橋の平面形となった要因は、広がる部分の江戸初期土橋の高さが低くなっているために新しい土橋の高さが極めて高くなってしまいうので、その安定を図るためであろう。土橋表面には、旧表土系の土が薄く認められる。なお、この土橋構築によって、百間堀を完全に水堀化することができた。つまり、土橋の最高所の標高が、本丸下の基盤層標高よりも高くなったのである。（車橋門報告参照）

構築方法を概述する。まづ盛土4によって約3.5m嵩上げされている。狭い部分はこの盛土のみで上面まで嵩上げされているが、広がる部分は横方向に段を形作るように拡張、嵩上げされている。こ

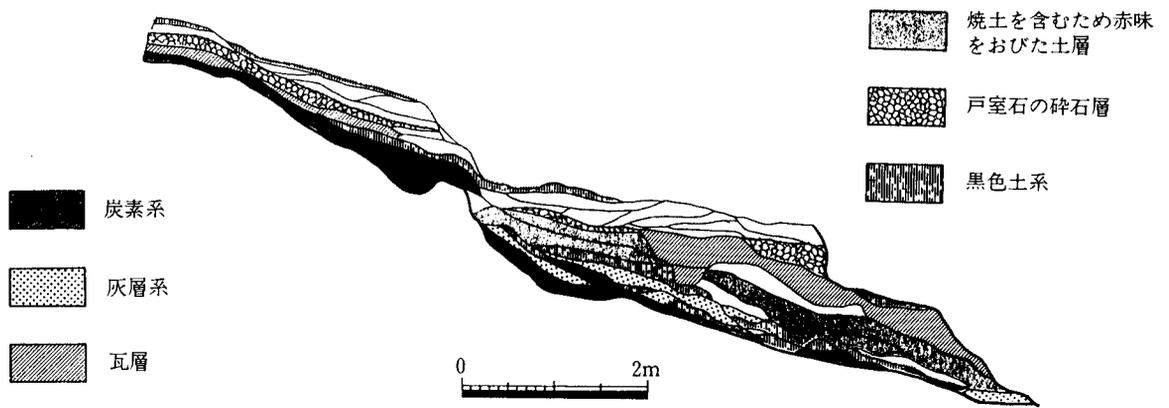


Fig. 240 石川門調査区盛土3土層模式図 (1/80)

の段の斜面化そして拡張をおこなっているのが盛土2・3である。つまり、これら3つの盛土は、工程の違いとしてであり、狭い部分で確認された高さ3.5mの盛土4の中に、盛土2や3の工程が含まれているのである。なお、盛土施工にみられる段を作って次第にそれを解消させていく方法は、盛土の始まりである盛土5上面の1m近くの段を利用する形でおこなわれている。

この中で盛土3は極めて特異な性質のものである。大量の瓦とともに大量の土師器皿、多くの陶磁器類が出土するのみならず、焼土や灰、炭、戸室石碎石層を主体とする小さな単位からなっており、1段広がる屈曲部の小範囲にのみみられる盛土である。しかも、合計1300個近くも出土した土師器皿は、同形のものあるいは同じ胎土を用いたものを大量に投棄しており、日常生活からの廃棄物状況と異なっている。兼六園江戸町推定地出土の土師器皿と比較すれば明瞭である。さらに直径約8cmの小形品は石垣が屈曲する部位に多く出土する傾向にあり、特別な意味をみることができる。

遺物箱で560箱にも及ぶ瓦の使用は、土層間に空間を作ってしまうことから盛土として不適切なものであり、焼土や灰、炭の盛土への使用もまた、土の締め具合という観点から不適合なものである。

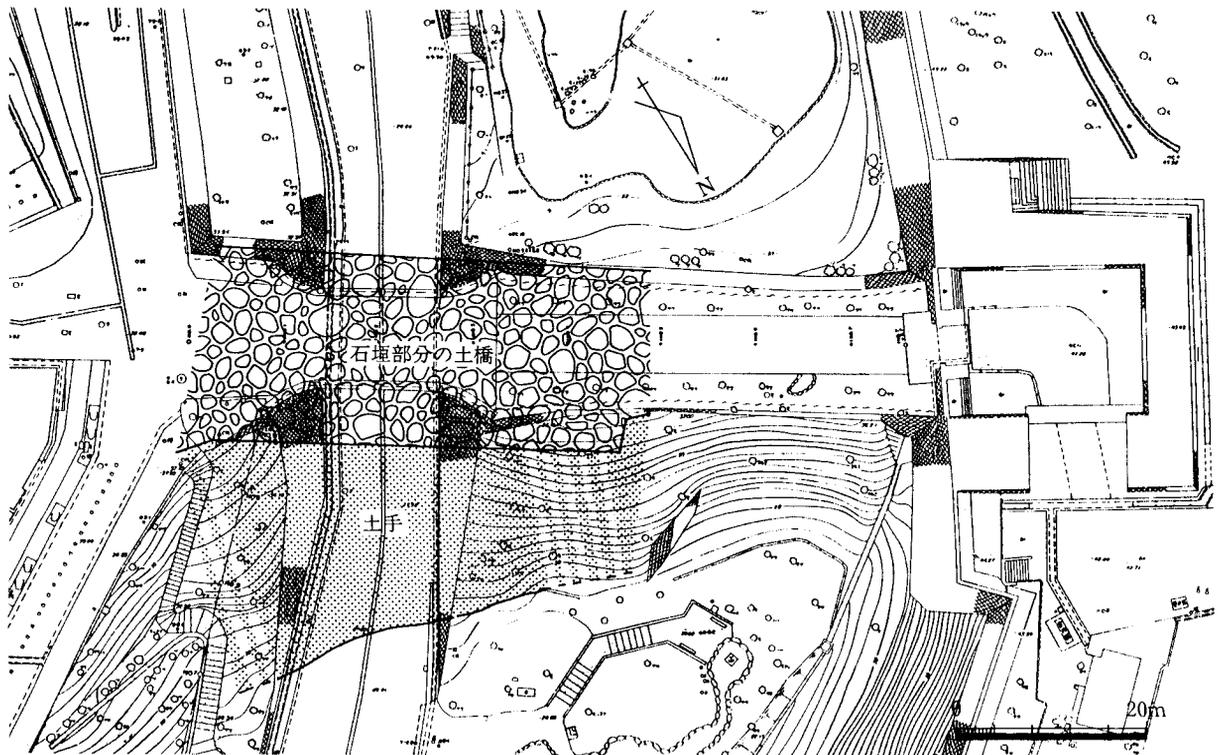


Fig. 241 江戸前期の土橋 (1/400)

実際発掘していても、この盛土のみ非常に柔らかく締まったものではない。石垣屈曲部の裏込めに位置する盛土3が、盛土に不適な状態でもあえて使っていることの意味を考えねばならない。土師器皿の規格性から大量生産された可能性を考えることができ、大量の瓦に鬩斗瓦等の特殊な瓦が含まれないことから、盛土中への遺物の投棄は意識的なものであり、施工主の特別の意図がある。本報告では、地鎮的な祭祀行為の可能性を考えた。報告書第1分冊参照。

なお、焼土や灰などは火災に関係する土層であるが、出土遺物のうち、熱を被った痕跡を示す遺物は非常に少ない。車橋門調査区石垣2・3間焼土層が火災の片づけ層と考えており、両者を比較すると明瞭である。後者には、熱を被ったもの以外にも完全に釉が溶けて陶石のような白色化したものが多く含まれているのに対し、盛土3にはほとんど含まれない。したがって、これらの土層は、火災に伴って片づけを目的としたものではなく、いわば廃材の直接的な捨て場の可能性は少ない。

e) 江戸後期の土橋

はっきりした年代はわからないが、盛土1による土橋の嵩上げを指す。土橋の平面形に変化はない。辰巳用水石管掘り下方に、百間堀石垣補修痕跡を確認した。その最下部は水平に礫層が堆積しているが、それ以上は土橋側から土砂が入れられ盛土2上面まで埋められる。さらに土橋全体に盛土が施され、それまでの土橋よりも約85cm高くなっている。その上面には、小砂利を包含した茶褐色砂質土が10cm前後の厚みで水平にみられ、表土層を成すものである。この石垣補修がいつなされたのかわからないが、少なくとも、辰巳用水石管理設以前であることは確実である。

【コラム—百間堀の石垣—】

百間堀の石垣は石川門の前面にあるために、私たちにとってとてもなじみの深いものである。ところがいつ石垣が作られたかとなると、なかなか即答できる人はいるまい。石垣の専門家は、寛永頃以降の積み方をしてしているという。築石面を見ると積まれた石の不連続部分が見られ、石垣の補修痕であることが察しられる。しかし、沈床園の土中に埋もれた部分は石垣普請当時のままであった。

この石垣は、それより上の石垣と同じような石材で作られ、やはり築石面に刻印を持っている。築石面の大きさは、上位の石材とあまり異なるものの、奥行きが全く異なる。これは、補修する時に短くされたのであり、出土した石材が普請当時のままであることを示している。根石は、2～3本の胴木の上に置かれているが、胴木は盛土6を掘りこんで設置している。まず杭を打ち込んで基準糸を通し胴木を置いていることがわかった。(Fig. 243)

土器が出土すれば年代を推定できるが、残念ながら出土しなかった。しかし、寛永頃の土橋の修築と関連づけると、石垣の様式とも矛盾無く理解できる。



Fig. 242 百間堀石垣根石



Fig. 243 百間堀石垣胴木と杭

第3節 木樋と辰巳用水

a) 木樋の構造

木樋の連結

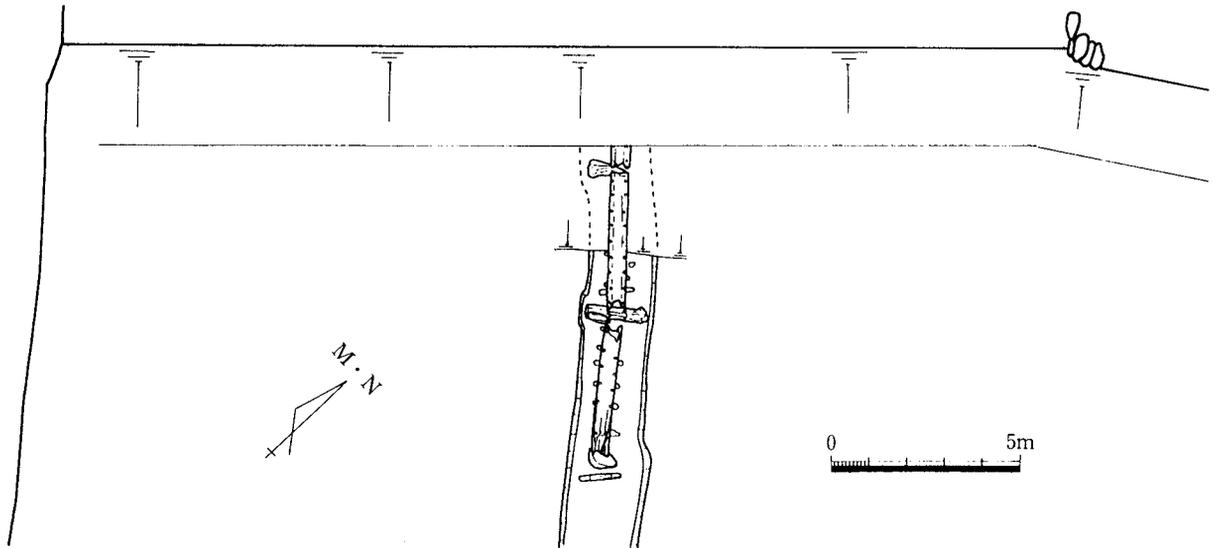


Fig. 244 石川門調査区木樋出土位置図 (1/200)

木樋は、地表面下約5mで土橋に平行に出土した。木樋3本と継ぎ手2つが出土し、木樋3本目のほとんどが調査区外に伸びている。取り上げ番号は兼六園側から1、2とつけた。木樋は、「木樋」本体と、それらを連結する「継ぎ手」、本体の沈下を防ぐH形の「支持受け」、そして「枕木」から構成されている。

木樋は幅90～100cm、深さ90cm近くの掘り方の中位に据え置かれている。そして、約30cm間隔に設けられたH形の支持受けにのり、継ぎ手に埋め込んで連結している。支持受けは、両側の縦木に横木を差し渡してほぞ結合させる構造である。縦木の先端は枕状にとがっているものではない。つまり、掘り方を埋めながら支持受けを置いていることがわかる。しかし継ぎ手の前後の支持受けは、H形のものではなくて枕木状のものを用いている。継ぎ手下には、平らな石が置かれその沈下を防

34.50

1. 灰色粘質土 (酸化激しい)
2. 灰色粘質土
3. 1より水多く含みシルト的
(20cm大の石を含む)
4. 灰色レキ土
5. 赤灰色砂質土
6. 赤黄色粘質土 (焼土灰層)
7. 淡赤灰色レキ層

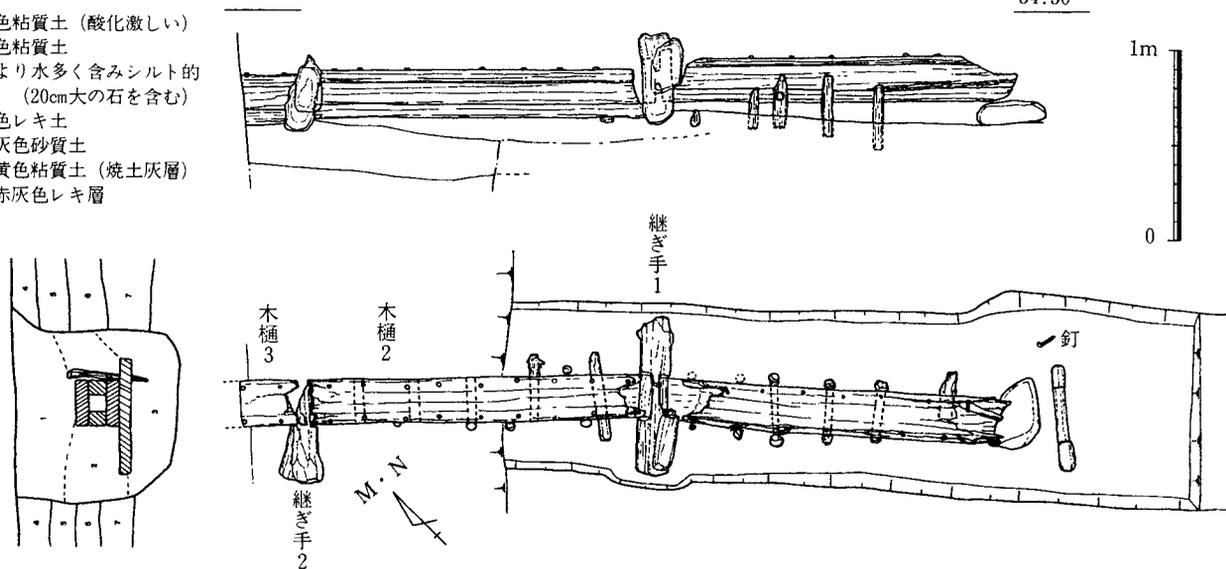


Fig. 245 石川門調査区木樋出土状況図 (1/40)

いでいる。継ぎ手には、木樋をはめ込む窓が、その幅よりもやや小さな方形の抉り込みとして両側にあり、木樋導水部分のみ貫通している。木樋の両端を少し削って埋め込み、なおかつ漆喰を接着剤として使って水漏れを防いでいる。しかし、当該箇所が最も弱い部分であったことが、継ぎ手際から木樋が落ち込んでいるという出土状態からうかがうことができる。掘り方内の埋土は、ほとんど均質である。一気に埋められた状況であり、掘り方掘削、木樋埋置、埋め戻しが短時間の内におこなわれたことを示す。ここで注意しなければならないのが、継ぎ手1で木樋の方向が若干変化していることである。

木樋1よりも南、すなわち兼六園側で木樋痕跡はなかった。木樋1南端近くで釘が掘り方内から出土していることや、木樋1南端の遺存状況が極めて悪いことから、それが抜き取られたものと考えられる。兼六園調査区壁面においても、木樋掘り方と考えられる溝を確認しているが、掘り返された土層状況であった。したがって、木樋埋置後、それを抜き取っていることは確実である。

さて、兼六園調査区壁面で確認した溝を、木樋掘り方であることを前提として論述する。兼六園側の溝底の標高は、 m で石川門調査区では標高 m であるので、若干の下りの状態となっており、おそらく当時の土橋の勾配に近いものであろう。城内に水を引き込むためには、どこかで木樋の勾配を上向きに変えねばならない。報告書第1分冊中では、石川門の位置、高さは現在とあまり変わらないであろうという想定をしていたので、検出地点からしばらくして傾斜変換点があると考えた。この考えに今も変わらない。若干方向を変えた木樋を延長していくと、石川門東側の櫓にぶつかることになり、木樋埋設時の石川門石垣台と現在のものとは違うことがわかる。

木樋の観察

木樋はアスナロ材で作られている。4枚の部材から構成され、底板の上に側板がのり蓋板がつくという構造である。一辺が25.4cm前後、長さ180cm強に作られている。部材の厚みは、底板で8~9cm、側板で6.7cm前後を測り、それぞれの部材を底板、蓋板側の両側から釘を概ね30cm間隔で打ち込んでいる。木樋の大きさ、特に幅を見ても、微妙に大きさに違いが認められ、継ぎ手から想定される木樋の長さについても微妙な異なりを見ることが出来る。また、鉄釘の打ち付け方でも、丁寧なものもあれば、最後まで打ち込んでいないものもあり、精粗がある。量産品だが、出来のよくないものも見られるという、突貫品であろうか。継ぎ手は長さ81~82cm、高さ30cm強、厚さ15cmをはかり、芯持ちのマツで作られている。接続部は一辺25cmと木樋よりもやや小さく作られている。奥行きは5~6cmで、3~5cmの壁を隔てて木樋が接続することになる。両小口は鋸で切断されたようになっている。このように木樋本体の重厚さにくらべて、継ぎ手は簡便な作りの感がある。

枕木は継ぎ手と同じマツ材から作られている。芯持ちの丸太材を上からコの字に切り落とした上に



Fig. 246 木樋調査作業風景



Fig. 247 木樋横断面

木樋本体を置く構造となっている。その切り込みが、丸太の中程よりも下まで来ていることから、この部分の遺存状況は極めて悪い。

b) 木樋の年代と辰巳用水

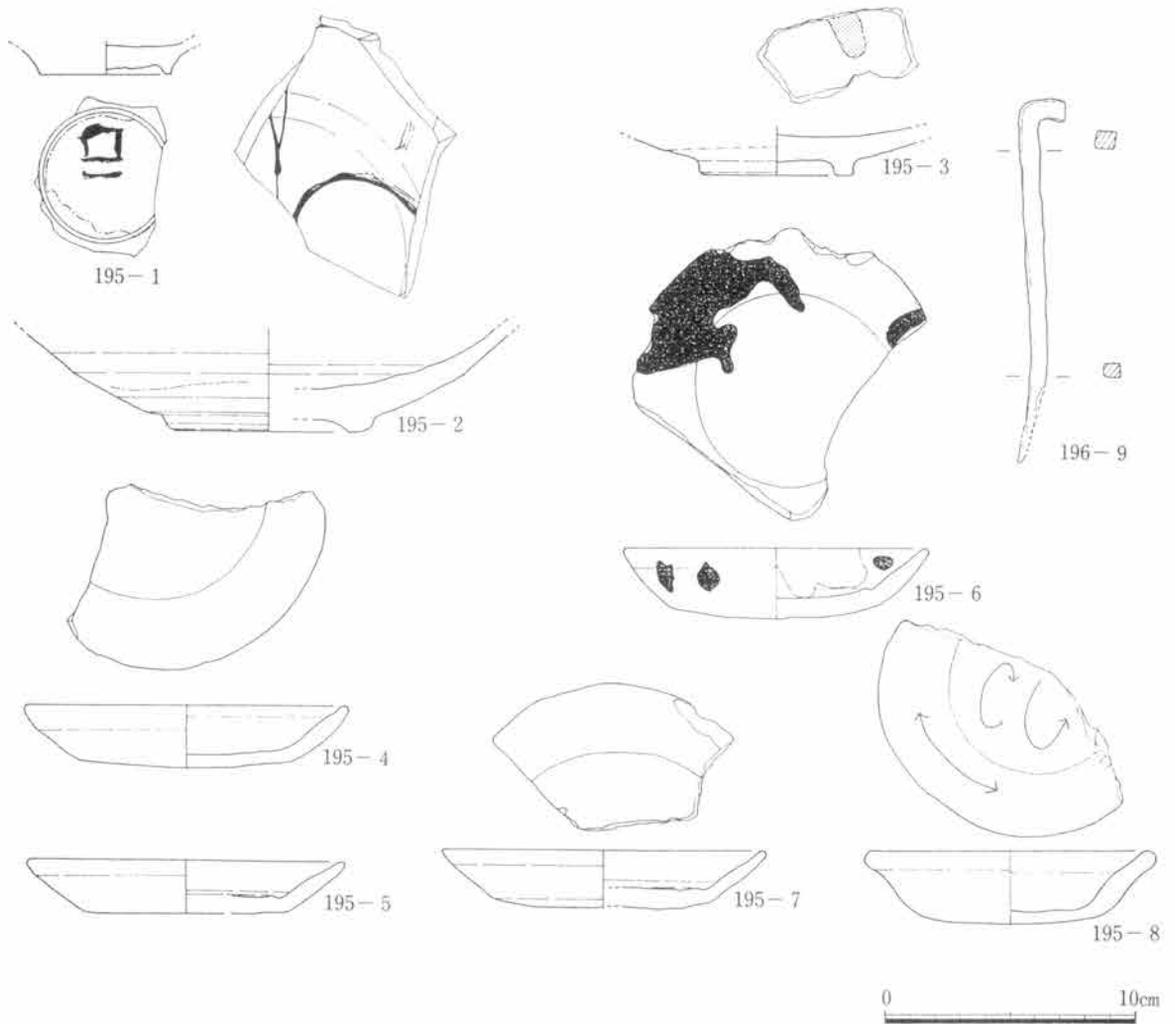


Fig. 249 石川門調査区木樋遺構出土遺物 (1 / 3)

出土遺物

いずれも木樋掘り方内より出土したものである。砂目積み唐津皿の出土がある (195-3)。熱を被って釉が溶けている。195-2は唐津鉄絵皿である。195-1は青磁碗で高台内面は無釉である。墨書されているが意味不明。土師器皿のうち195-8は、兼六園江戸町推定地出土土師器皿に近い形態だが、それ以外は盛土3出土品に近い形態である。これらの特徴は、木樋の年代と其上を覆う盛土4～2の年代が極めて近いことを示す。すなわち、1630～40年頃であるが、木樋の埋置年代かそれとも廃絶年代か明確にしかたない。

図に示した鉄釘は、掘り方内で本体から遊離していたものである。長さ cm、を測るが、



Fig. 250 辰巳用水石管下土坑

先端が腐食によって多少短くなっている。木樋に打ち込まれている釘から観察すると、長さが20cm近くはある。頭部は幅 1cm で、直角に折り曲げられている。本例の頭部は、打撃によってつぶされた形跡はなく、未使用のものである。

辰巳用水と木樋

木樋のほぼ真上約 4 m に近世に埋設されたままの辰巳用水石管を 3 本検出した。兼六園調査区壁面では明治以降に動かされた石管が出土したものの、直ぐ兼六園側脇の水道管切り回し調査区で近世埋設のままの石管を確認している。石管の接続は敷石の上に置いておこなわれており、接合面に接着剤として松ヤニを用いている。敷石には、石管をのせる時の基準線としての中軸線が刻まれており、しかも表面は極めて平滑に作られている。両調査区の敷石の高さはほとんど同じである。ところが、検出した三本の敷石の高さは、僅かながら兼六園側に向かって下がっている。つまり、石川門に向かって上り勾配となっているのである。兼六園側からは下がり勾配となっているので、どこかで勾配の変換点があるはずである。おそらく、近代の遺構としての水溜状遺構 SX01 付近と考える。なお、石管上面は明治以降の攪乱によって石管上面が破壊されており、埋設時期を示す遺物の出土はない。

石管下に石管掘り方溝とほとんど重複するように、石管設置面から深さ 54cm、推定される長さ 230cm の方形土坑が検出された。埋土は百間堀側から一気に埋められたようである。盛土 1 上面からの掘削となると、深さ 180cm にも及ぶ深い穴となる。意味もなく土橋の上に穴を掘ってすぐに埋め込むとは考えられず、何らかの目的を持っていたと推測できる。確たる証拠はないが、辰巳用水関係遺構の可能性を考えたい。石管は天保年間に埋設されたと言われており、それに置き換わる以前の遺構ではないかと推定したい。

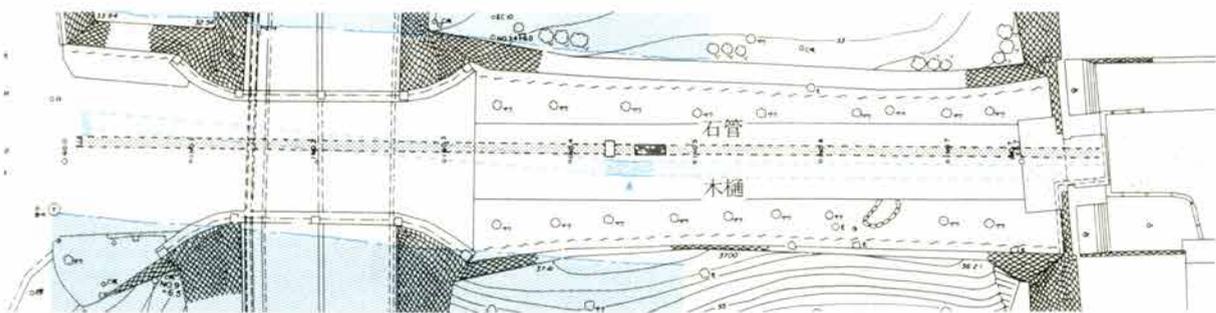


Fig. 251 木樋と辰巳用水石管の平・断面 (1/600・1/150)

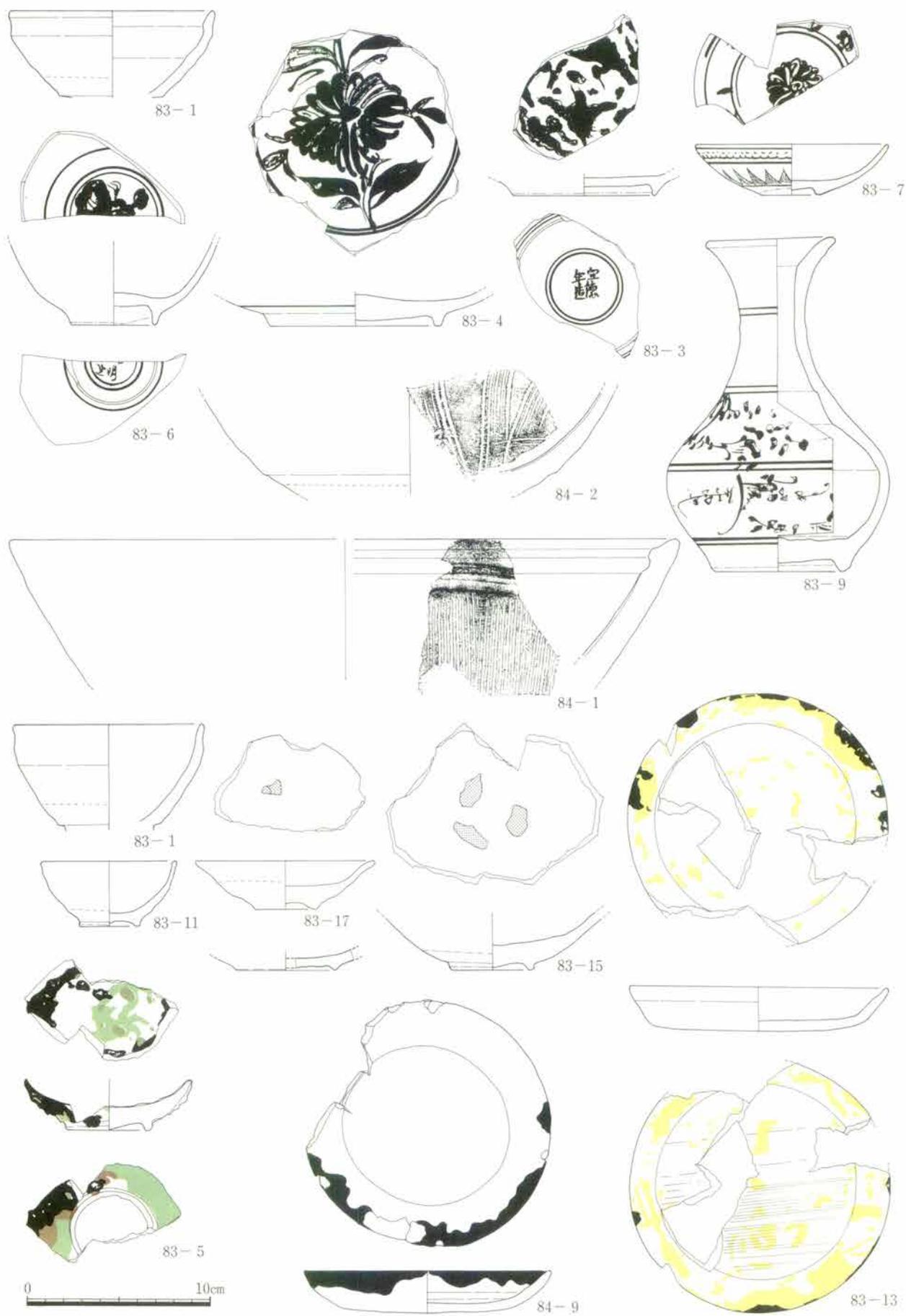


Fig. 252 沈床園調査区第4層出土遺物 (1 / 3)

第4節 主要出土遺物

第1分冊報告分の抜粋であるが、木製品のみその樹種同定結果が第2分冊に報告されるので、全て再録している。遺物の個体番号は、第1分冊時の挿図番号を先に記している。なお、木樋関係出土遺物のみ、前節で取り扱った。

a) 沈床園調査区出土遺物

百間堀の堆積土としての1・2層には、ほとんど遺物はない。かなり管理された堀の状況と考えられる他、明治43年の石川橋建設時における堀の水抜き取り後、泥土の除去によるものとも考えられる。2～3層にかけて瀬戸美濃鉄釉天目碗(83-1)が出土している。

4層からまとまった量の遺物が出土している。明染付け碗のうち、見込み饅頭心(83-6)や、碁笥底皿(83-7)、華南で作られた芙蓉手皿(83-4)や瓶(83-9)がある。一方で、83-3のような薄手で「宣徳年造」底銘をもつ優品もある。国産陶器の内、肥前系では砂目痕をもつものが特徴的である。

83-5は唐津皿だが、熱を被って釉が溶け、しかも緑錆も付着しているので、製銅のとりべとして使われたようである。鍛冶道具は、ふいご羽口が出土している。土師器皿の器形は石川門調査区盛土3資料に類似し、年代的に同時期であることを示す。これは肥前陶磁器からも矛盾はない。83-13は全面に金箔が張られており、しかも灯明皿として使われている。高位の人からの下賜品と思われ、灯明具として2次的に再利用されている。金箔は、にかわによって張り付けられているようである。

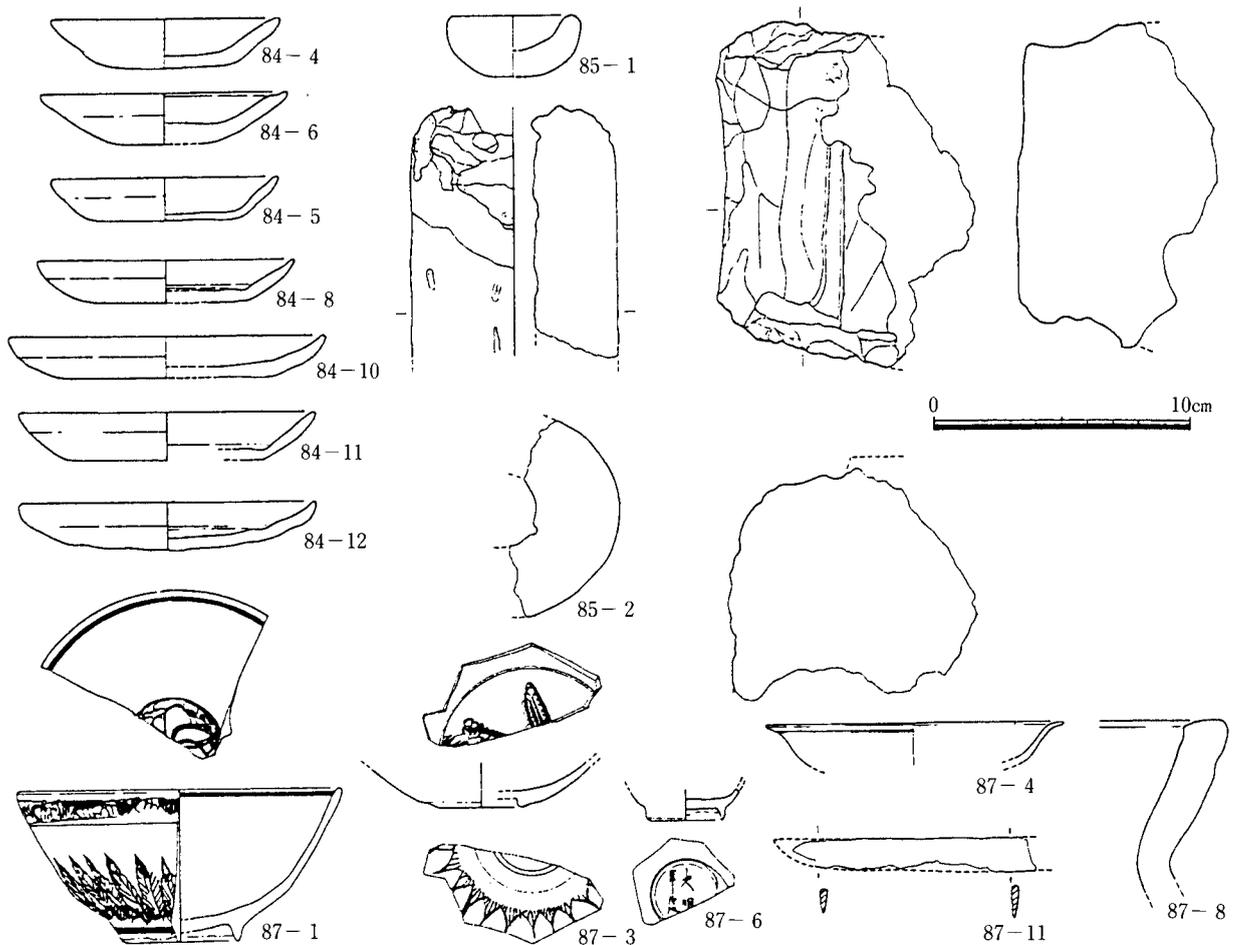


Fig. 253 沈床園調査区第4～5層出土遺物(1/3)

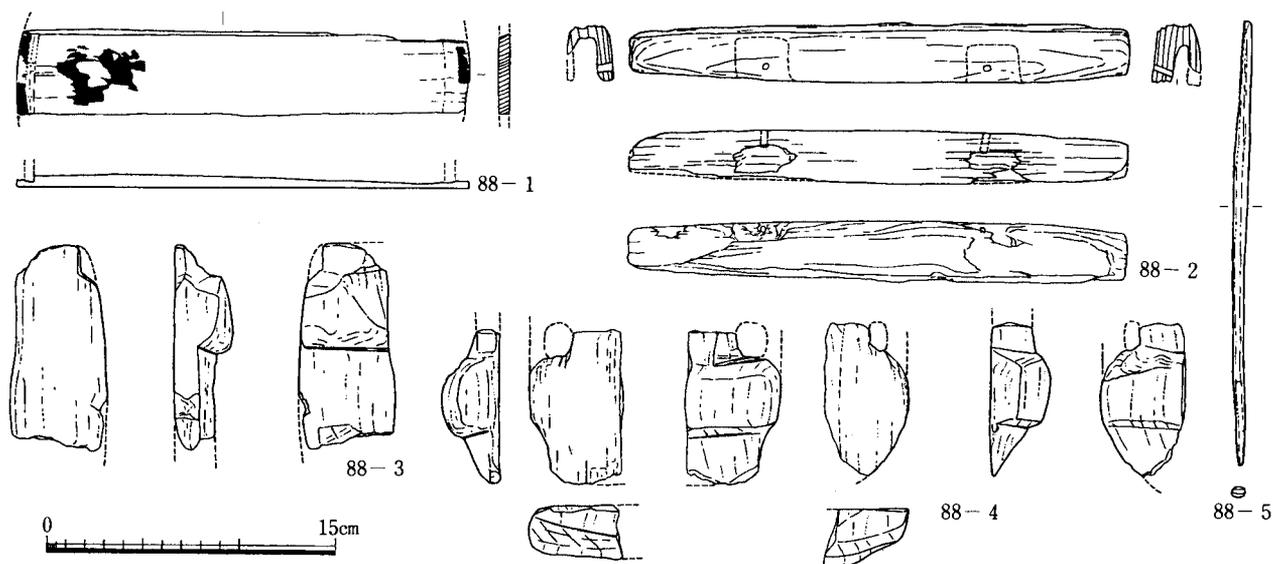


Fig. 254 沈床園調査区5層出土遺物（木器）

5層の遺物群はそれ以下の層の遺物群に共通する。すなわち、肥前系陶磁器を全く出土せず、木製品の出土も顕著である。87-1の大振り of 明染付け碗は4層出土のものよりも古手である。木製品では、88-1が漆塗り曲物底、88-2が把手、88-3・4が一木作りの下駄である。

6～7層にかけて、陶磁器とともに多くの木製遺物が出土した。これらの遺物群は、本報告の白鳥堀調査区遺物群に共通する。明染付け碗では、饅頭心のもはなく、高台を三角形に削りだしているものが多い。4層のような、華南産の厚手のものは見られず、基本的に薄い作りのものが主体をしめる。しかし91-5のような碁笥底で内面に人壽文の皿もある。91-8は白磁皿である。91-9は青磁壺で肩部に雲気文、体部に菱形文を彫り込んでいる、酒会壺である。土師器皿は極めて中世的な器形を呈している。明確に見込みは見られず、1回のナデを器面全体に周り、口縁端部のみ再度調整を加えている。

漆器碗が多数ある。93-1～4・8は、黒地に朱漆で文様が描かれている。5～7は全面朱漆塗りである。木製品でも多様な遺物がある。一木作りの下駄と組み合わせの連歯下駄である。94-3は桶側板、4が曲物底板、7が曲物杓、8が楔、10が灯明皿受台である。9が茶筌であり、茶器とともに茶の湯文化を示すものである。竹筒の一端を切り落としてたりけずりだしたりしたものが幾つか見られるが、用途不明。

92-4・5は厚さ1cm強の付け札のようなもので、一方面から釘が打ち込まれた板である。表面には判読の困難な文字が見られる。

番号	名称	法量	取り出番号	実測番号	樹種
1	底板	長さ23.4、幅4.2、厚さ0.7		306	ヒノキ
2	把手	長さ25.8、幅3.1、厚さ2.7、ほぞ穴長2.7、幅1.2、深さ2.2、目釘穴径0.3		182	スギ
3	下駄	長さ10.8、幅5.1、厚さ2.0、歯厚さ3.0		181	ミズキ
4	下駄	歯厚さ3.0		180	ミズキ
5	箸	長さ23.3、幅0.8		179	アスナロ

Tab. 1 沈床園調査区5層出木器属性表 (Fig. 254)

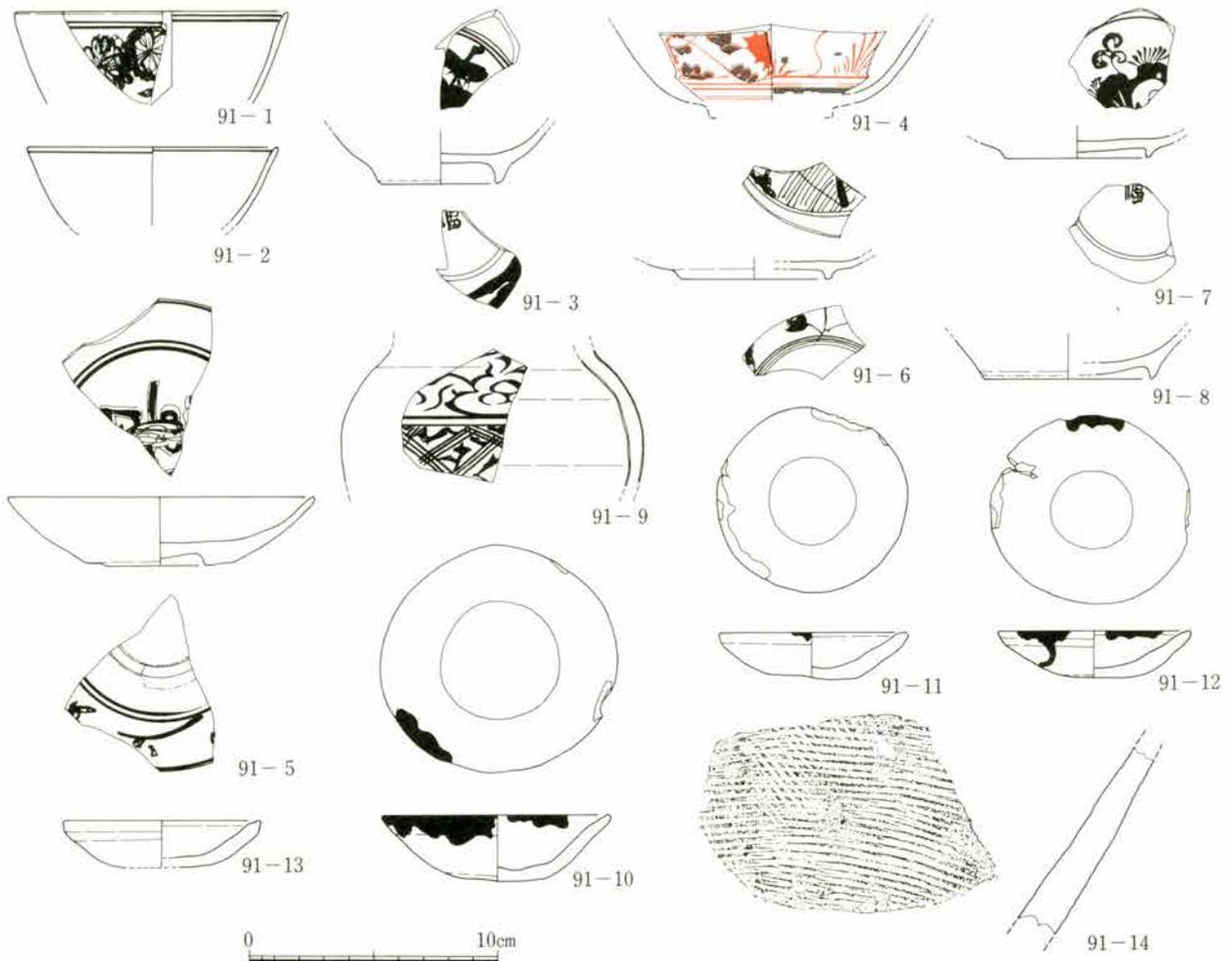


Fig. 255 沈床園調査区第6・7層出土遺物(1/3)

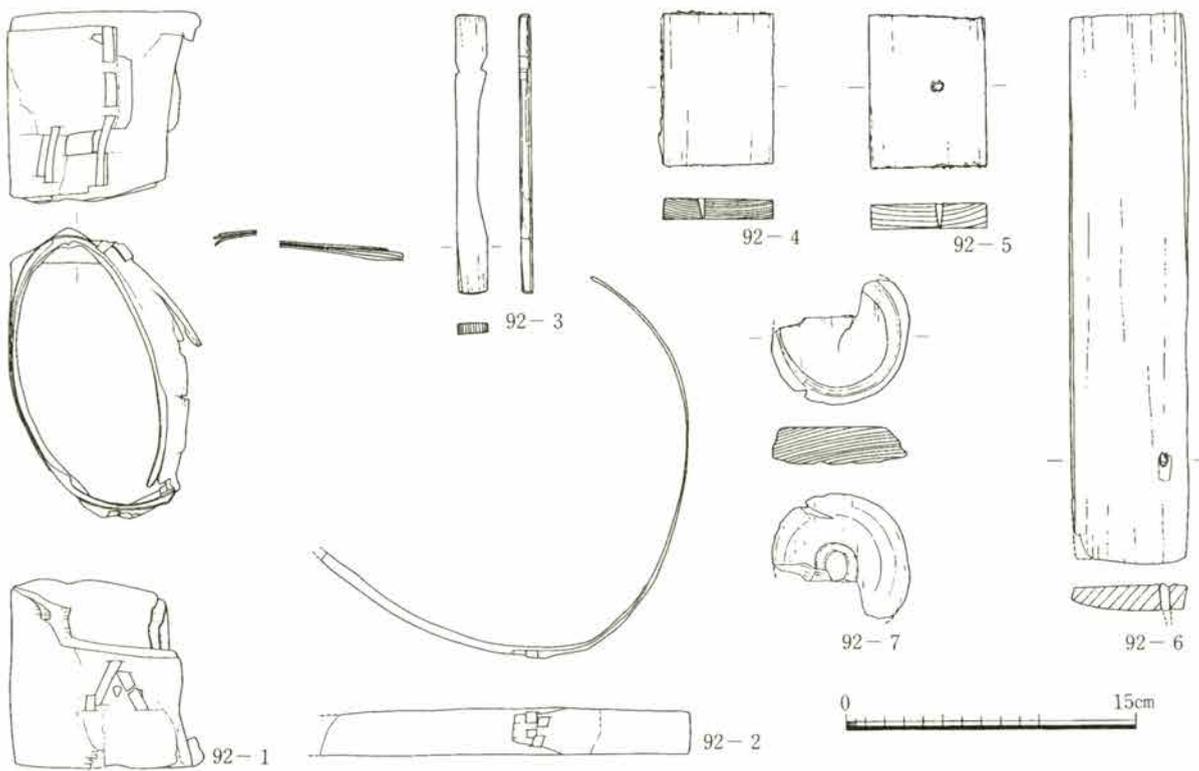


Fig. 256 沈床園調査区第6層出土遺物(木器)(1/4)

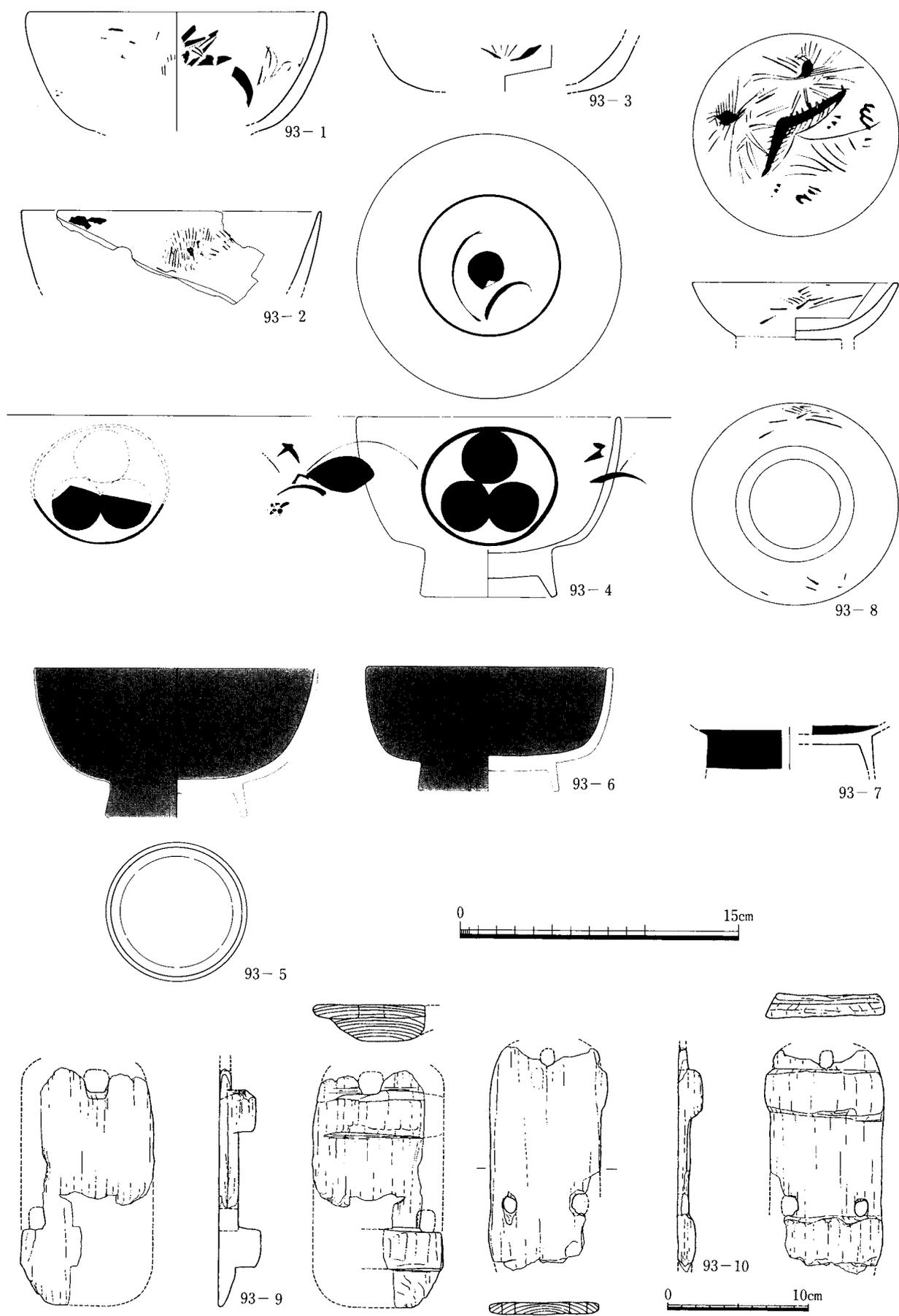


Fig. 257 沈床園調査区第7層出土遺物 (漆器、木器) (1/3、1/4)

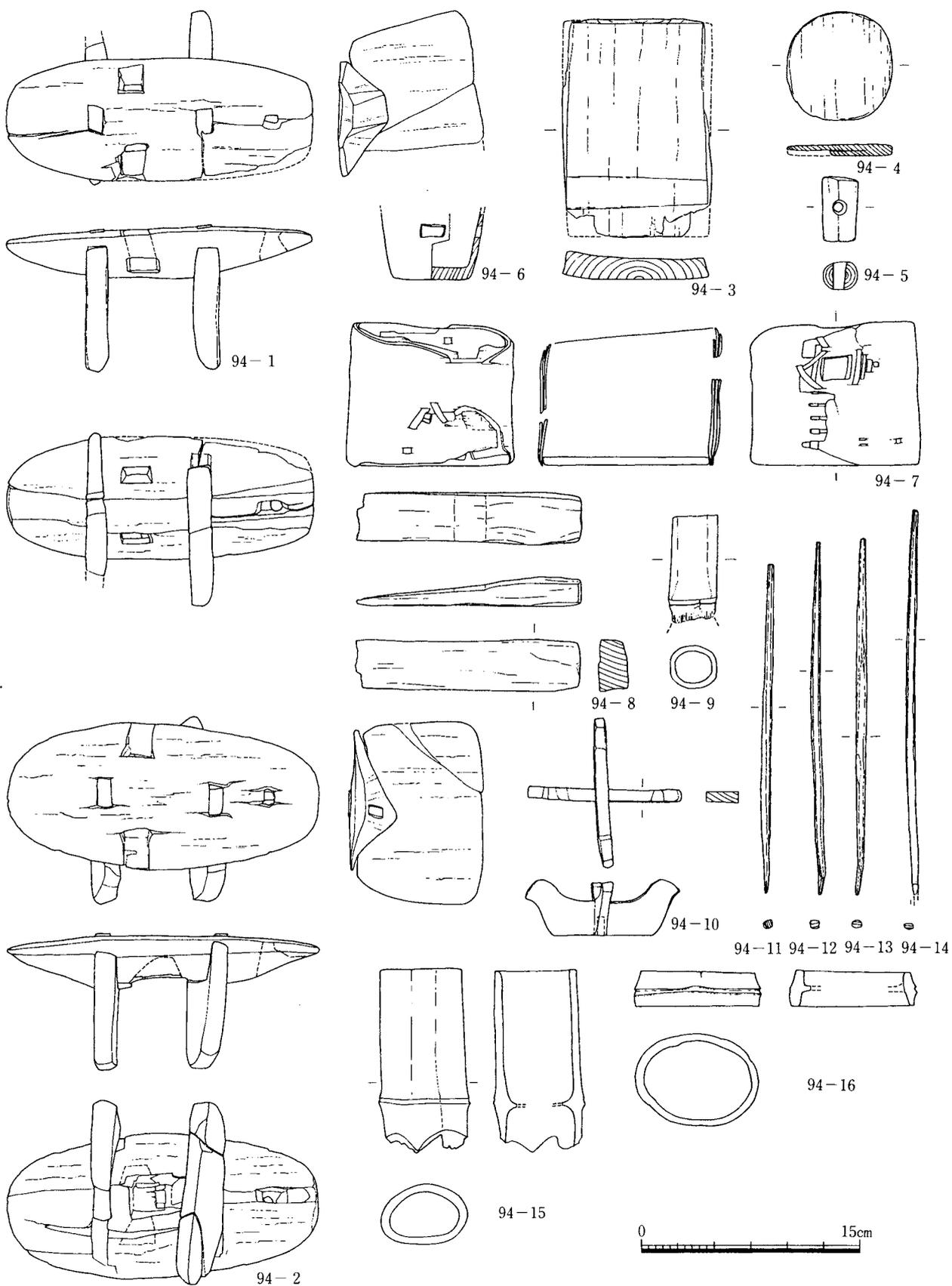


Fig. 258 沈床園調査区第7層出土遺物 (1/4)

番号	名 称	法 量	取り上げ番号	実測番号	樹 種
1	曲物杓	直径7.5~14.0(復元径11.0)、高さ9.9		135	ヒノキ
2	曲物	幅2.4		139	ヒノキ
3	板	長さ14.4、幅1.6、厚さ0.6		172	アスナロ
4	付札	長さ29.1、幅5.8、厚さ1.0		169	スギ
5	付札	長さ8.0、幅6.0、厚さ1.4		168	ヒノキ
6	板	長さ29.1、幅6.1、厚さ1.4		171	クロマツ
7	円盤	直径(上)5.7、(下)8.0、高さ1.9		170	ケヤキ

Tab. 2 沈床園調査区6層出土木器属性表 (Fig. 256)

番号	名 称	法 量	取り上げ番号	実測番号	樹 種
1	漆器椀	口径15.9	S-14		
2	漆器椀	口径15.8	S-4		
3	漆器椀		S-3		
4	漆器椀	口径、器高、高台径、高台高	S-8		
5	漆器椀	口径15.0、器高7.9、高台径7.4、高台高1.8	S-14		
6	漆器椀	口径13.2、器高6.5、高台径7.5、高台高1.6	S-1		
7	漆器椀		S-9		
8	漆器皿	口径10.8、器高3.1、高台径6.2	S-6		
9	連歯下駄	長さ17.2、幅9.5、高さ2.6、歯幅3.0、歯高1.2		164	コシアブラ
10	連歯下駄	長さ16.3、幅8.4、高さ1.8、歯幅3.5		163	ヌルデ

Tab. 3 沈床園調査区7層出土漆器・木器属性表 (Fig. 257)

番号	名 称	法 量	取り上げ番号	実測番号	樹 種
1	差歯下駄	長さ21.2、幅8.5、台高3.6、歯幅10、歯高8.8		133	ブナ属
2	差歯下駄	長さ21.5、幅10.5、台高3.8、歯幅13.0、歯高8.2	W-2 W-6	134	本体：ハコヤ ナギ属、歯： ブナ属
3	桶側板	長さ15.2、幅10.2、厚さ1.8		173	スギ
4	底板	径7.2~7.4、厚さ0.8		166	アスナロ
5	留め具	長さ4.5、直径2.2~2.5、穴0.6~0.9		165	マンサク
6	コップ	底径5.4、器高4.5、底厚さ0.9、穴0.8×1.7		280	ケヤキ
7	曲物杓	直径12.0、器高9.5~、穴1.6×2.0		142	側板：ヒノキ 底板：サクラ

番号	名称	法量	取り上げ番号	実測番号	樹種
8	楔	長さ15.7、最大幅3.6、最大高2.0		174	クリ
9	茶笥	長さ7.5、直径3.1		137	タケ
10	灯明受台	高さ3.9、受部径8.0、外形10.6、軸穴0.4	W-1	141	ヒノキ
11	箸	長さ23.0、幅0.6		175	ネズコ
12	箸	長さ24.6、幅0.7		176	アスナロ
13	箸	長さ24.9、幅0.7		178	アスナロ
14	箸	長さ26.8、幅0.6		177	アスナロ
15	竹製品	直径4.3~6.1、長さ12.9		136	タケ
16	竹製品	直径6.0~8.4、長さ2.4		138	タケ

Tab. 4 沈床園調査区7層出土木器属性表 (Fig. 258)

— [コラム—わらじが出た—]

沈床園調査区第7層からわらじが2つ出土している。かろうじてわらの繊維が残っていたが、わらが編まれていることはよく観察できた。一つは左の写真のもので幅広いタイプである。長さ20cm前後である。もう一つも同じ大きさだが、細身で紐が観察できた。本来2本あるはずの紐が1本しか観察できなかった。当時はよく使われたものでありながら、遺跡からめったに出土しない遺物の一つである。

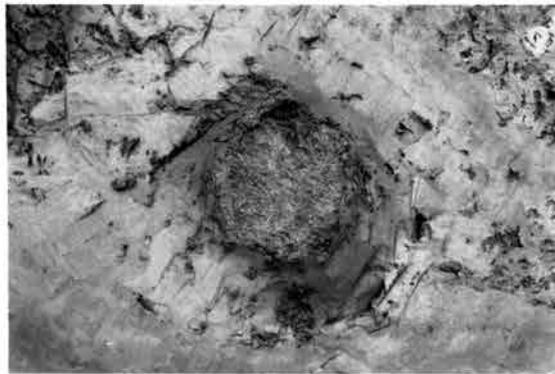


Fig. 259 沈床園調査区7層出土のわらじ

b) 石川門調査区表土出土遺物

石川門調査区表土層として、盛土1より上の近代の整地土、および白鳥堀土手表土・流土そして近代の遺構を一括した。当然ながら近代の遺物が多く認められたが、特徴的な遺物のみ再録した。

古手の明染付け磁器がある。これらは、盛土中に入っていたものが近代の再掘削及び整地土中に入っていたものである。57-7の一重網目文の筒椀もそうである。57-20・22は土師器皿で、盛土3資料群のものとは違う器形である。20の口縁端部には面をもち、22の底部は小さく緩やかな大きな皿状である。盛土3資料よりも新しい皿であろう。ただし、無釉である。57-16は旧陸軍で使われた食器で、硬質陶器製である。

軒丸瓦のうち、梅鉢文は意外と少ない。61-1・2は軸や剣のない花卉のみの梅鉢で無釉の燻し瓦である。これは白鳥堀土手表土中からのみ出土しており、2次的な移動を被っているが、その使用箇所に興味を持たれる。城内での類例の増加に待ちたい。これ以外の梅鉢文軒丸瓦には釉がかかっている。62-1は巴文だが釉がかかっている。軒平瓦で釉のかかっているものの出土はない。したがって、出土軒平瓦が古いのか新しいのか判断できない。70-5はいぶし銀のような光沢をもち新しい一群と推定される。なお、盛土1から梅鉢を中心に据えた軒平瓦が出土している。次項参照。棧瓦と石瓦が出土している。80-1と74-9の大きさの違いは使用部位の違いであろう。いずれも釉がかかっている。石瓦は凝灰岩製で内面は荒く鑿痕をのこしている。

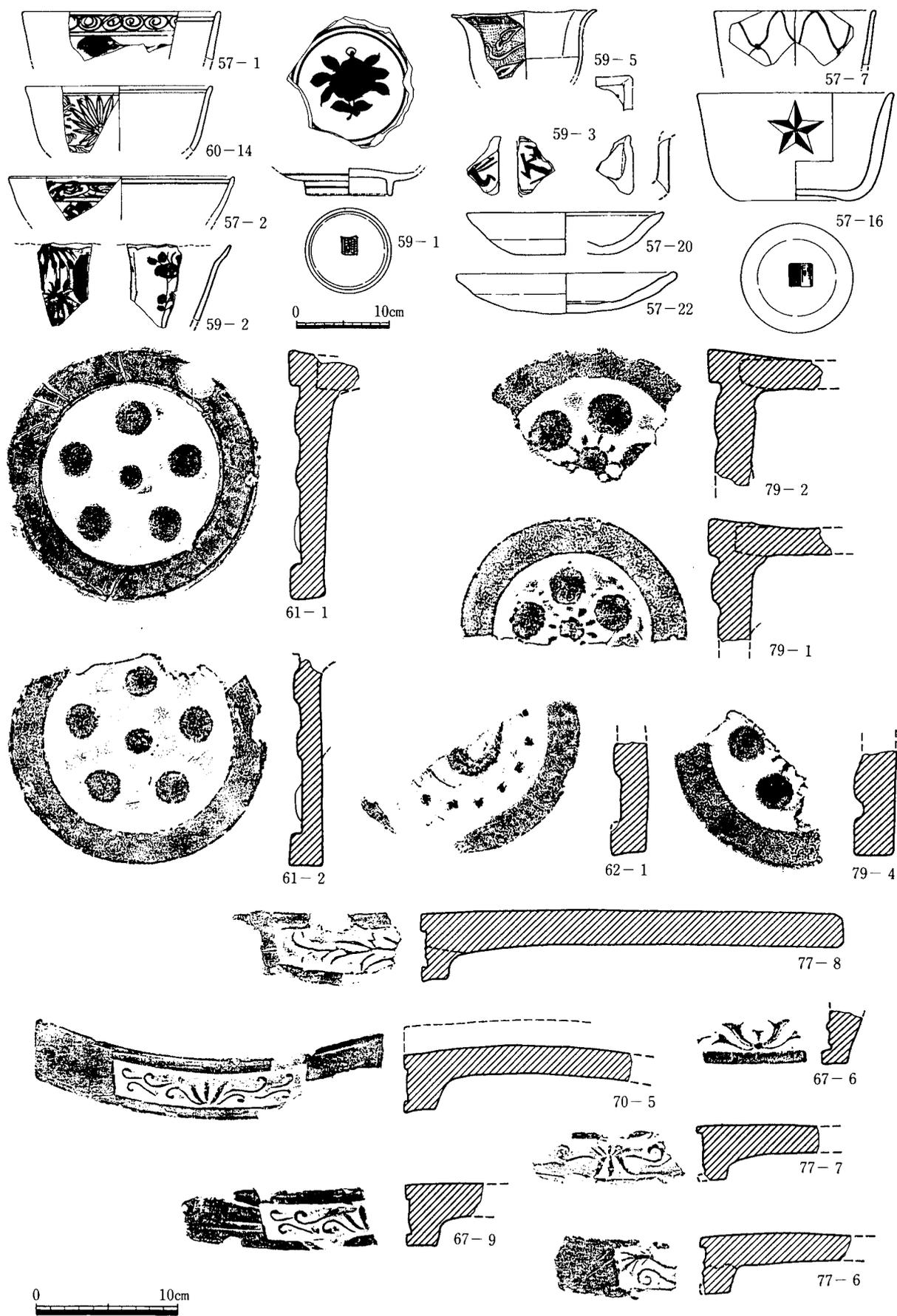
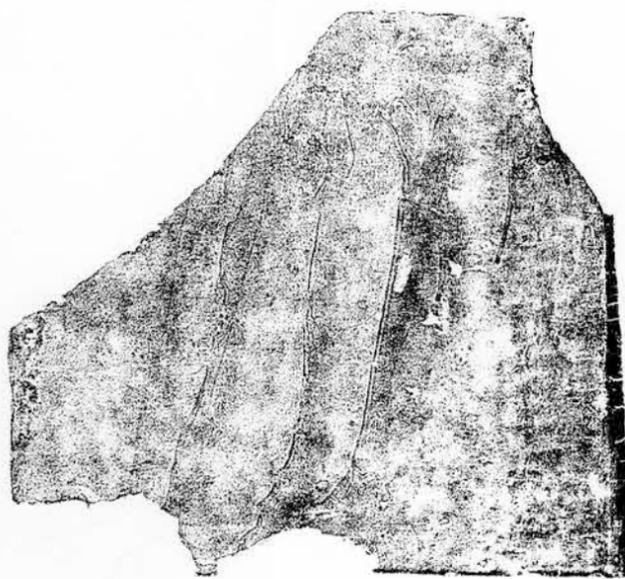
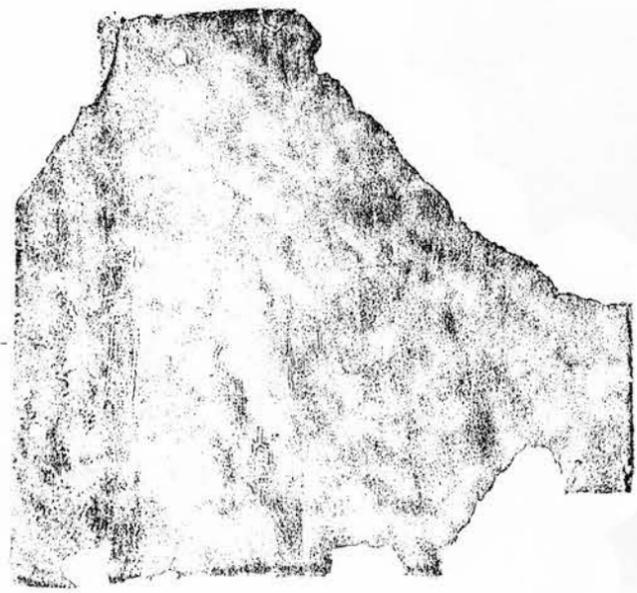
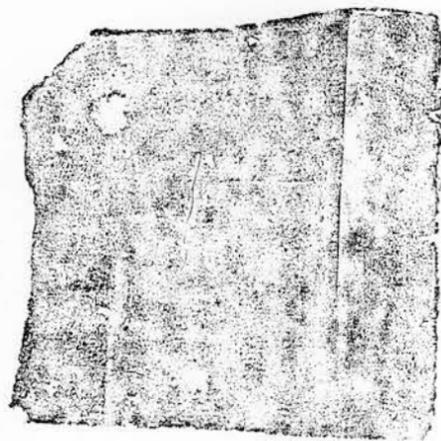
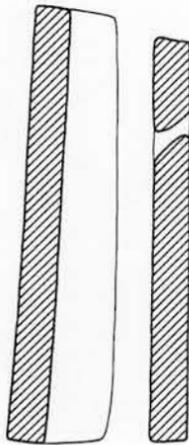
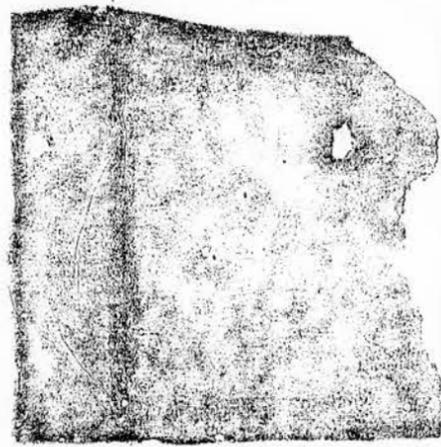
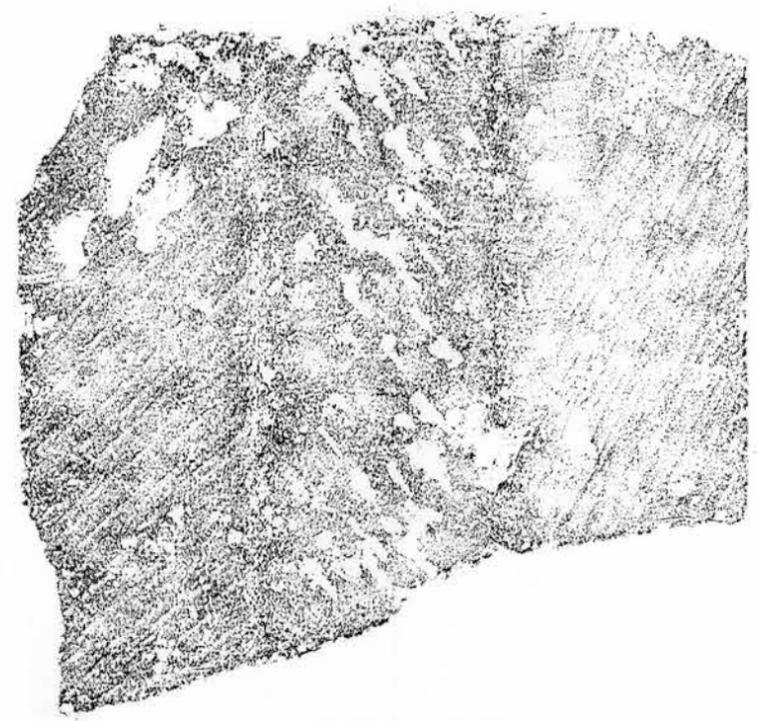


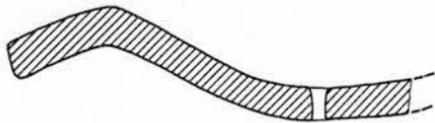
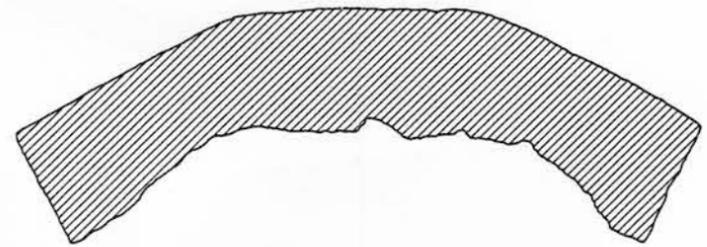
Fig. 260 石川門調査区表土・近代遺構出土遺物 (1/3)



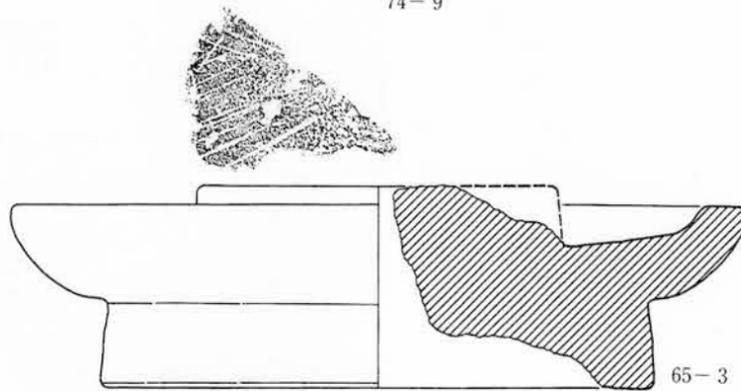
80-1



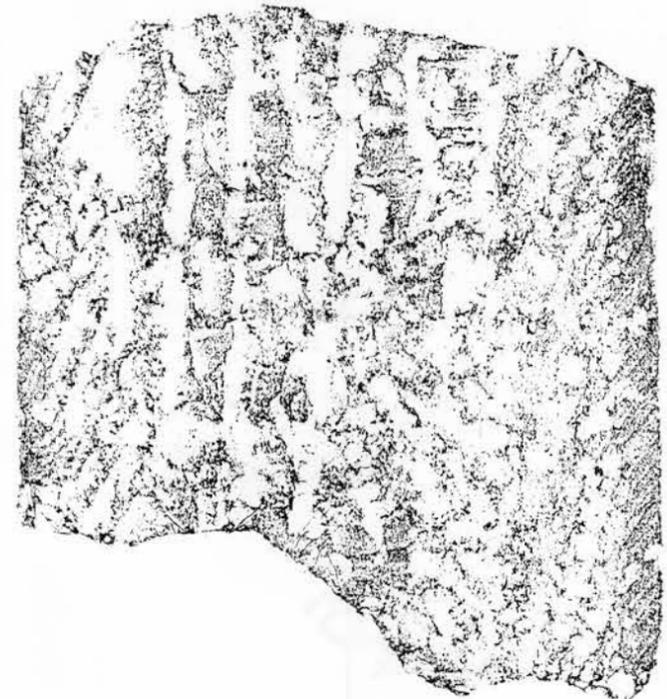
74-9



0 10cm



65-3



66-1

Fig. 261 石川門調査区表土出土遺物 (1/2)

c) 石川門調査区盛土中出土遺物

盛土 1

明染付け碗(105-1)は盛土の採取地からの混入か、あるいは下層の盛土からの混入である。105-12・9の土師器皿は、盛土3資料と異なっており、年代的に新しいものであろう。いずれも手捏ね品であるが、9のような溝縁状の口縁端部は特徴的である。

瓦には、盛土2上面にある瓦たまり1資料がまとまってある。軒丸瓦106-6の中心に珠文をもつものや巴の尾部が隣の巴の背中に接してあたかも圏線のように作っている(106-2)など、盛土3資料にそのモチーフが既にみられるものばかりである。本群中から梅鉢文軒丸瓦の出土はない。軒平瓦は唐草文主体で、軒丸瓦と同じように文様のモチーフは盛土3資料群と同じである。108-9は中心飾りに梅鉢を据えて左右に唐草を配する文様である。これとセットとなる軒丸瓦は、梅鉢の文様をしていることが容易に推測できよう。すなわち、江戸屋敷では江戸初期から梅鉢文の軒瓦を使用していることがわかっているが、金沢城での使用は遅れるようであり、盛土1の年代つまり18世紀と19世紀の変わり頃に求められよう。

盛土 2

明染付けが多い。114-7は祥瑞様式の大型の角皿で外面に龍文、内面に牡丹文を描く。表土中からも類似の器物が出土している(59-3)。114-6は色絵皿で、変色しているが朱と黄色が使用されている。114-1・2は芙蓉手碗。113-10が志野の可能性のある皿で、鉄釉によって外面に多重圏線、内面に草文を描き、白濁した長石釉をかけている。114-12は信楽壺で、茶湯に関係するものであろう。

盛土 3

大量の遺物を包含した瓦たまりを中心に出土している。

明染め付けとともに、初期伊万里様式の筒碗(119-21・22)が2個体のみ確認できた。生掛けの釉で21では内面に釉垂れをおこしているほか、厚手で青みの強い製品であることから、明染付けと一見して区別できる。119-3は葡萄を描き、ダミの上から葉の葉脈を釘などで掻き取って表現している。8はアルファベットのような文字がみられ、ヨーロッパへの輸出品であろうか。119-11~16は小杯で、本盛土層に集中して出土している。文様のモチーフはほとんど同じであるが、14が蛇ノ目高台風、15が饅頭心気味、11~13が口縁端反り、という違いがある。119-19が円形合子、20が角形合子で、ともに祥瑞様式である。18は華南産と思われる染付け碗で灰色気味の厚手のつくりで、口縁の釉がはげ落ちている。粗雑な作りの華南産と思われるものは意外と少なく、器壁の薄い精巧な作りの染付けが多い。

肥前系陶器もかなりの個体数が出土している。碗皿類は当然ながら、播り鉢も多くみられ、壺甕瓶類はないという組成である。そして、胎土目積みの個体は少なく、確認できる目跡の多くが砂目積みの技法によっている。碗では、120-1が天目、5が深い丸碗、3・4が直線的な体部の碗であるが、いずれも青みがかった長石釉をかけている。2と8は瀬戸美濃の可能性がある。2は飴釉を高台内面まで掛け、8は光沢のある鉄釉で「露」の印を押している。4寸程度の中皿には口縁端部を丸くおさめる通常のもの(120-6・7・13)と、口縁端部を水平に折り曲げる「溝縁皿」(120-9~11)がある。大皿も120-14、121-3~5などある。121-3は絵唐津、4は紫色の変色部があるが文様かそれとも釉の塗り分けかわからない。121-1は鉄釉で線を描き区画された内部に別の釉を塗るといふ、いわゆる二彩唐津である。121-6は播鉢のような器形だが、灰釉がかけられ砂目がみられる。122-1~3は播鉢で、口縁部周辺に鉄釉がかけられている。

播鉢ではこのほかに越前産のも少なからずみられ、122-4、123-1である。123-3・4はよくわからないが、硬質で赤褐色を呈し越前の可能性がある。123-2は、直立する口縁端部とそこに重ね焼きの痕跡を残し、鉄錆釉で灰色の素地だが、産地は今のところ不明である。122-5は瀬戸美濃天目碗、6は黄瀬戸溝縁皿である。確認できた瀬戸美濃系陶器は、非常に少ない。7は黒褐色の鉄釉で祖母懷壺の口縁部、8も瀬戸美濃壺の口縁である。122-9~11は越中瀬戸の内はげ皿である。小

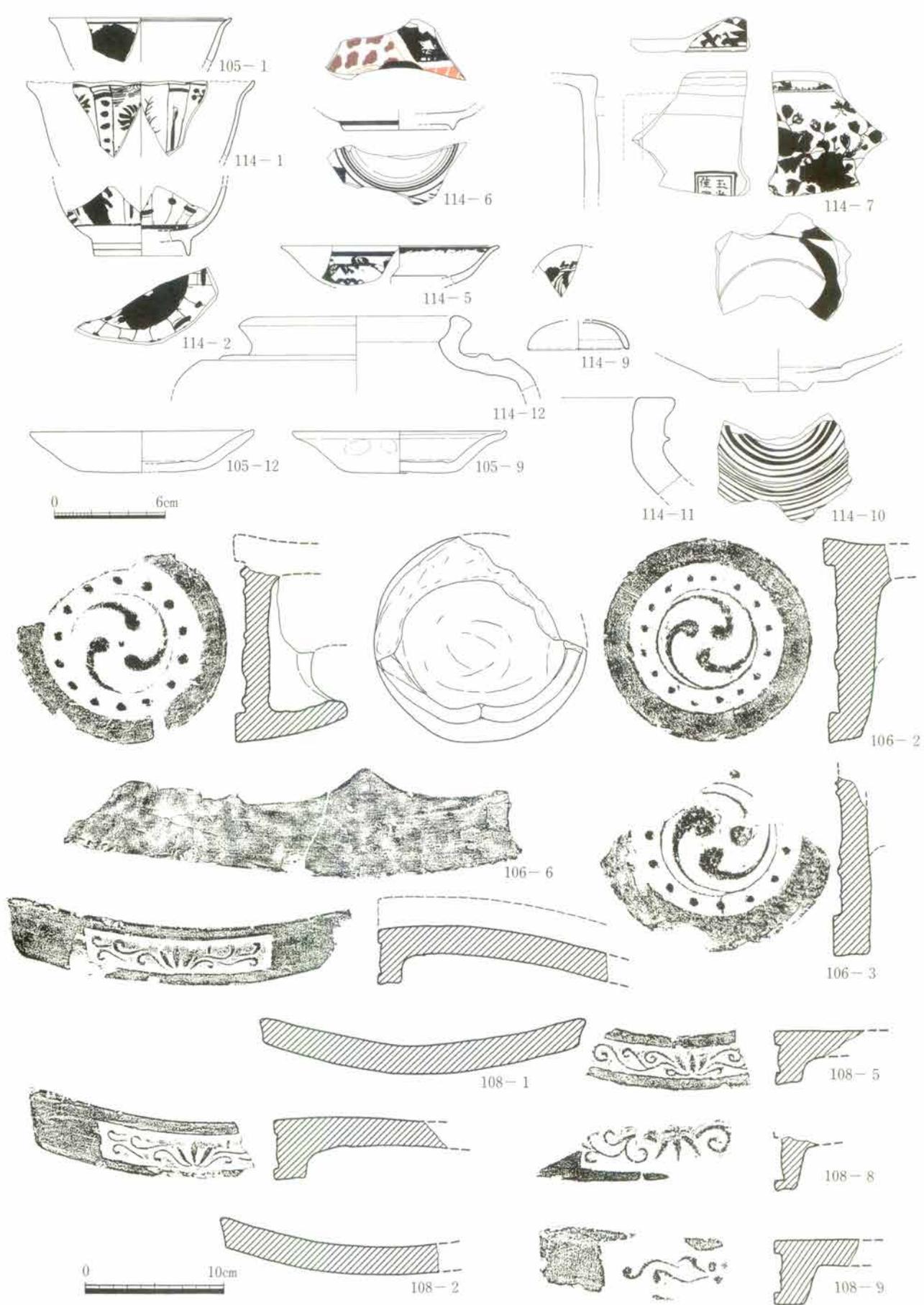


Fig. 262 石川門調査区盛土1・2出土遺物 (1/3)

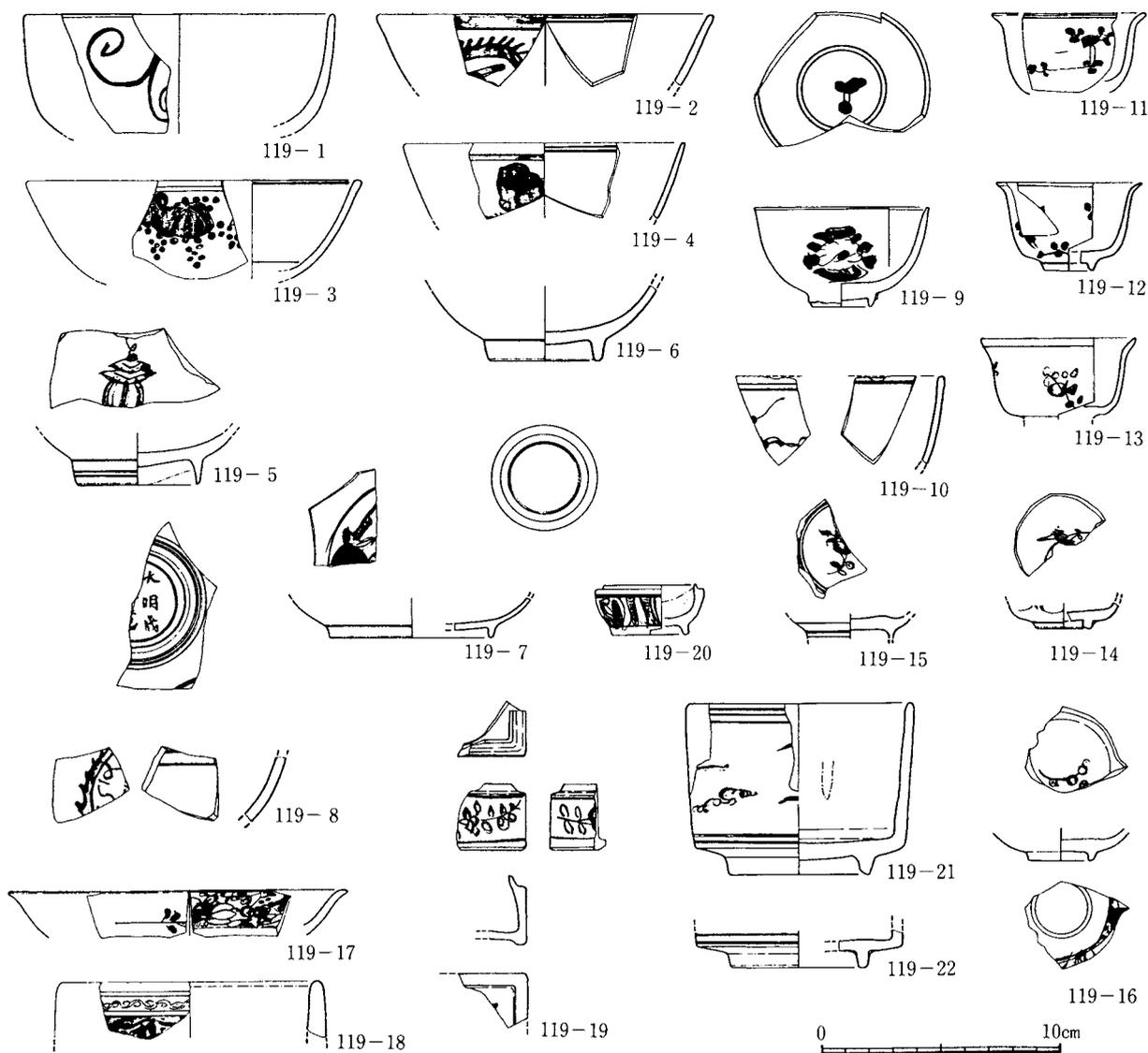


Fig. 263 石川門調査区盛土3出土遺物（染付け）(1/3)

さく直立する体部に鉄釉、見込みに印花、高台は碁笥底風に削りだしている。越中瀬戸はこの三個体のみである。

123-5~7は朝鮮ないしは唐津の徳利である。内面に同心円文当て具痕を残す。6は肩部に灰釉、体部に鉄釉の掛け分けがみられる。123-8は鍛冶関係の遺物で、とりべである。123-10~13は焼塩壺と考えている。底部は型作りのようだが、それより上は幅広い粘土板を積み上げるようにして作っている。熱を受けた痕跡はないが、焼塩壺の器形に最も近い。123-9は蓋である。焼塩壺の蓋としてのサイズに近い。

土師器皿は、遺物箱数にして33箱出土しているが、個体のバリエーションは少なく、よく似た器形および胎土である。胎土では、概ね3種類に区分される。1類は、淡赤灰色を呈し、焼成の悪い部分は赤色が強く、粉っぽい胎土の感触である。つまり粉っぽくて橙色。2類は灰褐色を呈し、1類よりもしっかりした器面状態である。つまり肌色でカチツとした土器。3類は2類よりも白く粉っぽい、そして金雲母がはいる。また、器形及び大きさに違いがあるものの、いずれも同じ製作技法である。まず見込みを平行になでて次に口縁部を最後にナデを1周させている。その手の抜き取りによって土器に歪みが生じている。また、見込みにナデをおこなうときに、筥の上でおこなったようで、その圧痕が残されている。体部と底部との境に浅い溝がめぐるものがあるが、口縁部折り返しの技法によるものであろうか。

灯明の痕跡を残すものと残さないものがある。残すものは、徹底的に使われて、口縁を全周して厚く油痕を残す個体が多い。この傾向は、兼六園江戸町推定地の出土土師器皿とも共通する。ただし、江戸町資料の個体差が大きく、本資料と性格を異にするようである。また、口径10cm以下の小形の一群がある。一見して中世のような感じを受けるが、製作技法は口径15cm前後のものと同じく、見込みに横方向のなでを加えている。白鳥堀調査区出土土師器皿にはこのような特徴はない。小形の一群には灯明の痕跡はなく、特別な意味があるようである。

金属器では、青銅製品が出土している。179-8・9が盛土4出土でそれ以外が盛土3出土である。1～4がキセルである。1がラウに接続する本体部分で、ラウからの管を挿入している。4はラウである。3は吸口近くと思われ、2が1・3との中間の太さである。このようにキセル軸全体を銅板が覆っていたのであろうか。錆化によって鍍金の有無はわからない。5は錠前の鍵。6は刀のはばきである。8・9は刀の兜金。9には紐を通す穴がある。7は鏡で、紐座に亀を描いている。なお、周囲が破損しているが、その破断面を磨いているようである。

瓦類は560箱出土しているが、ほとんどが盛土3と、その横の石垣を埋め込んでいる盛土層からの出土である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、輪違瓦がほとんどを占めているという、器種の偏りが特徴的である。同範と思われる個体は、軒丸瓦に刻まれたマークなどによって確認できたが、軒平瓦についてはよくわからない。

軒丸瓦は、その面径から4種類に分けられる。しかし、巴の形態はいずれもよく似ており、尾部が隣の巴の背中に接してあたかも圏線状になったものと、離れているものの二つがある。面径18cmのものは、全て巴が右巻きで、珠文が16個のものである。135-7の巴の間には鍵状のマークが範に刻まれている。135-3には「×」印が、135-4には両者を合体したようなマークである。面径16cmのもの(137-7)は僅かしか出土していない。珠文は18個と推測される。面径15cmのものは、非常にたくさん出土している。珠文数が16個のものと14個のものがあり、後者の巴文には右巻きと左巻きが存在する。本資料には右巻きの巴が大多数を占めるが、面径15cmで14個の珠文のものに限り左巻きがほとんどである。製作技術者の違いであろうか。面径13cmは16個の珠文があるので、個々のものは小さな突起となっている。このように、4つの面径に対応するように、丸瓦でも径の違いがある。

軒平瓦は、中心飾りを持つ均整唐草文である。中心飾りの花卉が、細長く下から上に上がるもの(「花卉直立型」142-2など)と、上から下に降りるもの(「花卉垂下型」144-7など)、そして花びら状になったもの(「幅広花卉型」145-5など)の3種類がある。さらに、軒平瓦の細かい分類は子葉の状態、表現で分けられる。幅広花卉型は、おそらく金沢城独自の文様であろう。幅広花卉型中心飾りは半肉彫りされるなどの立体的に表現され、子葉もまたその傾向にある。この点で他の軒平瓦と異なる。

なお、168-1・6は鬼瓦である。1は桐文である。

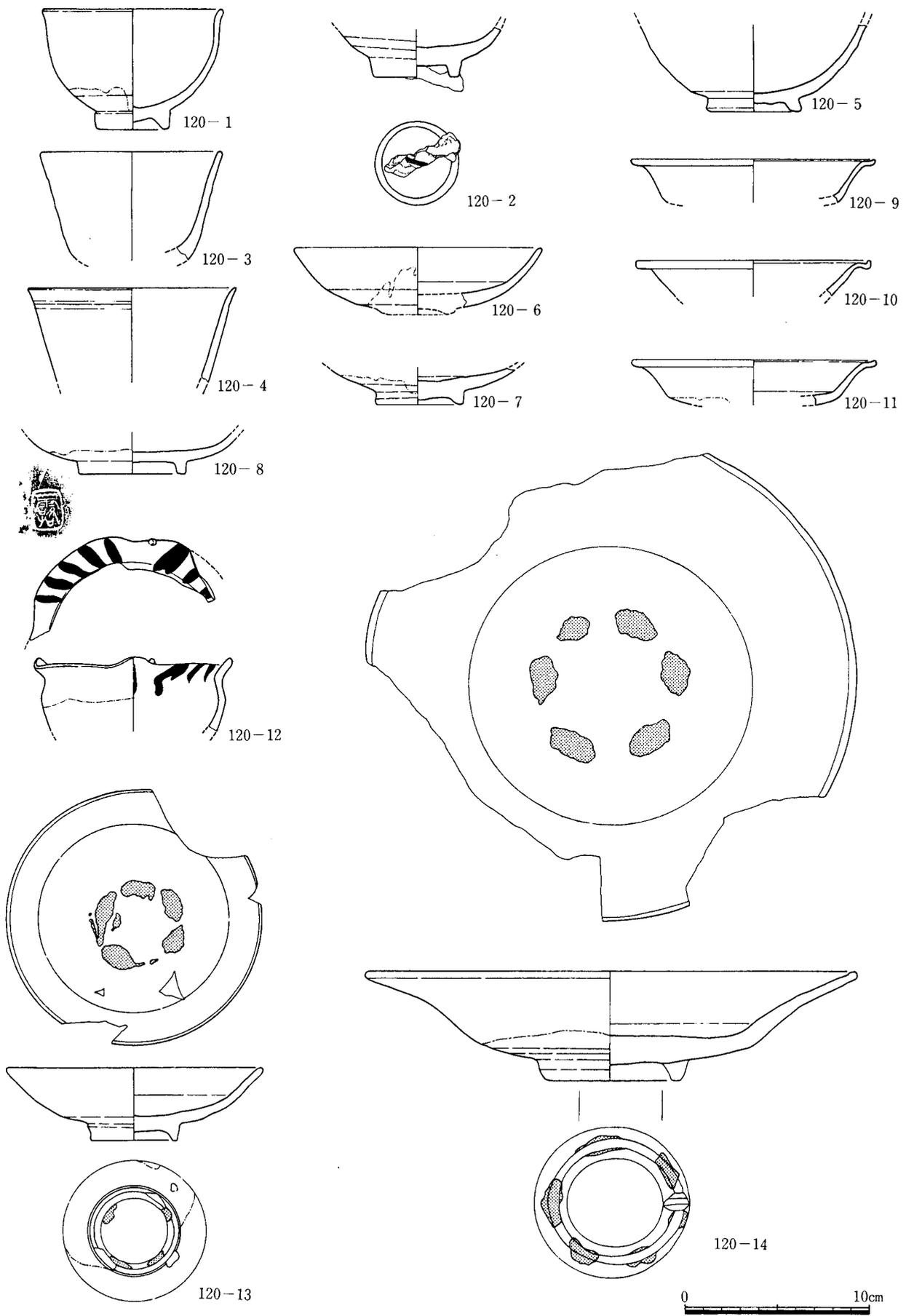


Fig. 264 石川門調査区盛土3 出土遺物 (唐津1) (1/3)

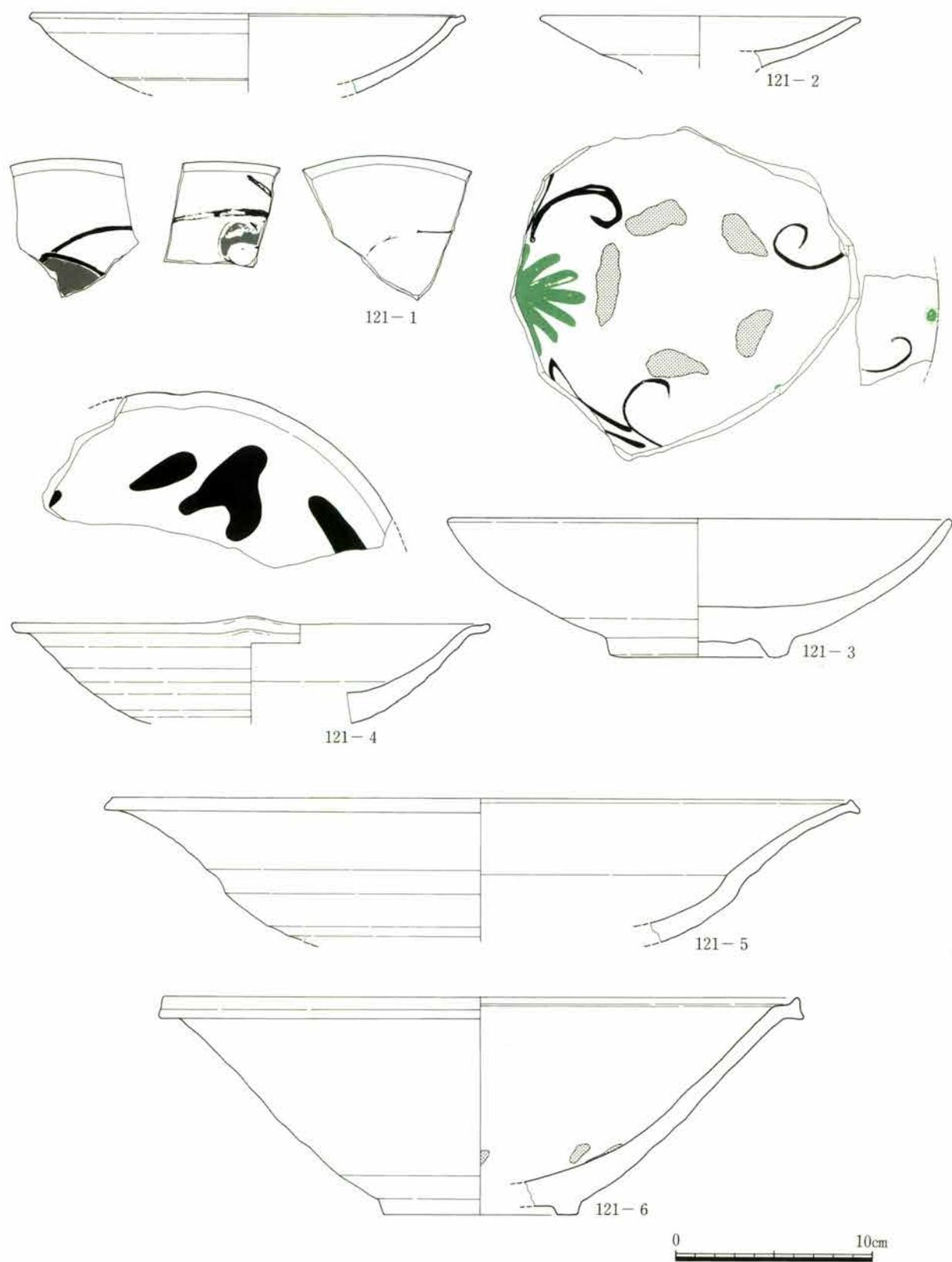


Fig. 265 石川門調査区盛土3 出土遺物 (唐津2)(1/3)

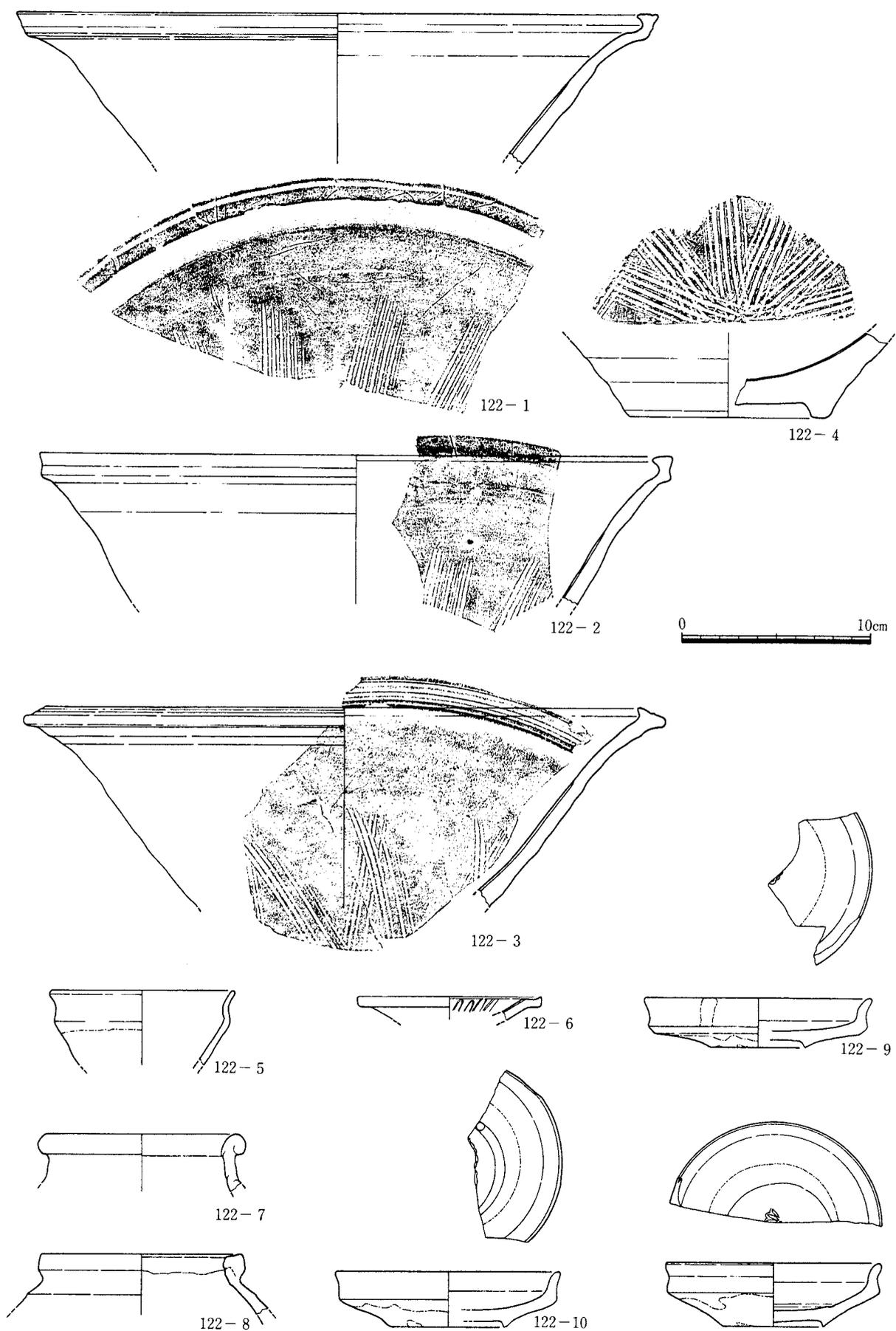


Fig. 266 石川門調査区盛土3出土遺物（唐津3、瀬戸美濃他1）（1／3）

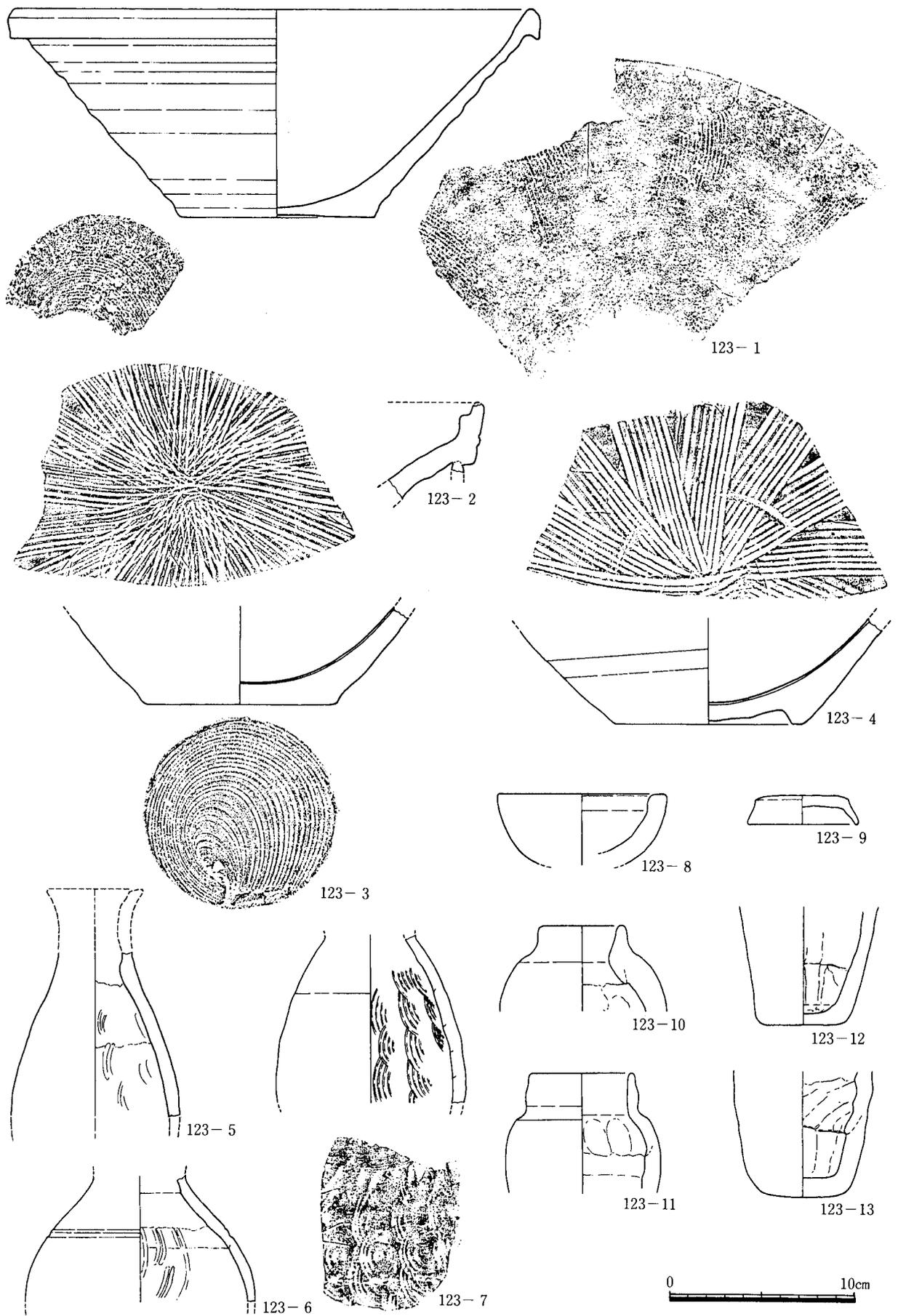


Fig. 267 石川門調査区盛土3出土遺物（瀬戸美濃他2、焼塩壺）（1／3）

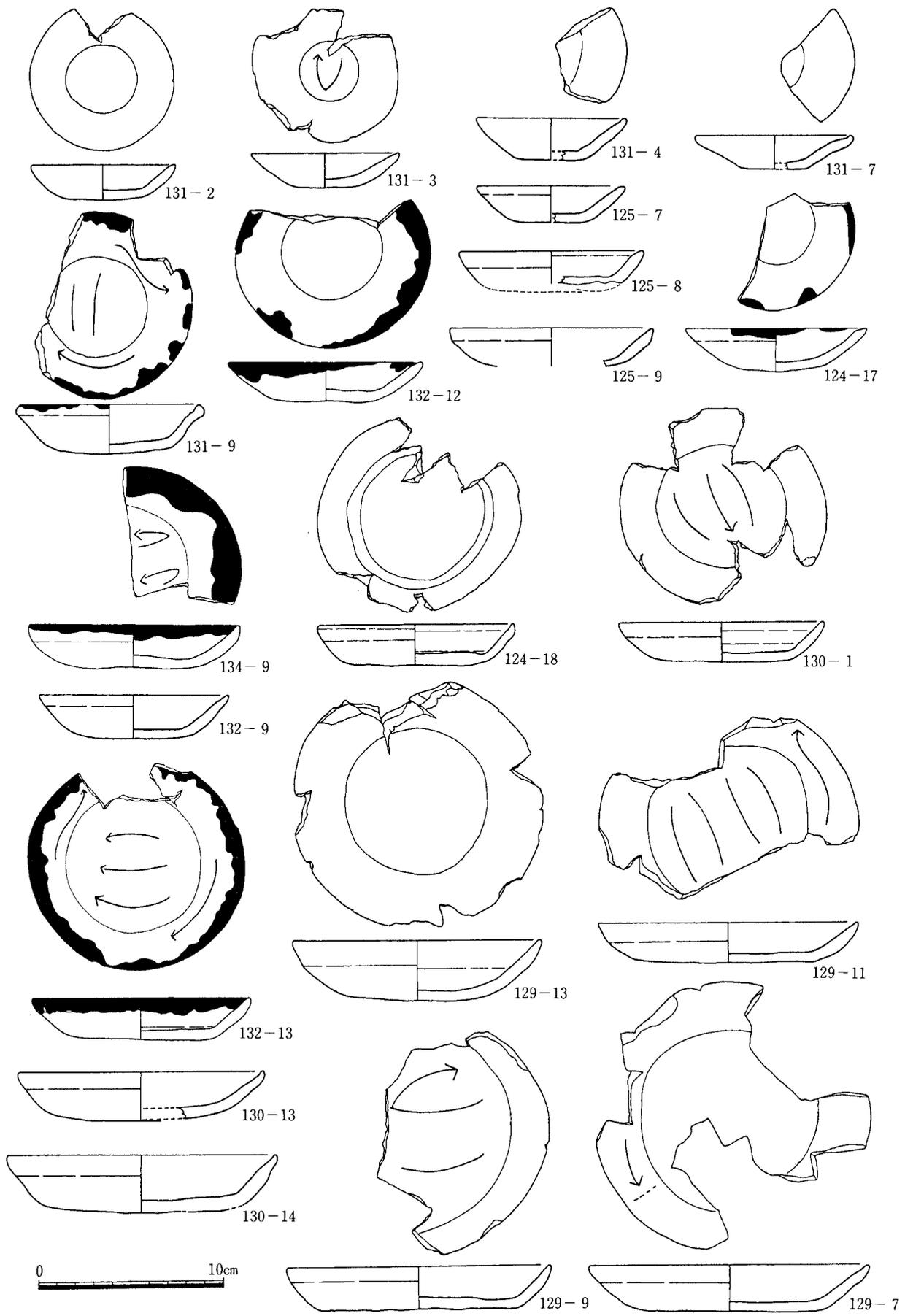


Fig. 268 石川門調査区盛土3出土遺物(土師器皿1)(1/3)

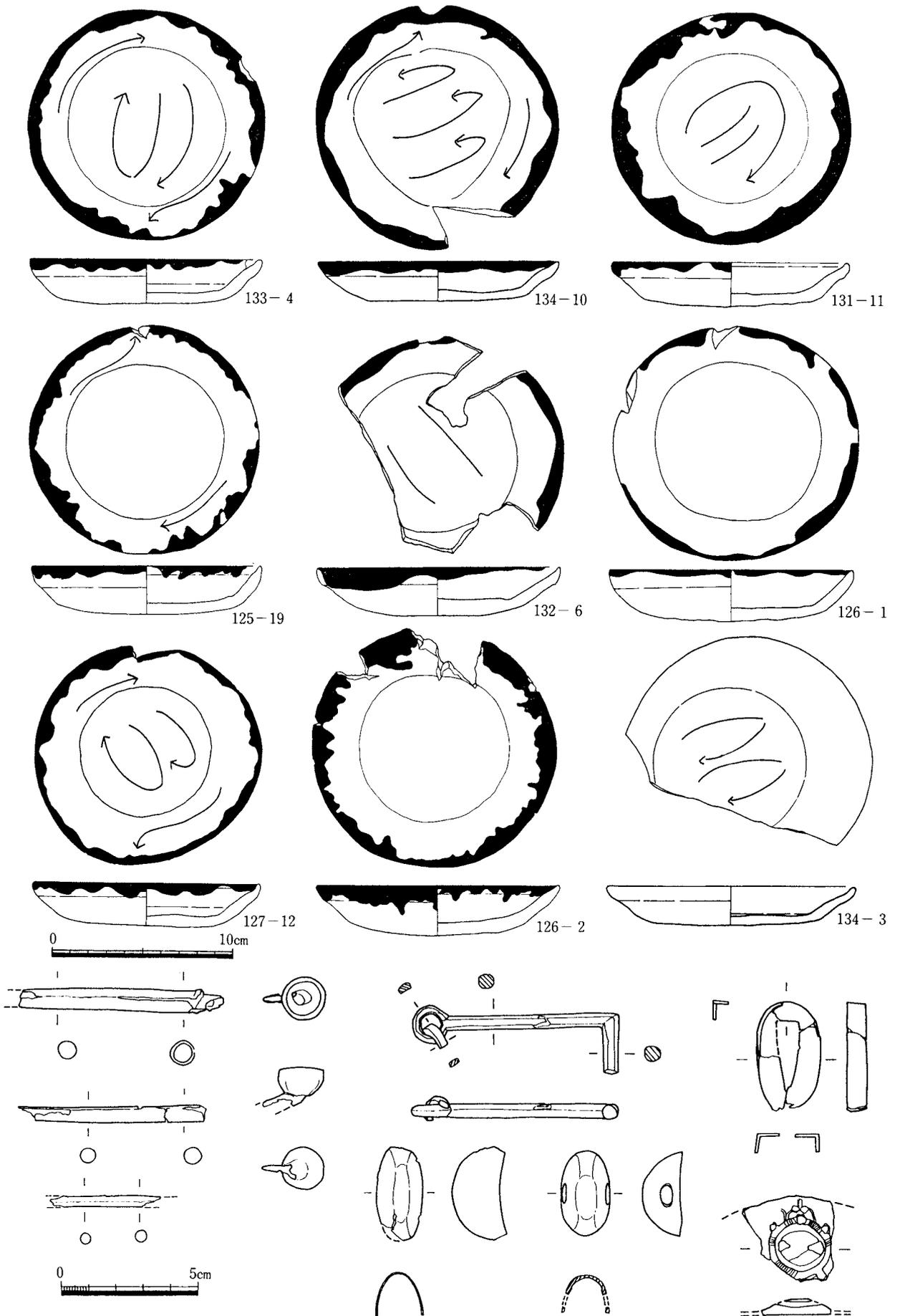


Fig. 269 石川門調査区盛土3出土遺物(土師器皿2)、盛土3・4出土遺物(金属器)(1/2、1/3)

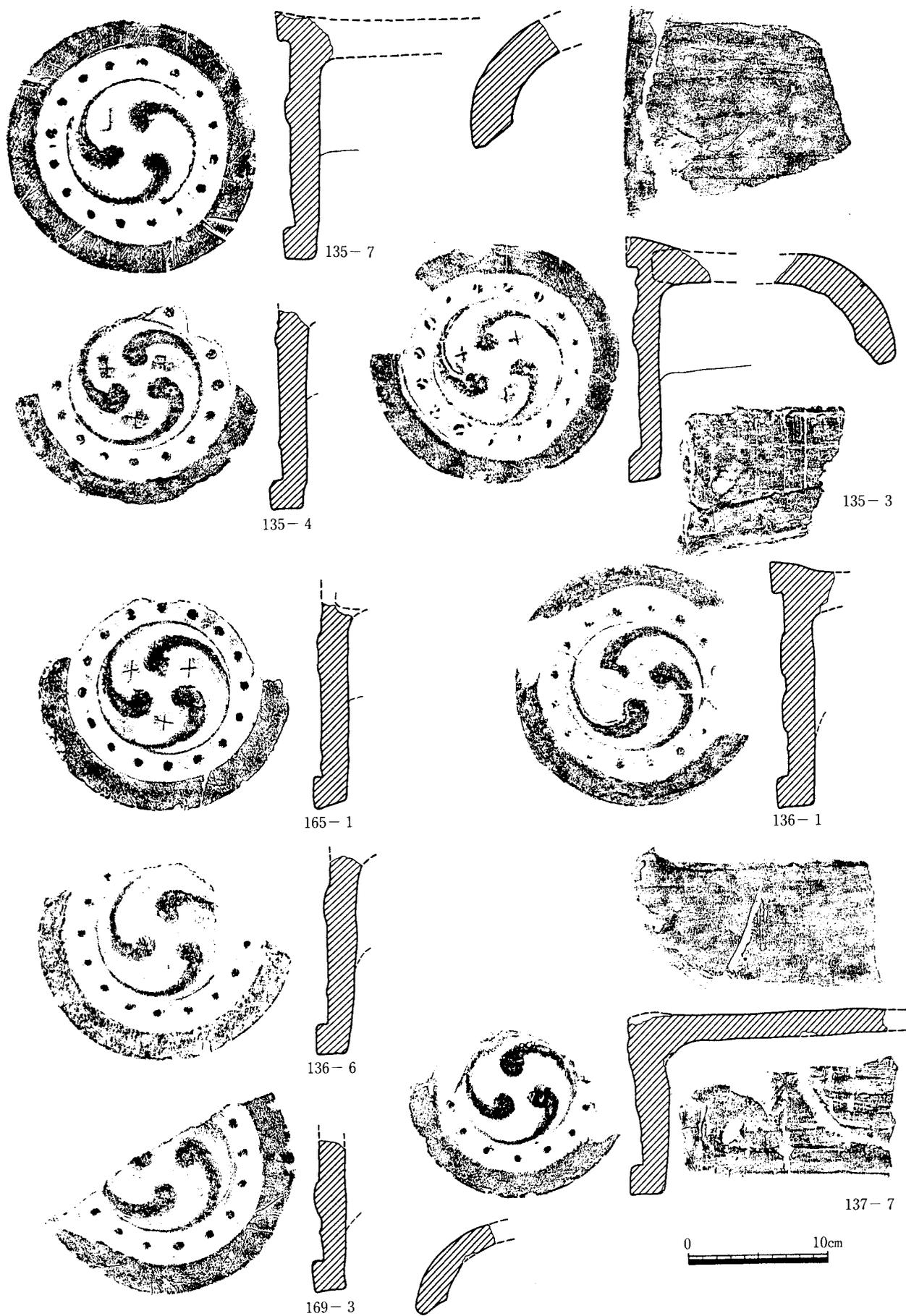


Fig. 270 石川門調査区盛土3出土遺物（軒丸瓦1）（1／4）

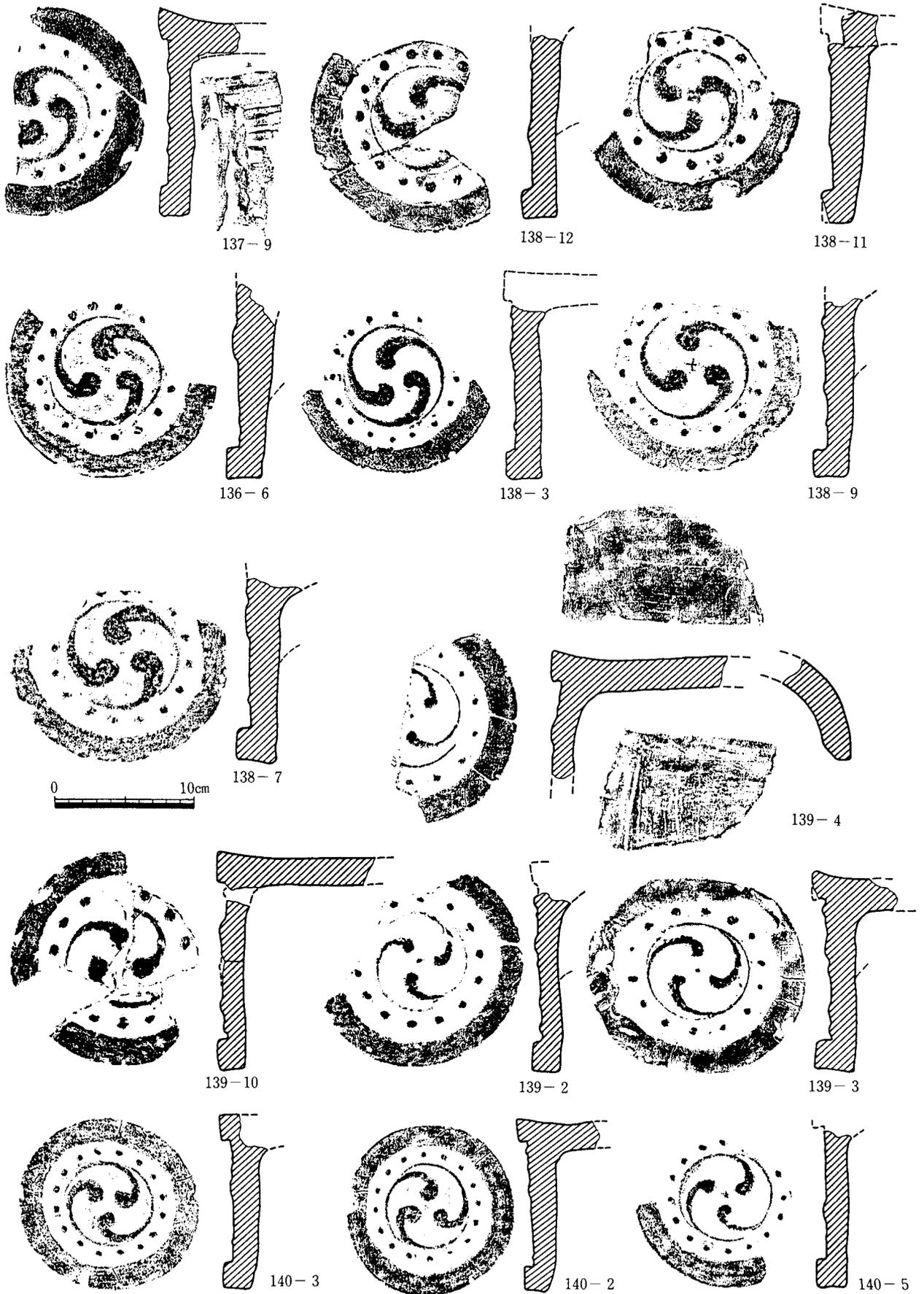


Fig. 271 石川門調査区盛土3出土遺物 (軒丸瓦2) (1/4)

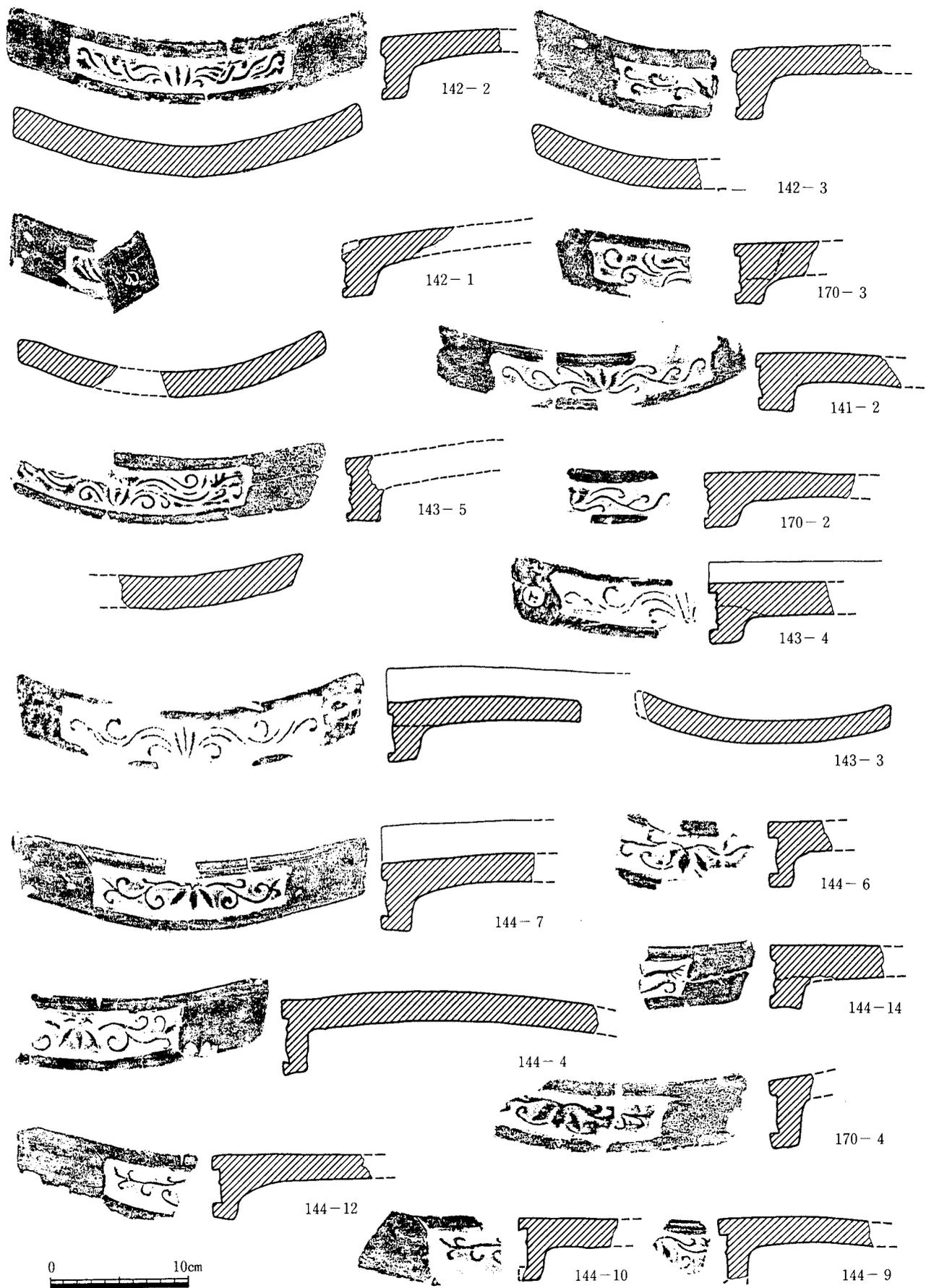


Fig. 272 石川門調査区盛土3出土遺物 (軒丸瓦) (1 / 4)

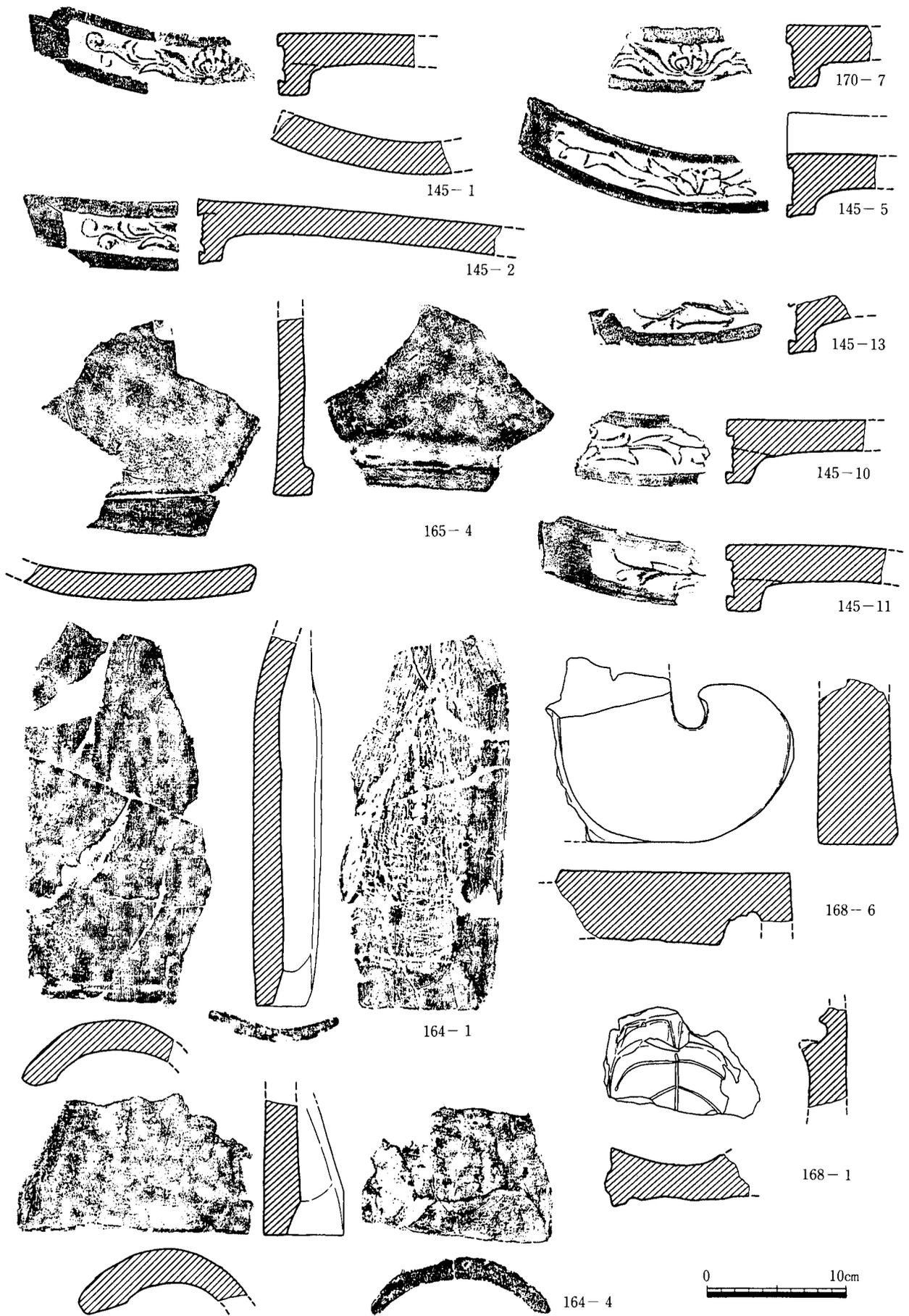


Fig. 273 石川門調査区盛土3出土遺物 (軒平瓦・特殊瓦) (1 / 4)

盛土 4

明染付けが主体である。177-1~5は芙蓉手碗である。薄手の精良品である。皆同じモチーフであるが、大きさや口縁など微妙な違いがあり、幾つかの個体がある。177-7・8は型作りの皿である。8内面には渦巻文。177-11は熱を受けて表面の釉が溶けているものである。177-15は角皿で、少なくとも3個体がある。177-18は色絵小壺で、外面に牡丹が描かれている。素地は灰色で釉もそのために暗い調子で、細かい貫入が入っている。177-19も色絵皿だが、18と異なつて素地は白い。釉は雑にかけられ、高台周辺でかけられていない部分がある。177-20は白磁小杯で、コップ状を呈する。把手には竜頭がある。優品である。178-6は清染付けで、ペンシルドローイングされた文様がある。肥前系染め付けが177-14である。素地は灰色気味で厚い。濃みに呉須が塗られ、釉の生掛けである。高台内面には灰のような細かい粒子が一面に付着している。

染付けの割に陶器は少ない。178-8は中国華南産の緑釉合子蓋である。外面を格子に溝を付けて緑釉を塗り、内面に灰釉を塗っている。178-9は大きな浅い皿で中国華南産である。内面に文様が線刻されて三彩が塗り分けられている。漆継ぎされている。178-5は青磁壺で酒会壺である。178-10は越前火桶である。15は同種の蓋であろうか。土師器皿は、盛土3資料と同じである。

なお、漆塗り製品が2点出土している。178-16は皿で口縁端部と内面文様に蒔絵が施されている。17は膳のような浅い角皿で、口縁上面に蒔絵が施されている。また金属器については盛土3の項参照。

〔コラム—発掘ニュース—〕

発掘調査は、世の中の開発を遅らせる原因の一つと思われているところがある。それに従事している人は、個人的な趣味を基にしているなどと思われていることもある。よく「趣味と実益がかねそなわられていいですね」といわれる。否定するつもりはないが、あまりにも私たちの仕事の一面しか評価していないと思う。マスコミをにぎわす調査成果は、あくまでも一過性であるが、一般市民にとってそれが私たちの仕事を知る唯一の手段でもある。現地説明会や講演会で普及啓発につとめても、それは無関心な人まで巻き込むことはできない。マスコミの力は大きいと思う。

このようなことを考えていると、私たちの方から歴史や文化財に無関心な人に積極的にアプローチできる方法、すなわち「壁新聞」ならぬ「立て看板新聞」を思い立ったのである。そこを通る人の目に付くように、歴史に興味が無くても新聞で記事を読むような感覚でありたいと思った。希望者には配布した。新聞には、調査成果を伝えるとともに、なぜ発掘調査というものがあるのかを訴えたつもりである。毎月の発刊を目指し、Fig. 274は最終号である。

この新聞を読んでもすぐに忘れるに違いない。しかし、新聞を読んだ事実と、「立て看板新聞」の向こうでおこなわれていた発掘を見た経験はどこかに残ることもあろう。それが私たちの仕事の理解の一步につながると信じる。

金沢城跡 発掘調査 ニュース

No. 7 (最終号) 平成5年12月9日
発行 石川県立歴史文化財センター
住所 金沢市末廣町4-155 Ⅲ 43-7692

調査は最後の段階になってきました。工事機材の発掘調査という特殊な状況から、極みの残らない成果を上げることができず不安になります。将来、金沢城の発掘担当者がこのニュースを継いでくれたら素晴らしいですね。(監)

「発掘する」ということ

私たちの主な仕事は、「遺跡の発掘調査」を行うことです。発掘調査は、計画を立てて現地での調査、作成した記録簿や出土遺物を整理・分析して「調査報告書」を刊行するまでの一連の作業をいいます。そして「考古学」という学問を基礎にしています。

考古学は、発掘することを目的としているわけではなく、遺跡や遺物を研究して、人間生活を研究し歴史を構築していく学問です。発掘は考古学研究の一つの方法にすぎません。私たちは大学の考古学を学ぶのであって発掘を体験したことはありません。しかし考古学の中で占める比重は大きく、発掘により新発見がなされたり、発掘調査が多いと研究も大きく深化されます。つまり考古学が発掘を切っても切れない関係というわけです。

昔の穴がどうしてあつたのか、その構造を明らかにします。これは土の色や質、あるいは砂ぼこり、土の質の違うところから、つくり置かれた穴に埋められた土は地面の土と絶対に違いますが、同じ土を埋め戻してもいいです。そして当時の生活しているものの物質を埋め戻さなければ土の層を探すとはいけません。

発掘で、土層を調べたり遺物の構造を明らかにしたり、遺物がどのように入土しているか調べたり、さまざまな作業があります。多くの記録簿の作成や測量、写真撮影、何よりも現場になる必要が多くなります。エジプトのエ(1979)ツタンカーンの墓を発掘した時、カメラは、驚くらしい新発見を見てはやる心を探るような記録簿を作成し、すばらしい調査をおこなった。

つまり発掘調査は誰でも出来るものではありません。1、2週間を継続すれば発掘を技術として出来るでしょうが、考古学研究に役立つ調査を継続しなければならぬ資格があります。出土する遺物や遺構を分析してはじめて調査成果が生きてきます。そして調査報告書には考古学的に有用な判断できる能力が求められるのです。

Fig. 274 発掘ニュース第7号

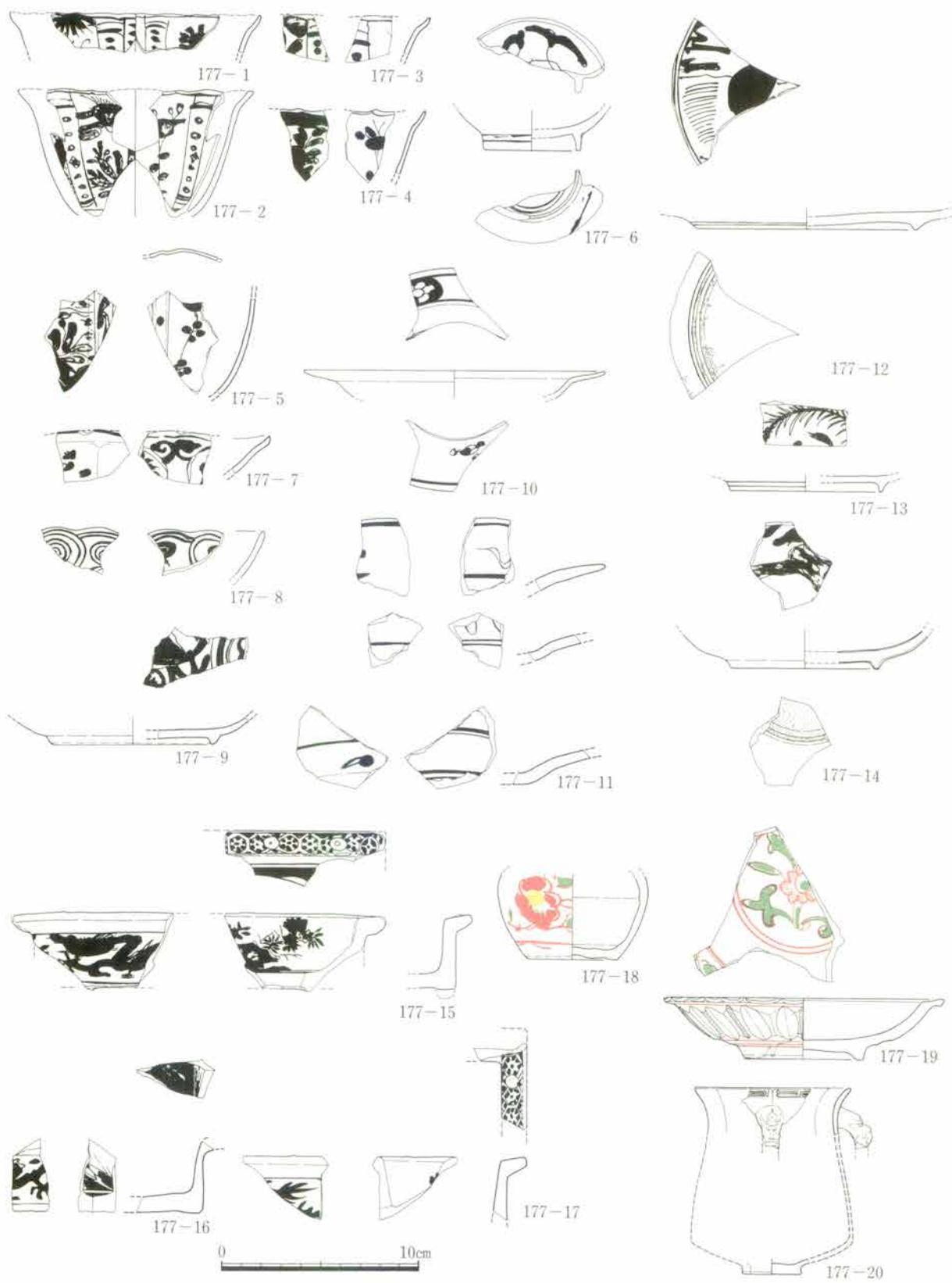


Fig. 275 石川門調査区盛土4 出土遺物 (染め付け) (1 / 3)

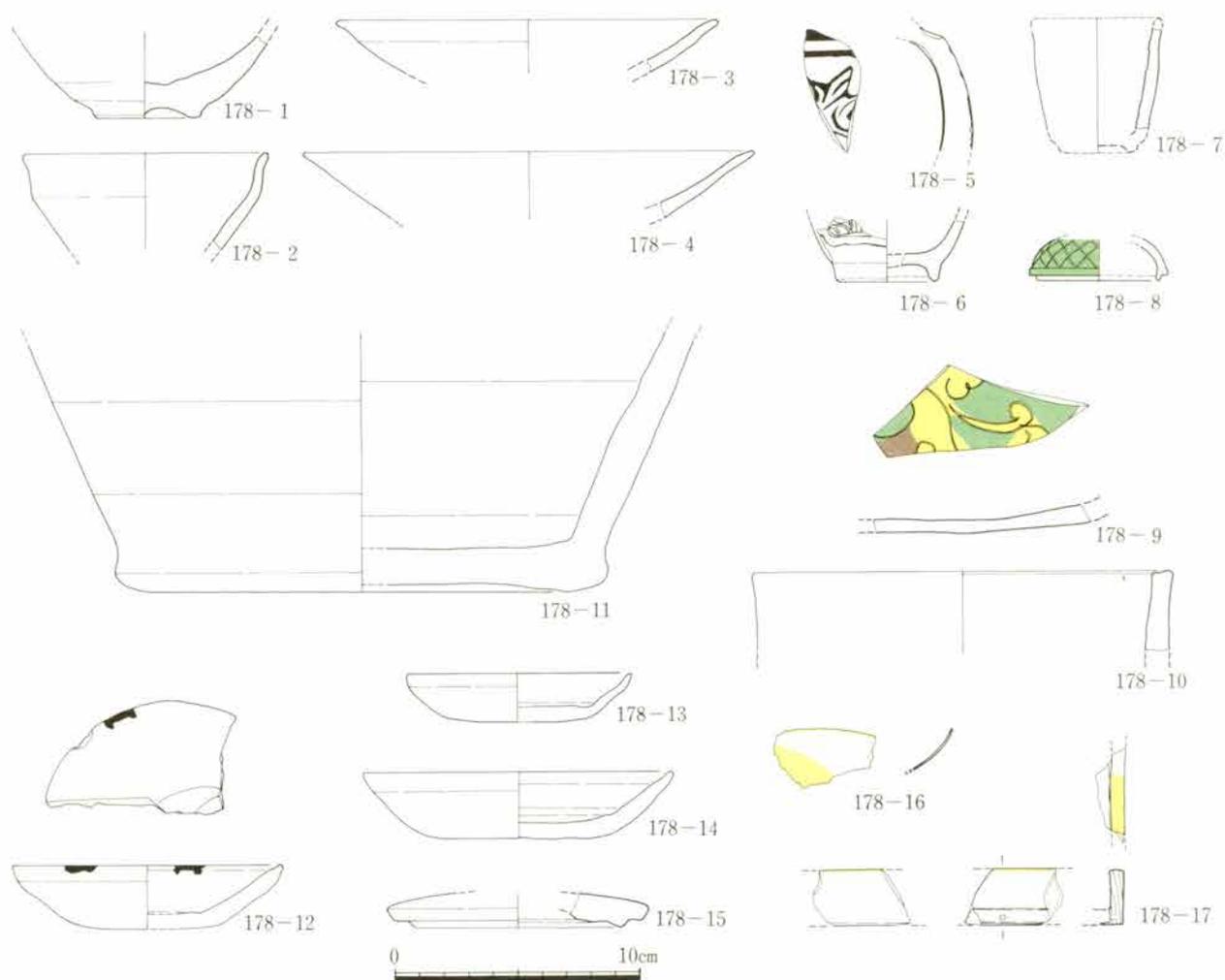


Fig. 276 石川門調査区盛土4 出土遺物 (1 / 3)

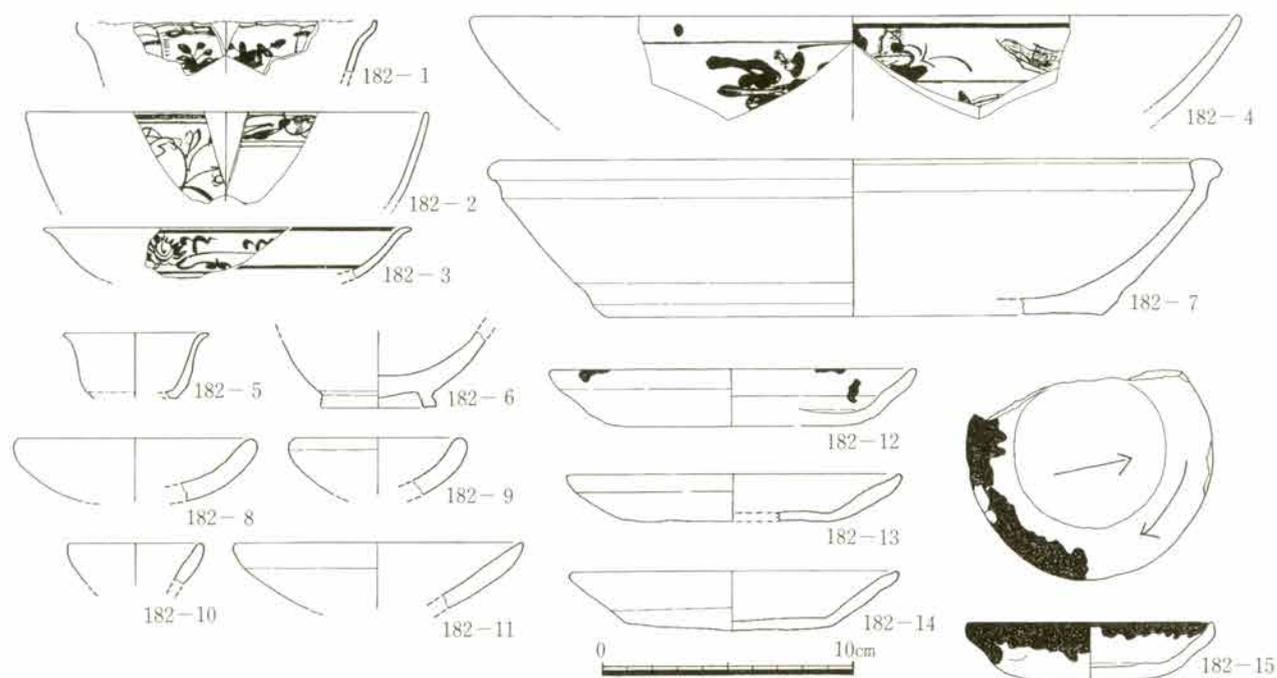


Fig. 277 石川門調査区盛土5 出土遺物 (染付け) (1 / 3)

盛土 5

盛土 5 出土資料の内、盛土 4 等と同時代資料が混入している可能性が大きい。182-1 の明染付け芙蓉手碗や 182-6 の唐津鉄釉碗、土師器皿などである。図示していないが、肥前系では唐津胎土目鉄釉絵角皿や唐津胎土目灰釉皿などが出土しており、年代的な指標として使えない。

第 5 節 小 結

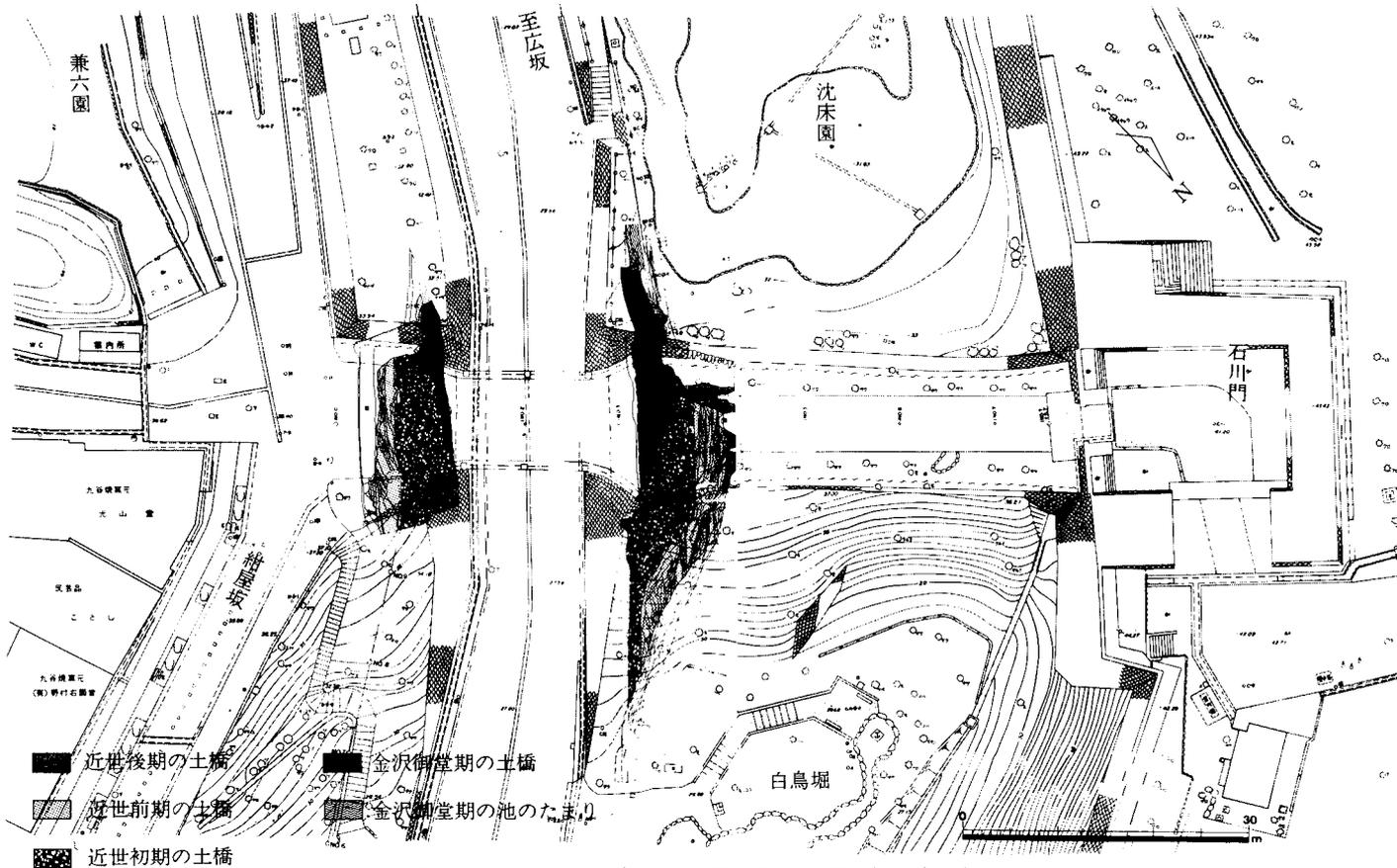


Fig. 278 石川門前土橋と現地地形合成図 (1/800)

石川門前土橋の近代・近世の報告として第一分冊を編集し、その成果をもう一度纏めたい。

従前、百間堀は、金沢城と兼六園をつなぐ丘陵を開削することによって作ったと考えられていた。しかし、石川門前については、谷地形であることが確認された。一方、沈床園内の立会調査の結果、本丸下の地形が高いことがわかったので、開削は本丸側の丘陵を主におこなって堀としたと考えられる。石川門前の谷地形に土橋を作ってそれを遮断し、人の往来ができるようにしたのは、金沢御堂期になってからである。土橋の北側（白鳥堀側）には本報告で扱う鍛冶遺構群が展開し、南側（百間堀側）には池状の水の溜まりが存在している。この範囲は、広くて水の手門付近までであることが地山の状態から推測でき、伝説にいう「蓮池」に相当しよう。

盛土は版築で築かれており、それ以降の盛土技術と全く異なる。版築は寺院建築でもよく使われ、金沢御堂関連施設で使われるについて違和感はない。むしろ、それ以降の技術的系譜の異なりを重視して、土橋が金沢御堂の重要な施設であったと考える。

金沢御堂陥落後、しばらくして盛土 5 による土橋が築かれ、金沢御堂の土橋を完全に隠蔽した。旧来の権威の否定であり、新たな支配者の宣言でもある。この盛土の年代や作られた背景を正当に評価するには、おそらく、築城史の流れにのった位置づけが必要になろう。次に土橋は、寛永年間（1630～40 年代）に作り替えられたと考えている。これによって、絵図にみられる土橋が基本的に完成

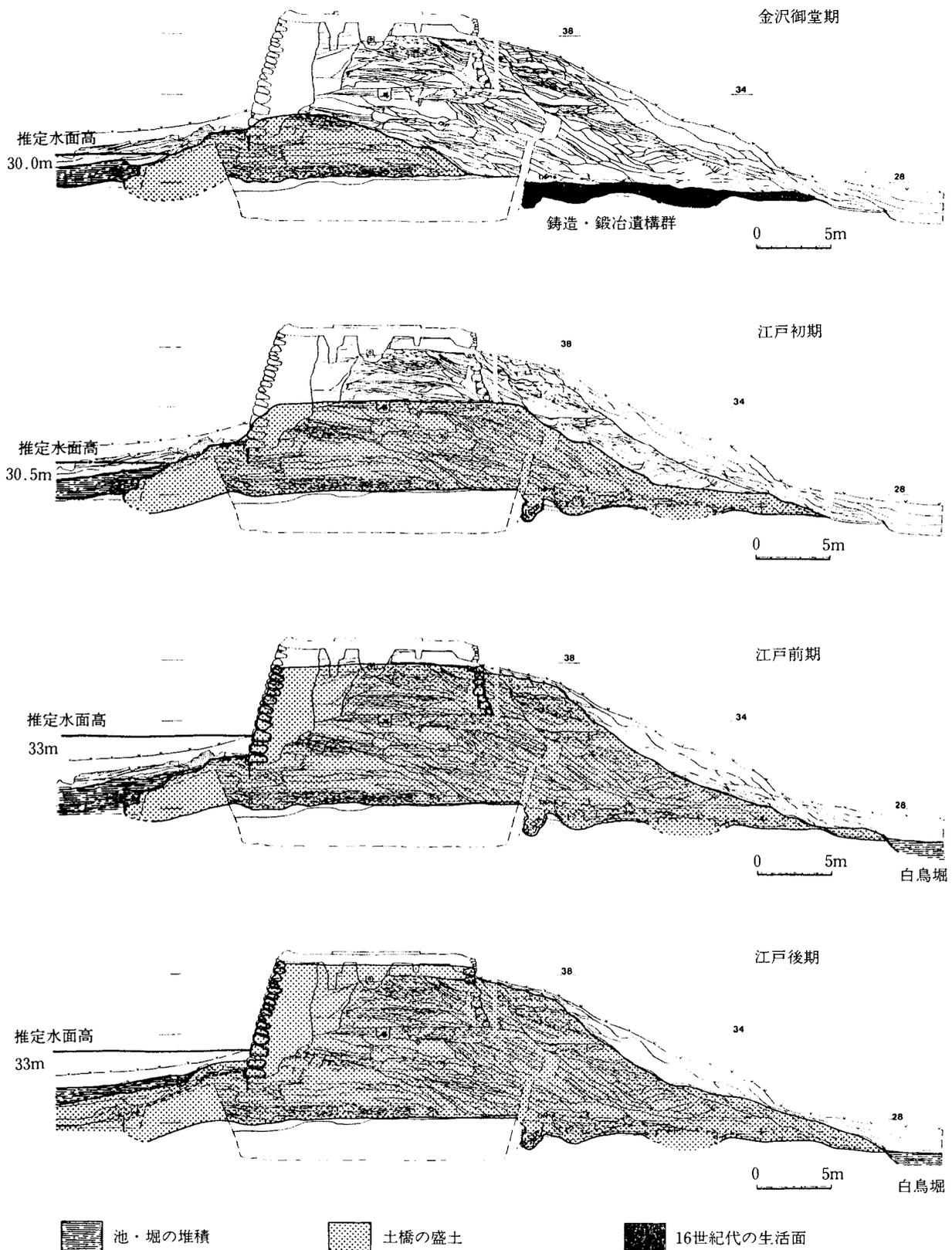


Fig. 279 石川門前土橋の変遷図 (1/400)

し、石垣も作られている。年代の根拠は、初期伊万里染付けの存在や、江戸町推定地土器群が元和年間（1620年代）の指標であり、それよりも新しいこと、からである。土橋嵩上げの理由はよくわからないが、木樋が鍵を握っていると考え。木樋は意図的に抜き取られており、掘り方からの出土の遺物は盛土3に極めて近い年代を示す。つまり、導水に失敗したので、兼六園から金沢城にいたる区間で、最も低い位置にある検出地点の高さを上げることによって、城内に水を引き入れることができたと推測する。これ以降安定した土橋形状であったが、18世紀の後半にはもう一回嵩上げをおこなっている。石川門の改修や石垣の補修などを考慮に入れて考えねばならない。

これまで単純に考えられていた石川門前の歴史が、意外にもかなり複雑であることがわかった。しかも、金沢城自体も絵図からのみでは理解できない部分が多々あることもわかった。さらに金沢御堂期の遺構の検出も、研究の新たな方向を導くことができるような成果である。しかし、考古学のみでは金沢城の実体、金沢御堂の実態を解明することはできず、文献資料・絵図資料とクロスチェックすることによって、新たな歴史像が見えてくる。

付 百間堀の旧地形―試掘調査成果から―

シンボルロード整備事業は、兼六園下交差点から広坂交差点までの区間の道路整備事業であり、石川橋付け替え工事に伴う発掘調査はその一部分にすぎない。この事業に関する詳しい調査経過については第1分冊報告書を参照していただくとして、ここでは本論に欠くことのできない石川門前の旧地形把握の調査成果を概観したい。つまり、兼六園下交差点から広坂交差点にあけた試掘坑の土層状況及び、石川門前発掘調査と車橋門跡発掘調査成果を総合して旧地形の把握が可能になり、築城の歴史展開の理解を容易にする。

石川橋の調査で盛土6の下に谷の埋土としての黒色シルト土を確認したが、卯辰山層を検出できなかった。10m程石川門側にいくと黒色土は薄くなって、その直下卯辰山層と思われる礫層となる。したがって、東西方向は谷の軸にほぼ直交していることがわかる。試掘坑は、南北方向の道路沿いにあけられている。No.9トレンチから水の手門下のNo.6トレンチにいたるまで地山の高さが上がっていることがわかる。特に、金沢御堂時期の堀の堆積土と思われる土が、No.8トレンチまで及んでおり、当該時期の池の範囲を示すものである。よく見ると、沈床園調査区で見られた上層の近世の堆積泥土もNo.6トレンチを境に認められなくなる。しかしNo.6トレンチでは、その上にさらに明るい色調の堀の堆積土が認められ、堀の堆積が一様でないことを伺わせる。

No.5トレンチ以南では地山の落ちが認められ、本丸南東隅石垣付近で最も高くなるものの、すぐに地山の落ちを車橋門調査区で検出している。つまり、本丸下は相対的に高い地山となっているが、起伏があることから旧地形に近いものであると考えられる。このように、本丸下が高い地形であったものを、削平して現在に至っていると考えられ、車橋門を造ることによって百間堀を水堀にすることができたことは、車橋門発掘調査報告書で既に述べた。また、石川門間土橋よりも南は、谷地形の低いところになり、下がりの自然地形が想定される。

このような旧地形は、現在から伺い知れるものではなく、積み重ねられた地道な調査結果の集積によって初めて明らかにされるのである。

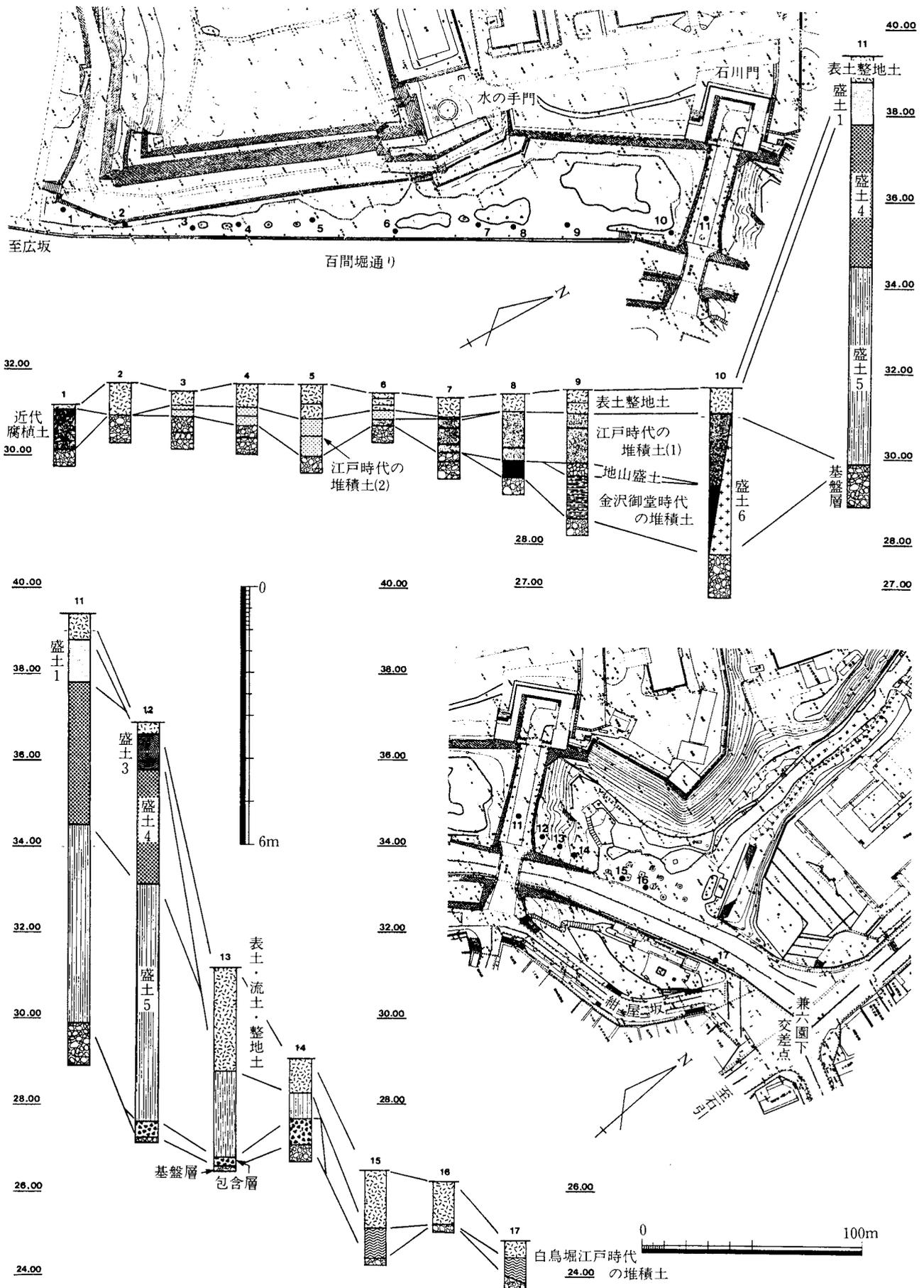


Fig. 280 百間堀通り試掘位置と土層柱状図 (1/3000)

大塚 57	58	59	83	84	85	87					
器物 番号	種別I	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徵	胎土・色調	備考	実測番号
1	中国 明	磁器	青花碗	石川門	表土		口径10.6		明灰色の素地	買入	A-136
2											A-57
7	肥前	磁器	碗	石川門	表土		口径8.6	一重網目文	透明感のない釉	釉の生掛け	A-142
16	硬質陶器	磁器	碗	石川門	表土					軍隊用食器	A-130
20		土器	皿	石川門	表探						D-51
22											
2	中国 明	磁器	碗	石川門	表探	流土3		外面龍文		芙蓉手	A-124
3			角皿	石川門		流土5				祥瑞	A-118
5			コップ	石川門		流土5					A-20
3	中国 明	磁器	青花皿	沈床園		4層	高台径9.4	網	灰色気味の素地	「言徳年造」	A-25
4			皿	沈床園		4層		見込み盛り上がる、釉の 掻き取りなし	白泥	スワトウ、陶器質、漆 継ぎ、高台焼成時欠損	A-22
6			青花碗	沈床園		4層	高台径4.8	饅頭心で高台内面も盛り 上がる		スワトウ「大明年造」	A-27
7			青花皿	沈床園		4~5層	口径10.4、底径2.3、器高2.8	外面芭蕉葉文、波頭文； 内面十字花文	青味の釉	暮筭底、漆継ぎ	A-28
9			青花瓶	沈床園		4層	口径6.9、高台径7.4、器高18.3	外面花樹文	青味の釉	スワトウ	A-1
10	肥前	陶器	皿	沈床園		4層	口径11.1		外面軸割落		D-151
11			小杯	沈床園		4層	口径7.4、高台径3.4、器高3.6		白色に変質	被熱か？	D-31
12			天目碗	沈床園		4層	口径10.4				D-28
13			皿	沈床園		4層	底径4.5				D-35
14	瀬戸美濃	陶器	皿	沈床園		4層	高台径5.6			面施釉、買入	D-152
15	肥前	陶器	皿	沈床園		4層	高台径4.7			砂目	D-34
2	肥前	陶器	播り鉢	沈床園		4層			緑色の灰釉	外面施釉	D-6
4		土器	皿	沈床園		4層砂上	口径9.1、器高1.9		石英：淡赤灰色		D-27
5						4層					D-26
6						4層	口径8.9、器高1.7	薄い	カクセン石		D-26
8						4層	口径9.7、器高2.0	口縁端部つまみ上げ	石英、金雲母		D-40
10						4層	口径10.2、器高1.8		石英、カクセン石：灰白色		D-37
11		土器	皿	沈床園		4層	口径12.6、器高1.6		カクセン石微		D-38
12						4層	口径11.1、器高1.9		カクセン石、石英、長石		D-39
11						4層	口径11.8、器高1.9				D-24
13						4層	口径14.0、器高2.4		胎土2類、灰白色	金塗り、板状瓦痕、灯 明油底	D-1
1		土器	とりべ	沈床園		4層	口径5.3、器高2.4		黒く変色		D-25
2			羽口	沈床園		4層砂上	口径7.8	先端は軸に対して斜め		鉄滓付着	D-11
4			鉢型？	沈床園		4層砂上				内型か？	D-12
1	中国 明	磁器	青花碗	沈床園		5層	口径12.9、器高6.1、高台径4.7	外面：芭蕉葉文、内面： 十字花文	素地粗く隙間あり	スワトウ、漆継ぎ	A-23
3			白磁碗	沈床園		5層	底径3.4	外面芭蕉葉文		スワトウ、暮筭底	A-7
4			青花小杯	沈床園		5層	口径11.7	口縁端区	青味の釉		A-71
6			青花小杯	沈床園		5層	高台径3.1、 高台径3.1、	軸掻き取り面1	白磁的	「大明年造」	A-101
8	越前	陶器	鉢	沈床園		5層					D-42

Fig. 5 石川門調査区・沈床園調査区出土土器観察表

器号	器名	種別1	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	実測番号	
91	1	中国明	磁器	青花碗	沈床園		6層	口径11.1	外面花文	青味の釉		A-5	
	2						7層	口径10.1		明灰色の素地		A-89	
	3						6層	高台径5.1	カンナ削り	灰味の素地	「福」	A-3	
	4			青花皿			7層	口径3.5	内面春文：	青味の釉	色絵(赤、黄?)	A-24	
	5						6層	高台径5.2	外面牡丹唐草		墓前底、刃口	A-6	
	6						7層上面	高台径5.8			カラック	A-4	
	7						7層、P-	高台径7.0			「福」	A-2	
	8			白磁皿	沈床園		1						A-8
105	9	中国	磁器	青磁壺	沈床園		6層					A-11	
	10		土器	皿	沈床園		7層	口径9.3、器高2.7		長石、石英：淡褐色	1ヶ所灯明油痕	D-3	
	11	中国明	土器	皿	沈床園		6層	口径7.6、器高1.8		長石、石英、長石	1ヶ所灯明油痕	D-2	
	12		土器	皿	沈床園		6層	口径7.7、器高1.9		石英：淡赤灰色	1ヶ所灯明油痕	D-4	
	14	珠洲	陶器	甕	沈床園		7層			長石、石英	内面小割落	D-246	
	1	中国明	磁器	碗	石川門	盛土1	白鳥側	口径10.0			赤灰色	口縁端反り	A-120
	9		土器	皿	石川門	盛土1	白鳥側	口径11.9、器高1.3、底径4.9	外面指オサエ、		長石、石英、海綿骨針：赤		D-75
	12			皿	石川門	盛土1	白鳥側	口径12.2、器高2.8、底径6.7	内面に板状の圧痕				D-76
	1	中国明	磁器	碗	石川門	盛土2	アゼ2	口径12.5	口縁端部受口			芙蓉手	A-122
	2			皿	石川門	盛土2	アゼ2	底径5.3				芙蓉手	A-121
	5			皿	石川門	断ち割り		口径14.1			青味がかった軸	漆継ぎ	A-138
	6			角皿	石川門	盛土中		底径6.1				色絵	A-96
7			蓋	石川門	盛土中				外面龍文、内面牡丹唐草		祥瑞、「玉堂：器」	A-17	
9			皿	石川門	盛土中		口径5.5、器高1.7					A-163	
10	瀬戸美濃	陶器	皿	石川門	盛土2	アゼ2			外面円、内面草		素地は黄白色、白色の長石	A-95	
11	越前	陶器	甕	石川門	盛土								
12	信楽?	陶器	壺	石川門	盛土2		口径12.8	肩部に1本の凸帯				D-213	
119	1	中国明	磁器	碗	石川門	盛土3	アゼ1下	口径13.2	外面渦文	大粒の長石、石英		D-192	
	2						口径6区	口径14.4	外面龍文		貫入	A-100	
	3						盛土3	口径12.5	匍菊文			A-161	
	4						盛土3	口径8区				A-88	
	5						盛土3	口径8区	カンナ削り			A-160	
	6			皿	石川門	盛土3	8区	高台径5.2			大明成口造	A-87	
	7			碗	石川門	盛土3	8区	高台径4.9			無文	A-104	
	8			小杯	石川門	盛土3	4区	高台径6.9				A-159	
	9			碗	石川門	盛土3	アゼ1下	口径7.3、器高4.3、高台径2.3	龍文、アフルアベット		釉の縮み	A-107	
	10			碗	石川門	盛土3	炭8区	口径13.7					A-83
11			小杯	石川門	盛土3	アゼ1下	口径6.5	端反り、外面				A-158	
12					盛土3	10区	口径6.2、器高3.8、高台径2.1	端反り、外面木花				A-85	
13					盛土3	炭8区	口径	端反り、外面				A-115	
14					盛土3	11区	高台径2.3	幅広高台				A-86	
					盛土3	11区						A-106	

図号	誌誌号	種別1	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	表測番号	
119	15	中国明	磁器	小林	石川門	盛土3	10区				陶頭心	A-157	
	16					盛土3	3区	高台径2.6				A-84	
	17			皿	石川門	盛土3	石垣外	口徑14.4				A-89	
	18			蓋	石川門	盛土3	8区	口徑10.9	内面牡丹唐草 雲気文	少し釉が溶ける	火を受けている、 柱端	A-103	
	19			合子	石川門	盛土3	石垣外					A-60	
	20					断步割り						A-58	
	21	肥前	磁器	筒碗	石川門	盛土3	4、7、 8区	口徑4.7、器高2.1、底径3.3 口徑9.6、器高7.2、高台径6.0			緑がかかる釉	離れ砂、釉の生掛け	A-12
	22					盛土3	石垣外	高台径5.6				釉の生掛け	A-112
	1	肥前	陶器	碗	石川門	盛土3	礫9区	口徑9.8、器高6.5、高台径4.0	削り出し高台		高台全面に灰釉	部分的に貫入、底部に 釘跡着	D-178
	2					盛土3	炭8区	底径4.7	高台に砂目跡			熱を受けている	D-170
	3					盛土3	礫2区	口徑9.8					D-173
	4					盛土3	アゼ1、 9区	口徑11.3					
	5	瀬戸美濃	陶器	碗	石川門	盛土3	炭8区	高台径5.2	削り出し高台		全面に粘色の釉	全面施釉	D-183
	6	肥前	陶器	皿	石川門	盛土3	炭8区	口徑13.6	削り出し高台			砂目	D-169
7					盛土3	炭5区	底径4.8					D-171	
8	不明	陶器	沓碗	石川門	盛土3	礫1区	底径5.8	削り出し高台、外面全面 などで	褐色の鉄釉、釉の光沢顕著	褐色の鉄釉、釉の光沢顕著 、口縁は胎釉	底部に印「露?」、同 一個体口縁あり	A-77	
9	肥前	陶器	皿	石川門	盛土3	礫下3区	口徑13.2				溝縁皿	D-168	
10					盛土3	炭10b c区	口徑12.7				溝縁皿	D-175	
11					盛土3	礫下3区	口徑13.2	口縁やや溝縁状				D-174	
12				鉢	石川門	盛土3	口徑				四波状口縁 総唐津	D-102	
12						盛土3			四角形の口縁、口縁に鉄 釉の幾何文		A-102		
13				皿	石川門	盛土3	口徑14.0、器高4.0、高台径4.8				砂目跡	D-13	
14						盛土3	口徑26.7、器高6.0、高台径7.9	削り出し高台		砂目跡、高台に切りこ み	砂目跡、高台に切りこ み	D-14	
1	肥前	陶器	皿	石川門	盛土3	アゼ1上 焼土層	口徑22.3	口縁小さな溝縁		釉の掛け分けの文様	漆継ぎ、釉の掛け分け 熱を受けている	D-177	
2			白磁皿	石川門	盛土3	焼土層	口徑16.2					D-167	
3	肥前	陶器	皿	石川門	盛土3	石垣外	口徑25.6、器高7.1、底径9.7				被熱で釉がとける、砂 目跡	A-16	
4					盛土3	8区	口徑24.4	銅緑釉か				D-197	
5					盛土3	石垣外	口徑38.5	高台削り出し			総唐津、砂目	D-176	
6					盛土3	石垣外	口徑32.9、器高11.2、高台径10.0				砂目跡	D-165	
1	肥前	陶器	播鉢	石川門	盛土3	6区	口徑34.8	口縁受け口		口縁鉄釉		D-157	
2					盛土3	アゼ	口徑34.0					D-162	
3					盛土3	8区	口徑34.7	口縁鏝状		口縁鉄釉		D-158	

器種	器種1	器種2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	実測番号
122	4 越前	陶器	揺鉢	石川門	盛土	壁面	底径10.5	削り出し高台(反時計回り)	長石		D-189
	5 瀬戸美濃	陶器	碗	石川門	盛土3	5区	口径9.9		熱を受けて少し軸がゆるげる	天目	D-186
	6		折縁皿	石川門	盛土3	7区	口径10.4		黒褐色の鉄軸	黄瀬戸	D-184
	7		壺	石川門	盛土3	7ゼ1下	口径11.2		外面のみ鉄軸	祖母蔵壺口縁	D-182
	8			石川門	盛土3	石垣外	口径11.1	内面当て具痕状の段あり	黒褐色の鉄軸	口縁軸なし	D-187
	9	越中瀬戸	皿	石川門	盛土3	3区	口径12.0, 器高2.7, 底径5.0	菊印花、暮げ底	黒褐色の鉄軸	見込み印花	D-20
	10			石川門	盛土3	3区	口径12.2, 器高3.0, 底径6.4	菊印花、暮げ底	黒褐色～褐色の鉄軸	見込み印花、重ね焼底	D-19
	11			石川門	盛土3	3区	口径11.4, 器高4.0, 底径5.4	暮げ底、菊印花	褐色の鉄軸	見込み印花	D-18
123	1 越前	陶器	揺鉢	石川門	盛土2	7ゼ1上	口径28.9, 器高11.4, 底径10.8	外面ロクロ目顕著、鉄錆	粗い長石、石英、凝灰岩片	底部回転糸切り	D-248
	2	陶器	揺鉢	石川門	盛土3	7ゼ1下		口縁沈線、重ね焼用の段	石英、長石、内外面鉄錆軸、茶地灰色	重焼痕	D-163
	3 肥前	陶器	揺鉢	石川門	盛土3	8区	底径10.5		赤褐色	底部回転糸切り	D-159
	4			石川門	盛土3	盛土3	底径10.3	回転糸切り、暮げ底風	長石小粒		D-160
	5		徳利	石川門	盛土3	炭9区			暗緑色の鉄軸	内面当て具痕	D-185
	6 朝鮮	陶器	徳利	石川門	盛土3	炭8、9区		肩部に二本の沈線、内面当て具痕	上半に灰軸、下半に鉄軸	軸の掛け分け	D-166
	7				盛土3	5区		内面当て具痕	外面灰色、内面赤褐色	無軸	D-164
	8	土器	とりべ	石川門	盛土3	8区	口径9.1, 器高3.9				D-138
	9		蓋	石川門	盛土3	黒色土5区	口径6.0, 器高1.6, 天井径5.3				D-80
	10		焼埴壺	石川門	盛土3	8区	口径4.7				D-141
	11				盛土3	炭6区	口径5.7				D-139
	12				盛土3	2区				底部	D-140
	13				盛土3	7ゼ1	底径4.6			底部	D-137
124	17	土器	皿	石川門	盛土3	5区	口径9.1, 器高2.4, 底径2.5		胎土3類、小機多い、カクセン石微	灯明油痕	D-346
	18			石川門	盛土3	5区	口径10.8, 器高2.2, 底径6.6				D-98
125	7	土器	皿	石川門	盛土3	6区	口径8.0, 器高2.0, 底径3.2		胎土2類、カクセン石		D-363
	8				盛土3	6区	口径10.0, 器高1.8		赤褐色、金雲母、海綿骨片		D-90
	9				盛土3	6区	口径11.0, 器高, 底径		胎土3類		D-364
126	1	土器	皿	石川門	盛土3	6区	口径13.4, 器高2.9, 底径5.6		胎土2類?	灯明油痕	D-262
	2			石川門	盛土3	6区	口径13.6, 器高2.8, 底径5.5		胎土2類、カクセン石	灯明油痕	D-93
127	12	土器	皿	石川門	盛土3	8区	口径12.6, 器高2.4, 底径7.9		胎土2類	灯明油痕	D-109
129	7	土器	皿	石川門	盛土3	黒色土炭層, 8, 9区	口径15.0, 器高2.6, 底径9.8		胎土1類		D-287
	9				盛土3	黒色土炭層, 8区	口径14.3, 器高2.3, 底径10.7		胎土2類、カクセン石	席状圧痕	D-292
	11				盛土3	黒色土炭層, 8区	口径14.9, 器高2.2, 底径9.8		胎土2類、カクセン石	席状圧痕	D-288
	13				盛土3	8区	口径13.6, 器高3.3, 底径8.4		胎土1類		D-111
130	1	土器	皿	石川門	盛土3	8区	口径10.9, 器高2.2, 底径7.4		赤灰色、	二次的被熱	D-128

器号	器号続	種別1	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	表割番号
130	13	土器	皿	石川門	盛土3	4, 5, 8, 10区	口径13.4, 器高2.7, 底径8.9		胎土1類	板目圧痕	D-309	
131	2	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1	口径14.7, 器高3.2, 底径9.2 口径7.8, 器高1.9, 底径4.4		胎土2類 淡灰黄色、胎土1類に似る、 胎土2類、カクセン石目立		D-335 D-132	
132	3	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1上	口径8.1, 器高1.9, 底径4.5		胎土2類、カクセン石目立		D-147	
133	4	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1上	口径8.2, 器高2.3, 底径4.7		胎土2類、カクセン石、金雲母		D-343	
134	6	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1上	口径7.8, 器高2.0, 底径3.7		胎土2類?	粉っぽい	D-341	
	7	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1上	口径8.6, 器高1.8, 底径3.7		胎土2類?		D-342	
	8	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1上	口径10.2, 器高2.7, 底径6.4		胎土2類	灯明油痕、席状圧痕	D-296	
	9	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1上	口径13.1, 器高2.5, 底径9.3		胎土2類	灯明油痕、席状圧痕	D-299	
	10	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1下	口径10.2, 器高2.4, 底径6.1		胎土1類		D-332	
	11	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1	口径10.6, 器高2.1, 底径5.8		胎土1類	灯明油痕	D-143	
	12	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1	口径11.8, 器高2.2, 底径7.7		胎土2類	灯明油痕	D-142	
	13	土器	皿	石川門	盛土3	アゼ1	口径12.7, 器高2.5, 底径8.7		胎土2類	灯明油痕	D-131	
	14	土器	皿	石川門	盛土3	石垣外	口径13.6, 器高2.2, 底径9.7		胎土3類、海綿骨片	非在地的器形、席状圧痕	D-255	
177	1	中国明磁器	碗	石川門	盛土4		口径11.4, 器高2.2, 底径6.9		胎土2類	灯明油痕、席状圧痕	D-356	
	2				盛土4		口径13.6, 器高2.2, 底径7.2		胎土3類	灯明油痕	D-280	
	3				盛土4		口径13.5, 器高2.7, 底径8.7		胎土1類?	灯明油痕	D-264	
	4				盛土4		口径12.6	口縁端部受口		芙蓉手	A-123	
	5				盛土4		口径11.8			芙蓉手	A-80	
	6				盛土4					芙蓉手	A-170	
	7				盛土4					芙蓉手	A-125	
	8				盛土4		底径5.2			芙蓉手	A-126	
	9				盛土4					芙蓉手	A-90	
	10				盛土4					芙蓉手	A-119	
	11				盛土4					型作り	A-92	
	12				盛土4		口径8.8	外面渦文			A-56	
	13				盛土4		口径15.2	外面露芝			A-162	
	14				盛土4			内面翻				
	15				盛土4		口径11.0			貫入と陶器質素地は被熱のためか		
	16				盛土4		高台径7.7					
	17				盛土4		底径7.5					
	18				盛土4			内面水鳥				
	19				盛土4							
		中国明磁器	角皿	石川門	盛土4					明灰色の素地		A-94
		中国明磁器	角皿	石川門	盛土4							A-18
					盛土4							A-117
					盛土4							A-116
					盛土1, 4					下半のみ施軸		A-93
					盛土4		口径14.0, 器高3.0, 底径5.9	菱花皿		五彩		A-13

器号	器号	種別I	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	実測番号
177	20	中国明	磁器	白磁八角 杯	石川門	盛土4		口径7.8, 器高8.6, 底径5.9	龍の把手、口縁外面雷文		型作り	A-109
178	1	肥前	陶器	碗	石川門	盛土4		底径4.4				D-188
	2	瀬戸美濃	陶器	碗	石川門	盛土4	アゼ1	口径10.0		黒褐色の鉄釉	天目	D-194
	3			皿	石川門	盛土4		口径15.5				D-190
	4	肥前	陶器	皿	石川門	盛土4		口径18.3				D-191
	5	青磁	磁器	蓋	石川門	盛土3、 流土			体部多角形の袋物、体部 上半に文様	釉が少し溶ける	熱を受けている	A-59
	6	中国明	磁器	小壺	石川門	盛土4			ペンシールドローイング		茶入れ	A-108
	7	肥前	陶器	碗	石川門	盛土4			外面鉄釉、内面無釉	黒色の鉄釉		D-196
	8	中国明	陶器	蓋	石川門	盛土4		口径5.7	外面格子で緑釉、内面灰 釉		彩釉陶器	A-91
	9			浅鉢	石川門	盛土4			三彩、底面無釉	黄白色	華南彩釉陶器、漆継ぎ	A-105
	10	越前	陶器	火桶	石川門	盛土4		口径16.9		長石		D-195
	11			蓋	石川門	盛土4		底径20.0	外面鉄錆釉	石英、長石		D-17
	12			皿	石川門	盛土4		口径11.1, 器高2.6, 底径6.1			灯明油煙	D-63
	13				石川門	盛土4	アゼ1下	口径9.2, 器高2.0, 底径5.7				D-78
	14				石川門	盛土4		口径12.6, 器高2.7, 底径7.4				D-62
	15	越前	土器	蓋	石川門	盛土4		口径8.0, 器高1.0, 底径6.9		長石	火桶蓋	D-193
182	1	中国明	磁器	碗	石川門	盛土5	白鳥	口径11.9	外面唐草		芙蓉手	A-168
	2			皿	石川門	盛土5		口径15.9	外面唐草			A-98
	3			皿	石川門	第5層	飯橋下	口径14.7	外面宝相華唐草文			A-113
	4			小杯	石川門	盛土5		口径30.5				A-97
	5	瀬戸美濃	陶器	小杯	石川門	盛土5		口径5.9		緑褐色の釉調、灰白色、す が入る		D-245
195	6	肥前	陶器	碗	石川門	盛土5		底径4.7	内面鉄釉、外面灰釉		鐘鐺時計回り	D-198
	7		鉢	石川門	盛土5		口径29.0, 底径19.5			赤褐色	内外面灰かぶり	D-199
	8		土器	とりべ	石川門	盛土5		口径9.7			使用済	D-201
	9				石川門	盛土5		口径7.0			使用済	D-203
	10				石川門	盛土5		口径5.4			使用済	D-202
	11				石川門	盛土5	下部	口径11.5				D-368
	12			皿	石川門	盛土5	下部			胎土3類	堅緻	D-354
	13				石川門	盛土5		口径13.1, 器高2.4, 底径8.3				D-250
	14				石川門	盛土5		口径9.7, 器高2.3, 底径6.1			灯明油痕	D-64
	15			皿	石川門	木樋	掘り方	底径5.3			墨書	A-14
	1	肥前	磁器	皿	石川門	木樋	掘り方	底径8.4			絵唐津	A-15
	2			皿	石川門	木樋	掘り方	底径8.2			砂目、熱を受けている	D-16
	3				石川門	木樋	掘り方					D-68
	4			皿	石川門	木樋	掘り方	口径13.0, 器高2.5, 底径8.6			: 赤灰色	D-71
	5				石川門	木樋	掘り方	口径12.7, 器高2.2, 底径8.0			: 灰白色	D-69
6				石川門	木樋	掘り方	口径12.3, 器高2.8, 底径8.3			: 灰白色	D-70	
7				石川門	木樋	掘り方	口径13.0, 器高2.3, 底径8.8			: 灰白色	D-67	
8				石川門	木樋	掘り方	口径11.5, 器高3.0, 底径7.0			: 淡赤灰色	D-67	

第2章 白鳥堀調査区の調査

第1節 白鳥堀調査区の土層関係

a) 調査区の設定と調査の経過

白鳥堀調査区は、土橋土手下に位置する。平成4年度に、工事用資材置き場のための発掘調査で確認された、谷の堆積土としての黑色シルト土上面に分布する遺物包含層を対象とする調査である。平成4年度の調査は、土層断面図作成のための調査であったが、作業ヤード造成工事掘削によって道路面まで下げられた区域で、偶然黑色土上面で遺物を拾い、あけられていたSE01南約2mで数㎡の包含層上面をジョレンで削ったのみである。この時に出土した遺物は、概ね出土位置を限定することが出来る。



Fig. 281 崩落した調査区壁面

そして、工事掘削の関係で石川橋橋台除去工程が道路面と同じになって発掘調査にかかることが可能になる。そのために平成5年12月になってようやく調査にかかることができた。毎日雨や雪が降るような時雨れた天候の中での発掘を3月までおこなった。そして、悪条件の中での発掘作業は、細かな土層の検討ができず、気ばかり焦る発掘調査となったのである。重機掘削も、包含層をかなり掘り込み、失ってしまった情報が多々ある。SX01やSX02等の遺構を確認して作業員による掘削に切り替えた。

工事側の不手際で、調査範囲よりも部分的に広く工事掘削をおこなってしまった。このため、削り残された工事未了区域の約100㎡を調査することとなった。平成6年7月に調査に着手した。今回は良好な状態での発掘であり、前回調査で確認できなかった遺構面に枚数がどれほどであるか、を調査の主眼においた。

詳しい調査経過は、報告書第1分冊を参照していただきたい。

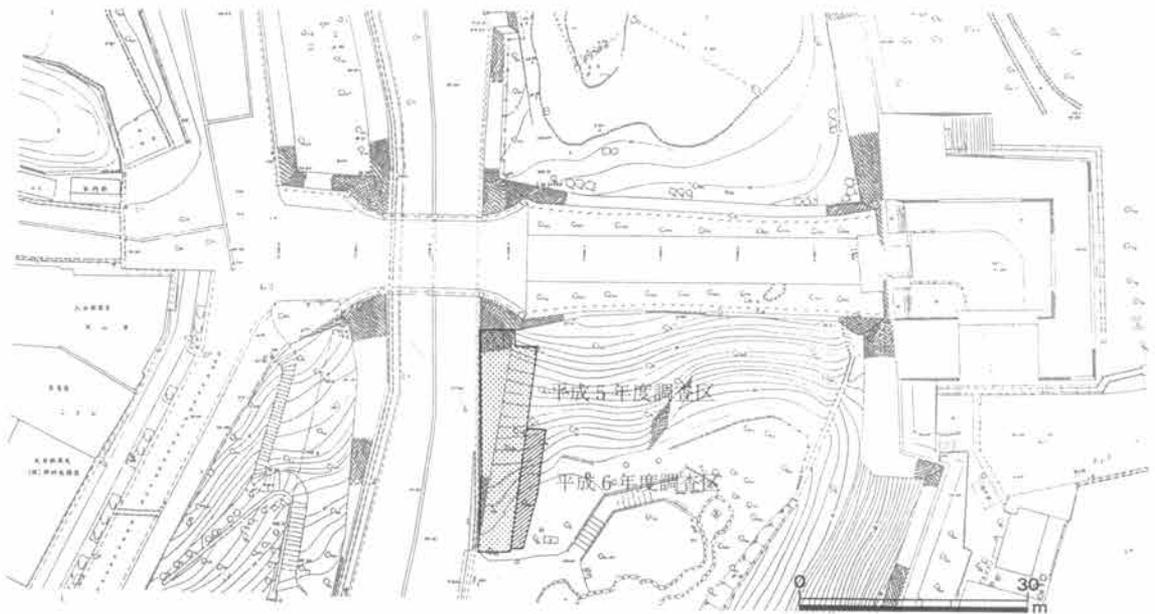
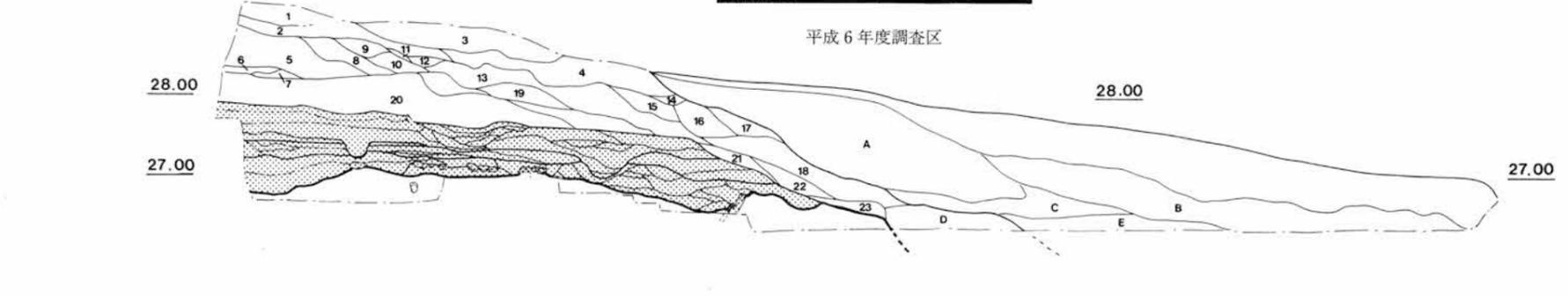
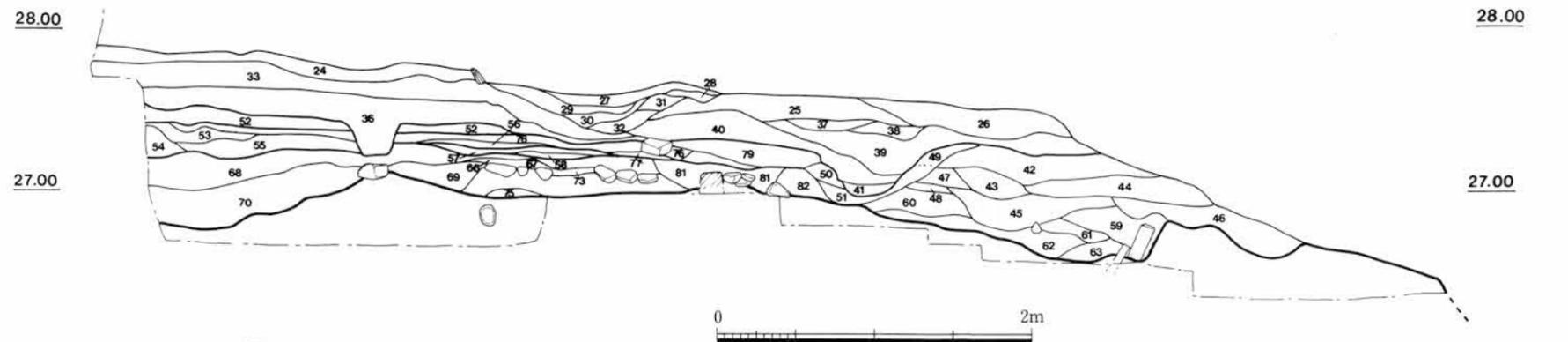


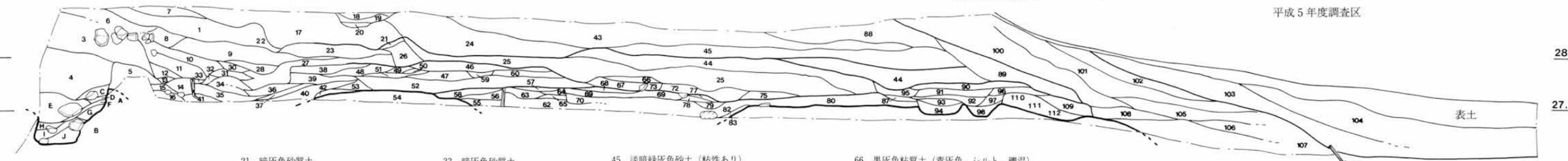
Fig. 282 白鳥堀調査区位置図 (1/1000)

1. 灰色粘質土 (赤灰色粘土のブロック含む)
2. 暗灰色粘質土 (" 含まない)
3. 褐色礫層 (礫は比較的少なく、砂分多い)
4. " (3よりも、礫多く含む)
5. 緑灰色礫土 (堅い)
6. 20と同じだが、砂礫含まず
7. 暗黄色砂土
8. 5. よりも礫が少なく、砂土的
9. 淡灰色砂土
10. 9の土中に、粘質土あるいは黄色砂のブロック含む
11. 2と同じ
12. 1と同じだが、上面に黒色粘質土バンドあり
13. 褐色粘質土
14. 淡褐色シルト
15. "
16. 褐色礫層
17. 16より礫の大きさが大きい
18. 褐色粘土質礫混り (礫種は13より小さい)
19. 黄色砂質土
20. 灰色粘質土 (小礫も多く含む)
21. 褐色細礫層
22. 黄褐色細礫層
23. 21と同じ
24. 暗灰褐色粘質土
25. 暗褐色シルト
26. 25よりも礫あるいは砂分多く含む
27. 黄灰色砂質土 (小礫混り)
28. 黄灰色シルト
29. 24と同じ
30. 24と基本的に同じだが、シルトっぽい
31. 30よりもシルト的
32. 黄褐色シルト (部分的に砂土あり)
33. 暗褐色砂質土 (炭混じり)
34. 33の土中に黄砂質土ブロック多く含む
35. 黄色砂質土~細砂土 (自然堆積)
36. 33と基本的に同じだが、より炭の入る量が多い
37. 暗黄灰色シルト
38. 黄灰色シルト (砂質的)
39. " (砂質的で礫含む)
40. 淡黄灰色砂質土 (部分的に白色砂土含む)
41. 白色砂土と灰色粘土の薄い互層
42. 淡暗灰色砂質土 (灰が主体となる層なので、バサバサな土である)
43. 44よりも明るい
44. 淡暗赤灰色砂質土
45. 暗灰色砂質土 (この土には灰層はあまり見られない)

46. 44よりも汚れた感じ
 47. 灰色シルト、白色ブロック含む
 48. 47と同じ
 49. 黒褐色粘質土
 50. 暗灰色粘質土と白色砂ブロックの混合土
 51. 黒灰色粘質土
 52. 黒褐色粘質土 (炭焼土、黄色ブロックを多く含む)
 53. 黒灰褐色粘質土 (焼土etcの小ブロック含む)
 54. 暗灰色粘質土 (黄色ブロック多く含む)
 55. 礫層 (かたくしまっている)
 56. 黄色砂礫土 (地山土)
 57. 暗黄色細砂土 (よくしまる)
 58. 54と同じ
 59. 暗灰褐色粘質土
 60. 59と同じ
 61. 62より砂粒が細かい
 62. 灰色砂質土 (粘性高く、63よりしまっている)
 63. " (粒子が粗い)
 64. 杭痕—灰色粘質土が入っている
 65. 灰黄褐色粘質土、砂多く含む
 66. 暗黄褐色シルト (シルト的)
 67. 暗灰褐色粘質土と白砂、あるいは黄色砂土との互層
 68. 黒褐色粘質土礫混り
 69. 67と同じ状態だが、互層状にはならずブロック状に入り込む
 70. 黒褐色粘質土、礫混り
 71. 暗灰色シルトで、細砂粒多く含む
 72. 暗灰色粘土
 73. 灰褐色細砂質土
 74. 黒褐色粘質土、礫多く含む、ベースとしての谷の埋土によく似ている
 75. 黄色砂土 (地山土の埋土)
 76. 濁暗黄色砂質土 (灰中心の土)
 77. 黒黄色砂質土
 78. 77と同じ
 79. 暗褐色粘質土、礫混じり
 80. 76と81の混合土
 81. 暗灰褐色粘質土 (焼土、灰、炭を多く含む、小礫)
 82. 65と同じ
- A. 暗褐色砂質土 (大きいものでは人頭大の礫を含む)
 B. 黄褐色礫層 (白鳥堀埋立土)
 C. 暗灰色粘土
 D. 灰色粘質土 (礫混り)
 E. 暗灰色粘土 (ヨシなどの植物遺体が多く見られ、瓦が多数出土)



- A. 暗褐色砂礫土 } 非常にかたい
 B. 灰色礫層
 C. 暗灰色粘質土
 D. 灰色シルト
 E. 灰色粘質土に青灰色シルトのブロック含む
 F. 灰色砂土 (この層の下面に、有機物 (黒色) の薄いバンドあり)
 G. 灰色砂土、Fよりも粗い
 H. 灰色粘質土 (砂土含む)
 I. 灰色粘質土 (緑灰色シルト含む)
 J. 暗灰色粘質土 (")



1. 黒褐色粘質土 (炭、暗灰粒ブロック含む)
2. 淡灰緑色シルト
3. 黒灰色粘質土 (砂礫多く含む、2のブロック含む)
4. 3に2のブロック含まず、砂礫も少ない
5. 茶褐色粘質土 (シルト的)
6. 黒灰色粘質土
7. 緑灰色粘質土を大きなブロック状に含む
8. 暗灰褐色粘質土 (炭、黄色粒含む)
9. 8よりも黄色粒多く含む
10. 暗灰褐色粘質土 (砂の粒子粗い)
11. 灰褐色粘質土
12. 3よりも粘性あり (3の土の崩落土か?)
13. 淡黄色粘質土 (しっくりのような土)
14. 灰色粘質土 (よくしまる)
15. 灰色細砂質 (くらい)
16. 5の土に砂礫多く含む
17. 粗砂土 (部分的に1の土を含む)
18. 20と同じだが、20よりも少し砂っぽい
19. 黒色炭層 (炭をブロック状に含む)
20. 灰の礫層 (暗灰黄色砂礫土)

21. 暗灰色砂質土
22. 濁黄色粘質土 (ブロック状に含む)
23. 暗茶褐色粘質土 (砂礫、炭、多く含む)
24. 4~10cm大の砂礫層
25. 21よりも砂礫多く含む
26. 17と同じ
27. 暗灰褐色砂質土 (炭粒、赤色粒多く含む)
28. 暗灰色シルト (炭粒含む)
29. 31よりも軟質
30. 暗灰色粘質土 (炭、焼土塊多く含む)
31. 30よりも炭の含む量少ない
32. 青灰色細粒土
33. 暗灰色砂質土
34. 黄色砂質土 (炭、焼土塊多く含む)
35. 暗灰色シルト (炭粒多く含む)
36. 28と同じ
37. 黒色炭層
38. 28よりも砂っぽい
39. 灰色シルト、38よりもシルト的
40. 灰色粘質土
41. "
42. スラッグのたまり
43. 暗灰色砂礫土
44. 45より暗い

45. 淡暗緑灰色砂土 (粘性あり)
46. 暗灰色粘質土 (炭混り)
47. 暗赤灰色砂質粘土
48. 砂礫層
49. 暗灰褐色粘質土 (赤灰色小ブロック含む)
50. 暗黄色シルト
51. 淡暗灰色砂土 (若干の粘性あり)
52. 砂礫土
53. 暗灰色粘質土 (42と同一だが、スラッグを含まない)
54. 茶褐色粘質土 (地山か?)
55. 黒灰褐色粘質土
56. 55の土中に黄灰色粘質土ブロック含む
57. 炭層 (非常にかたく、叩きしめられた面)
58. 暗灰褐色粘質土
59. 47の土中に暗灰色粘土ブロック含む
60. 47よりも暗い
61. 57と同じ
62. 黒灰色粘質土、砂粒微混 (礫含む)
63. 黒褐色粘土礫層
64. 暗暗灰色シルト
65. 黒灰褐色粘質土 (礫、青灰色シルト混)

66. 黒灰色粘質土 (青灰色、シルト、礫混)
67. 砂礫層
68. 砂利層
69. 黒色シルト層 (たたきしめられたように、黒色土と灰色土が数mm単位の層となっている)
70. 65、62に近い
71. 粗砂土
72. 66とよく似ているが、部分的に礫のかたまり含む
73. 青灰色シルト (灰色シルトをブロック状に含む)
74. 暗灰色シルト (")
75. 黄色粗砂土
76. 黒色粘質土 (かたい—白色ブロック含む)
77. 白色粘質土
78. 黒色粘質土 (有機体含む)
79. 青灰色粘質土をブロック状に含む
80. 黒灰色粘質土 (植物質など混りもの多い)
81. 青灰色シルト
82. 暗灰色粘質土 (砂分多い)
83. 青灰色シルトがブロック状に入る
84. 黒褐色粘質土 (青灰色シルト)
85. 84と同じだが、青灰色シルトを含まず、礫となる。

86. 62と同じか
87. 黄色砂土
88. 赤褐色砂礫土 (粘性あるが、しまりなし)
89. 88よりも粘性高く、キメ細かい、礫の入り方も少ない
90. 暗灰色粘質土 (25に近いが、砂礫少ない)
91. 濁黄色砂土
92. 91よりさらに汚れている
93. 黒灰色砂礫土
94. 濁黄色砂土
95. 25、90よりも青味強い
96. 淡黄灰色砂質土 (砂土的)
97. 淡黄色粘質土 (砂分多し)
98. 暗灰色砂土
99. 褐色礫層
100. 99より礫の粒子細かい
101. 暗褐色砂質土 (礫含む)
102. " 101よりも暗い

103. 104の土に人頭小の礫多く含む
104. 暗赤褐色砂礫土
105. 崩落してよくわからないが、礫層
106. 暗灰色粘土 (礫含む)
107. 暗灰色粘土 (礫含む)
108. 89戸同じ
109. 暗灰色粘質砂土 (炭、焼土含む)
110. 109よりも炭、焼土含む、量少ない
111. 黒灰色粘質土 (炭と97のブロック含む)
112. 111よりも黒く、炭多く含む

Fig. 283 白鳥堀調査区土層断面図

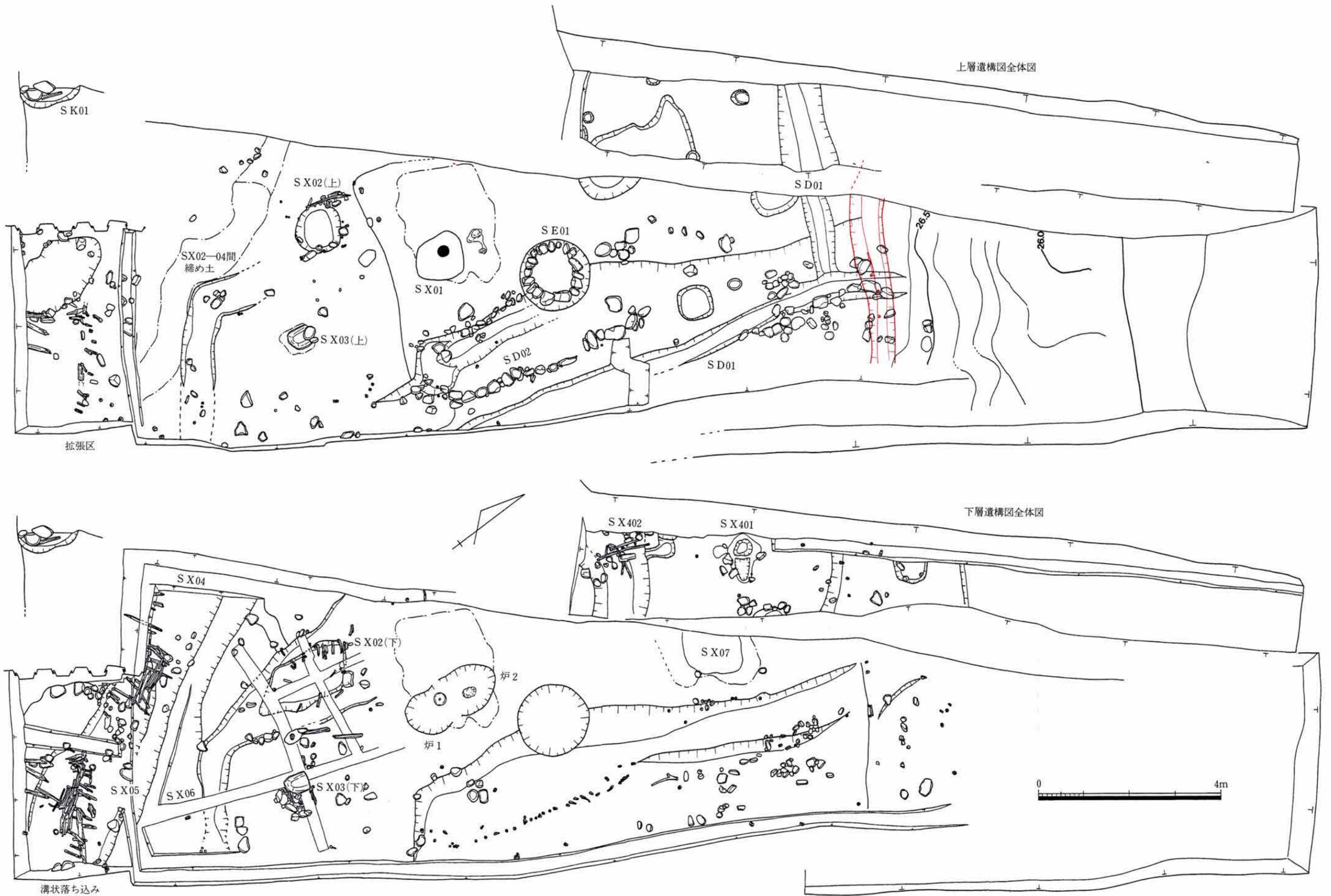


Fig. 284 白鳥堀調査区全体図 (1/80)

b) 基本土層と遺構面の状況

白鳥堀調査区の16世紀後半の遺物包含層及び遺構面は、盛土5下部にある。平成5年度調査区（5年度調査区と略）の壁面は、十分に検討を加えることができずに、雪による重みで崩落してしまったので、盛土5との関係や、黒色シルト土との関係、さらに包含層の中での遺構面の確認、各遺構の切り込み位置の確認など、不明確な事実関係が多々ある。したがって、平成6年度調査区（6年度調査区と略）の壁面を中心に考える。

盛土5は、灰褐色、褐色、黄色系の礫層や砂質土等のように、粗い性質の土である。その下面は平坦で、標高28m付近である。溝状の落ち込みがみられるなど、遺構面のようなものである。そのベースとなっている土は、盛土5と同じような色調だが砂質土やシルトなどの細かい土である。溝状の落ち込みの埋土も同じような土質であるので、重機掘削での遺構面の存在は全く注意されなかった。この土の違いは、5年度調査区でも確認されたが、調査中は盛土5の一部と認識していた。そして、南側に行くにしたがって、包含層との区別がしだいにつかなくなっていくのである。

この面が生活面としての遺構面であるか、あるいは作業単位面であるのか等々、検討したい。盛土5北端にある溝状の落ち込みの上端は不明確で、埋土も盛土と同じような土が入っている。盛られながら溝が作られそして埋められていく状況と考えられ、盛土作業の中の一工程の可能性が高い。そして、5年度調査区の南端に行くにしたがって盛土と遺構面（包含層上面）との境が不分明になっている。調査中には、盛土5と包含層との境に注意していたがよくわからなかった。これは、土層区分が不分明になった区域が調査区南端で検出された溝状落ち込み上部にはほぼ当たるために、いわば軟弱な地盤にあたろう。この部分の盛土作業による攪乱的な土のかき回しによって混乱した土層状況と考えることができる。

標高27.5m付近にある第1遺構面と第2遺構面は同一の整地関係と考えている。すなわち、第2遺構面が全面に広がり、部分的な整地された状態が第1遺構面である。第2遺構面には鍛冶関係の硬化面があり、付近に炉が存在する可能性を考える。また、北端には溝（SD01）が土橋に平行に作られている。SD01は、第3遺構面の溝を継続し掘り直している。6年度調査区でも溝の掘り直しを確認できたが、4枚の遺構面ごとに対応しているわけではない。埋土は、砂土あるいは砂礫土・砂質土を中心とし、整地過程で埋め込まれながら再度掘削している。この溝の外側は、自然地形としての下がりとなっているので、空間を区画するとともに北側への排水機能もあろうか。この溝周辺でのみ瓦の出土がある。

5年度調査区でも対応する高さに面を確認することができる。ただし、SD01の面を把握しがたく、上部の盛土と混同している部分がある（土層No.44・45）。混同の理由も、先に見たような盛土とともに溝構築という特殊性に起因しよう。この面を追いかけると、SX04が埋まった状態となっている。つまり、ここの低い溝状の落ち込みは、鉦淬捨て場となっていたので、上の面でも盛んに鑄造鍛冶作業が行われていたと考えられ、6年度調査区第2遺構面に相当する上層の遺構面と把握できる。

標高27.2m付近にある第3遺構面と第4遺構面もまた、同一の整地関係でとらえられる面である。SX401の底面が地山としての第4遺構面にあたる。第3遺構面に見られた炉の周囲の足場を整える石から、第3遺構面でも炉を使っていたことがわかる。つまり、二つの遺構面の時間幅で一連の生活状況を示す面が存在するのである。6年度調査区の地山のレベルは、5年度調査区と同じ標高約27mである。地山面に作られていたSX02や03がこの遺構面に属し、下層の遺構群として認識できよう。

以上のように、生活面としての遺構面は、上下二つが存在していることがわかる。冬場の発掘という時間的な制約から、最初の重機掘削によって上層遺構面ぎりぎりまで下げてしまったため、その把握が非常に困難になったのである。しかも整地土中から多くの遺物群が出土したことも、遺構面の把握を困難にってしまった。そして、6年度調査区のSX402の延長を発掘できなかったのは大きな調査ミスである。

しかし、遺物出土レベルと土層との関係を見てみると、標高27.00m付近で出土するものと、標高

27. 20～30 mで出土するものがあり、概ね、前者を下層に属する遺物群、後者を上層に属する遺物群ないしは整地作業に入り込んだ遺物群と理解することができよう。

第2節 平成5年度調査

a) 遺構面の把握と遺物出土状況

本調査区の遺構面の把握は、極めて困難であった。これは、前節でも述べたような調査初動時のミスによるものである。これによって、下層の遺構面に属する遺物については取り上げレベルを参考に帰属が類推できるが、上層の遺構面に属する遺物は、包含層が失われているか僅かに残されているために判別しがたいものがある。とくに、両層の間はわずか15～20cmで遺物が連続して出土する状況である。冬場の悪天候の中、このような出土状況にあって遺物の帰属の判別は、非常に困難な作業である。上層の遺構の年代を知るために、遺物が重要な鍵を握るが、意識的に遺物を弁別することによって帰属を決める必要がある。

遺物は、一面に出土しており、まとまる傾向はみられないようであった。これは、整地作業に廃材と一緒に埋め込んだためである。木製品や漆塗り製品の有機物は、地下水位の高いところに集中し、6年度調査区からの出土はほとんどない。SE01東の落ち込んだ整地土中やSX02・03から盛土6背後の落ち込みにかけて出土が多い。下駄と漆器の分布は、鍛冶作業に直接関係のない遺物の埋まり方を知る代表としてみる事ができる。つまり、使用形態を示すものではなく、整地に際し、廃棄物を利用しながらおこなっている様子が見て取れる。しかし、気がかりな点は、陶磁器類の出土量に比べて、あまりにも下駄などの有機質で出来た日常用品の出土が多いのではないかと、ということである。単に地下水位の高さから説明されるのであろうか。

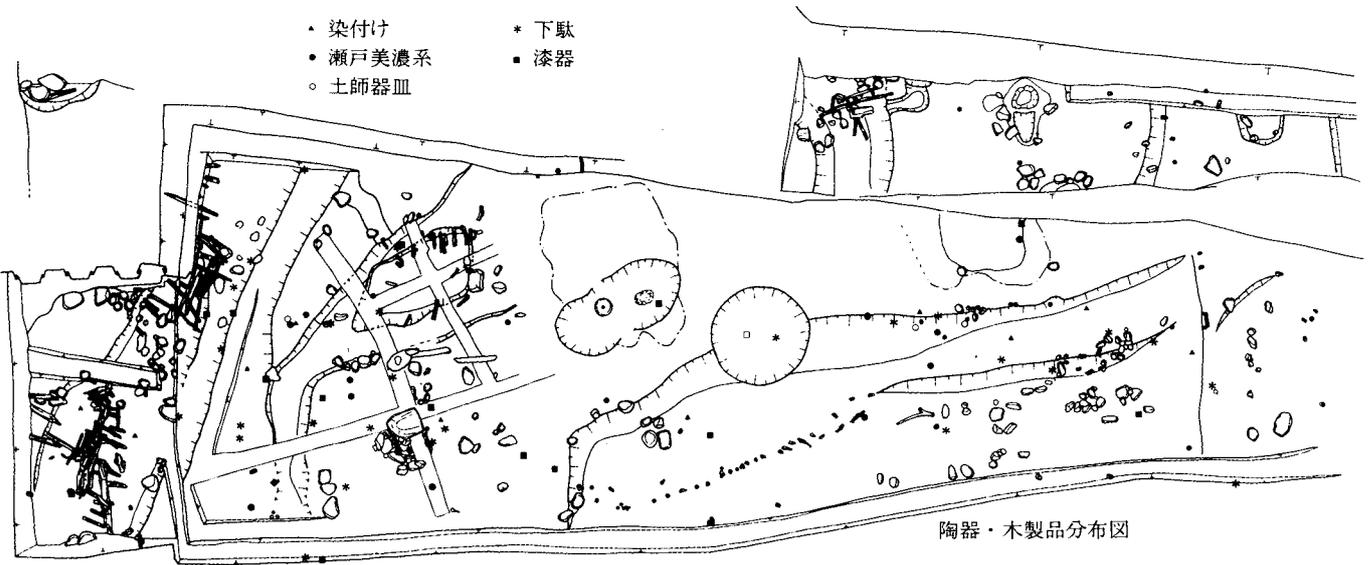
さて他の遺物はどうか。

染付けは20個体出土しているが、その多くを調査時に番号をふらずにあげてしまった。ドットでは7個のみである。いずれも整地土部分からの出土であり、整地土とともに捨てられた状況である。天目碗では、SX03南の整地土に多くみられるが、下層遺構面に密着するものはすくない。包含層一括で取り上げているのが6個あり、そのうち平成4年度調査時出土品が2個体あるので、これも染付けと同じように、SX01を境にみられる整地土中に混入しているものである。レベルからみても、下層に属すると思われる標高27.10m付近から出土しているものと、上層と思われる標高27.30m付近から出土するものが半数である。そして、瀬戸美濃茶入れがSX03下部構造から出土しており、金沢御堂の時期から茶湯が盛んであったことがわかる。

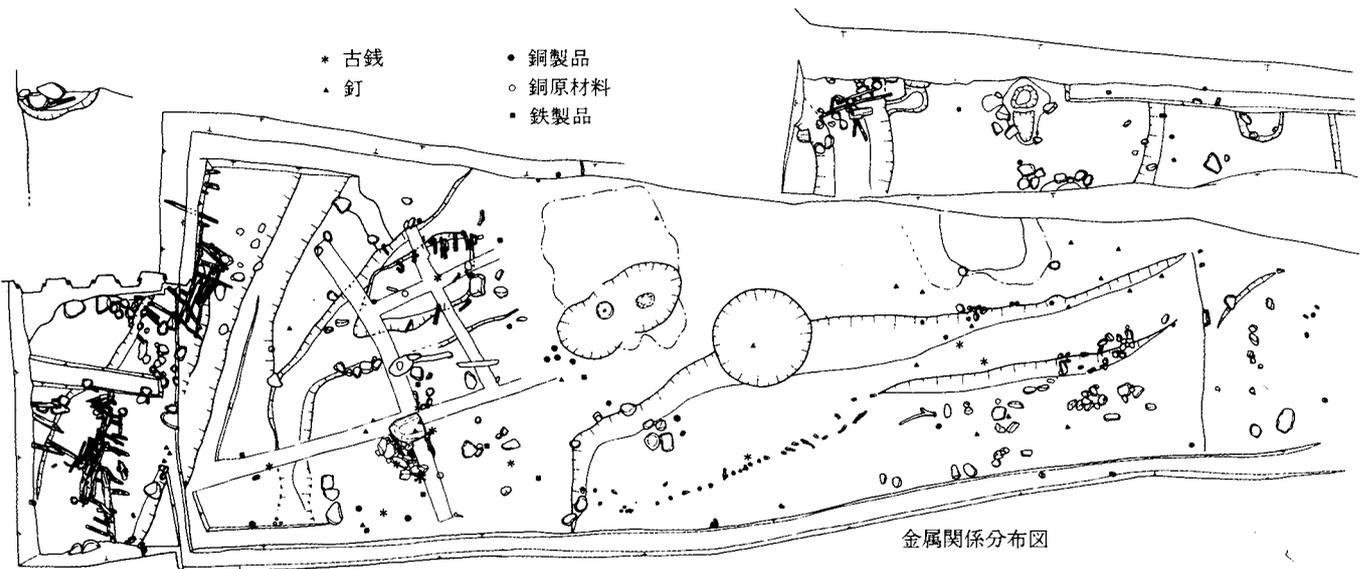
古銭は6年度調査区から8枚、5年度調査区から29枚が出土しており、SX03周辺にやはり多い。北側では、僅かに3枚だけである。しかし、6年度調査区でも面積の割に非常に多くの古銭が出土している。共通することは、炉の近くに古銭が多く分布することであり、鍛冶あるいは鑄造作業との関連が想定できる可能性も考慮しなければならない。また、SX03下部構造の最下部で、石組みの間に12枚を一差しとする古銭が出土している。意図的に置いたものであり、炉の地鎮的な性格を持つのであろうか。そして、この古銭とその他の散在する古銭とが、同じ意味を持つかわからない。出土した3枚の無文銭の分布は、かたよることはない。鑄造施設で出土していることの意味を積極的に見いだす必要はないが、何らかの繋がりを考える余地もあろう。

銅製品はどうか。製品としての道具と原材料としての銅の2種類がある。製品は、SE01横から4つ出土しているが、あとはSX03にかけて点々と出土している。一方原材料の方は、SX03からSX02にかけての狭い範囲に分布する。この違いがどのような意味を持つのか、少ない点数ではよく把握できないが、少なくとも、SX02・03周辺まで銅の鑄造の作業エリアであった可能性が強い。これは、銅関係の製品が、炉跡群よりも北側に分布しないことから、単なる整地作業での埋め込みという理解では不十分であることがわかる。ここで生産していたと考えられる毛抜きや鉄鋸など鉄製品も概ね銅製品と同じような傾向を示す。つまり、主な作業空間は、炉跡周辺から南側にかけて広がり、北側は常に片づけられた空間である。これは木器や漆器などの生活用具の整地土への入り込みと

- ・ 染付け
- ・ 瀬戸美濃系
- 土師器皿
- * 下駄
- 漆器



- * 古銭
- ・ 釘
- 銅製品
- 銅原材料
- 鉄製品



0 4m

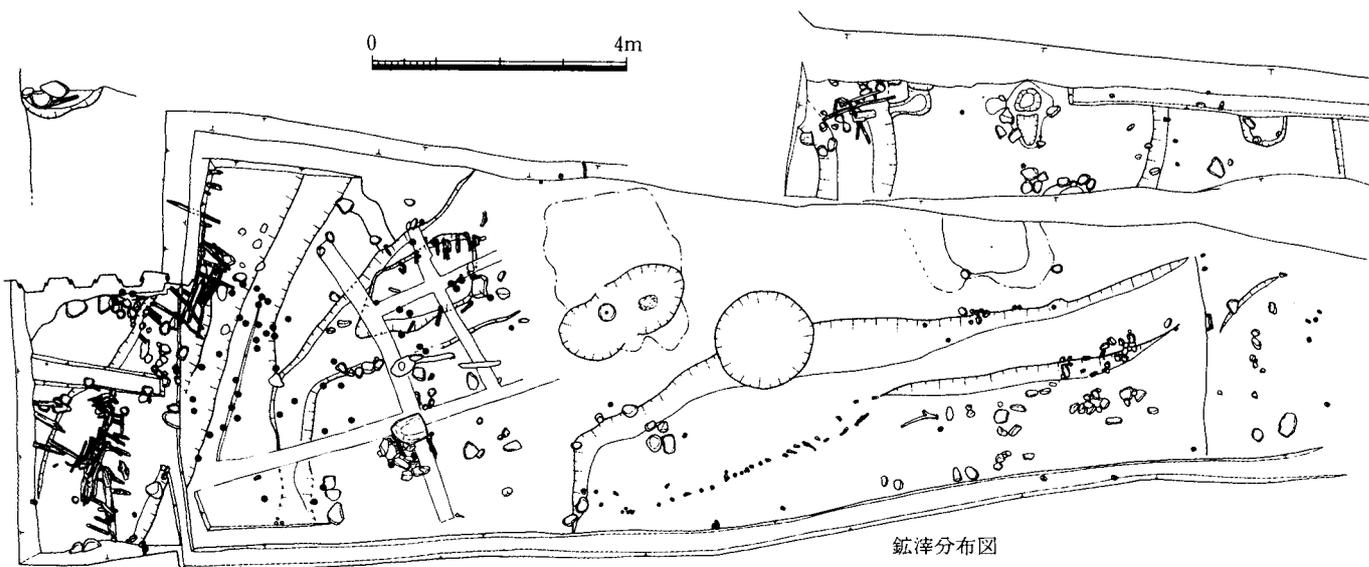


Fig. 285 白鳥堀調査区遺物出土分布図 (1/120)

大きく異なる。

しかし釘の分布範囲は広範囲である。炉跡群から北側にもそれなりの数が分布している。鉄釘の使用・未使用の状態に関係なさそうである。これは、出土量が金属の中で一番多いという、生産量に比例した遺存率の高さからくるものであろう。しかしよく見ると、SX01周辺には少なくSX07周辺に分布する。北側の鉄釘はSX401に帰属するものと理解すれば、これもまた、鍛冶作業空間での出土となり、他の金属製品の出土傾向と同じになる。



Fig. 286 白鳥堀調査区調査風景

b) 鍛冶遺構関係

SX01

SE01南にある溶解炉である。SX401と同じように、炉の周囲を粘土で覆った形式である。後述するが、下部構造は、SX01以前の溶解炉を利用している。炉の周囲には黒くなって堅く締まった面が広がっているほか、北側50cmに溶かした金属を流し出す部位があったと思われ、鉍滓の塊がうずたかくなっている。ふいご座はわからなかった。

①構造について

炉を再利用することによって構築されている。その炉本体部分に黄色の粘土を主体として、それに砂を混和させたものや質の違う粘土とともに完全に埋め込んでSX01炉の下部構造としている。その北側は下部の炉の稼働によって排出された鉍滓で完全に埋まっていた。下部の炉底から20cm上で炉心下に石臼が置かれており、炉心の下がり防止する目的であろうか。類例に注意したい。そして、その周囲に小さな杭が3本埋め込まれていた。本来は4本あったものが1本朽ち果てたと考えられる。杭は炉の壁体を補強するものであり、壁体の構築とともに埋め込まれたものである。杭の樹種は全て異なり、ネズコ、ヌルデ、サクラ属と付近の雑木で作られている。炉はかなり焼けただけで堅くなっており、内部には炭や小さな鉍滓が充満していた。検出時には、ふいご羽口片が炉心に接して出土していたが、先端の断片であることやふいご位置にしてはおかしいことから、重機掘削時に2次的に動かされたものであろう。

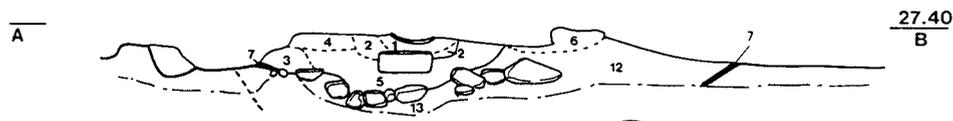
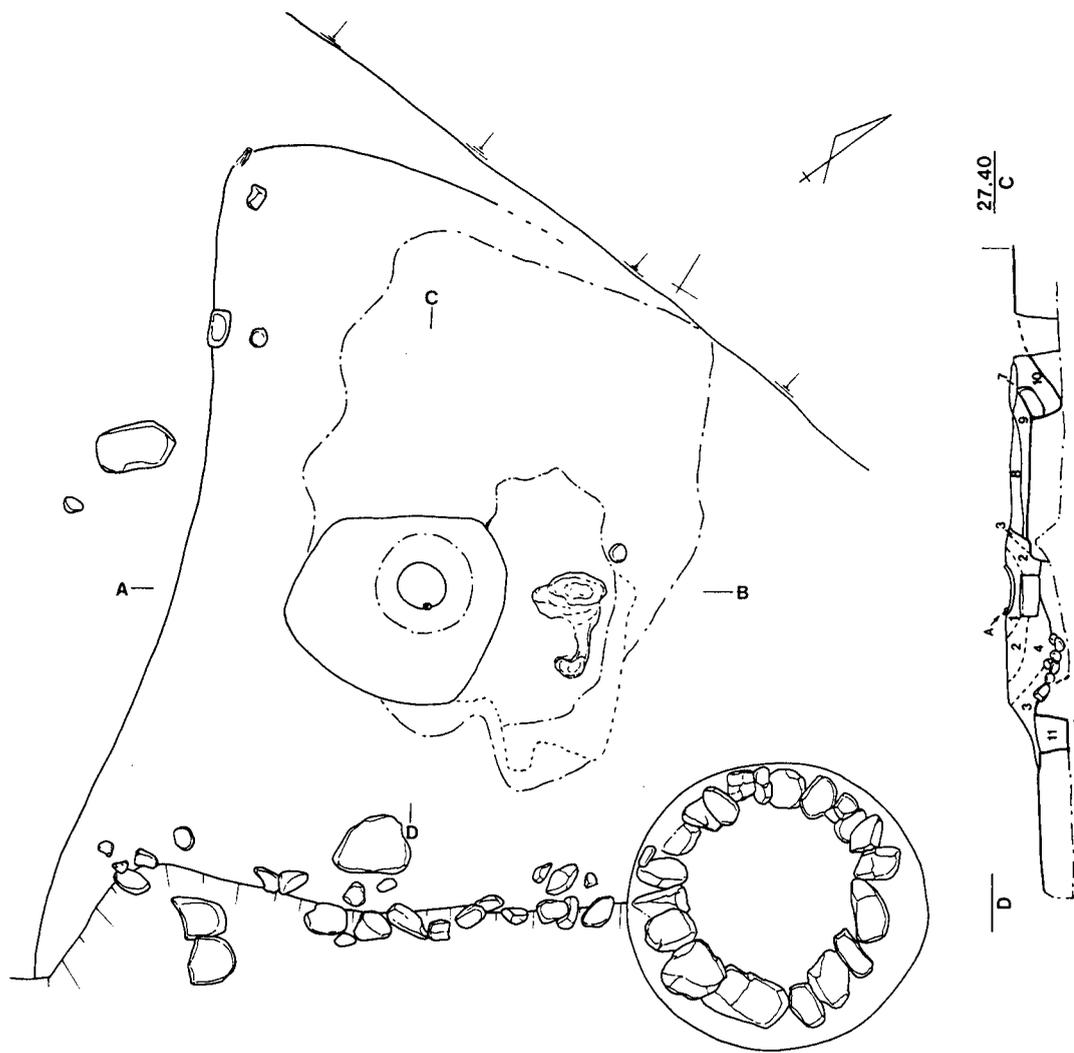
杭を観察する。287-1はヌルデ材で、丸棒の先端を丸くとがらせて杭にしている。樹皮はないが、本来はついていたものが落ちてしまったものである。287-2はネズコ材で角棒の両面を削ることによって杭にしている。287-3はサクラ属で、他の2本に比べて貧弱である。先端の切削は2と同じである。このように規格性はなく、あり合わせの部材を利用したと考えられる。

②炉の周囲について

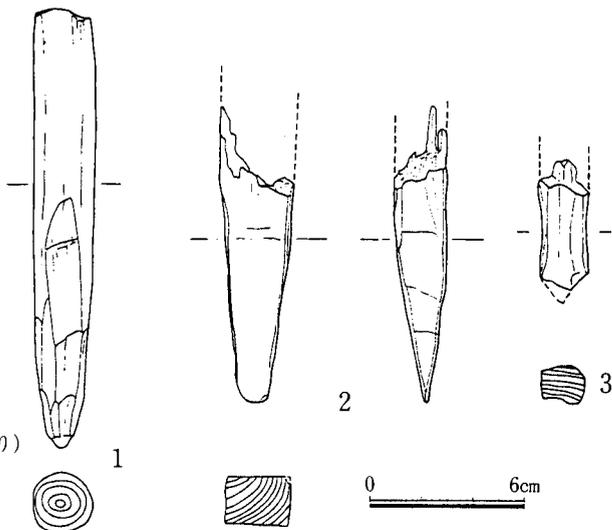
SX01の南50cmに東西に走る土の違いが観察された。黄色粘質土が筋状にSD02から約4.5mの長さで伸び、そこで直角に曲がって北に向かうが、50cm程度でわからなくなってしまふ。直角に曲がる位置に直径4cmくらいの小さな杭が打ち込まれている。調査当初、何の痕跡か全くわからなかったが、それより南の地形が下がって整地土となっていたので、SX01作業面と整地土との境が見えているのであろうと考えた。炉の周囲は熱を受けて非常に堅くなっていた。黒青褐色の硬化面が南北2m、東西2.8mの範囲でみられ、炉から融けた金属を流し出す付近はより黒くそして堅くなっており、地面に流れ落ちた溶けた金属が冷えて固まった瘤状の隆起となっている。

炉の底面に接してふいご羽口断片が出土しているが、2次的に動かされたものであろうか。ふいご座の位置は確定しがたいが、炉より1.3m東に40cm弱の平らな石があり、これに当てることもできよう。炉に覆屋があったかどうかわからない。

周囲から鉄滓や銅滓がほとんど出土していない。西側を調査していないので全くないとも言い切れ

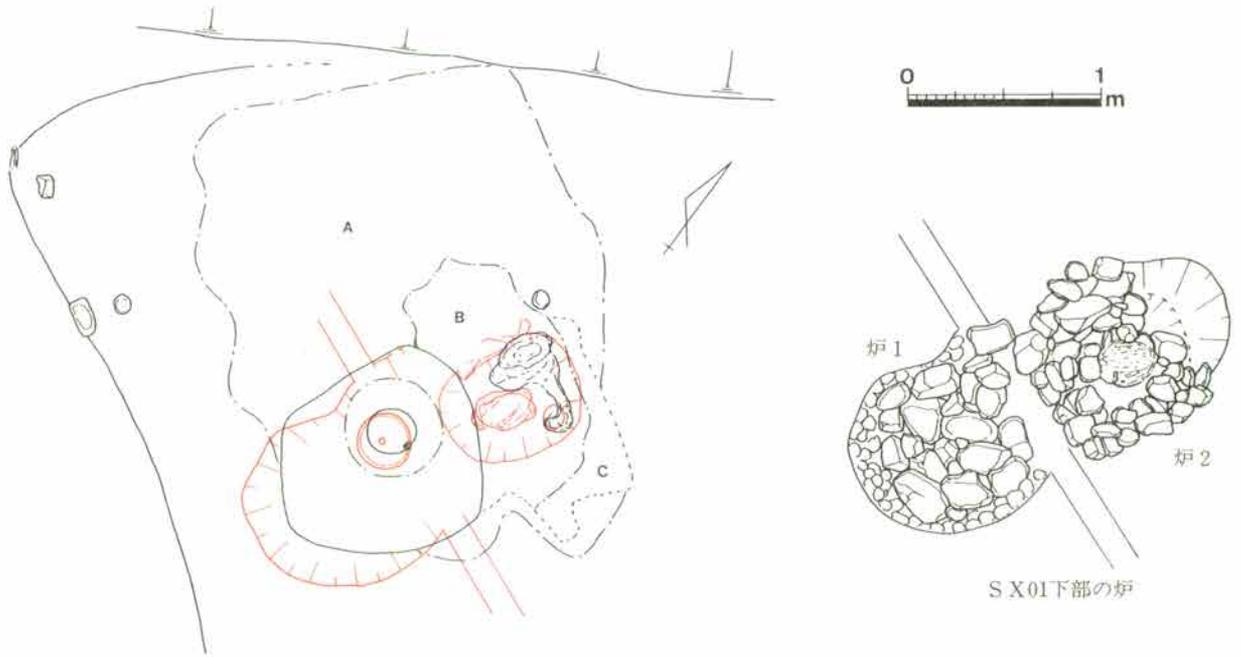


1. 赤変部分
2. 黄色粘土
3. 2 + 砂
4. 灰黄色粘土
5. 4 よりも明るい
6. 硬化部分
7. 炭層 (1cm前後の小さいもの)
8. 灰褐色粘質土 (黄色ブロック含む) - 整地土
9. 暗褐色粘質土 (下面にスラッグや部分的に炭などかたい面あり)
10. 炭に灰スラッグの層
11. 暗黄灰色砂質土
12. 鈹滓土、黒色炭層 (完全に粒子化)



炉心出土木杭

Fig. 287 白鳥堀調査区 SX01実測図 (1/60)



- A. 黒褐色の被熱? 固く縮った範囲 (薄いので部分的に欠損部含む)
- B. 灰黒色 (硬化) 被熱
- C. 灰黒色 (硬化) 被熱

Fig. 288 白鳥堀調査区 SX01下部構造 (1/40)

ない。炉の形態から鍛冶関係というよりも鑄造関係と思われ、そのためであろうか。

③下部の炉について

下部の炉は二つの部分から構成されている。一つは、炉本体の基礎となっていた部分であり、SX01 炉と重複している。もう一つは、炉から溶けた金属を流し出すところであり、ここもSX01の溶けた金属の流し場と重複する。前者を炉1、後者を炉2とする。いずれも土坑の中に石を敷きつめた構造となっている。たちわりによる断面観察の結果、炉の土坑はそれほど大きくなく、一回り大きい程度である。炉の内面は黒く焼けただけである。下部の石は幾つか重なりがあるようだが、当初のものなのかそれとも改変されたものなのかよくわからない。

炉1の石から、石製鉢が出土している。また、炉2中から漆器椀が出土しており、上部の炉の構築にいろいろなものを使っているのがわかる。炉2中心部には、溶けた金属を流し出し地面に落ちてしまったものが冷えて固まっているが、中心あたりでかなりの厚みを持つてみられる。

SX03・SX02

SX03は、皿状の凝灰岩の炉を持つ鍛冶炉である。炉下部には石や陶器、木によって防湿施設を作っている。この構造内および周囲の整地土から多種多様な遺物が出土している。そして、西隣には、SX03と同じ主軸をとる浅い土坑をSX02とした。内部に溜まった白色砂に磁石を近づけると、小さな粒子(鍛造別片か?)付着するので、やはり鍛冶関係の遺構で、SX03とセットをなすものと考えられる。

①SX03の構造について

炉の燃焼部分は、方形の浅い皿状となったもので、南側がなだらかな壁をもっているが、北側はオープンになっており、検出時には石が2個おかれてあった。これが炉の一部かどうかわからない。凝灰岩製の炉の下部は粘土によって地面に固定されている。炉の周囲は南側が1.3mで、東側が60cmで一段下がるように作られており、炉本体が地面から少し浮き上がるような状態である。

炉本体の下部の地山は少し掘り窪められ、灰白色を呈する非常に硬い土の層がある。防湿のために



Fig. 289 白鳥堀調査区 SX02・03上面実測図 (1/40)

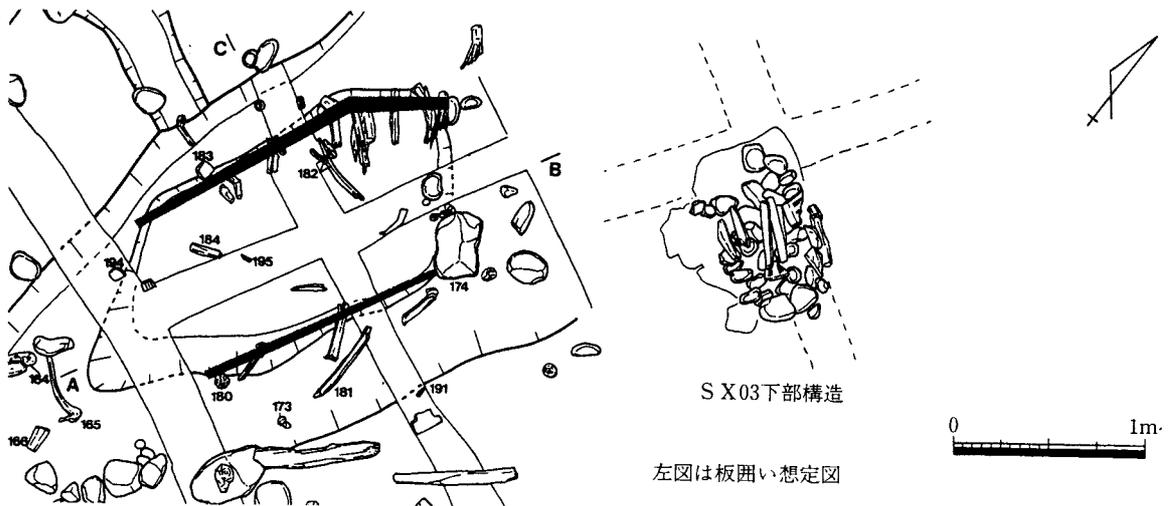
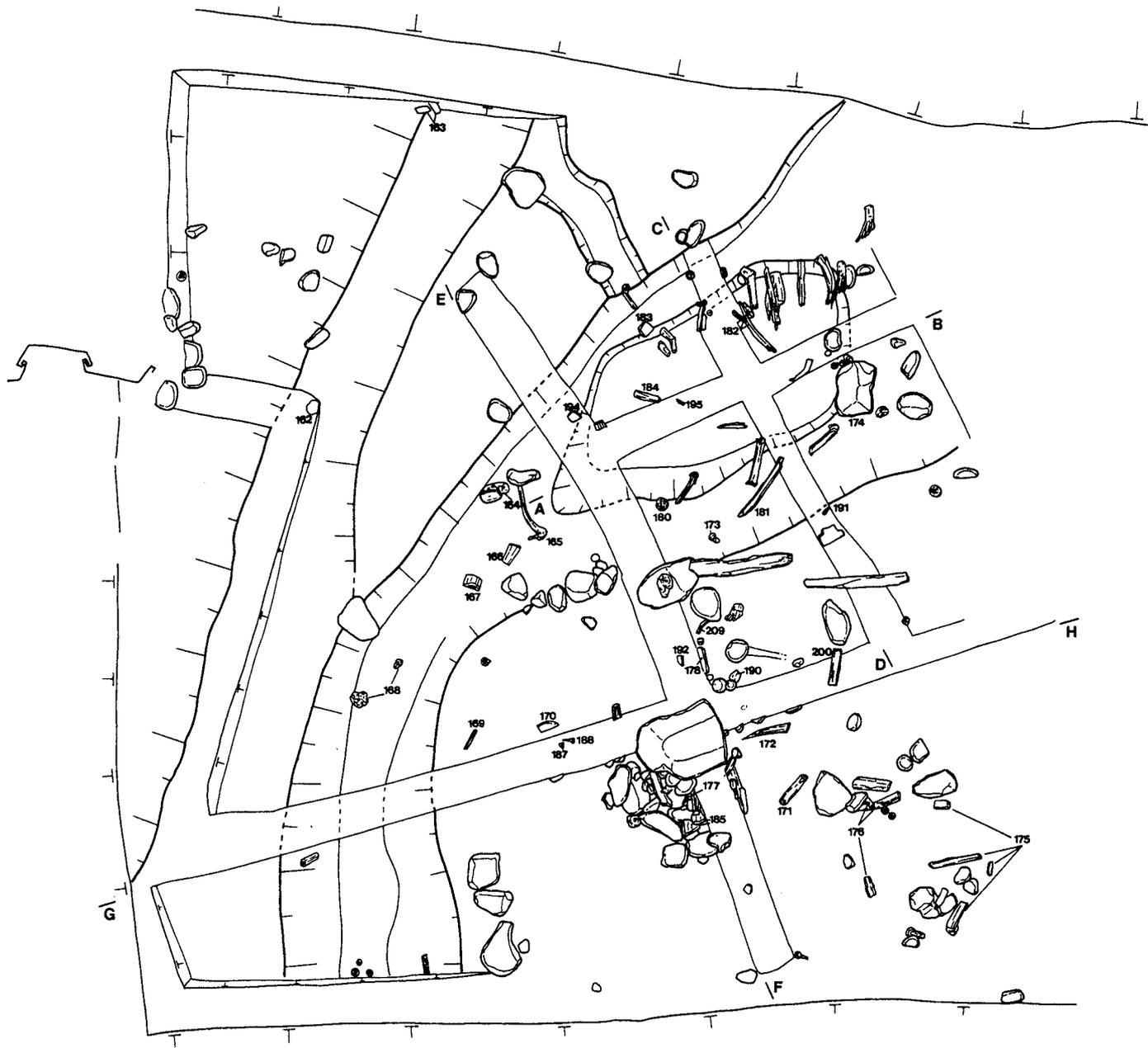
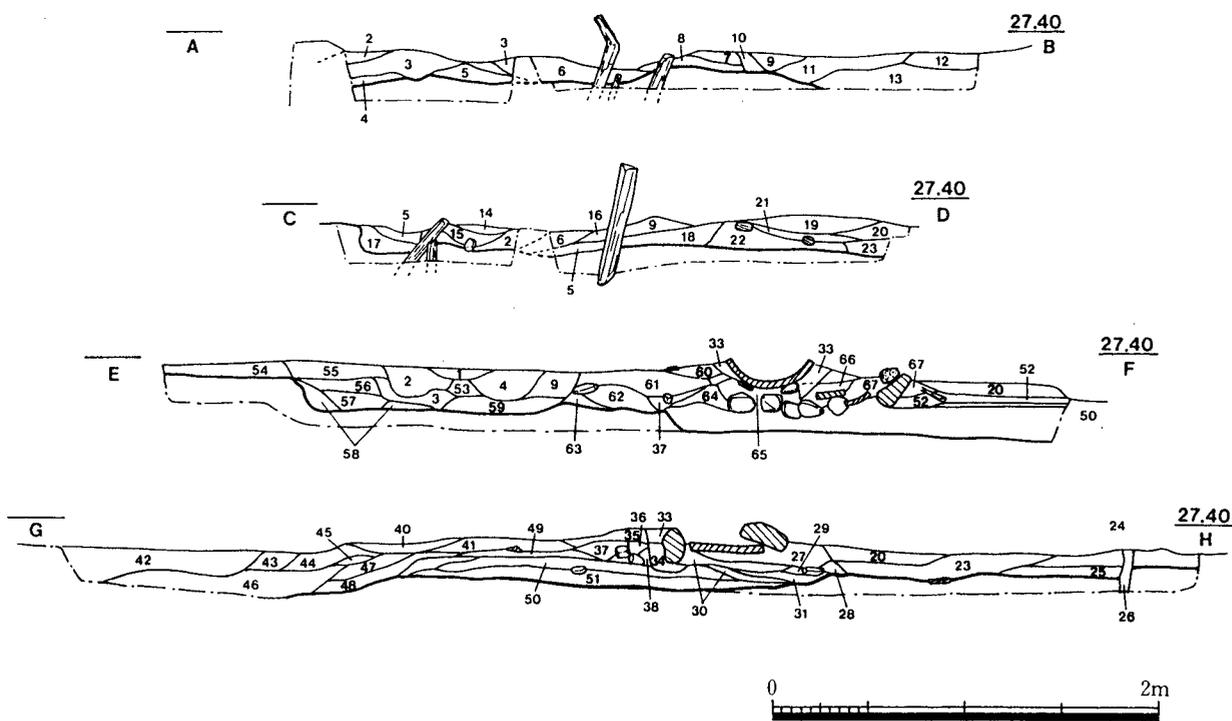


Fig. 290 白鳥堀調査区 SX02・03の完堀実測図 (1/40)



- | | | |
|--------------------------|----------------------------|-------------------------------|
| 1. 暗黄褐色粘質土 (黄色ブロック・炭含む) | 23. 黒黄色砂質土 (炭・灰多く含む、汚れた感じ) | 46. 40と44の上に礫や黄色ブロック含む |
| 2. 白色砂 | 24. 暗黄灰色粘質土 (SX01に伴う・整地土) | 47. 黒灰色シルト (炭粒多い) |
| 3. 暗灰褐色粘質土 (上層の方に炭粒多く含む) | 25. 黄褐色粘質土 | 48. 47よりも明るく黄味強い |
| 4. 黄灰色砂 | 26. 杭痕・濁黄色粘質土 | 49. 36と同じ |
| 5. 3の土で砂粒含まない | 27. 褐灰色砂質土 (灰層か? 汚れた感じか) | 50. 暗褐色粘質土 (作業時の表土層) |
| 6. 3の土と同じだが砂質土的 | 28. 褐色粘質土 | 51. 灰白色 (かたい土) |
| 7. 暗黄褐色粘質土 (黄色ブロック含む) | 29. 炭層 (黒色土) | 52. 黒褐色砂質土 (炭粒灰多い) |
| 8. 暗黄灰色粘土 | 30. 暗黄色砂質土 | 53. 灰褐色粘質土に1がブロック状に入る |
| 9. 灰褐色粘質土 | 31. 30の土に暗灰色粘質土 | 54. 礫層 (42と同一層か?) |
| 10. 9よりも暗い | 32. 灰褐色粘質土 | 55. 灰褐色砂礫土 |
| 11. 9の土に黄色ブロック含む | 33. 黄白色粘土に砂分小礫含む | 56. 淡褐色砂質土 |
| 12. 黒灰色土 (スラッグ含む層か) | 34. 黒灰色粘質土 (少しブロック状に含む) | 57. 58の土に白色ブロック含む |
| 13. 12よりかたくスラッグ多い | 35. 黒灰色粘質砂質土 (炭粒含む・灰層) | 58. 淡灰色シルト |
| 14. 黄白色砂 | 36. 淡暗灰色砂質土 | 59. 暗灰色粘質土 (黄色ブロック・炭含む、汚れた感じ) |
| 15. 暗灰色砂土 (炭粒含む、汚れた土) | 37. 36の土に黄色ブロック、炭粒、焼土ブロック | 60. 黒色炭層 (炭粒は1~2cm程度と小さい) |
| 16. 暗灰色砂質土 (黄色ブロック含む) | 38. 黒炭色粘質土 | 61. 37と同じだが、焼土ブロック多い |
| 17. 褐黄色粘質土 (黄色粒・スラッグ含む) | 39. 37と同じ | 62. 61と同じようだが、焼土ブロック含まない。 |
| 18. 黒褐色粘質土 (黄色ブロック含む) | 40. 暗灰色シルト (黄色ブロック含む) | 63. 灰褐色シルト |
| 19. 暗褐灰色砂質土 (礫含む) | 41. 灰色シルト | 64. 暗灰色粘質土 (炭含む) |
| 20. 19の土に褐灰色ブロック含む | 42. 礫層 (鉄滓多く含む非常にかたい) | 65. 黒灰色粘質土、特に炭ブロック多く含む |
| 21. 20よりブロックの量多い | 43. 灰色シルト (黄色ブロック多く含む) | 66. 暗灰褐色粘質土 (ブロック多い) |
| 22. 明灰褐色粘質土 | 44. 40よりも砂質 | 67. 66の土にブロックほとんど含まない |
| | 45. 砂のブロック | |

Fig. 291 白鳥堀調査区 SX02・03アゼ実測図 (1/40)

石灰を締めたる層であろうか。その上に粘質土系あるいは粘土を主体とする土を薄く積み上げている。同時に、防湿施設である礫や土器、杭などで組まれた構造物も作られている。この下部構造最下面に、12枚が一差しとなる古銭が出土している。ちょうど石組の脇に置かれた出土状況で、意図的なものである。このほかにも、やや離れるが茶器である茶入れの下半部も最下面に接して出土しており、これもまた意図的な所作をみる事ができる。

炉内堆積土を洗浄すると、鍛冶作業で出てくる小さな粒状の鉄、鍛造剥片が多くみられた。このことから、鍛冶炉と考え、鉄製品の生産にあたっていたと考えた。また、大沢正己先生の分析でも、多量の鍛造剥片が出土していることから、鍛冶炉である蓋然性は極めて高い。椀形などの鉄滓は、SX

03より南で出土しているので、その生成要因がどこに求められるか問題である。つまり、鍛造の鍛冶で作られた碗形滓ばかりでなく、鉄の鑄造で出てきた碗形滓である可能性もあり、両者おこなっていた作業状況も復元可能であろうか。ともかく、この炉は鉄に関わる炉である。そして、炉の周囲や下部構造内に、銅製品などが多くあることにも注意しなければならない。際に位置するSX01が銅の生産に関わるものと想定したように、鉄製品と銅製品が密接に関連しているのである。

下部構造を構築した後、炉を設置するようであり、周囲よりやや高くなった炉の状況が復元できる。見つかった炉は、土層観察によって、これら一連の基礎を掘りこんで作られており、作り直されたことがわかる。SX02から伸びる溝はSX03がの面に掘りこんでいるように思える。作り直される前の炉がのと思われる土では、ふたつの遺構の間に土手状のものがあるにすぎないので、切り合いがあるかは不明である。二つが密接な関連を持つ遺構であると考えられ、一連の造作によるものであると理解している。

なお、SX03周辺は、SX01ほどひどく焼けて堅くなってはいない。これは、上層、下層両方ともに共通する。それぞれの炉の性格の違いであろう。むしろSX03南の鉦滓を捨てている付近が強く焼き締まると同時に流れた鉦滓などで固まった面を成す。ここからも多量の鍛造剥片が出土しており、この方が主たる作業場と認識できる。

③ SX02の構造について

SX03一連の遺構で、あぜ断面でも切り合い関係はよくわからない。幅2mの溝状落ち込みが幅1m前後と狭くなってSX03前面をめぐるように屈曲する形状である。SX03からの廃棄物を捨てたりしている。溝底のレベルは北から南、そして西から東に低くなっている。この溝状の落ち込みは北に行くとわからなくなるが、SX02と一体をなすものであることは確実である。幅広くなる部分は、調査当初から落ち込みがみられ、きれいな白色砂が溜まっていた。これがこの遺構の最終段階で、中心部分と南端に厚くみられる。白色砂はこれ以外にもみられ、何回か使われている。混入がないので人為的な埋土であることがわかる。

SX03横にさらに一段低くなる部分がある。南北約2.3m、東西約1.1mで、わずか15cm程度の浅いものである。西壁がややオーバーハング気味に垂直に立ち上がる特徴があるが、南北の壁の立ち上がりはそれほどでもない。特に南側は伸びたような形状で比較的緩やかである。

さらに特徴的なのは、南北の両壁に杭が密に打ち込まれており、一様に南に折れている。あるいは折れながら傾いている。土層を検討すると、壁の立ち上がりを境にして埋土が異なっている。中央東西あぜでは、西側で外が暗灰褐色粘質土、内が白色砂や暗灰色砂土で、東側で外が灰褐色粘質土、内が西側と同じ。これは、杭がうちこまれたラインに板などの囲いがあって、内と外が区別されていたと考えられる。この区別する施設は、南北壁にはみられず、必要なこととなる。

埋土は、白色砂などの砂土や灰褐色の粘質土など、水が溜まって堆積した土層でもない。西側にSX04に連絡する溝があるが、非常に浅いものである。杭は、底から20cm程度で同じように折れて曲がっているので、その高さまで土坑側面を区画する施設が存在したと考えられる。板囲いでは

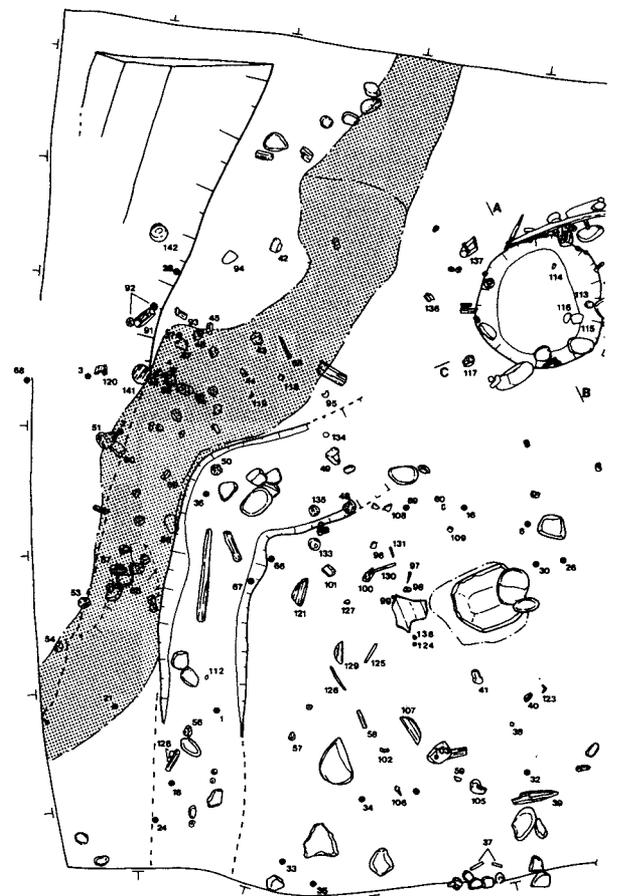


Fig. 292 SX02,04間締め土の範囲 (アミカケ部分)

水などを入れることはできず、ためることもできない。やはり土砂や炭などの固形物と考えられる。具体的には、堆積土としてみられる白色砂などである。炭もその候補にあげることができよう。湿気を嫌うために、SX02を高いところに据えて、排水の溝を切っているのである。北西側のコーナーが少し屈曲してそれに対応するように北東コーナーにある石が、作業の足場石のようなものとも推測することができようか。

なお、SX02と03の間に土台石を持つ柱が立っている。どのような構造体なのかよくわからない。
SX04～06

これらは具体的な遺構を指すものではなく、d項で報告する溝状の落ち込みに堆積した状態を指す。すなわち、この溝に鍛冶・鑄造作業で出てくる鉋滓などの不要物を捨てており、その出土位置をある程度把握するためのものである。落ち込みでも鉄矢板より北をSX04、南を拡張区とした。拡張区の中でも鉋滓が特に集中して非常に堅くなった部分をSX05、SX05北側の溝状の浅い落ち込みをSX06とした。なお、SX02からのびる溝は遺構番号を付けずに、SX03南あるいはSX02・04間叩き締め土というようなラベルで遺物をあげている。

また、SX03とSX05の間に、叩き締められたような非常に堅い層があった。SX01や07で見られたような黒褐色の硬化面とよく似ているが、礫や木製品、鉋滓などを含むという違いがある。大沢先生の分析で鍛造剥片が非常に多く出土していることから、鍛造作業エリアであることがわかる。つまり、横におそらく水をたたえている溝の廃棄場所を控えた状況であり、火と水の相反する要素が近くにあることをどのように説明できようか。

SX07

6年度調査区SX401にともなう硬化面を指す。詳細は次節参照

c) 井戸

SE01の1基のみ検出した。石組みの井戸で、内径90cm、掘り方径140cm、深さ180cmを測る。井戸は浅いながら、地山としての黄色粘土、礫層、緑灰色シルトの卯辰山層まで及んで、湧水層である砂層まで掘削されている。使用されている石材は、基本的に川原の転石を使用し、下から80cm位までやや大きめの石を用いている。それより上はやや小形の石材となるが、上面付近になると再びやや大きめの石材となる。石は基本的に小口積みを基本としているが、中には横長の部材を差し渡すものもある。この場合は、幅が他の石材の奥行きほどもある大型の石材を使用している。反対に、間詰石のような小さな石材も使っている。

このように、石組み中程がやや弱い構造となっているので、井戸全体が東10度近くも傾いている。構築時によるものなのか、それとも埋没後に動いたものなのかわからない。使用石材の中には、火を受けて脆くなっているものもあるほか、石臼片数個体分・越前播鉢もみられ、雑多なもので構築されている。掘り方埋土は、上層に良質の粘土を多用した砂礫土となっているが、下から140cmまで荒い砂礫土を裏込め石として使用している。

井戸の下半分は井戸水堆積土がみられ、上層として人為的埋土である、盛土5と同じ緑灰色砂質土や粘質土、礫土が入っていた。盛土5施工時に埋め込まれたものである。遺物は僅かに土師器皿が出土したのみである。構築年代はわからないが、上層遺構であり、最も新しい遺構と考えられる。

なお、SX01と近接しており、同時に存在したのであろうか。SX01炉心と150cmしか離れていない。しかも、金属を流す場所が炉心から50cm離れた溶けた金属の流し場の溜まりであるとする、ますます井戸に近くなる。このことから、同時存在した可能性は少ないと考えたい。

d) 調査区南端溝状落ち込みと柵列



Fig. 293 白鳥堀調査区南端落ち込み実測図 (1/40)

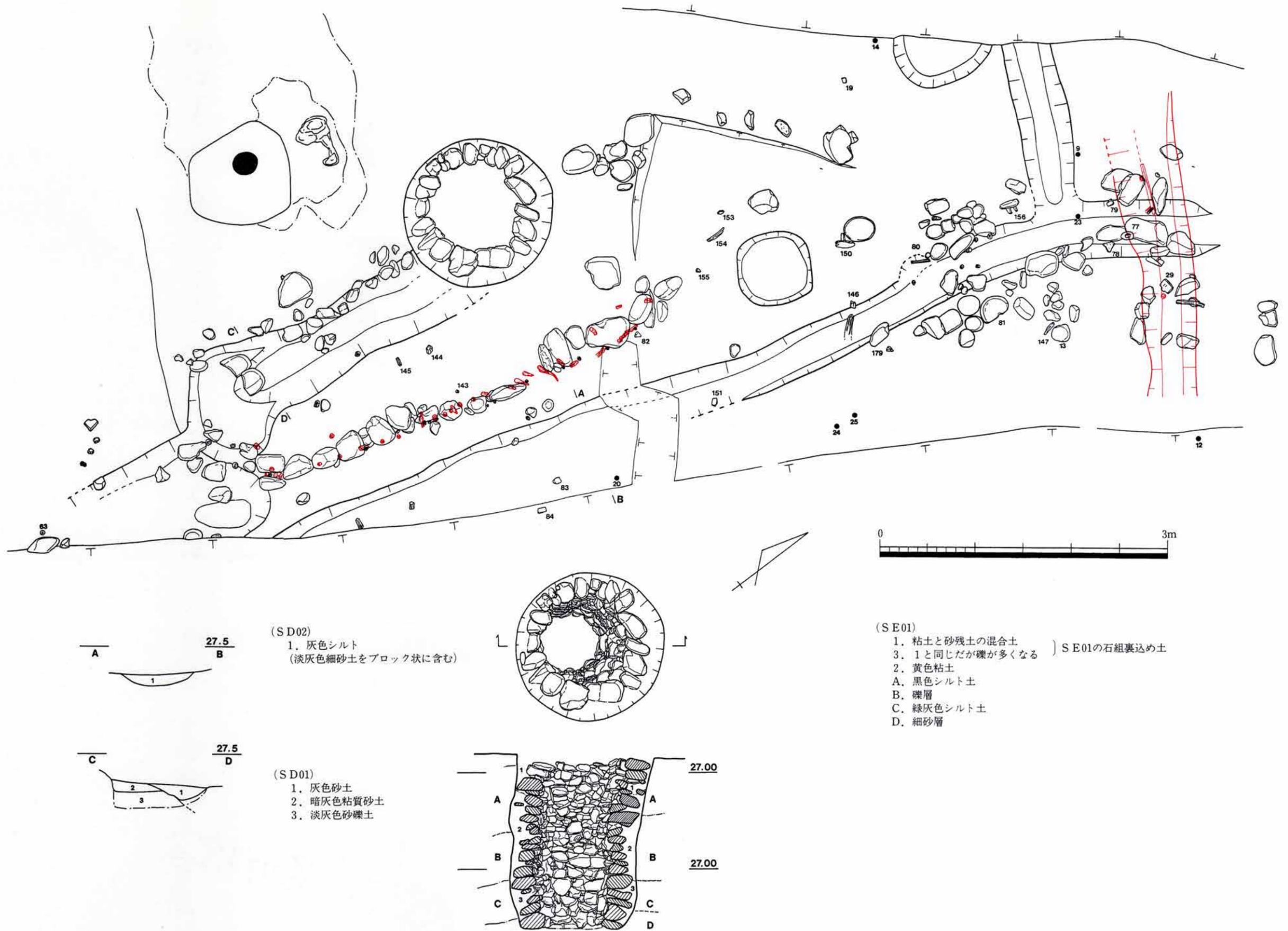
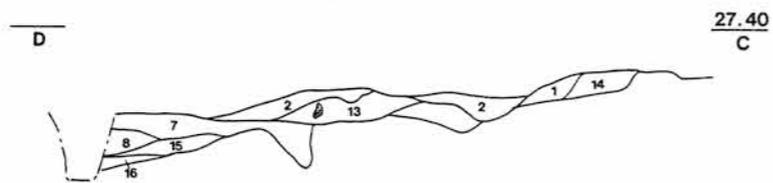
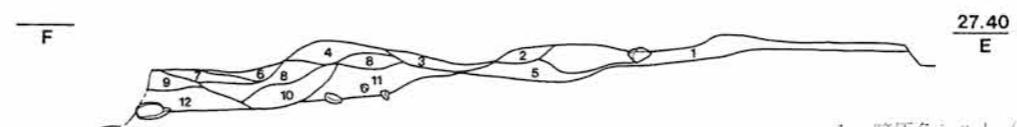
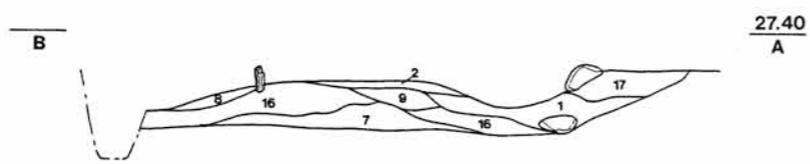
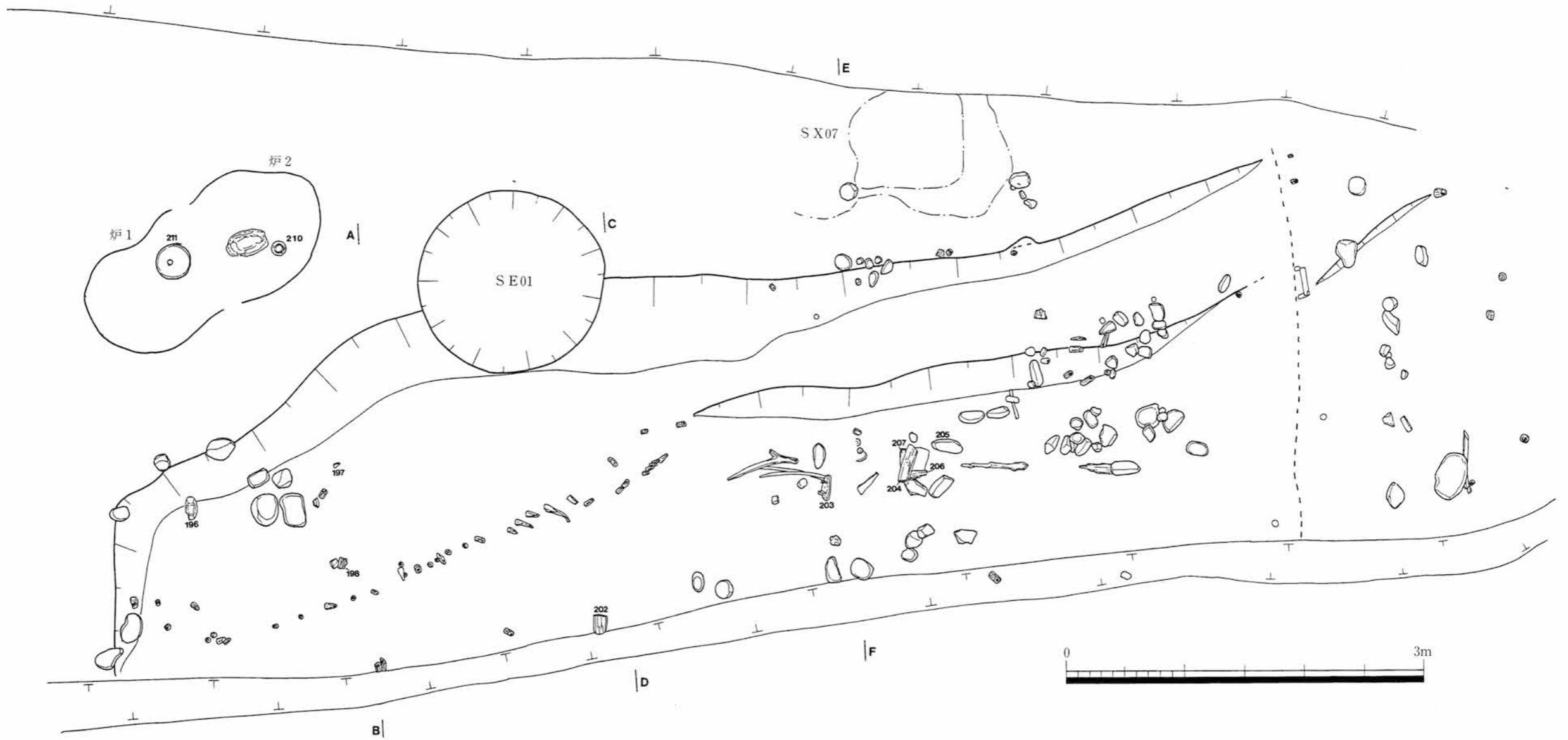


Fig. 294 白鳥堀調査区 SE01上層遺構周辺図 (1/40)



1. 暗灰色シルト (炭含む、灰を主としているのか?)
2. 黄灰色砂礫土
3. 黒灰色粘質土 (下層に黒色灰層)
4. 暗灰色粘質土
5. 灰色礫層
7. ブロック多い
8. 7よりもブロック多い
9. ブロック小
10. 下面に有機物
11. 12に同じ
12. 礫含む
13. 2よりも粗い石
14. 灰褐色粘質土、黄色ブロック含む
15. 暗灰色シルト (砂混り)
16. 暗灰色シルト
17. 黄褐色粘質土 (SX07炉心の整地土)

Fig. 295 白鳥堀調査区 SE01周辺下層遺構図 (1/40)

SX04～06とした溝状の堆積をみせる落ち込みである。土橋の盛土6の背後にあたり、杭列が検出されている。鉄矢板を境にして西側は、工事側の橋台掘削エリアとなっており、調査ができなかったため、その続きを検出できなかった。したがって全容はわからないが、予想される溝状の落ち込みは、土橋盛土にはほぼ並行するようで、調査区主軸から斜めに検出された。西側ではその落ち込みラインを明瞭に把握できてSX04としたが、矢板を境に急にわかりにくくなる。鍛冶作業で出てくる廃棄物をこの落ち込みに捨てており、それらをSX05や06とした。溝状の落ち込みの深さは30～40cmの深さまで掘削したが、さらに深い可能性もある。これは、断面図の作成を怠ったために、検証できないのである。もしかすると地山の黒色シルトと混同して、掘りすぎている可能性も否定できない。ともかく、溝の斜面は比較的単純で、人工掘削溝と考えられる。

溝の埋土は盛土5が上面に認められるが、南の拡張区南側では杭列上面近くまで盛土5が覆い被さっており、溝の落ち込みが幅を減じながらも、新たな土橋が盛土5で埋め込まれるまで機能していたことがわかる。この溝は、石川門調査区壁面で確認されなかったため、土橋の高まりから少し離れたことがわかり、白鳥堀調査区でも溝の外側に土坑SK01が存在することからもわかる。そして、溝幅は最大限SK01までの3m程度の幅と考えられる。土橋からの雨水を流す溝と考えられるとともに、鍛冶遺構群を区画する意味合いもあろう。兼六園調査区で土橋背後に類似の溝は確認できなかった。

杭列は、北側に倒れ込んだ状態で出土している。調査中は土留めのようなものかと考えていた。しかし土橋下端からかなり離れていること、杭の構造が土留めには平板であることから、土留めではないと考える。杭列は、溝上端から1m近く離れてその頭が見えてくる。掘削で検出できた最も離れた地点は溝上端から1.8mくらいで、そこに横木もかたまつて出土している。縦木の間隔は一定ではないが、10～30cmの間で概ね20cm前後の間隔が多い。横木は基本的に縦木の上から出土しており、組み合わせ状況を示している。つまり、縦木の土橋側に横木を差し渡している。縦木が直立していたと考えると、横木と一緒に柵を作ることができる。横木が集まっているところが、倒壊するときの地表面である。杭列はさらに1m程離れて幾つかみられ、柵列が重列であった可能性もある。

このようにみえてくると、20cm四方の格子にかこまれた柵列と考えた方が良さそうである。それが2重になっている部分もある。外側の杭の方が太い傾向にあるのであろうか。柵列とすると、意識的に区画する特別の空間を作っているわけである。それが鍛冶遺構であり、一般的な町屋のイメージから遠くなる。

e) 溝

SD01を確認した。調査区東西に流れる溝で、上層に属している。調査中は、溝の存在に気がつかず、周囲に瓦がこの部分でのみ出土するのが不思議であった。遺構として実測図を作成していないので、推測の遺構のラインである。したがって、次節で詳述するので、参照していただきたい。SD01は整地して生活面をあげても溝を作り続けている。したがって、盛土5施工されるにしても最後の段階まで溝が開いていた状況なのである。面を下げていくと各段階の溝を確認でき、6年度調査区での溝のふれよりも大きいものとなっているのは、溝の出口に近いのであろう。上層時の地山の下がりの等高線は、北側に地形がのびていく様子を示す。

また、南北に流れる幅約40cmの溝も上層に属し、SD01とした。東西のSD01につながるものである。埋土は単純で、盛土5のような緑灰色粘土を多く含む土である。SD01西際には



Fig. 296 SD1土層

石列がみられ、溝の壁をなすものである。もともと溝があり、その最終段階の溝がSD01である。SD01に平行するようにSD02がある。幅約70cmである。この部分は、地山との境にあたることから、その際の溝で、便宜的に水を流したものと考えられ、SE01付近から溝の輪郭がわかりにくくなる。

なお、6年度調査区 SX401 の延長は、5年度調査で全く気づかなかった。ただ、SE01 東側の整地土の状態がよくわからなかったので、SX401 の延長がこのあたりにくると推測できる。

f) 土坑

調査区南端の石川橋橋台建設エリアに接し、通常ならば安全のための安全地帯として発掘をおこなわない部分であるが、調査区断面精査の時に土坑状の落ち込みを確認したので、調査することとなった。長さ130cmを測るが、調査区外にどれほど伸びているかわからない。深さは、断面でみる限り150cmもある。灰色砂土や灰色粘質土、黒灰色粘質土などの盛土5によって埋め込まれている。土坑底には暗灰色粘質土などの土坑本来の堆積土がみられる。内部に人頭大の石が入っている。

溝状落ち込みの外側に位置しておると考えられ、土橋盛土背後が、調査区断面で確認したような単純な形状でなく、凹凸のある形状と考えられる。

第3節 平成6年度調査

a) 調査の概要

4枚の遺構面を確認した。さらに調査区土層断面の精査の結果、盛土5土層に近い状態の土をベースにした遺構面のような土層の違いが存在していたことがわかった。これは標高27.7m付近で、第1遺構面より40cm程高い位置にある。溝のような落ち込みが確認でき、水が流れたシルト土や自然に溜まったと思われる砂土がみられる。大きな特徴は、はっきりとした溝の壁を持たないことである。これは、盛土の嵩上げとともに溝もまた、作り直しあるいは掘り直ししたためであろう。したがってその埋土の大部分は、盛土と同じような土が入っている。

同じような状況が、第1遺構面で確認した北端の溝にも当てはまる。特定空間を区画する溝と考えられ、時期を区別せず溝が存在していることがわかる。地山の起伏は意外とあって、最下面で溝であるSX402も確認できた。平成5年度調査で確認できなかった遺構であり、どのように溝が伸びるか興味深いところである。また、平成5年度調査で確認した硬化面が、第4遺構面SX401の炉跡に伴う作業硬化面であることがわかった。また、包含層中から瓦の出土はみられず、むしろ盛土5と遺構面が接する付近で多く出土する傾向であることがわかった。平成5年度調査でも瓦の出土が調査区北に偏っていることがわかっており、それを追認したことになる。すなわち、遺構面に伴うものではなく、土橋上からの崩落状況であることを示す。

なお、盛土下の遺構群は調査区の南半分に偏っており、北側が自然地形の下がりとなっている。工事で失われた部分が、鍛冶鑄造作業場の中心である可能性もあり、非常に残念である。

b) 第1遺構面



Fig. 297 調査風景



Fig. 298 調査風景

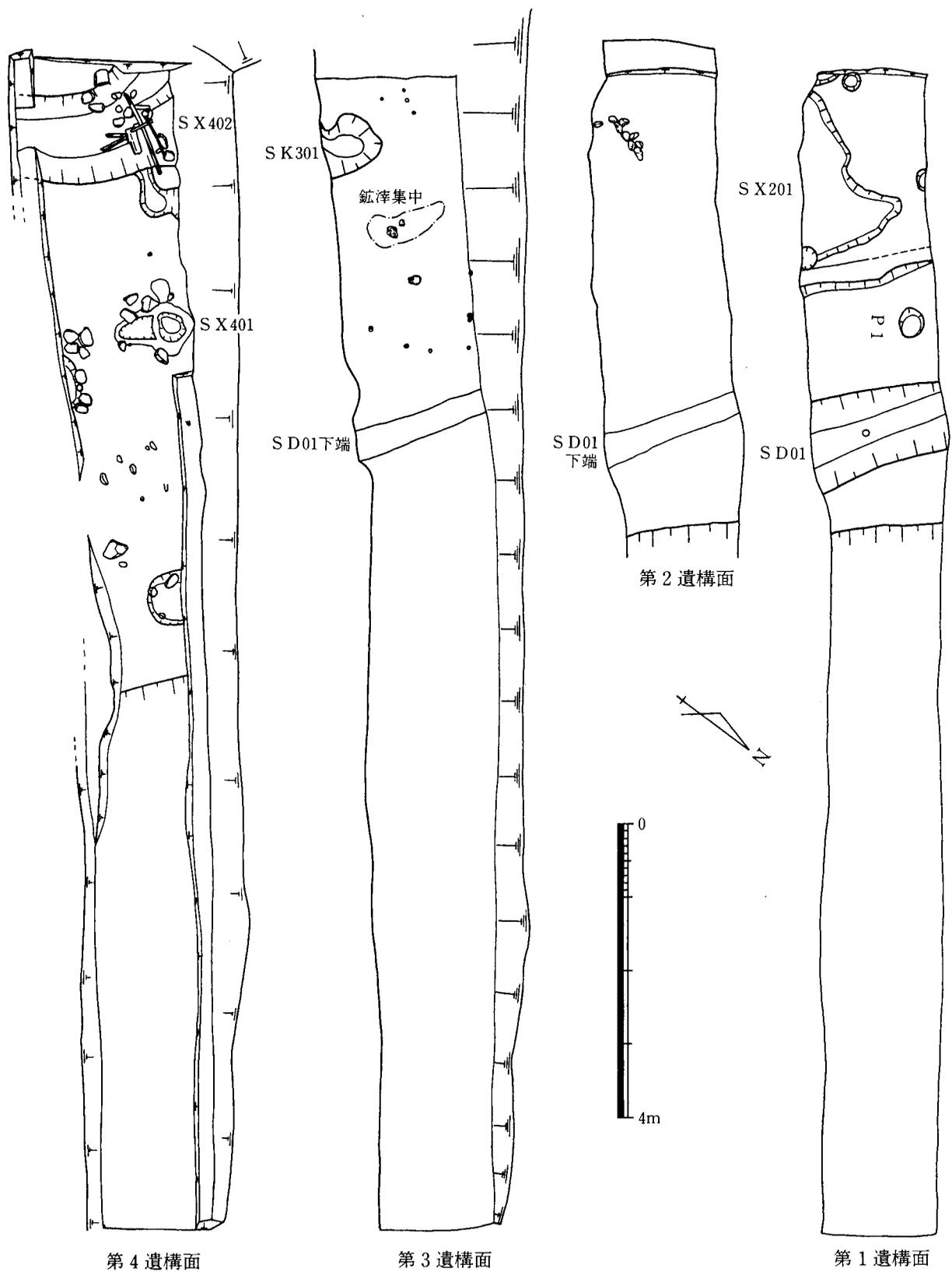


Fig. 299 白鳥堀調査区 (平成6年度) 各遺構全体図 (1/80)

北西から南東方向の溝がある (SD01)。これは、平成5年度調査区の溝につながる。前年度調査では、SD01 周辺から瓦が多く出土しており、この傾向は6年度調査区でも同じである。埋土は上の層の埋め立て土が入り込んでいる。最下層には白色砂土と灰色粘土の互層となっており、雨水などによる堆積である。SD01 は第3遺構面にも存在している。整地土の盛り上げとともに、SD01 も改修されて使われたのである。溝の機能は、水を流すことであるが、意外にも粘質土の堆積がみられないのは、溝さらえなどがおこなわれたと考えられる。溝底の高さを両年度の調査区土層で確認すると、水は西から東に流れるようである。これは前年度調査確認したSD01 が最終的に北の谷に流れ込んでいるのによく合致する。

SD01 から1 m 近く南に、不整形の浅い落ち込みがある。自然の窪みと思われる。また柱穴を4つ確認した。いずれも掘立柱建物の柱穴で、直径20~30cmを測る。P-1は底に石があり、土台石をなすものである。しかし、石の表面が平滑にも関わらず傾いて置かれているために土台石として機能していない。建物の全容は全くわからない。

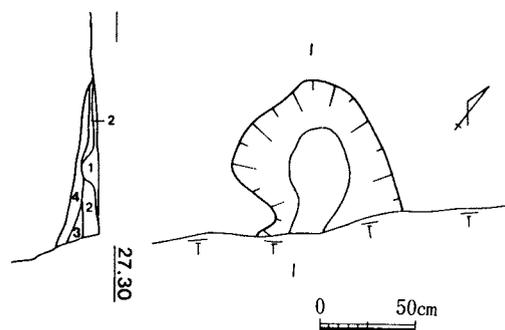
c) 第2遺構面

第1遺構面下の、鍛冶関係によって非常に堅くなった硬化面を第2遺構面とした。これに伴う遺構はみられず、調査区外の西、北方に存在すると考えられる。第2遺構面は第1遺構面と密接な関係がある。それは、SD01 をともに共有しているからであり、活動時期が近いことを示している。つまりこの両者は、生活面としての遺構面が同じであることであり、第1遺構面が小面積の整地土である。

d) 第3遺構面

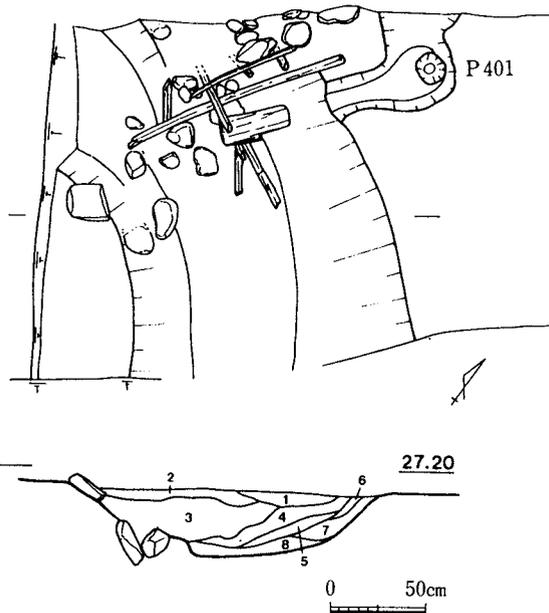
第2遺構面で確認した硬化面を除去すると第3遺構面にいたる。硬化面は、薄く矧ぐことができるので、何回にもわたる熱の土砂の堆積であることがわかる。つまり、第4遺構面から第2遺構面まで断続的に連続する面の層位関係によって、ますますわかりにくくなっている。鑄造鍛冶の作業エリアが重複しているようなので、このような状態になったのであろう。しかし、第3遺構面と第2遺構面との間には十数cmの厚みが存在するので、異なる生活面ととらえたい。

調査区南端で検出した不整形の落ち込みをSX301とした。これは、下層の溝であるSX401の上面にあたる。そして1 m 近く北に鉋滓が集中して出土する地点がある。全体的に平坦な石が多く、下層の鍛冶炉遺構であるSX401 付近に集中するので、この作業に関係する石であろうか。石の重なりは二重になっているところが多く、鍛冶炉の足場の作り替えとも解される。



1. 褐灰色粘質土層 (炭粒含む)
2. 褐灰黄色土層 (黄ブロック炭混)
3. 灰青シルトと黒茶粘土層
4. 茶褐色砂質土層 (砂粒粗く、砂土的である)

Fig. 300 白鳥堀調査区 (平成6年度)
SK301実測図 (1/40)



1. 暗灰色粘質土
 2. 1よりも暗く粘性強い
 3. 暗灰色砂質土 (粘性あり)
 4. 淡緑灰色シルト
 5. 4中に植物質を含む
 6. 灰色細砂
 7. 8の土に黒色ブロック (ベース土) を含む
 8. 4と同じだが、4よりもやや粘性高い
- } 同質

Fig. 301 白鳥堀調査区 (平成6年度)
SX402実測図 (1/40)

SX301は緩やかに落ちて最大の深さ約25cmを測る。上面には炭粒を含む褐灰色粘質土、その下に黄色の強い粘質土がある。最下層には褐色砂質土である。土坑の落ち込みが不明確なことから、人為的な掘削による穴かそれとも違うのかわからない。

この面付近から鉋滓や金属製品が出土する割合が高くなるのは、SX401があるためであろう。また、面として存在するものの具体的な炉関係の遺構は見られない。むしろSX401が第3遺構面まで使われていた可能性が強い。

d) 第4遺構面

地山に接した遺構だが、そこまで下げると、炉跡SX401周囲の足場の礫が浮くものもある。また南端に幅約120cmの溝があり、平成5年度調査区に伸びている。SX402である。

前年度調査のSX402延長部分の発掘条件が悪く、鍛冶作業に関わる硬化面と一部重なるなど、見落としてしまった。溝には人頭大の平らな面を持つ礫や大型の建築部材が出土している。

平面図からは、西の石川門の方に向かって僅かに溝底が下がっているが、実際はどうだろうか。むしろ東が低いという地形的な流れで理解した方がよいとも考えられる。埋土は大きく上層と下層に分けられ、上層には暗灰色粘質土系の土が、下層には淡緑灰シルト土系の土がみられる。下層は、北からの流入を示し、黒色シルト土をブロック状に含んだり、木片などを含んだりしている。層の単位は小さい。上層は安定した土の堆積で、よどみの状態と考えられる。この層に木器を包含している。両層ともに石を含むが、上層に多く含む傾向にある。SX401に関係するものであろうか。そうすると、SX401稼働時には、すぐ南に水がある状態となる。

SX401は遺存状況のよい鑄造炉である。SX01よりもかなり小型であるが、炉の作り方は同じである。粘土で炉本体

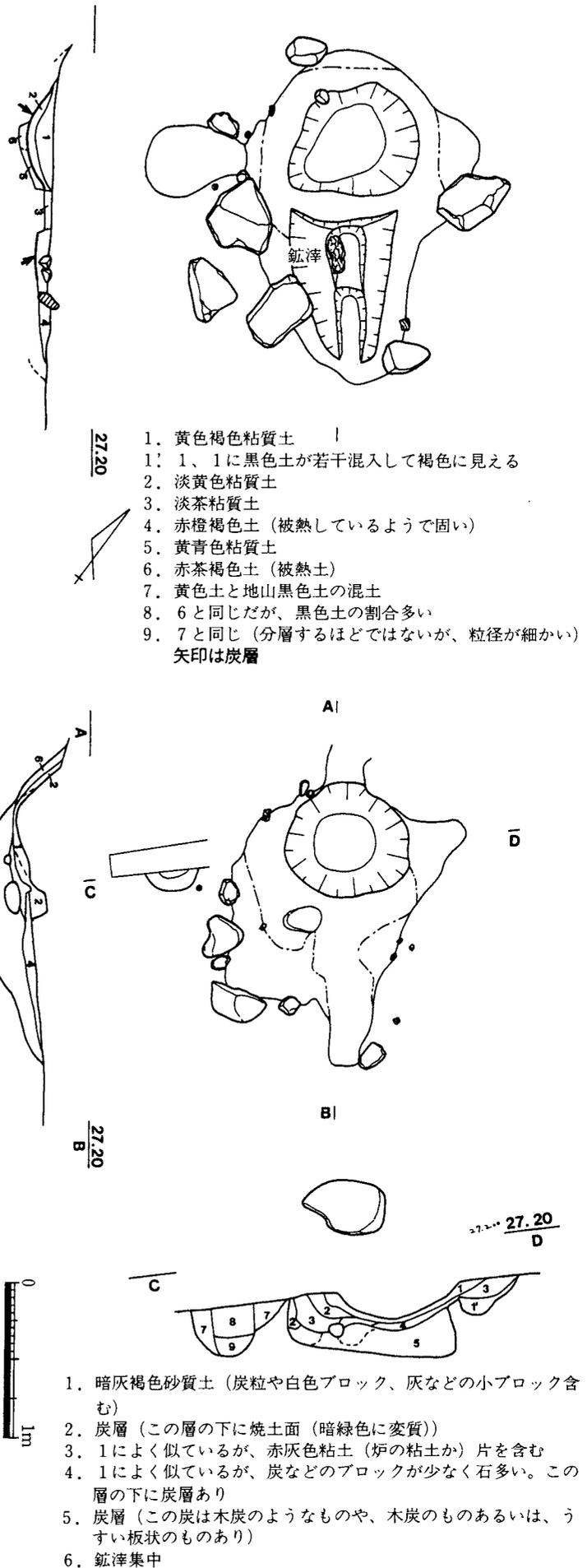


Fig. 302 白鳥堀調査区(平成6年度)SX401実測図(1/20)

を築き、東西に細長い軸を持っている。西側に円形の炉を据え、幅 10cm の壁を隔てて、溶かした鉄や銅をとりべに受け取る部分からなっている。炉の南に接して、ふいご座と思われる小穴があり、ここまで炉の粘土はおよんでいない。つまり、燃焼空間としての炉の部分と溶かした金属を流す空間（流し場と仮称）、および炉をかたち作る構造体としての粘土から構成されている。ふいご座は前者の構造に含まれる。

炉本体は、炭や灰層で埋まっており、流し場も同じ土層である。この下に、薄い炭の単純層さらに焼土面になる。二つを隔てる壁は、厚さ 15cm 前後を測り、粘土と焼土・灰・炭との混合土であり、鍛冶作業たびに作り替えているものと考えられる。流し場は炉側半分しか熱を受けた痕跡がないので、流し込む作業はほとんどこの範囲で行われたと考えられる。最下部に、垂れた鉍滓が若干ある。炉の焼け方が少ないので、長期間の使用は考えにくい。

炉の構造体は、基本的に SX01 と同じである。下部に方形土坑を穿って埋め込まれ、全て粘土で作られている。方形土坑は、80cm 四方で深さ 30~40cm 前後で、南北の壁面は垂直に立ち上がるが、東西については皿状になっている。黄色系の粘土を埋め込んで炉を作っているが、下半の粘土には褐色砂質土の混合がみられる。炉に近くなると、粘土の質もよくなり、適当に砂分の入った状態となっている。熱の被り方によって、粘土の色調が変化している。ふいご座は、南壁に接してある。まず小穴を掘り、柱状のものを立てている。

炉壁検出面で表面の平らな石がふいご座を囲むように、そして流し場へと東につながるように置かれている。作業するときの足場になるものであり、石の高さもそろっている。土層観察によると、炉の作業面の最も高い位置は第 3 遺構面に対応し、少しずつその周囲が整地されてのである。炉の流し場から東に 2 m ほどで 5 年度調査区の硬化面になる。至近にある遺構として、SX 401 に密接な関連があると考えられる。

なお、上層資料だが、把手のついた坩堝が出土しており、本遺構に伴うものであろうか。

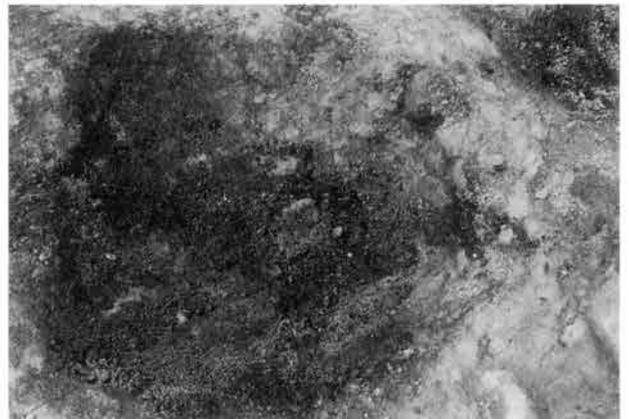


Fig. 303 SX401 炉内鉍滓

第 4 節 小結

両年度にわたっておこなった調査によって、上下 2 層の遺構面と、1 基の鍛冶炉、2 基の鑄造炉、および資材置き場を確認した。また、SX01 下部にある炉も溶解炉と考えた。遺構面を 2 枚確認したものの、それぞれが異なった時期に独立して繰業しているわけではなく、鑄造炉とともに鍛冶炉がともにある状況であり、関連を持った遺構群である。つまり、「鍛冶屋」と「鑄物屋」が同居しているのである。鑄物関係では、飾り金具などの銅製品が出土しているほか、古銭の出土も多い。特に無文銭が 3 個体も出土していることに驚く。銅生産とどのように絡むのであろうか、興味のあるところである。鍛冶関係では、鉄鏃、小柄とともに、大量の釘が出土している。未使用のものが多く、生産していたようである。未使用の釘には赤色顔料が塗布され、水銀朱のようである。錆止めの効果をねらったものであろう。類例は寡聞である。

遺構群が土橋の背後の低い位置で、谷奥のような所にあることや、土橋との間に柵列があること、炉が直線で 10m の間に 3 基もあるという密集した状況であること、資材を置く特別の空間を作っていること、等から町屋における鍛冶屋の状況ではない。その成立及び生産にそれを作らしめる権力が積極的に金属器生産に関わっていた可能性があると考えられる。これを金沢御堂を構成する権力と呼び変えることも可能であろうか。

これらの炉跡群に上屋構造物があったかどうか判然とせず、柱の痕跡を見つけることはできなかつ

た。十分に精査を加えることができた6年度調査区でもSX401周囲に柱を見つけることはできなかった。SX03と02の間に土台石を持つ柱を確認したが、それがどのようにつながるのかわからない。実際調査時に、遺物が出土してくるために不用意に石をはずしてしまったことが悔やまれる。少なくとも、南側の溝状落ち込みに鉄滓を捨てていることから、この方に壁を持つ構造物は考えにくく、屋根だけの簡単な作りのものと推測したい。SD01で四角で区画された部分が鍛冶生産区域である。このようにみえてくると、SX02から南に伸びる溝がSX03南で屈曲して直線的に伸びるのは、建物に規制されたものと理解できよう。

上下2枚の遺構面は、鍛冶鑄造作業面の継続した整備の結果と考えており、それによって炉の廃絶などの可能性は考えにくい。つまり、面の違いが炉の再編を意図したものではない。出土遺物から、炉の築造年代は16世紀第3四半期と考えられるが、その下限は難しい。天目碗からみると、やや新しいものがみられるので、天正8年の金沢御堂陥落後も鍛冶鍛造施設が使われた可能性がある。しかし、瓦が出土しないことから、金沢城に瓦が葺かれる以前の遺構であり、葺かれるころには埋められていることになる。出土した瓦に年代的な特徴は見いだしがたく、最大公約数的に言えば慶長以前の瓦である。

さて、今回調査した整地土中からかなり多くの遺物を出土している点に注目できる。生活面廃絶後の整地土であれば、その中に当時の生活物資が埋め込まれるわけだが、今回の整地土はわずから十数cmであり、炉の再編・廃絶を意図したものではなく、むしろ作業環境の整備の目的が強いと考える。そのような整地土の中に、多くの遺物が入っているのである。金属関係は、作業場という点から整地土に入り込む蓋然性は高い。しかし、木製品特に下駄の出土は顕著である。無歯下駄が 個体、連歯下駄が 個体、差歯下駄が 個体と非常に多い。整地土の中に不要物を捨てるのは、当時に限らず現代でも広く認められる所であり、これによって整地に使う土量を少なくする、という目的がある。もちろんこれによって整地土の強度が弱まるが、それほど強度を必要としない場合に有効である。このような点で廃材を埋め込むのも同じ目的を意図したものである。

すなわち、これら出土した木製品や陶磁器類は、整地作業にあたって意識的に不要物として入れられたものである。その目的は土の搬入を少なくすることであろう。土中に入れられる器物は、使い込まれた下駄や櫛等とともに、未使用と思われる下駄、下駄の歯、漆器の優品あるいは使用具など様々であるが、その時にとっては「ゴミ」である。使い込まれたものなどは、個人的な廃棄物とも理解できるが、未使用のものや優品は個人のレベルでの廃棄物とは考えにくい。破損品あるいは失敗作の可能性が高いと考える。このような品物が出てくる場、「工房」からの廃棄物であろう。そしてこの工房が近くにあるために不要物として供されたと考えることもできよう。

このような器物を廃棄できる状況にあったのは、近隣が手工業生産にかかる施設が集まっていた可能性が高いと考える。町屋として手工業生産に携わる人々が、作業所兼住居というような光景も考えられようが、本調査区で見たような鑄造鍛冶の集約的な生産体制を敷衍化すると、木製品にしても集約された生産場所としての細工所のようなものが存在していたのであろうか。これらについては、本願寺での商工業者集住とか、織豊系城下町と構造がどうなのか、という簡単には解決できない問題がある。したがって、一つの可能性として提示したい。

第3章 白鳥堀調査区の出土遺物

第1節 輸入陶磁器

a) 染付け (Fig.304-1~18)

碗

304-1は見込みに花折枝文、外面に渦文、底銘に「大明年造」あり。見込みは饅頭心である。外面に鍛冶作業での煤が付着している。漳州窯系。304-2は外面に芭蕉葉文、口縁部に波濤文。やや青みがかった釉である。漳州窯系。304-5の外面は鳳凰か。304-7は碁筍底で灰白色の素地で陶器質の粉っぽい感じである。底内面にまで釉が及んでいるが部分的なものであろうか。304-8も碁筍底で底内外面に一重圏線、素地は黄色みをおびた陶器質で粉っぽい感じである。

皿

304-9の見込みに十字花文、外面に唐草。端反りの口縁で、全体的に厚い作りである。青みをおびた釉で、高台畳付けの削りは複数回おこなっている。304-10は碁筍底で、端反りの口縁である。釉は外面体部中程までしか掛けられていない。外面は、一筆描の唐草文か。304-11は304-9と同じような文様である。ただし、やや口径が大きい。304-12は薄手の作りの皿で、見込み2重圏線の中に文様が描かれている。304-13は口径15cm近くを測る中皿で、他の皿に比べて薄手の作りである。景德鎮窯であろう。304-16は、口縁端反りの中皿である。外面に草文。高台畳付けは複数回削られている。304-17は、呉須で底銘がかかっているのみである。なお、先の報告で、盛土2出土品の内、114-8を誤って報告してしまった。本調査区出土品である。訂正する。114-8は華南系の皿で、見込みに薄い呉須でかろうじて圏線がわかる。高台畳付けを削ることはなく、底部に靱殻の痕跡が付着している。

b) 青磁 (Fig.304-22~24)

304-22は型成形の菊皿である。高台内面は白磁という「裏白」製品である。高台内面に墨書されているが、意識的に掻き消されているので判読できない。漆継ぎされている。304-25と同形同大で、同じ型から作られたセットとしてある。304-23は、口縁端反りで見込みがやや垂れている。焼成時によるものであろう。これも白磁に近い釉の色調である。304-24は大皿で、内面が菊皿状になっている。内外面に貫入が入り、鮮やかな緑色を呈する。高台は低く、削りはみられない。高台内面が無釉である。漆継ぎの痕跡がある。

c) 白磁 (Fig.304-20、21、25、26)

304-20は白磁のような白っぽい型成形の菊皿である。304-21は碗で、青磁の技法で作られたもので内外面に貫入が入っている。素地が灰色を呈しているために灰色の釉調となっている。口縁端部外面は、釉が溜まって玉縁気味になっている。304-25は304-22とセットとなるような皿である。これも高台内面に墨書されているが、意識的に掻き消されている。漆継ぎされている。304-26は器壁の薄い精巧な作りの小杯である。高台外面4mmの幅で釉が削られている。内面に灰が被ったような褐色の粒子が多数付着している。景德鎮であろう。

d) 陶器 (Fig.304-28)

李氏朝鮮製瓶である。底部はやや上げ底気味で薄い器壁である。器壁は焼き膨れがいたるところに見られ、内面に黒色の吹き出し物が多くみられる。外面は透明感のある灰色と褐色の釉が薄くついており、内面は黒褐色である。

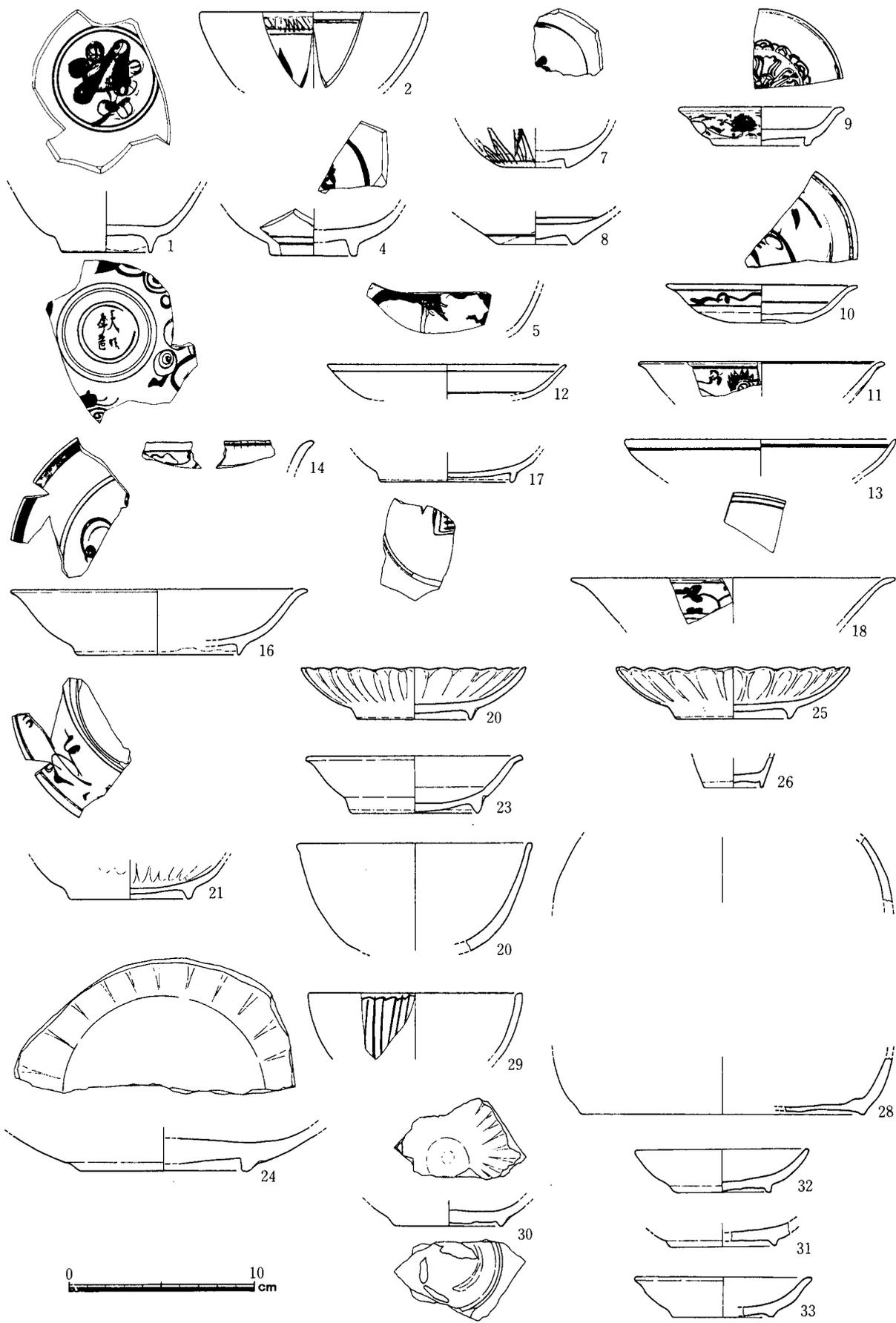


Fig. 304 白鳥堀調査区出土遺物 (染付け、青磁、白磁) (1 / 3)

第2節 国産陶磁器 (Fig. 304~306)

a) 青磁・灰釉・鉄釉 (Fig.304-29, 30~33)

304-29は瀬戸美濃青磁碗で、連弁を線刻することによって表現している。304-32・33は瀬戸美濃青磁皿で同形態である。304-32は内外面に貫入がみられ、2次的に熱を被ったために釉が溶けている。鍛冶関係の熱であろうか。33の口縁はやや端反り。内面のみ貫入が荒く入っている。

30は瀬戸美濃灰釉皿で、内面が菊皿状になっている。見込み中心が盛り上がっているものの、灰釉が厚く溜まって平坦になっている。高台は低い。鮮やかな緑色を呈する灰釉が全面にかけられているが、外面は薄い。青磁を意識して作られたものである。高台内面に、砂目跡がついている

b) 茶器 (Fig.305-1~10)

305-1~9までが瀬戸美濃天目碗である。外面に鉄釉が塗られているが黒味の強いもの、茶味の強いものそして、光沢の強いもの弱いものなどの釉調に差がある。口縁端部の仕上げは、小さく外反するもの(2、4、7、8)とそれが弱いもの二種類がある。また、口縁の立ち上がりが長いものと短いものもある。1・3は、口縁の立ち上がりが長く、端部の屈曲が弱いもので、2・4は端部の屈曲が強いものである。5・6の口縁の立ち上がりは弱く、体部から口縁の屈曲が連続的である。7・8は、端部の屈曲の度合いが大きく、内面への張り出しも顕著である。なお、9は小碗で5や6に近い器形である。

305-10が瀬戸美濃茶入れである。底部は回転糸切り痕を残し、やや上げ底気味である。外面は、底から2cmまで釉が施されているが、溜まった状態となっている。釉は光沢のある鉄釉で、茶色と黒褐色がまだらになっている。実測していないが、茶入れ口縁小片も出土している。

c) 鉄釉皿 (Fig.304-31, 305-11)

304-31は瀬戸美濃鉄釉皿である。高台は低く小さいが、鋭く作られている。素地は明灰色を呈し、精良である。釉は高台内面中心までは及んでいない。305-11も鉄釉皿だが、胎土は瀬戸美濃特有のスが入る。光沢のある褐色の鉄釉である。口縁やや端反りで、復元よりももう少し口径が小さくなるかもしれない。

d) 鉢・壺・甕 (Fig.305-12~18)

305-12は瀬戸美濃祖母懷壺である。胎土に黒い噴出物がみられ、焼き膨れもある。外面に鉄釉が少しついている。底部付近を割って鉢として使っているようで、内面に墨書されている。305-13は越前鉢底部である。底面に板目を明瞭に残し、外面に黒褐色の鉄錆釉を塗っている。305-14は越前壺底部である。底面無調整、鉄錆釉が塗られている。305-16は越前甕である。口縁は一条の凸線ようになっており、口縁端部はほぼ水平に近く、305-15と同じである。体部は丸く作られているようで、内面に指でなで上げた痕跡が明瞭に認められる。光沢のある鉄釉が塗られている。305-17は越前甕体部下半で、外面に灰釉がある。自然釉であろうか。305-18は、SX03炉の脇にあったもので、底鉄錆釉が塗られている。炉の横出土でありながら熱を受けた痕跡はない。

e) 擂鉢 (Fig.306)

越前擂鉢は、306-1~3、7~9である。胎土が灰黄色を呈し軟質のもの、灰色を呈し硬質のもの(2、8)に分けられる。しかし形態は同じである。内面口縁部下に幅広の溝がみられ、おろし目がこの前後にまで及んでいる。おろし目1単位あたり8~9本の溝がある。2の体部のみやや内湾気味である。いずれもよく使い込まれており、おろし目が浅くなっている。

4の外面には成形時の凹線がみられ、灰褐色の色調を呈し、海面骨片が入っている。色調は異なるが、珠洲焼きの可能性はある。付近から珠洲焼き甕体部片が若干出土することから伝世というよりも混入であろう。306-5・6は同形態のものである。口縁が垂直に立ち上がり3条の溝が付けられている。口縁端部上下端には重ね焼きの痕跡がみられ、口縁内面に段を作っている。このような特徴から、備前系と考えられる。加賀地域では、備前擂鉢と混同しやすい作見窯が活動しているために、識別が現状で困難なので、「備前系」とした。

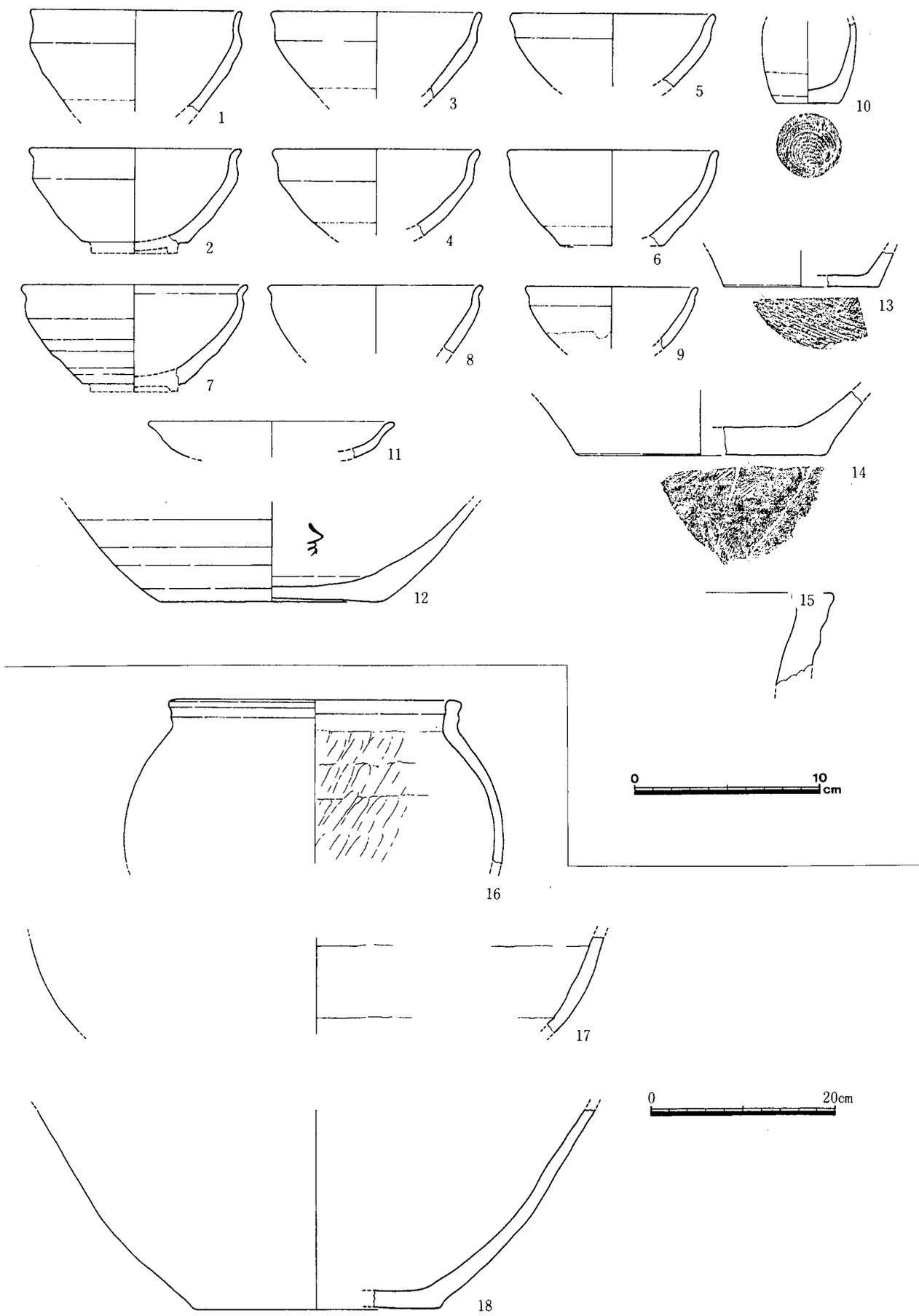


Fig. 305 白鳥堀調査区出土遺物 (陶器)(1/3、1/6)

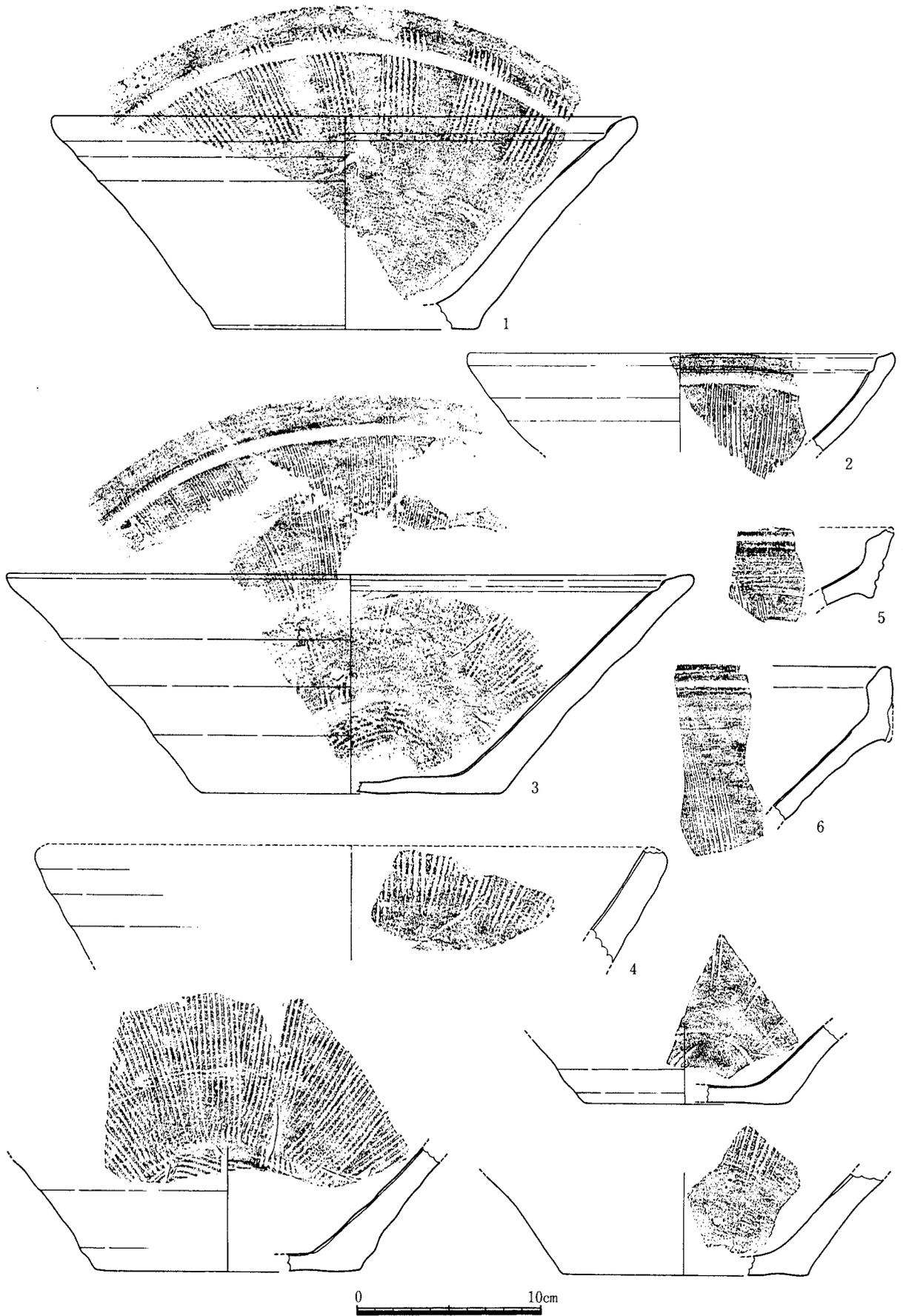


Fig. 306 白鳥堀調査区出土遺物 (播鉢) (1 / 3)

第3節 土器・土製品 (Fig. 307)

a) 土器 (Fig.307-1~20)

土器は土師器皿である。口径が10cm前後かそれ以下の小形品と、15cm前後の大型品に分けられる。小形品は、はっきりとした底面を持つものと、持たないものがある。いずれも見込みのナデはほとんどおこなわず、体部口縁部のナデを1回転することによって調整している。胎土には、白っぽいものと黄色いものがある。黄色の土師器皿には石英の微粒子僅かにみられ、白っぽいものでも混和は少ない。307-1や307-5は非常によく使い込まれているが、それ以外は灯明油痕を残すほど使われていない。307-12には焼成後の小孔がみられる。307-10底面には墨書があるが判読しがたい。307-8の底部にも墨書のような痕跡が観察できる。307-13の底面には、木目のような痕跡がみられ、板の上で底部から体部口縁へと作られたのであろうか、見込みに、底部と体部との境に指押さえの痕跡がある。

大型のもののうち、307-20は薄くそしてシャープに作られており、胎土もよく堅緻である。口縁端部は引き延ばされ、底部と体部との境に明瞭な溝がある。外面のナデは口縁部のみである。見込みは横方向になでを施し、体部はなでを止めて引き上げているようである。一見して、在地で作られたものではなく、いわゆる京都系土師器皿である。しかしよく見ると、海面骨片を含むことから、さ

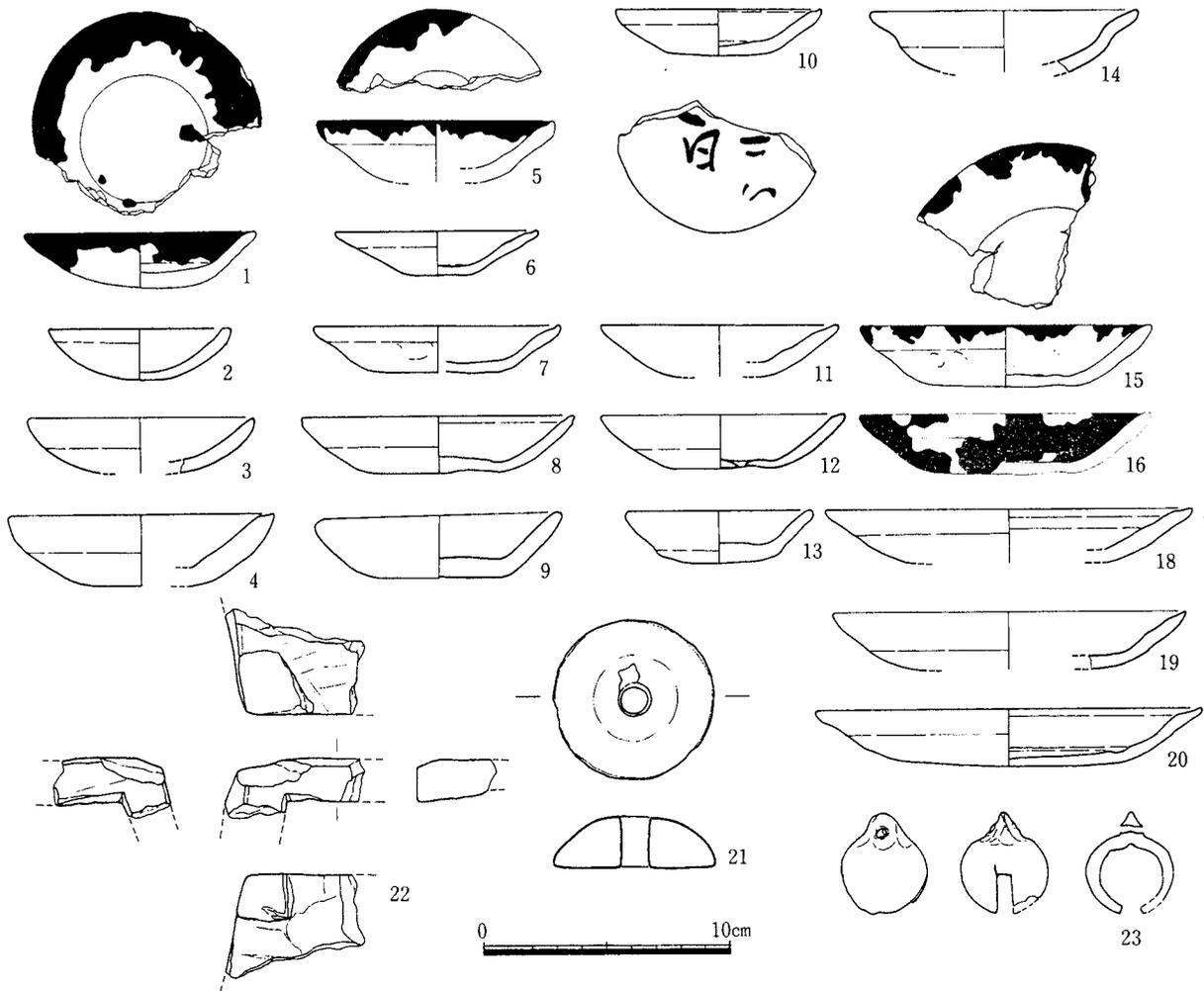


Fig. 307 白鳥堀調査区出土遺物 (土師器皿・土製品) (1/3)

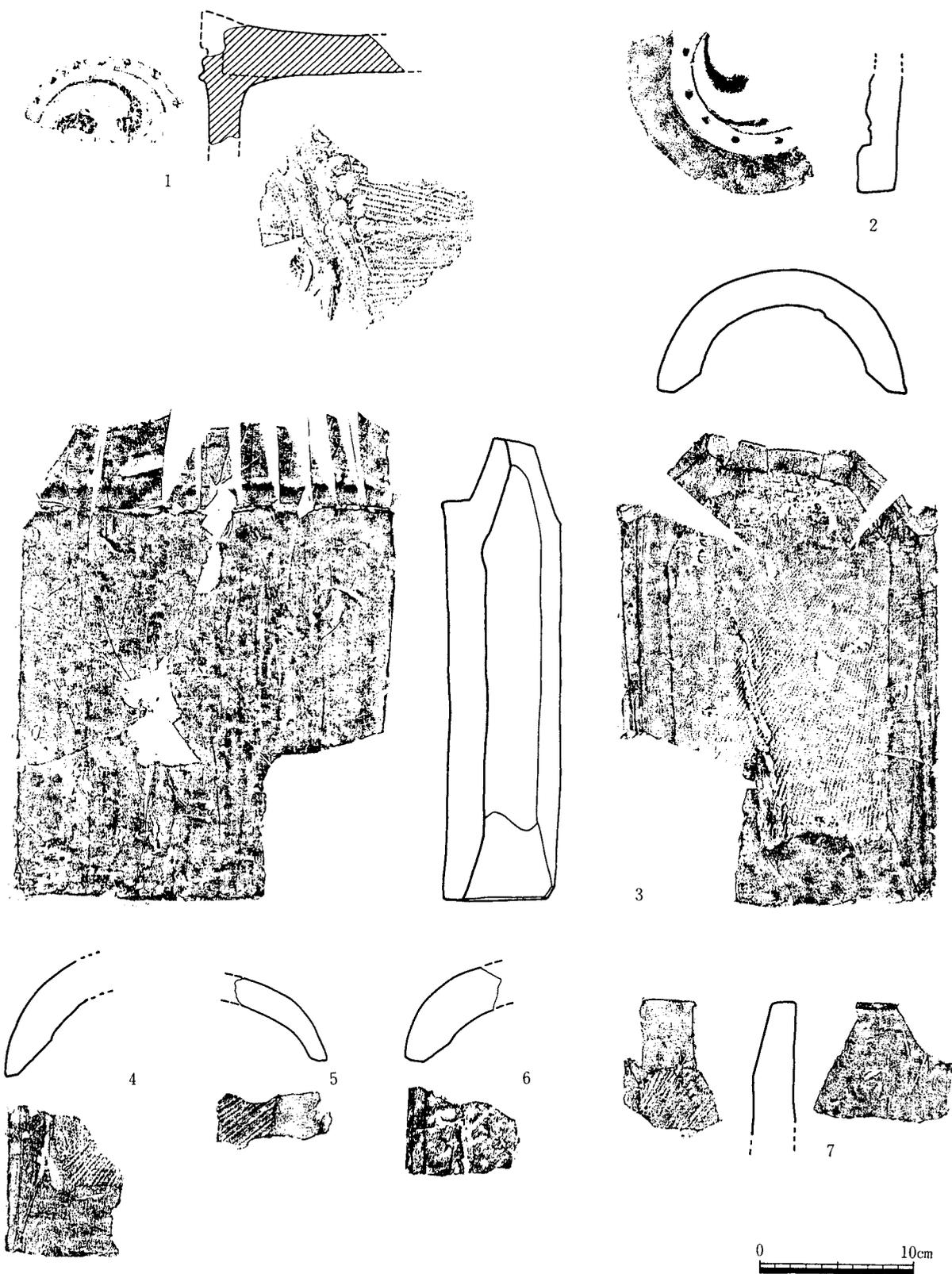


Fig. 308 白鳥堀調査区出土遺物 (瓦1)(1/4)

らなる検討を要する個体である。

b) 土製品 (Fig. 307—21 ~ 23)

307—21は紡錘車である。よく使い込まれたためか、底面が平滑になっている。二次的な熱を被っている。307—22はバンドコの上部コーナー部分である。307—23は土鈴である。鈴の大部分は型成形のようだが、紐でつり下げ部分内面に絞り痕がみられるので、空間に詰め物をして最後に粘土板で蓋をして作ったものと考えられる。鈴の窓は成形後に切り抜いている。

第4節 瓦類 (Fig. 308、309)

出土個体数はわからないが、出土個数では、軒丸瓦2片、丸瓦7片、平瓦6片で、軒平瓦は出土していない。非常に僅少である。いわゆるコビキA手法によって作られたものであり、この種の瓦は、上層の盛土の中からは見つかっていない。

308—1・2は丸瓦瓦当で、1の周縁が欠損している。いずれも面径15cm前後に復元できる。1が左巻の巴に対して、2が右巻きであるという違いがある。上層より出土した寛永頃の巴文の巻きの方向は、右巻きが圧倒的に主流であったが、本年代の資料はどうであろうか。資料数の増加に期待したい。1の内面に指頭痕を明瞭に残す。2表面には離型材としての雲母がみられる。これは、年代的に天正頃よりも新しいことを示している。胎土中に海面骨片がみられるので、在地で作られたもの

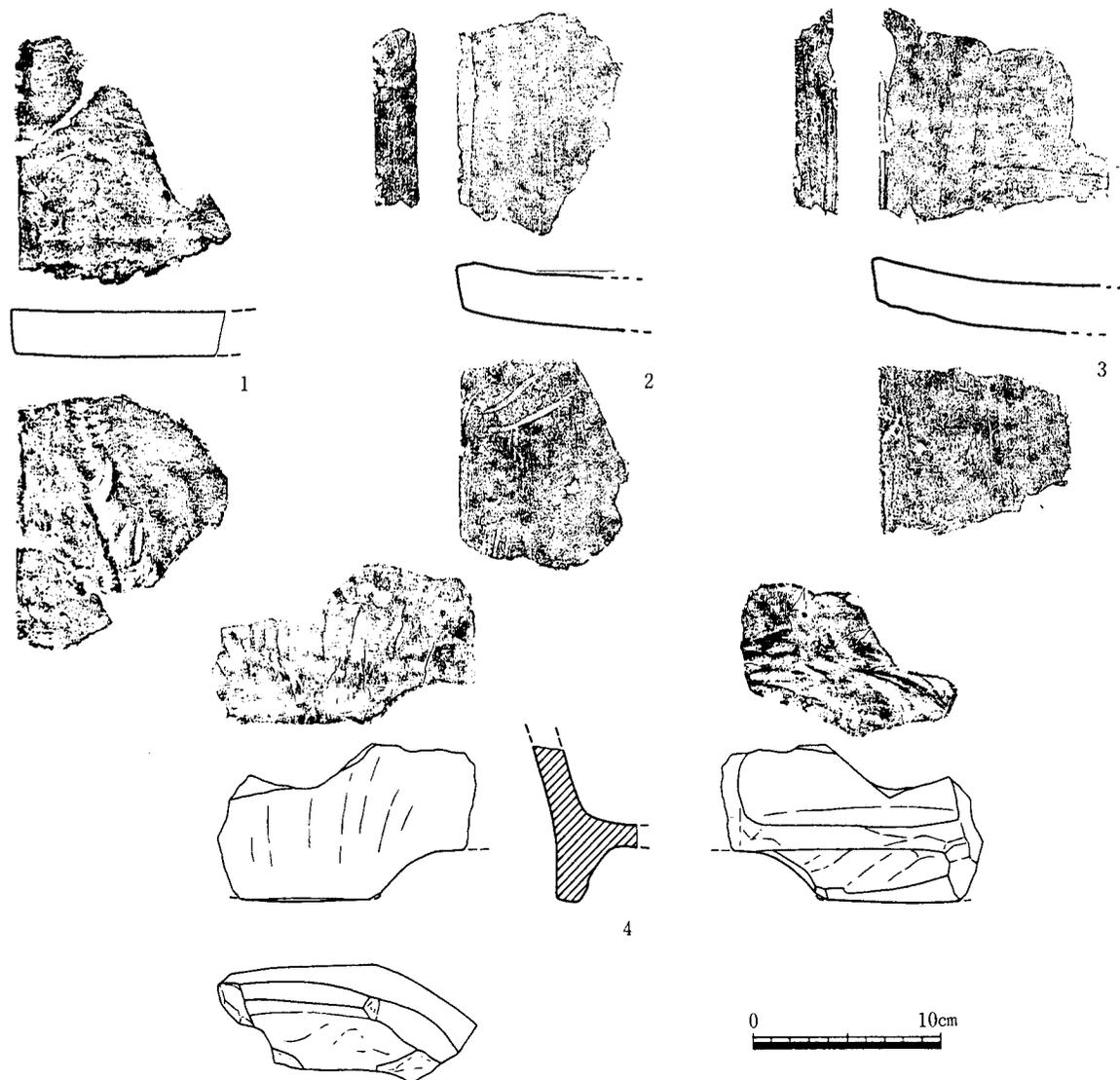


Fig. 309 白鳥堀調査区出土遺物 (瓦2)(1/4)

であることがわかる。

308-3~7は丸瓦で、3がほぼ完形である。全長30.3cm、幅16cmを測り、先の丸瓦とセットになる大きさである。内面にはコビキ痕が明瞭にみられ、布合わせの紐の痕跡もある。側縁は2回程度の面取りがおこなわれている。308-4・7は小口付近。309-1~3は平瓦である。平瓦は凹型台を使っているようで、凸面に砂を付着させている。凹面の側縁の面取りは2から3回である。なお、燻された器として、309-4がある。高台状の脚を持つが半円形になると思われる切り込みが入っている。外面はきれいに磨かれ、内面はなでられているものの、底面には荒いなどとなっている。型作りではないようである。

第5節 漆塗り製品

椀 (Fig. 310)

310-1、2は黒漆塗りである。1は高い高台で厚い底部、腰の張った体部である。2は直線的な体部で1と異なる器形である。3以降は赤漆を使って装飾した製品である。3は丸に三葉文を見込みと外面に二つ描いている。所有者の紋であろうか。外面ではこの文様の間に松葉を配する。見込みの文様は手抜きで描かれ、葉脈を表現していない。4と5はなにを描いているかよくわからない。ともに腰の張るタイプで、高い高台と厚い底部を持つ。6は内面赤漆、一般的な高台。8は内面赤漆、底面に二つの丸。9は薄い底部。このようにみえると、腰の張る体部を持つ椀は厚い底部を持ち、まっすぐ伸びる底部のばあいは薄い底部、というように分けられようか。310-7は、扇の図案であろうか、外面と見込みに描かれている。どれも同じデザインである。

皿・その他

311-1は大型の皿で、内面朱漆、底銘に「幸」だが、1本線が多い。2は内面に草文を描く皿。3は口縁が端反りの小形皿である。全面朱漆で、優品である。4は直線的な口縁の皿である。5は1と同じような皿の可能性が高い。6は外面朱漆、内面黒漆の円形合子身である。印籠蓋合わせになるように口縁部を作っている。底部はやや上げ底で、結果的に幅広い高台風となっている。

7・8は小形曲物底板である。内外面に黒漆が塗られている。いずれも側板が底板の上に乗るタイプである。9は半円形の筒状容器の底板である。側板は底板の上に乗るタイプで、目釘が底板から打ち込まれている。10は、隅がカットされて八角形を呈する折敷側板で、コーナーの組み合わせ部分である。コーナーの部材と側板は、互い違いに上下を切り取って組み合わせ、目釘によって二つの側板を固定している。底板とも目釘で固定する。11はコーナーを丸く仕上げる容器側板、曲物であろう。曲げるための切り込みがみられる。

12は曲物の中に、漆塗りの材料を入れたものである。柿下渋地や木炭が樹脂状に見えるが、非常に堅い。想定される厚みは2cmもあり、それを保存するために曲物に入れていたものである。詳細

番号	名称	法 量	出土位置	実測番号
1	漆器椀	器高6.5、高台高2.1	包含層	漆23
2	漆器椀	器高5.9	No.35	漆24
3	漆器椀	口径16.0、器高8.5、高台径7.2、高台高2.6	No.3	漆2
4	漆器椀	器高7.5、高台高0.8	No.30	漆17
5	漆器椀	器高5.7、高台高1.1	No.1	漆13
6	漆器椀	口径13.0、器高5.3	No.13	漆18
7	漆器椀	口径12.4、器高4.4	No.210	漆1
8	漆器椀高台	器高3.0	No.133	漆11
9	漆器椀高台	器高1.9	包含層	漆25

Tab. 6 白鳥堀調査区出土漆器属性表 (Fig. 310)

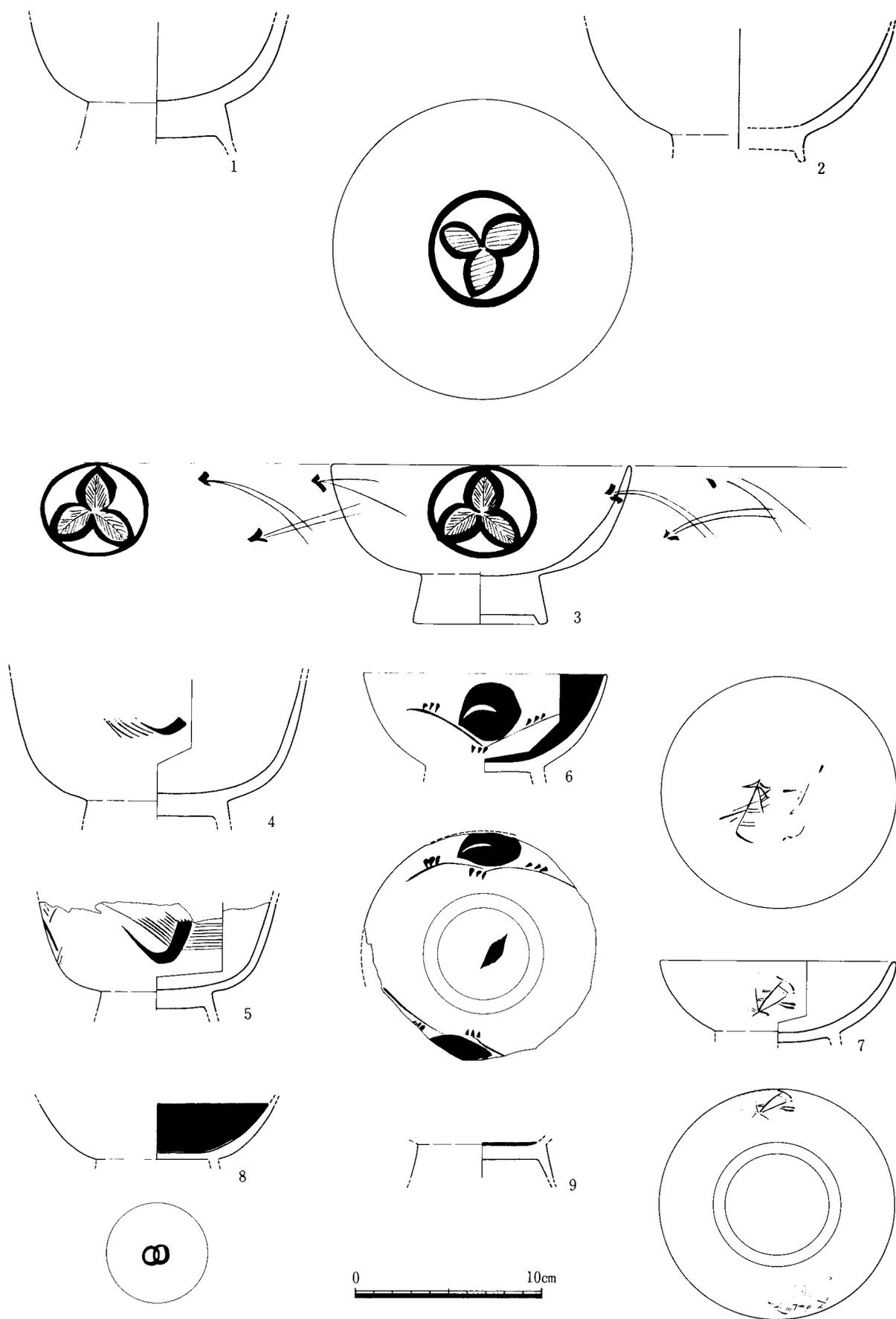


Fig. 310 白鳥堀調査区出土遺物 (漆器1) (1/3)

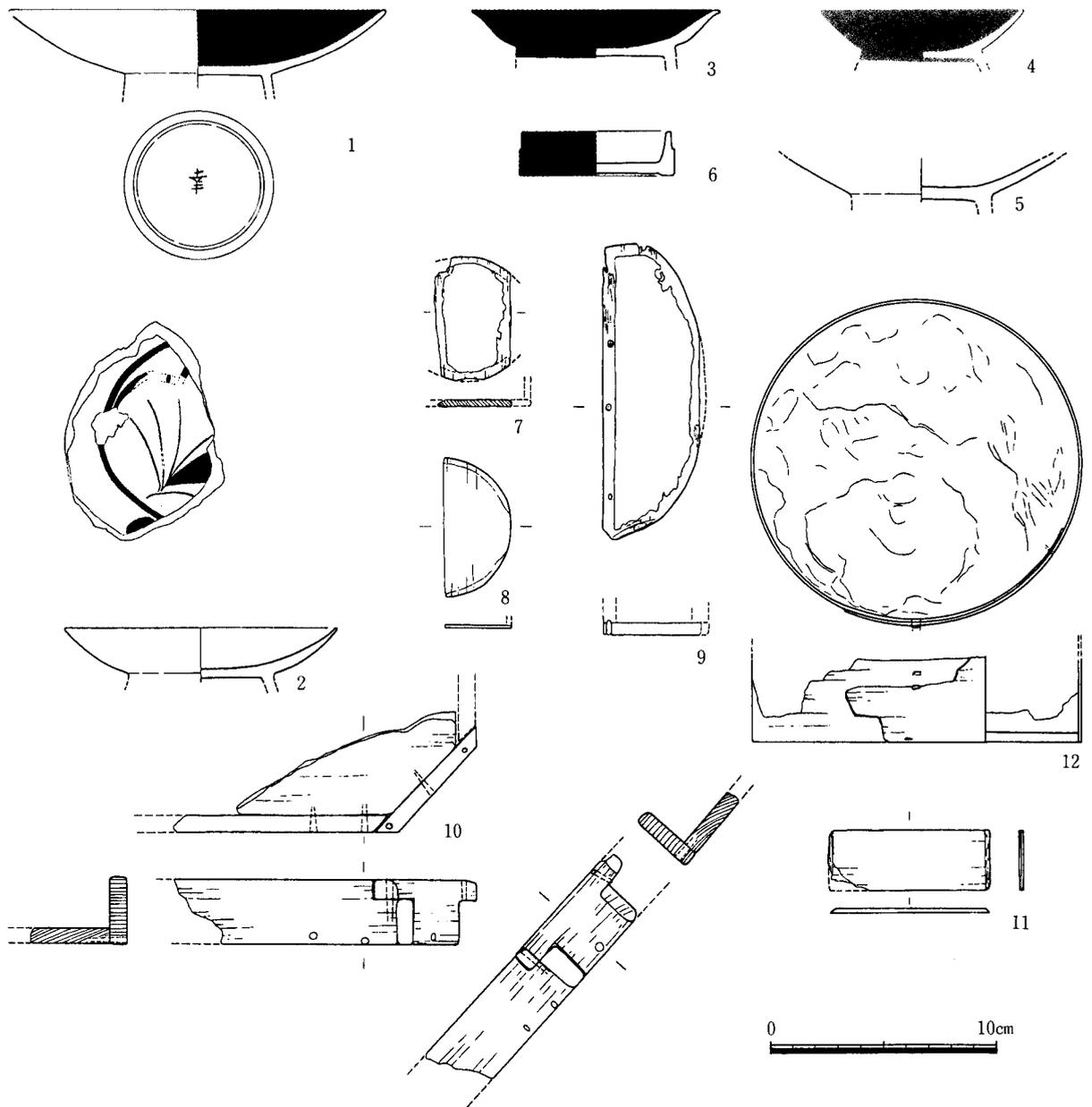


Fig. 311 白鳥堀調査区出土遺物 (漆器2)(1/3)

番号	名称	法量	出土位置	実測番号
1	漆器皿	口径16.7、器高3.5、高台高0.6、高台径6.7	No.14	漆15
2	漆器皿	口径12.1、器高2.5、高台高0.3、高台径6.5	SX03東	漆12
3	漆器皿	口径11.1、器高2.1、高台高0.5、高台径7.2	No.212	漆16
4	漆器皿	口径8.9、器高2.4、高台高0.3、高台径5.6	No.16	漆20
5	漆器皿	器高1.9	No.201	漆30
6	漆器合子身	口径6.7、器高2.0、底径7.0、高台幅0.6、推定蓋径7.0	No.8	漆26
7	漆器底板	径5.6、厚さ0.3	包含層	漆19
8	漆器底板	径6.2	SX03東	187
9	漆器椀高台	器高1.9	包含層	漆25
10	漆器八角		包含層	漆27
11	漆器曲森	長さ7.0、幅2.7、厚さ0.2	No.145	漆29
12	曲物	径14.6、高さ3.7	No.141	漆3

Tab. 7 白鳥堀調査区出土漆器属性表 (Fig. 311)

は、第6章参照。

第6節 木製品

下駄 (Fig. 312~ 314)

1木から作られたもの(連歯下駄、無歯下駄)と、本体と歯を組み合わせたもの(差歯下駄)の2種類が出土している。個体数的には、差歯下駄の方が多い。無歯下駄の資料のうち、実測可能な個体は全て実測をおこなった。

312-1・2が無歯下駄である。312-1がヒノキから作られ、前緒穴のみである。312-2はアスナロ材である。ただし、他の下駄と違って、木取りが異なることから、下駄でない可能性もある。312-3以降は連歯下駄である。312-7例中4例がマツ材から作られているという特徴がある。なお、312-4はアカマツ材から作られた露地下駄で、前歯が本体前端にコの字状につくものである。後歯の痕跡は、後緒穴よりも後ろで、本体後ろ端に直線的につくようである。これは、連歯下駄の一特徴をよく示している。

312-3・5・8・9は、後ろ端が後歯と一体となって直線的な形である。前緒穴は、下駄の中軸よりもややどちらかにずれている。312-5・9がネズコで作られている他は、マツから作られている。312-8・9のサイズが小さいので、子供用かと思われる。312-6・7は後ろ端が後歯よりも伸びる、今日の下駄の形状に近い。周囲が丸く作られているのは、他の連歯下駄の特徴と同じである。6がマツ、7がコシアブラ材から作られ、これらも子供用のサイズである。

差歯下駄は概ね同じ形状で、同じような材料で作られている。本体がブナ、歯の部分がアスナロが多く、ブナ、モクレン、ハコヤナギがある。本体は、長方形でコーナーが丸く仕上げられているが、前よりも後ろの方が丸く仕上げられている。本体下面は、舟底形に作られているが、面を持つように削り出されている。前緒穴は真下に開けられているが、後緒穴は内側を向くように開けられている。314-4は、後緒穴の中間下側に方形のくり込み穴を掘りこみ、そこに緒穴を通してある。方形のくり込み穴で、鼻緒を結ぶのであろう。差歯は、本体に溝をきいてそこにほぞ結合させている。未使用のもの(313-5)では、本体と連結する部分より下のほうが厚い作りとなっている。歯の平面形は真四角であるが、使用されたものをみると、片減りしているものが多い。このタイプの下駄には、子供用の出土はない。

差歯下駄本体の全形がわかるもののうち、全長21cm前後にはほぼ収まる大きさである。最小で313-2の19.9cm、最大のもので313-4で21.6cmであり、ほとんど同大といって差し支えない。当時の規格を示すものであり、7寸を目安に作られたものであろう。このような目で無歯下駄を観察すると、312-4の露地下駄が20.9cmで作られている他は、やや短く18cm前後に作られていると思われ、6寸を目安に作られていることがわかる。ともに大人用と考えられるので、この違いがはき方の違いによるのもであると考えられる。

工具柄 (Fig. 315-0~5)

315-4のように、基部に一条の溝をめぐらすものもあるが、多くには細工を施していない。ヒサカキ、アカマツ、クロマツ、クリ、マンサク、と樹種は多様である。全て心持ち材を使用している。315-0は幅12cmで、柄を差しこむ穴は浅く錘状をしている。未使用のものかもしれない。315-3の工具穴は反対側まで抜けており、破損品であろう。315-5の柄は、工具柄にしては細長く、ヤリカンナのような工具がつくと考えられる。

小柄柄 (Fig. 315-6, 7)

6は中に小柄基部を残している。ヒノキ材の柄は茎の両側から樹脂で張り合わされ、紐などで固定されたのであろうか。接着剤や紐の痕跡を見つけることはできなかった。柄は、握りやすいように握り部をやや狭めている。鞘口部分は、一段低くなって、漆で塗られた紐で巻かれた痕跡がみられる。はばきまで連続して作られている。7はモクレン属の樹木から作られ、差し込めるような削り込みがみられる。その反対側には細い溝が施され、固定する紐をまわすのであろうか。切出し刀のような工

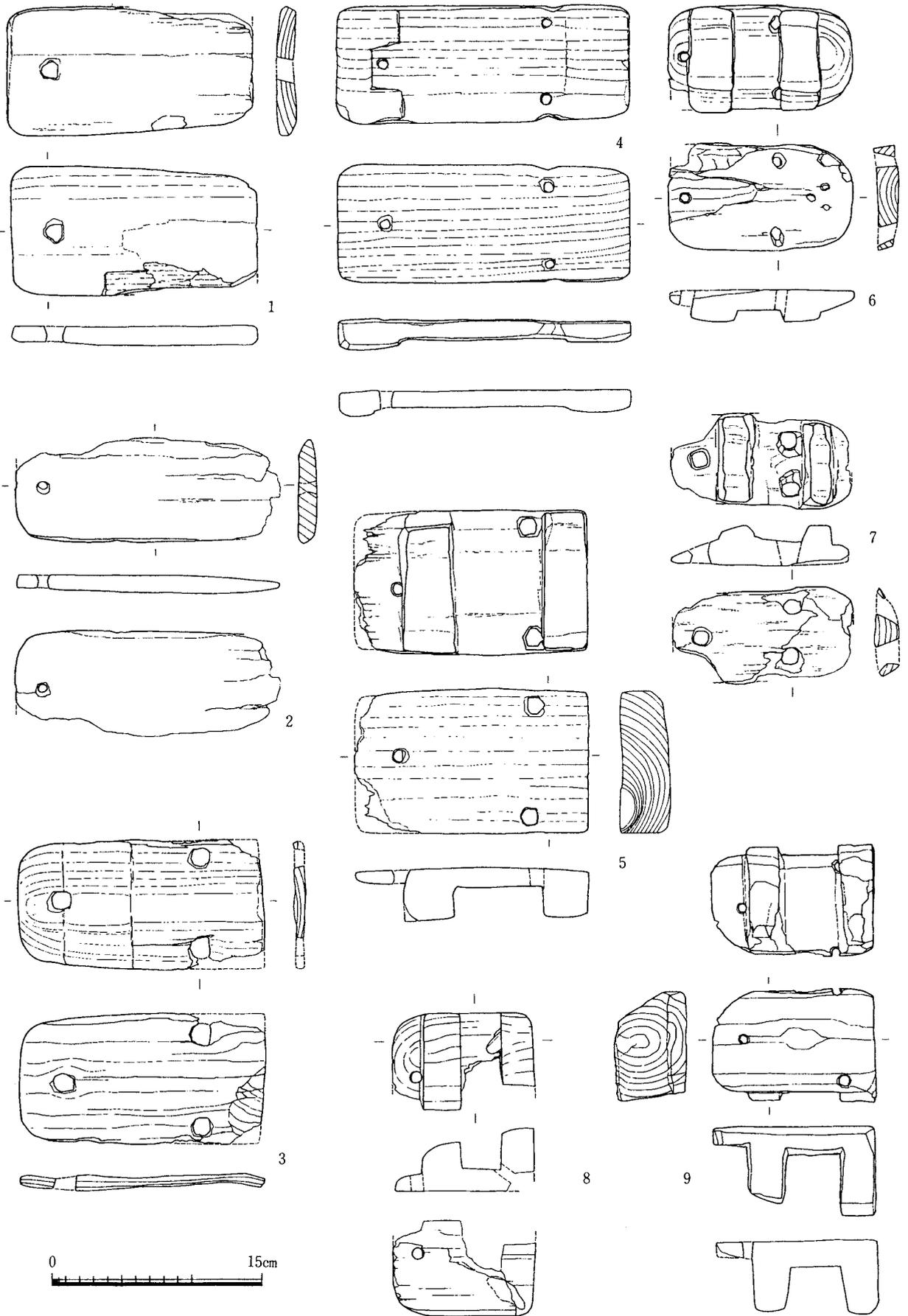


Fig. 312 白鳥堀調査区出土遺物 (下駄1)(1/4)

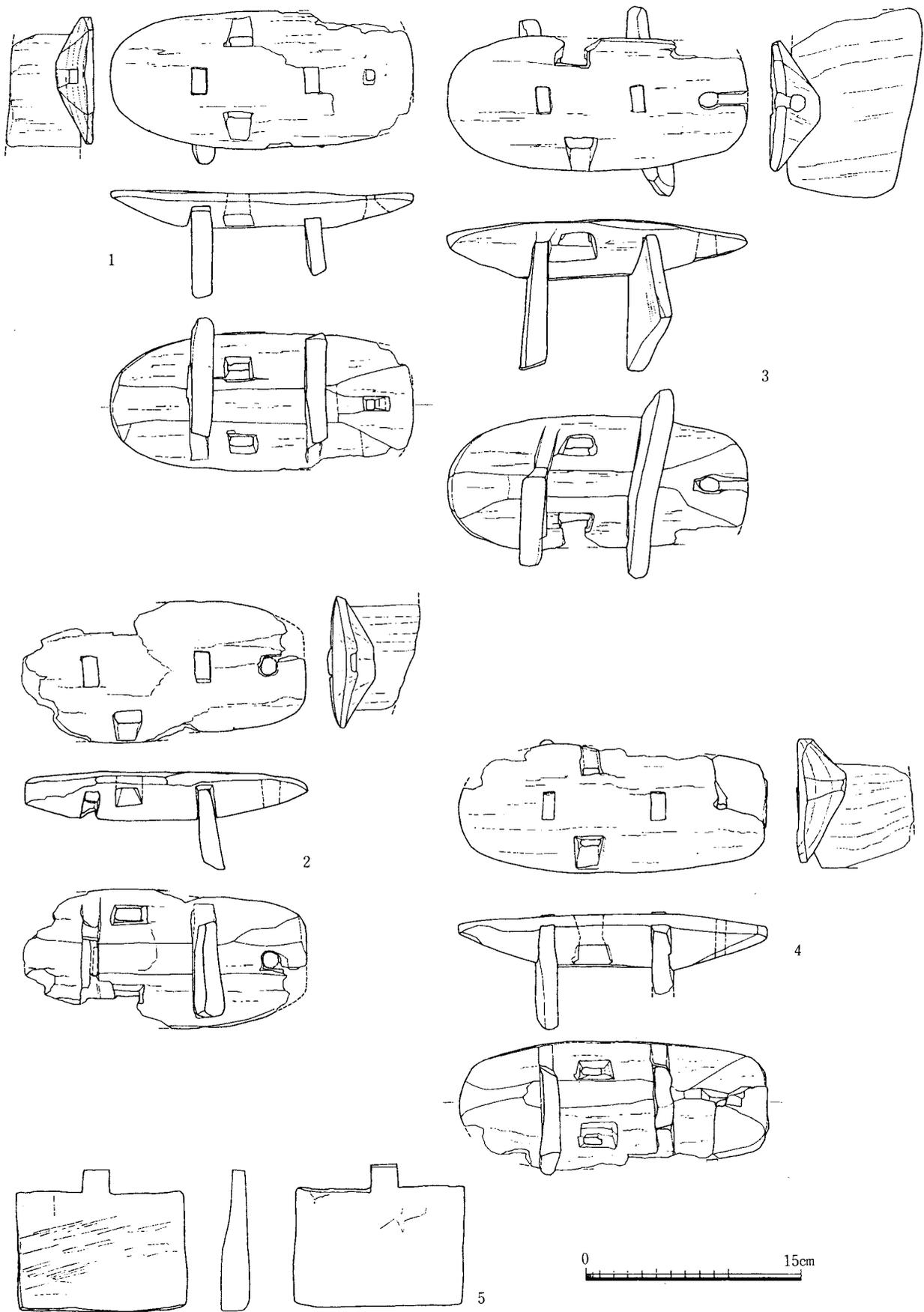


Fig. 313 白鳥堀調査区出土遺物 (下駄2)(1/4)

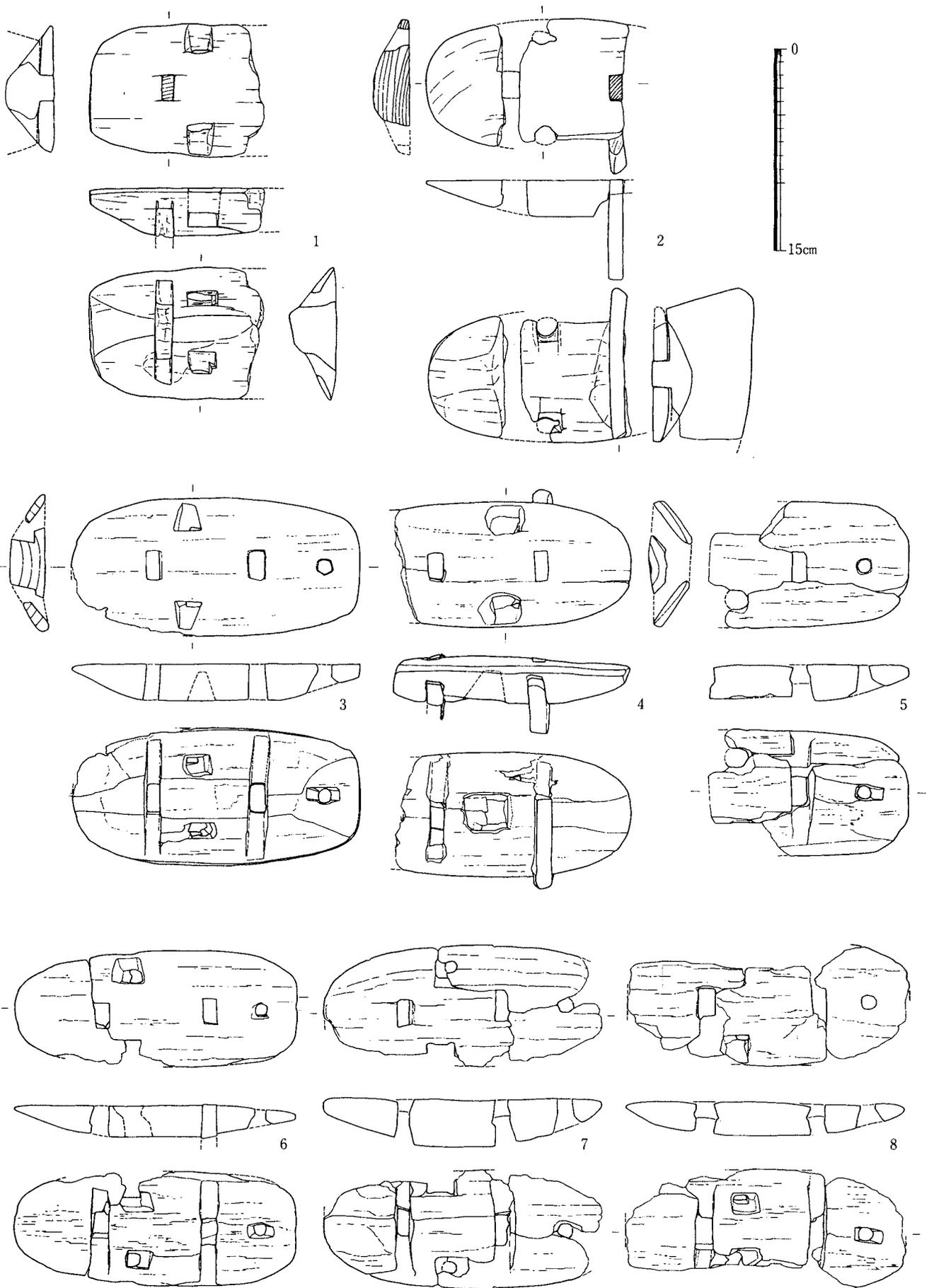


Fig. 314 白鳥堀調査区出土遺物 (下駄) (1 / 4)

番号	名称	法量	取上番号	実測番号	樹種
1	無歯下駄	長さ17.5、最大幅9.3、厚さ1.4	No.20	154	ヒノキ
2	無歯下駄	長さ18.9、幅8.5、厚さ1.3	包含層	150	アスナロ
3	無歯下駄	長さ17.5、幅9.3、厚さ1.1、緒穴径1.2	No.12	151	マツ属
4	露地下駄	長さ20.9、幅8.3、厚さ1.2、緒穴径0.8、歯高2.2		147	アカマツ
5	連歯下駄	長さ16.8、幅10.3、厚さ1.4、緒穴径1.1、歯幅3.5、歯高3.7	No.5	145	クリ
6	連歯下駄	長さ13.1、幅7.5、厚さ1.5、緒穴径0.6、歯幅2.8~3.2、歯高2.3	No.94	152	マツ属
7	連歯下駄	長さ12.8、幅6.5、厚さ1.9、緒穴径1.1、歯幅2.5、歯高2.9	No.33	155	コシアブラ
8	連歯下駄	長さ10.2、幅6.9、厚さ1.7、緒穴径0.9、歯幅2.3~3.0、歯高4.5	No.28	200	マツ属
9	連歯下駄	長さ11.5、幅7.2、厚さ1.8、緒穴径0.7、歯幅2.3~3.0	No.90	146	ネズコ

Tab. 8 白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 312)

番号	名称	法量	取上番号	実測番号	樹種
1	差歯下駄	長さ21.2、台幅9.8、厚さ2.5、前緒穴0.6、歯幅8.0、歯高6.2	No.164	144	本体：トネノコ属 歯：ブナ属
2	差歯下駄	長さ19.9、台幅9.7、厚さ3.3、前緒穴1.0	包含層	157	本体：ブナ属 歯：ハコヤナギ属
3	差歯下駄	長さ21.0、台幅9.4、厚さ4.2、前緒穴1.0	No.156	143	本体：ブナ属 歯：ブナ属、モクレン属
4	差歯下駄	長さ21.6、台幅9.0、厚さ3.7、前緒穴0.6	No.203	153	本体：ブナ属 歯：ブナ属
5	差歯	長さ10.0、幅12.0、厚さ1.0~2.0	No.62	159	アスナロ

Tab. 9 白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 313)

番号	名称	法量	取上番号	実測番号	樹種
1	差歯下駄	長さ12.9、台幅9.8、厚さ3.5	No.199	197	本体：ブナ属 歯：ブナ属
2	差歯下駄	長さ14.7、台幅9.0、厚さ2.7、歯幅11.1、歯高6.5	No.137	148	本体：ブナ属 歯：ブナ属
3	差歯下駄	長さ21.4、台幅10.2、厚さ2.7	No.91	158	ブナ属
4	差歯下駄	長さ17.7、台幅9.2、厚さ3.5	No.137	148	本体：ブナ属 歯：ブナ属、マツ属
5	差歯下駄	長さ14.7、台幅9.3、厚さ2.7	SX06	156	ブナ属
6	差歯下駄	長さ20.9、台幅8.7、厚さ2.3	No.29	160	ブナ属
7	差歯下駄	長さ20.7、台幅8.9、厚さ3.5	No.150	162	本体：ブナ属 歯：アスナロ
8	差歯下駄	長さ20.5、台幅7.3、厚さ2.5	拡張区	198	ブナ属

Tab. 10 白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 314)

具柄の可能性もある。

へら (Fig. 315 - 8・9)

8はサワラ材から作られたシャモジである。柄部先端背側は丸く面取りされている。柄先端から2 cm程内側に、紐つり下げ用の穴がある。9は扁平な板材で先端がとがっていることからへらとした。作りは荒く切削痕を明瞭に残すが、内外面を意識して削りだしている。マツ材である。

栓 (Fig. 315 - 14・15)

14がアスナロ材、15がコナラ節の樹木から作られている。14の先端は鋭利に尖って、細長い円錐形を呈する。よく見ると先端は再度尖らせており、補修であろうか。基部には、茎2 mm位の小孔が開けられ、紐を通す目的であろう。15は樽栓のような太い作りで、片側は幅3 cmで少しえぐられ、もう片側は削り出されている。14が板目材、15が心持ち材と違うのは、木材の性質の違いであろうか。

楔 (Fig. 315 - 11・12)

三角形の楔状を呈する。11・12ともクリ材から作られている。11の残りがよく上面に楔で固定した時の圧痕が残っている。

櫛 (Fig. 315 - 16・17)

16がネジキ材、17がツツジ属の樹木から作られている。材は違うが、同じ作りである。すなわち山形の背を持つ横櫛に、細い目の梳き櫛である。17の先端部が摩耗して基部のみになっているのは、使い込まれたと同時に、何らかの目的で歯の部分を削りこんだものである。

金隠し状木製品 (Fig. 315 - 18)

18でクリ材から作られている。長さ23cm、幅21cmを測り、頭部は隅を丸く仕上げ、両側はまっすぐ下に降り、13cm降りた下半両側で内側に2 cmの段を設けて切り取った形状である。切り取り部分には、鋸の痕跡がある。また、横に目釘が2ヶ所にみられ、板を横に差し渡して固定したものである。さらに、下から3 cmの所にも2本釘が内側に向くように打ち込まれている。この製品が、便所の金隠しかどうかかわからないが、一乗谷出土の金隠しに近い形をしていることから、連想し命名した。

箸 (Fig. 315 - 20, 27)

20~27である。ネズコやアスナロ、ヒノキ、センダンなどの多様な材などで作られている。一方を扁平に作っているものもある。出土点数は、これ以外に数点の出土のみで、他の木製品量に比べて意外と出土量は少ない。

組み合わせ部材・竹 (Fig. 315 - 13, 19)

13は11.5cmを測るスギ材である。一長側面に1 cm強の段を設けて目釘穴を開けている。おそらく、同じような部品が段の部分にきて目釘で固定するものであろう。19はヤマウルシ材から作られたもので、吊り下げる鉤のようなものであろうか。長さの違うV字形を呈し、二股に分かれる枝部分を利用して作られている。長い方の枝には段を作った頭部が作られ、穴が上から下まで貫通している。底面は直に切られ、そこに別の部材を合わせることができるようになっている。もう一方の枝には、途中まで穴が掘られている。用途が何かよくわからないと同時に、組み合わせの全形が何であるかわからない。

挽物 (Fig. 316 - 1)

椀である。挽き物のろくろ目が荒く残っている。完全に炭化している。意図的であろうか。

蓋 (Fig. 316 - 2)

ヒノキ材から作られた木蓋の把手である。低い山形を呈し、両端に全部貫く穴が開けられ、中間に二つの穴があるが、貫いてはいない。後者の穴は失敗したものであろうか。

箱指物 (Fig. 316 - 3・4)

3は四角の隅が切られた、八角形を呈する折敷である。同類品が漆塗り製品でも出土し(277-10)、本例もおそらく漆が塗られていた可能性がある。作り方は、漆塗り製品と全く同じで、小口両端の上下一方の半分を切り、隣の部材と組み合わせて目釘で固定する。底部とは、目釘で横から3 cm間隔

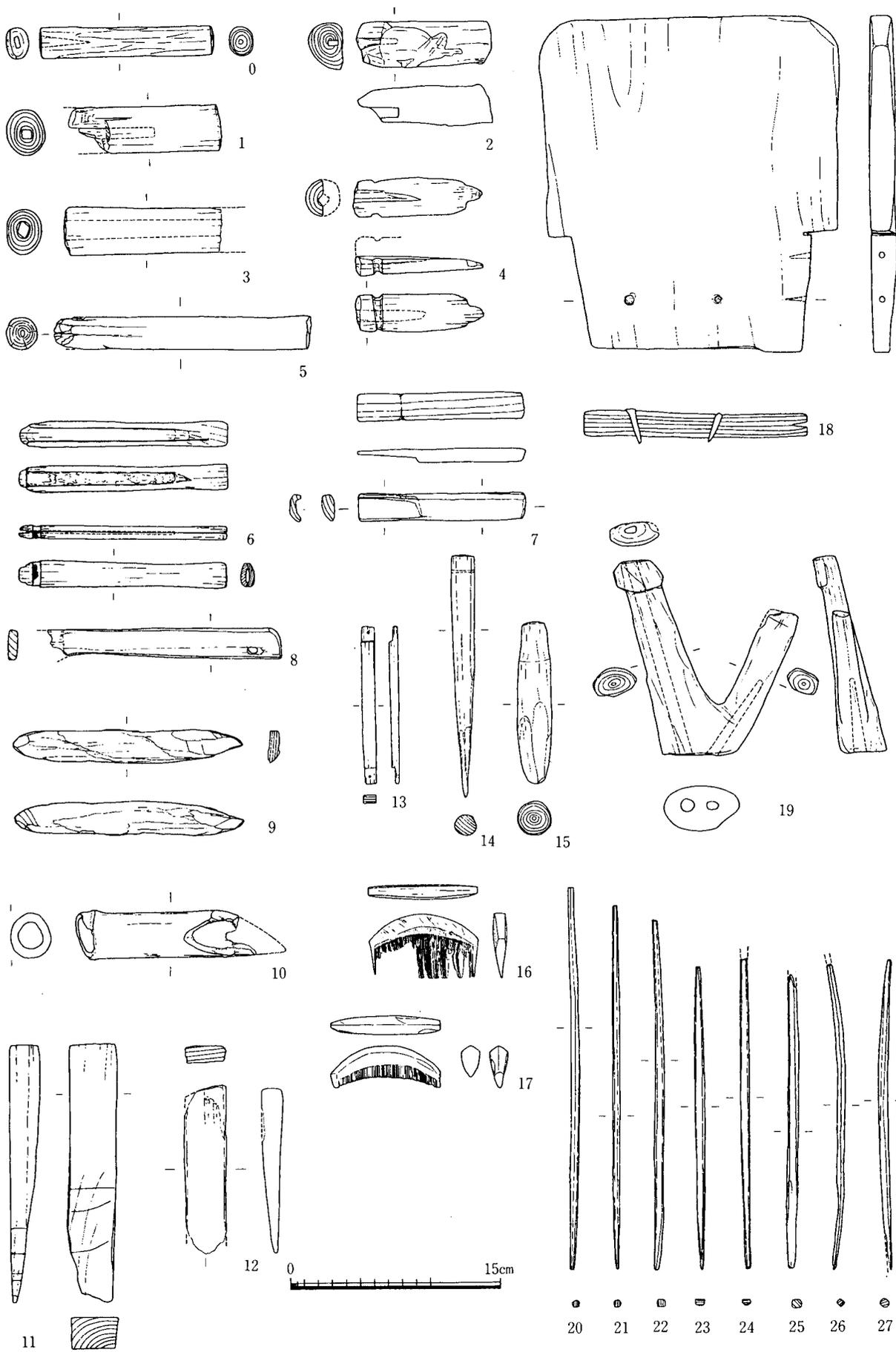


Fig. 315 白鳥堀調査区出土遺物 (工具等) (1 / 4)

番号	名称	法量	出土位置	実測番号	樹種
0	工具柄	長さ12.3、幅2.1、厚さ1.6	包含層	260	アカマツ
1	工具柄	長さ10.9、幅3.3	SX03周辺	241	クリ
2	工具柄	長さ9.6、幅3.4	SX03	245	ヒサカキ
3	工具柄	長さ11.2、幅3.4、厚さ2.5	SX03下	242	クロマツ
4	工具柄	長さ9.3、幅2.7	SX03下	193	マンサク
5	柄	長さ18.3、幅2.4	SE01東	263	クリ
6	小柄柄	長さ14.8、幅1.8、厚さ0.9	No169	251	ヒノキ
7	柄	長さ12.0、幅1.9、厚さ0.9	SX03	284	モクレン属
8	杓子	長さ16.4、幅2.2、厚さ0.7	包含層	266	サワラ
9	へら	長さ16.4、幅2.3、厚さ0.8	SX03東	261	マツ属
10	竹筒	長さ12.7、径3.2	柱穴	285	タケ
11	楔	長さ18.5、幅3.4、厚さ2.2	SX02中央	259	クリ
12	楔	長さ11.8、幅3.0、厚さ1.2	SX03東	276	クリ
13	組合せ部材	長さ11.3、幅0.9、厚さ0.6、段長1.1	SX01	255	スギ
14	栓	長さ17.4、幅1.7、孔径0.3	No68	192	アスナロ
15	栓	長さ11.5、幅2.4	No76	256	コナラ節
16	横櫛	幅7.7、高さ4.6、背厚さ1.0、歯長さ2.2~3.2	No34	140	ネジキ
17	横櫛	幅7.8、高さ3.0、背厚さ1.3	包含層	246	ツツジ属
18	金隠し状木器	長さ23.6、幅21.1、下端幅14.8、厚さ1.8	No205	252	クリ
19	鉤状木器	長さ14.4、11.0、下端幅5.3、3.2、穴径0.9、0.6	包含層	247	ヤマウルシ
20	箸	長さ27.3、幅0.6	No130	203	ネズコ
21	箸	長さ26.0、幅0.5	SD01	204	ネズコ
22	箸	長さ25.0、幅0.6	No126	205	アスナロ
23	箸	長さ21.7、幅0.7	第2面	202	ネズコ
24	箸	長さ22.1、幅0.6	SX01炉下	201	ネズコ
25	箸	長さ21.0、幅0.7	SE01北	207	ヒノキ
26	箸	長さ21.9、幅0.6	SE01北	206	アスナロ
27	箸	長さ22.2、幅0.7	SX02	208	センダン

Tab. 11 白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 315)

で打ち込んで固定している。4は重箱のような物である。長方形の板材の底部に、下から目釘を打って固定している。隣の側板との接合方法はよくわからないので、重箱でない可能性もあろう。

曲物 (1) (Fig. 316—5・6)

曲物でも、直線的な側面を持つ物をここで取り上げる。5は隅を丸く仕上げる曲物である。側面は直線的に、隅に切り込みを入れて丸く仕上げている。底板とは目釘を下から打ち込んでいるほか、スクラ皮を巻き付けて緊結しているようである。6は幅広い物で、6.5cmの高さがある。5と同じように、コーナー部分に切り込みを入れて丸くしている。本例は、綴じ合わせ部分である。底板とは、目釘で固定している。

桶 (Fig. 316—7~10)

ヒノキ材が多用されている。10のみネズコ材である。7内面には底板の痕跡が残されている。底面内側は平坦である。8は口縁部周辺。9は遺存状況が悪く内面に残される底板の観察はできない。

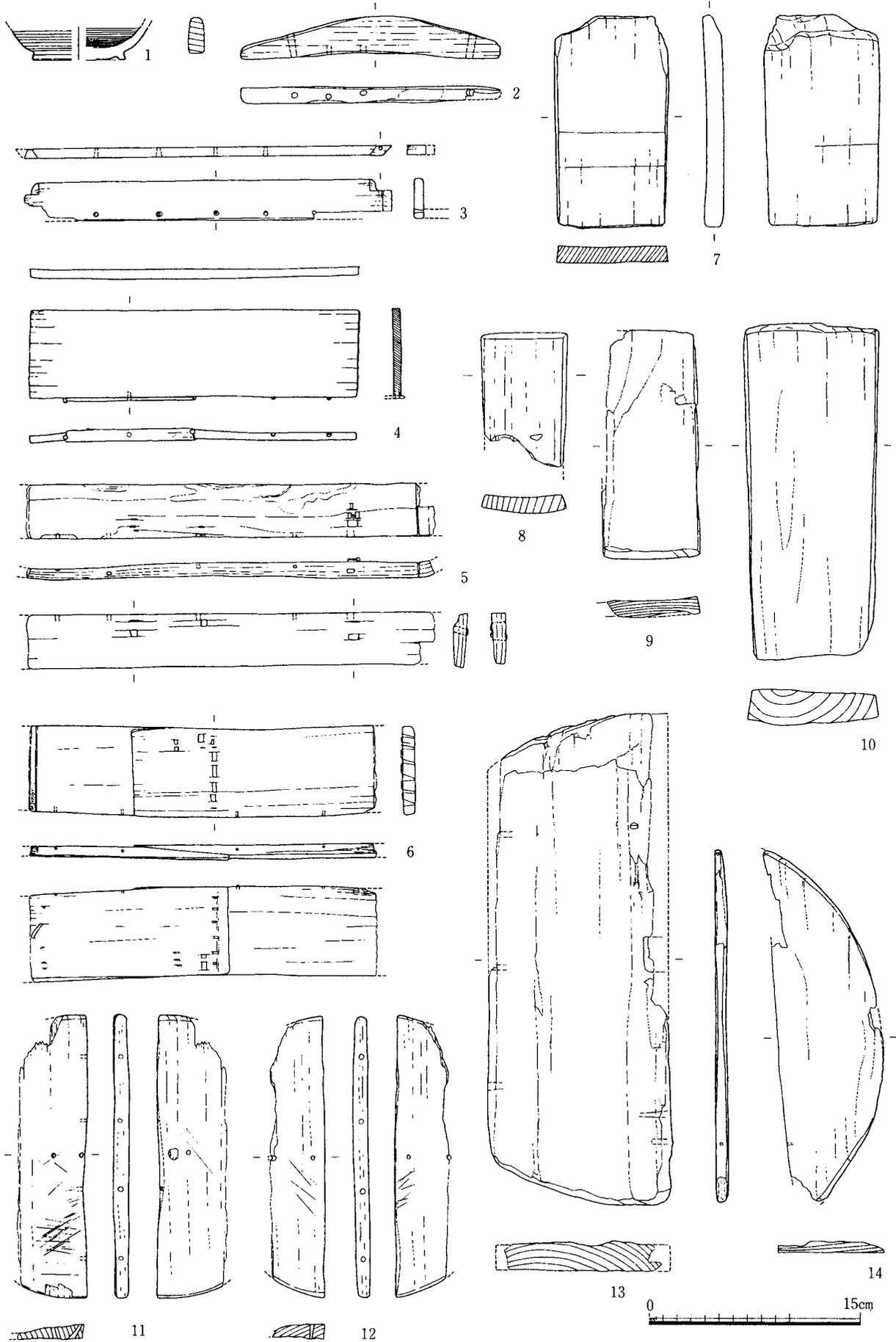


Fig. 316 白鳥堀調査区出土遺物 (容器1)(1/4)

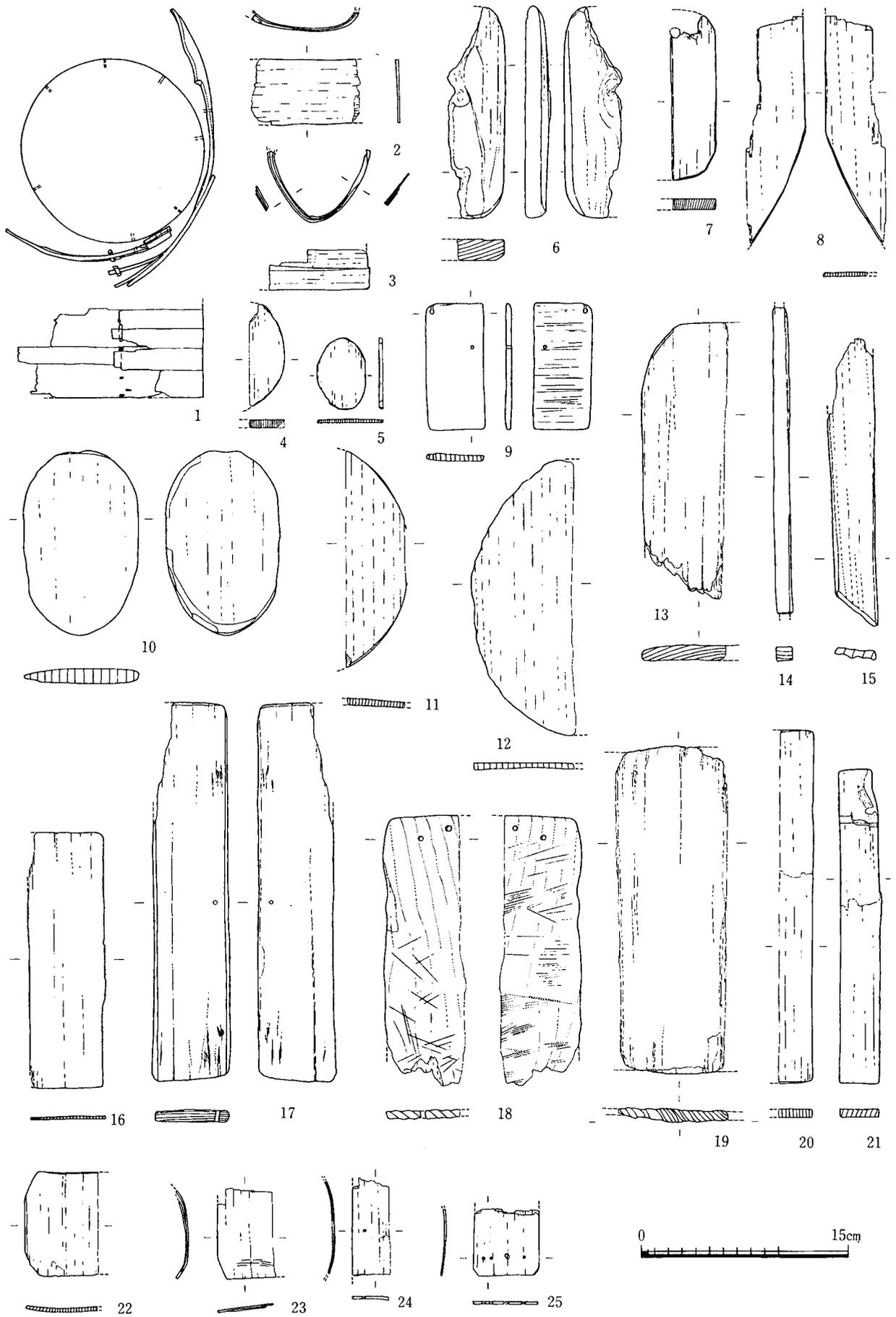


Fig. 317 白鳥堀調査区出土遺物 (容器2、板材その他) (1/4)

桶・樽の底板 (Fig. 316—11・12)

316—11・12は同一個体である。ネズコ材。4本の目釘によって二つからなる底板部材を固定している。13は大きな樽の底板である。スギ材である。左右の側面に目釘があるので、4枚で構成された底板であることがわかる。14はアカマツ材である。目釘の痕跡を1つのみ確認できた。3枚で構成された底板であろうか。

曲物 (2) (Fig. 317—1~3)

317—1は残りのよい曲物である。底板とは、7箇所の目釘で固定されている。2は小形の曲物と思われ、カーブが強い。22~25は幅の狭いへぎ板で、隅をカットしている。へぎ板は、木目方向で割れると、生きているか死んでいるのか判別しがたく、特に、1のような曲物へぎ板の幅を確認しがたい。

底板・板材 (Fig. 317—4~25, Fig. 318—1~8)

曲物の底板をはじめ各種の底板と思われる物を一括した。317—4・5は曲物の底板で、小さな物である。ヒノキ材である。317—6はブナ材側面が直線でコーナーが丸い形状である。底板としては厚いので、果たして底板として機能するかどうか。317—7はサワラ材で、317—6と同じような形状である。一端に穴が開けられている。317—8は円周に仕上げられているようだが、カットの関係で直線的に仕上げられている。317—9は方形である。穴が開けられているが、緊結のためかよくわからない。317—10は周縁が荒く仕上げられており、小判形である。これはケヤキ材。317—11と12は曲物底板であろう。固定の釘などは見られない。317—13は隅が丸い四角形の底板である。317—15は側縁が斜めに切られた部材である。317—17はアスナロから作られた短冊形の板で側縁中心に穴が開けられ、補修孔かもしれない。柁目材で厚い幅である。317—18は図上の上に二つの孔が並んだ、隅丸のスギ板材である。317—19は両側縁が破損している。317—20、21は細長い板材である。317—22~25はヒノキのへぎ板である。22の隅は斜めにカットされている。

318—1の上側縁が山形を呈する。一方面には、小孔が二個ある。318—2には小さな長方形の穴が開けられている。318—3は隅がカットされた四角形を呈すると思われ、中心に方形の穴が開けられているが、四角の軸が4周と45度ずれている。318—5はヒノキ材で箱指物の底であろうか。318—7の一短辺が互い違いに切り込まれた物で、穴が一つある。318—8は方形の切り込みが入った材

番号	名称	法 量	出土位置	実測番号	樹 種
2	蓋把手	長さ18.7、高さ2.9、幅1.1	包含層	186	ヒノキ
3	折敷椀	長さ26.4、幅2.9、厚さ0.7	包含層	264	ヒノキ
4	側板	長さ23.6、幅6.3、厚さ0.6、底板厚さ0.2	No.200	262	ヒノキ
5	曲物木椀	長さ29.2、幅3.7、厚さ1.0	SX03	184	スギ
6	曲物木椀	長さ24.9、幅6.3、厚さ0.8	SX04	185	ヒノキ
7	桶側板	長さ15.1、幅8.3、厚さ1.2	SX05	195	ヒノキ
8	桶側板	長さ9.5、幅6.1、厚さ1.1	SE01	196	ヒノキ
9	桶側板	長さ16.5、幅6.9、厚さ1.2	包含層	274	ヒノキ
10	桶側板	長さ24.0、幅9.4、厚さ2.5	SD01	254	ネズコ
11	底板	長さ20.5、厚さ1.1	No.121	269	ネズコ
13	樽底板	長さ33.5、29.5、幅13.0、厚さ2.1	拡張区	253	スギ
14	底板	長さ25.5、幅7.4、厚さ0.9	No.107	189	アカマツ

Tab. 12 白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 316)

である。組み合わせる物であろう。

建築部材

318-9はマツ材である。いびつな方形を呈し、狭い方の辺が斜めに仕上げられている。組み合わせの加工や釘の痕跡、穴などはみられない。はめ込まれた物であろう。318-10は一辺が直角の台形を呈する。斜面と上側面は斜めに仕上げられ、釘が打ち込まれているが、互い違いに打ち込まれている。318-11は10と同じように、一辺が斜めに切られた部材のようであるが、鋭角部分が欠損している。釘が1本打ち込まれている。318-12は端に面を持ち切り込みがある部材である。心持ち材なので、柱あるいは梁関係であろうか。318-13には釘が打ち込まれている。釘による緊結が解かれた後、残された釘を叩いて折り曲げている。下端は斧のような工具で切断されている。318-15には鉄釘が打ち込まれている。318-14には釘が抜かれた痕跡がある。318-17は柱材であろうか。下端を斧のようなもので切断している。18も柱材と思われるが丸木の半裁で、両端が切断されている。

319-1の両端の側面方向から穴があげられており、抜かれてしまった釘穴と思われる。319-2は自然に褶曲している木材である。両小口が破断し、長側縁が斜めにカットされている材である。自然な褶曲を見せる部分の梁材であろう。319-3は幅広く、凶面の右側面が破損している。厚みが薄いので、壁材であろう。319-4も同じ壁材であろう。319-6は柱材のようだが、下端が斧のよう

番号	名称	法量	取上番号	実測番号	樹種
1	曲物	径13.0、底板厚さ0.6、側板高さ6.5	SD01周辺	279	サワラ
2	曲物	高さ4.6	No.164	295	ヒノキ
4	底板	長さ7.5、幅2.7、厚さ0.6	SD01周辺	257	ヒノキ
5	底板	長さ5.2、幅3.6、厚さ0.3	包含層	190	ヒノキ
6	底板	長さ15.4、幅4.2、厚さ1.5	包含層	258	ネズコ
7	底板	長さ11.7、幅3.1、厚さ0.8	包含層	256	サワラ
8	底板	長さ16.3、幅4.2、厚さ0.3	包含層	301	サワラ
9	板	長さ9.2、幅4.2、厚さ0.5	包含層	267	ヒノキ
10	丸底	長さ13.5、幅8.2、厚さ1.1	No.6	307	ケヤキ
11	底板	長さ15.9、幅4.3、厚さ0.5	東側溝	188	ヒノキ
12	底板	長さ20.1、幅7.3、厚さ0.5	包含層	268	スギ
13	底板	長さ20.2、幅6.1、厚さ1.1	包含層	300	スギ
14	四角棒	長さ22.4、幅1.0、厚さ1.0	SX06	298	アスナロ
15	板	長さ21.0、幅3.1、厚さ0.7	包含層	303	ヒノキ
16	板	長さ18.6、幅5.6、厚さ0.2	包含層	294	ヒノキ
17	板	長さ27.6、幅5.4、厚さ0.9	SX03	283	アスナロ
18	板	長さ19.8、幅6.0、厚さ0.6	SX01	282	スギ
19	板	長さ23.9、幅8.0、厚さ1.0	SX06	289	ヒノキ
20	板	長さ25.8、幅2.4、厚さ0.6	No.58	292	ヒノキ
21	板	長さ23.9、幅2.8、厚さ0.6	No.80	297	ヒノキ
22	板	長さ7.7、幅5.4、厚さ0.2	SE01	296	ヒノキ
23	板		No.163	293	ヒノキ

Tab. 13 白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 317)

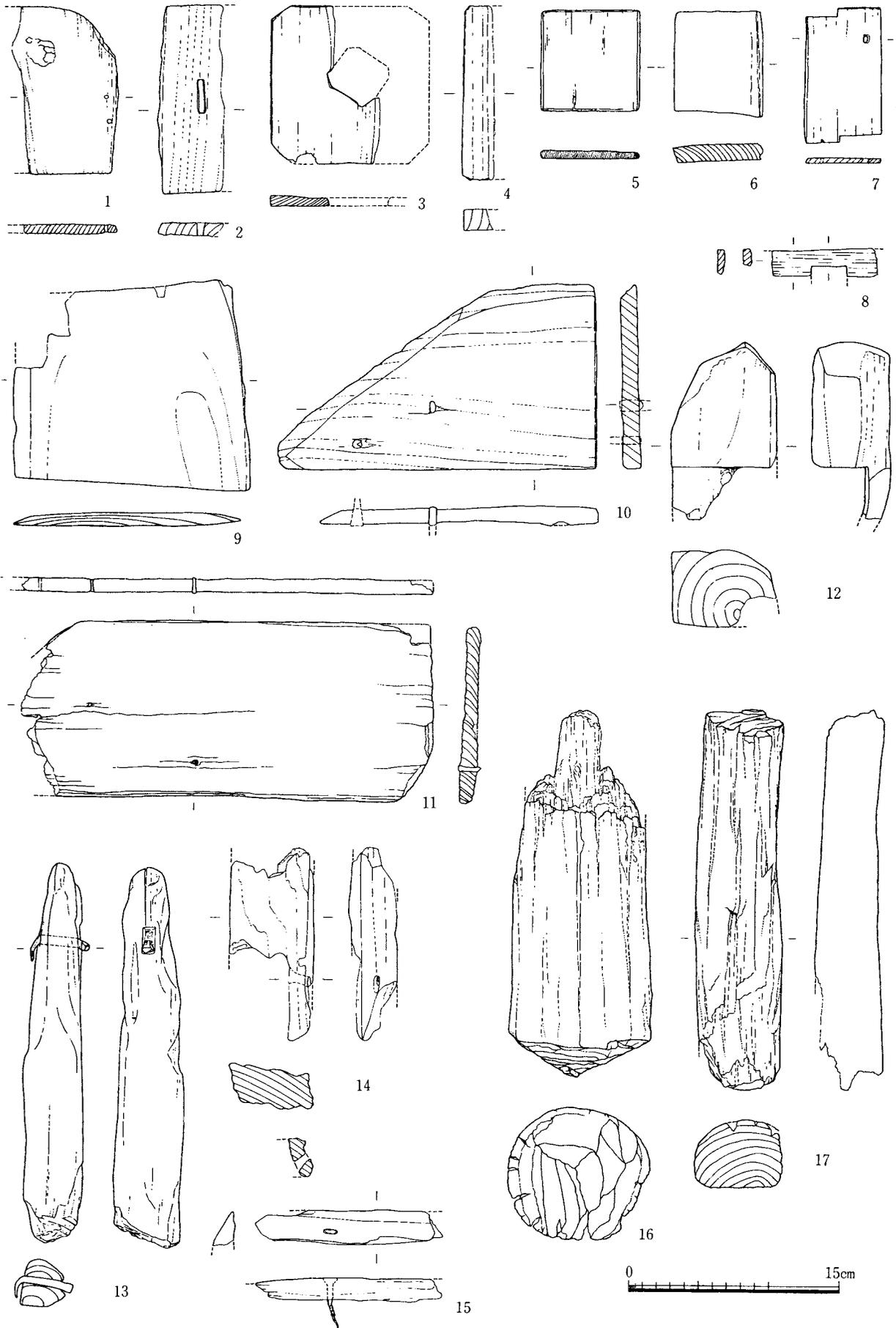


Fig. 318 白鳥堀調査区出土遺物 (板材2、柱等) (1/4)

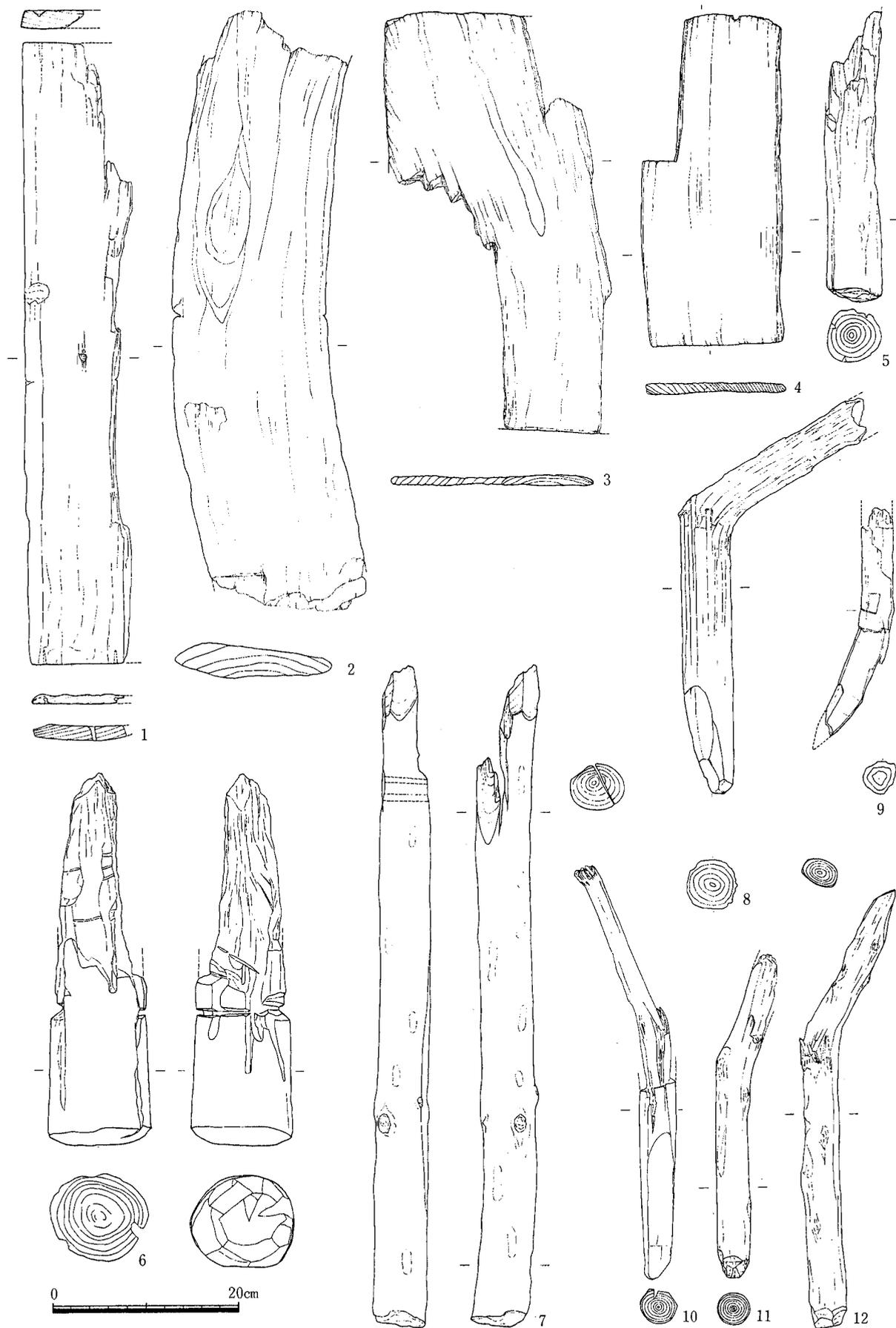


Fig. 319 白鳥堀調査区出土遺物 (大型木器 1) (1 / 6)

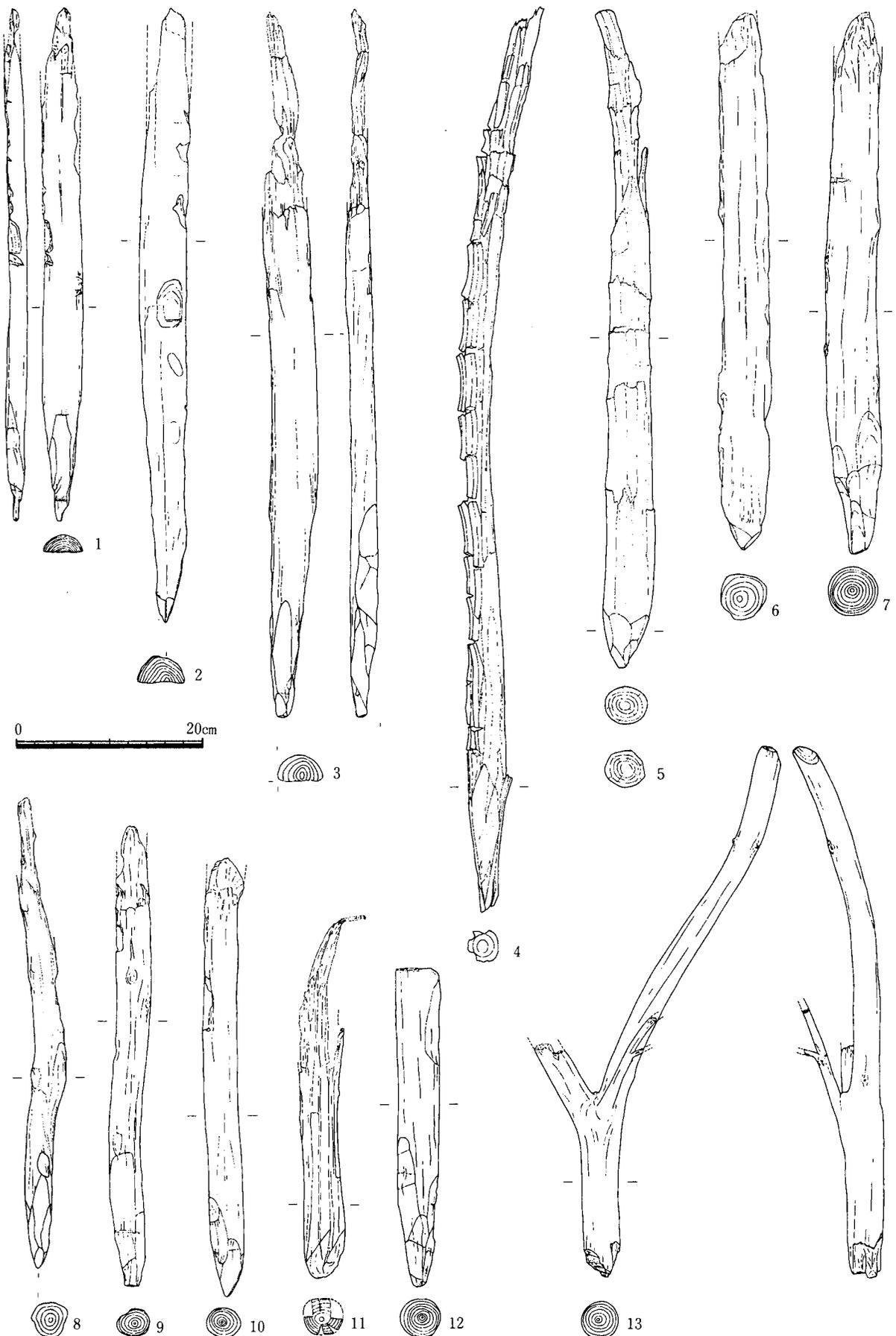


Fig. 320 白鳥堀調査区出土遺物 (大型木器2)(1/6)

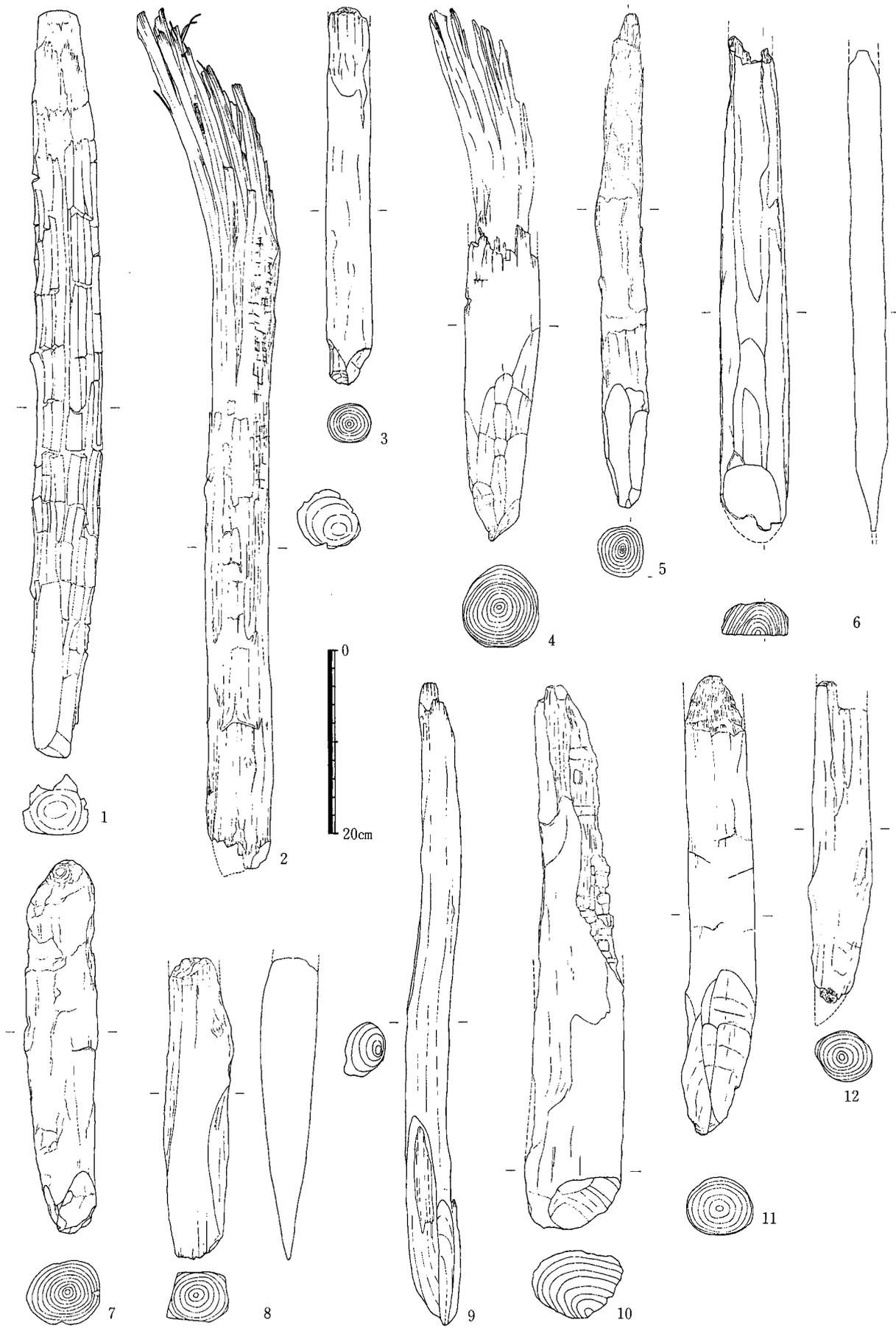


Fig. 321 白鳥堀調査区出土遺物 (大型木器3)(1/6)

なもので切断され、しかもその上 8 cm に柱に対して横方向に切り込みを入れている。切断しようとした痕跡である。319-7 は柱というよりも、杭に近い。上には二本の釘の痕跡があるものの、現状は割れて釘は見られない。上部は削られている。

杭など

319-5 は下端が切断され、クリ材である。319-8~12 が SX02 で使われた杭である。先端の削り出しは各種である。320-1~321-11 までは、各所で使われた杭で、太いものは調査区南端の溝状落ち込みに使われていたものである。鋭利に削りだそうとしているものや先端だけ切削しているものなどである。ほとんど全てクリ材である。Fig. 321 の杭材の多くは、SD01 等で使われたものである。なお、321-11 はマツ材で、二股に分かれる部位を尖らせて杭のようにしているものの、実際は杭として使われたか疑問である。SD01 下に当たる整地土層から横たわって出土した。特徴的な杭は、321-1 や 2 のように、半截した部材の先端を削って杭にしており、2 と 3 は半截部分が合致して、もともと同一材であったことがわかる。また、321-4 のように多少節で曲がっていても杭として使っている。Fig. 320 は大型の杭を集めた。320-6 のように半截材のものもある。301-8 の先端は両側から削りこまれ、あたかも楔状になっている。大型の杭でも鋭利な先端を意識しているものとあまり意識していないものがあるが、小形の杭よりも前者の方が多いためである。これは、大型の場合打ち込みやすくなるからである。

番号	名 称	法 量	出土位置	実測番号	樹 種
1	板	長さ12.0、幅7.7、厚さ0.7	第3面	79	サワラ
2	板	長さ13.4、幅4.8、厚さ0.9SX03 南			クロマツ
3	板	長さ11.4、幅7.8、厚さ0.8	SX03 南	149	カキ
4	板	長さ12.5、幅2.3、厚さ1.5	No.64	377	サワラ
5	板	長さ7.2、幅7.1、厚さ1.2	包含層	302	ヒノキ
7	板	長さ9.7、幅5.5、厚さ0.4	包含層	194	クロマツ
8	板	長さ7.5、幅1.9、厚さ0.5	調査区東	275	アスナロ
9	建築板材	長さ15.1、幅17.0、厚さ1.0	No.26	305	ヒノキ
10	建築板材	長さ23.0、幅13.4、厚さ1.4	SE01下層	271	マツ属
11	建築板材	長さ29.7、幅12.7、厚さ1.2	SX05	304	クロマツ
12	建築材	長さ12.7、幅7.5、厚さ5.6	SX03	272	ハンノキ節
13	建築柱材	長さ27.5、幅4.8、厚さ4.2	包含層	249	クリ
14	建築材	長さ13.8、幅6.0、厚さ3.4	SE01	286	アカマツ
15	建築材	長さ13.5、幅2.5、厚さ1.5	包含層	273	クロマツ
16	建築柱材	長さ26.5、幅10.2、厚さ10.0		209	クリ
17	建築材	長さ27.3、幅6.1、厚さ4.6		233	クリ

Tab. 14 白鳥堀調査区出土器属性表 (Fdb. 318)

番号	名 称	法 量	出土位置	実測番号	樹 種
1	建築板材	長さ67.0、幅11.0、厚さ2.0		183	マツ属
1	建築板材	長さ65.8、幅17.4、厚さ3.6		287	エノキ属
3	建築板材	長さ45.0、幅22.0、厚さ1.3	包含層	288	アカマツ
4	建築板材	長さ35.6、幅14.9、厚さ1.3	SX402	290	マツ属
5	建築柱材	長さ31.3、幅5.7、厚さ5.6		234	クリ
6	建築柱材	長さ40.2、幅11.2、厚さ11.9		210	サクラ属
7	建築柱材	長さ72.5、幅5.8、厚さ5.8		大7	
8	杭	長さ46.0、幅5.5	SX02	213	クリ
9	杭	長さ25.0、幅3.4	SX02		
10	杭	長さ45.0、幅3.9	SX02	223	クリ
11	杭	長さ35.2、幅3.5	SX02	240	クリ
12	杭	長さ47.3、幅3.9	SX02	243	クリ

Tab. 15 白鳥堀調査区出土器属性表 (Fig. 319)

番号	名 称	法 量	出土位置	実測番号	樹 種
1	杭	長さ35.2、幅4.2、厚さ1.9		225	クリ
2	杭	長さ65.9、幅5.0、厚さ2.9		236	クリ
3	杭	長さ75.9、幅4.9、厚さ3.0		235	クリ
4	杭	長さ97.4、幅3.3		316	
5	杭	長さ71.0、幅4.3、厚さ4.2		315	
6	杭	長さ57.6、幅5.6		239	クリ
7	杭	長さ50.6、幅3.6		21	クリ
8	杭	長さ58.0、幅5.3		218	クリ
9	杭	長さ49.5、幅3.6		217	クリ
10	杭	長さ47.2、幅3.5		222	クリ
11	杭	長さ39.0、幅4.5		237	クリ
12	杭	長さ34.3、幅4.6		221	カキ
13	杭?	長さ59.6、幅4.0		224	マツ属

Tab. 16 白鳥調査区出土木器属性表 (Fig. 320)

番号	名 称	法 量	出土位置	実測番号	樹 種
2	杭	長さ93.6、幅6.7		317	
3	杭	長さ40.9、幅4.7		244	サクラ属
4	杭	長さ58.0、幅8.2		214	クリ
5	杭	長さ53.7、幅4.9		231	クリ
6	杭	長さ54.0、幅7.1、厚さ3.6		211	ネズコ
7	杭	長さ40.6、幅7.8		238	ブナ属
8	杭	長さ32.7、幅7.0、厚さ6.0		220	クリ
9	杭	長さ69.9、幅4.5	SX04	318	
10	杭	長さ59.1、幅10.4、厚さ7.5		212	クリ
11	杭	長さ49.8、幅7.0		215	クリ
12	杭	長さ34.9、幅6.1		226	ブナ属

Tab. 17 白鳥堀調査区出土木器属性表 (Fig. 321)

第7節 石製品 (Fig. 322・323)

322-1~6は石臼である。1・3はSX01下の炉跡から出土し、著しく被熱している。ともに戸室石製である。2はSX01炉心下に置かれていた石臼で、臼の面が著しく摩耗している。大きな石英が多く入り込み、安山岩系統の石材であろう。5・6はSE01石組に組み込まれた石臼で、青みを帯びた凝灰岩である。擦り石面は使い込まれて磨り減っているが、水などによる風化の度合いは少ない。

322-7・8は硯である7は両面使われている。8は小形品で、高嶋硯で、すり減って中心が窪んでいる。7は褐色、8は青緑色を呈している。10~12は砥石である。4面がよく使い込まれている。10や11で、細い溝状が見られ歯潰しのような作業であろう。

323-1~5が石製鉢である。ほとんどがSX01下の炉跡から出土している。また、5は廃棄物捨て場としてのSX06から出土している。いずれも熱を受けた痕跡がある。鑄造炉の近くから出土する傾向にあるので鑄造に関する器物であろう。

番号	名 称	法 量	特 徴	出土位置	実測No.
1	石臼	直径31.2、器高9.8	全面にかなり激しい熱を受けて脆い	No.2	308
2	石臼	直径28.3、器高8.5	戸室石製、鉋滓若干付着	SX01炉心下	126
3	石臼	直径29.6、器高8.0	熱を受けて少し脆くなっている	SE01	117
4	石臼	直径31.6、器高10.2	内面以外熱を受けて焦げている	SE01	119
5	石臼	直径31.8、器高12.8	他の石臼の石質と違って緻密な砂岩である	SE01	116
6	石臼	直径30.8、器高9.8	熱を受けて焦げている	SE01	118
7	硯	長さ5.6、幅6.0、高さ1.3	両面使用	包含層	120
8	硯	長さ6.9、幅2.5、高さ0.6	高嶋硯	包含層	121
9	砥石	長さ3.3、幅3.5、高さ1.5	四面使用	No.110	125
10	砥石	長さ4.4、幅2.1、厚さ2.0	二面使用	包含層	127
11	砥石	長さ7.3、幅3.6、厚さ2.7	四面使用	No.84	123
12	砥石	長さ7.5、幅3.2、厚さ2.5	四面使用	包含層	124

Tab. 18 白鳥堀調査区出土石製品属性表 (Fig. 322)

番号	名 称	法 量	特 徴	出土位置	実測No.
1	鉢	口径31.1、器高10.6	内外面被熱	No.86	129
2	鉢	口径39.3、器高9.5	内面被熱	SD01周辺	130
3	鉢	口径37.5、器高10.5	内外面被熱、内面に鉋滓と炭付着	SX01下	131
4	鉢	口径19.0、器高8.8	内面から断熱被熱、転用であることがわかる、底面にも煤	SX01下	132
5	片口鉢	口径34.4、36.3、器高14.7	内面被熱、底面にも煤痕	SX06	128

Tab. 19 白鳥堀調査区出土石製品属性表 (Fig. 323)

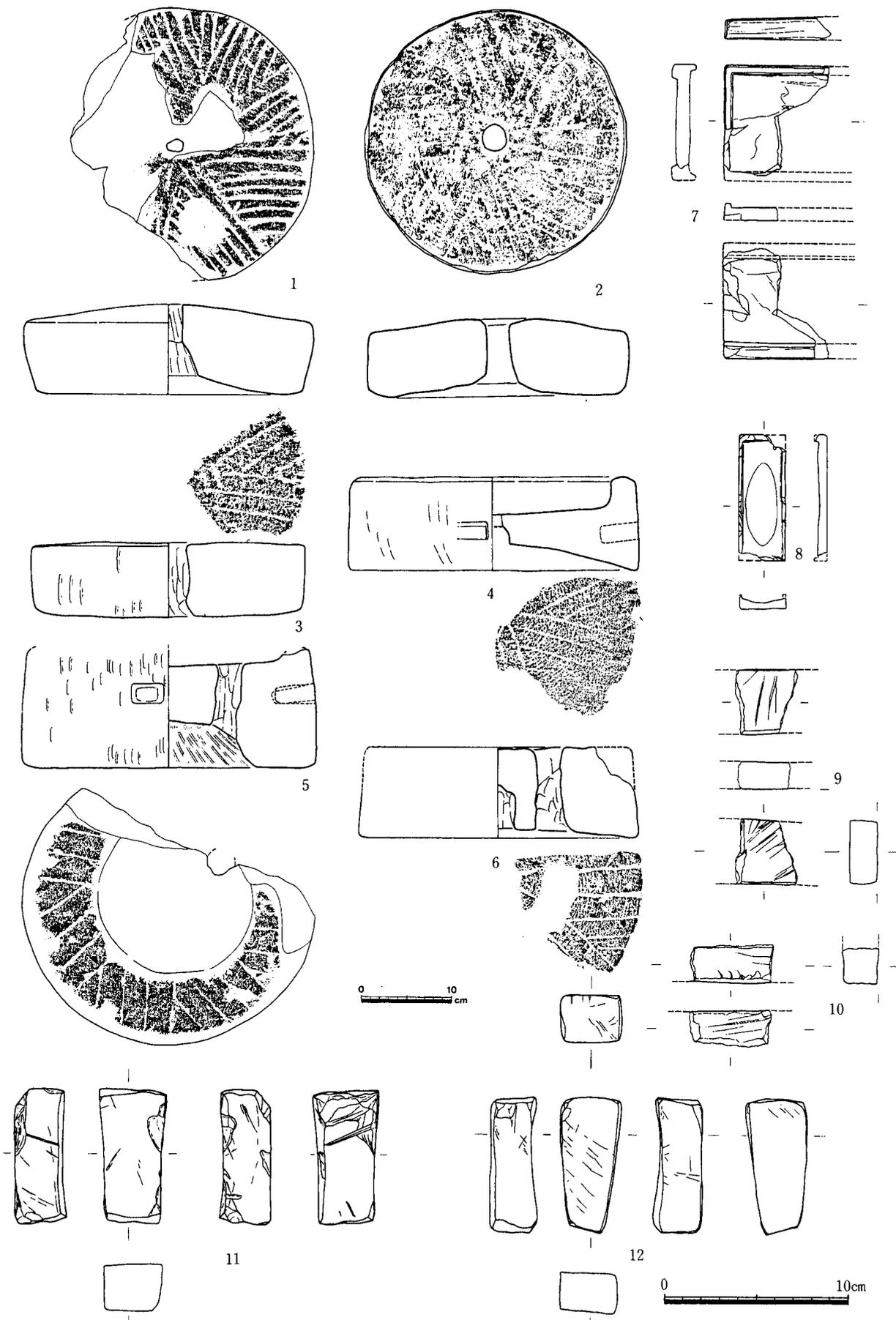


Fig. 322 白鳥堀調査区出土遺物 (石製品 A) (1 / 3)

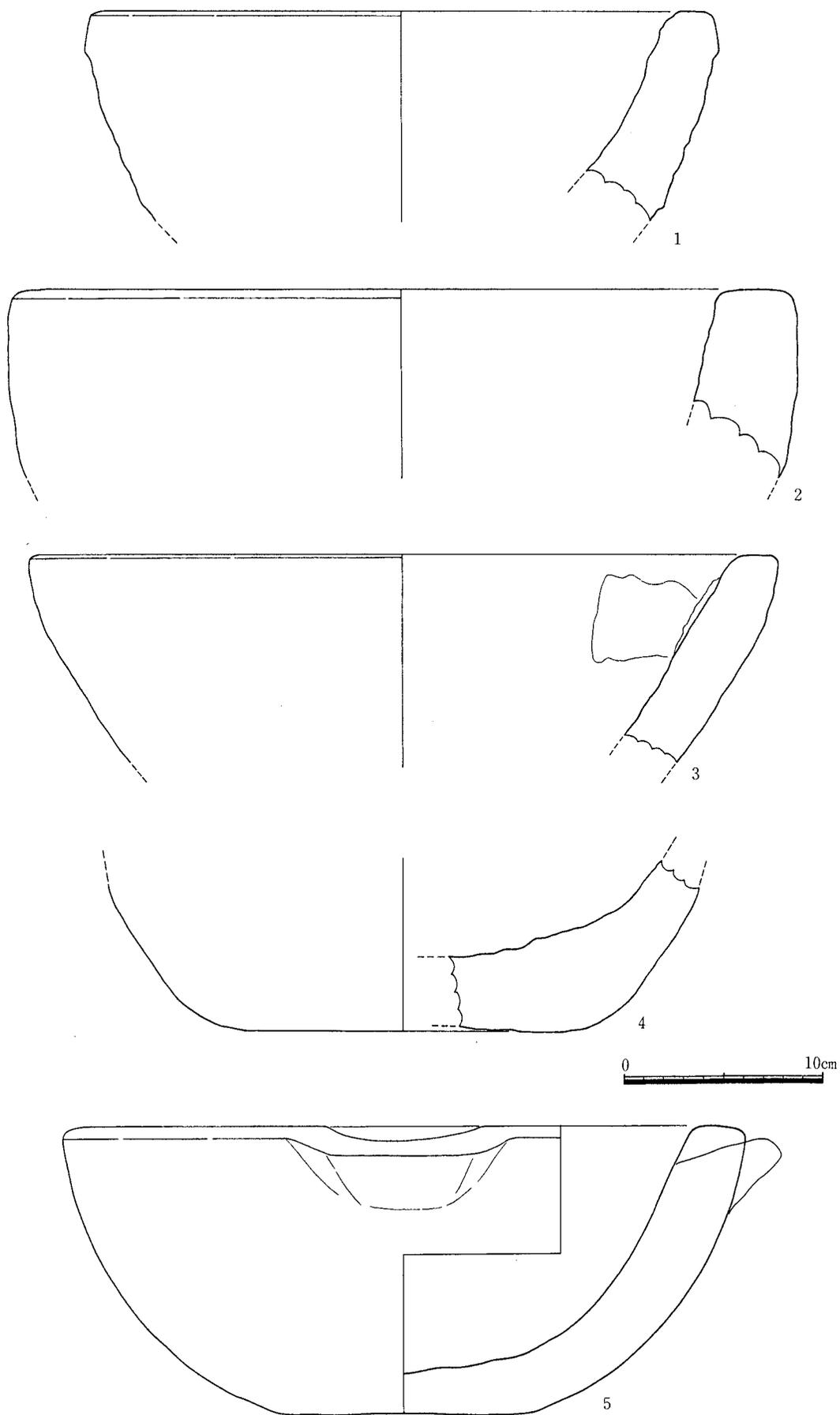


Fig. 323 白鳥堀調査区出土遺物 (石製品 B) (1 / 3).

第8節 金属製品

a) 鉄製品

324-1~4は小柄である。1の刃部途中から曲がっているのは、土圧なのか意図的なのかわからない。いずれにしても焼き入れする前であろう。324-2は切先を欠損している。324-3と4は刃部途中である。324-5~7は毛抜きである。いずれも同じ形態で、長さ7~8cmで刃部を幅広く作っている。324-8~10は鉄鍬である。324-8は先端が円錐形である。324-9は平面台形で両刃の刃部を作っている。茎部には糸が巻かれた痕跡があり、矢柄への装着用であろうか。324-10は鉄鍬基部と思われる。そこは二重になった鉄板を巻いており、刃部を挟み込んでいたようである。324-11、14は責金具である。木製工具柄などに装着されるのであろうか。324-14の綴じ合わせ部分は開いている。

325-1は鋸である。刃部は徐々に幅を減じ、先端で急に狭くなって尖るようであるが、狭くなる場所には鋸歯は無いようである。刃部側の関部は、湾曲を持った斜めに落とされている。茎部は完存せず、目釘の有無はわからない。刃部に木質が付着しているが、鋸に付属するものかどうかかわからない。325-2は鎖でS字状金具を3つ連結している。325-3も鎖に一部と思われるが、細いので別個体である。325-4は先端が釣り針のように小さく曲がるもの。何かの工具であろう。325-5はこてのようなものである。途中で欠損している。刃部は作られていない。325-7は直線の両端を丸く曲げた形状を呈し、端部は平たく尖っている。直線的な部位は厚く、両側面から力が加えられたように少し潰れている。何か引っ搔くものようである。

326-10~12は錠である。釘の個体数に比べて少ないのは、使用頻度の違いであろうか、未使用品であろう。326-13~327-32は釘である。326-13は大型の釘でこれのみの出土である。釘は、概ね9cm前後の3寸釘、5.6cmの2寸釘、3.4cmの1寸釘の三種類が出土している。3寸釘の多くが、ねじれたものがあり、実際に使われたものが抜かれたのであろうか。2寸釘以下で捻れたものは少なく、頭部の折り返されるまえのものや、赤色顔料が塗布されているものが目立つ。赤色顔料は水銀朱と思われ、鮮やかな赤朱色を呈している。すなわち、未使用のもので、この鍛冶場で生産されたものと理解される。

b) 銅製品

銅製品には、鍍金の痕跡はない。色調のわかるものは、鮮やかな金色を呈し、いわゆる「真鍮」である。324-12、13は円管となっているが、責金具と思われる。12は一方面が折り曲げられてその面の周縁を保護する形状となっている。ともに、合わせ目がないことから、鑄造品であろう。324-15は穴の開いた金具で、両側から挟み込むようになっている。下側には小さな三角形が2ヶ所に見られ、木製器物を挟み込んだ後この爪を折り曲げて固定するのであろう。324-17は柄のようである。穴が開けられ、紐を通すのであろう。324-18、19は管で、座金具のように使われるものである。円筒部分は銅板を丸め円形の座金具に接着している。どのような技法がよくわからない。324-20は調度などの縁金具である。丸い穴が開けられている。21と22は薄い銅板で、銅鉾を打ち込む穴が開いている。324-23は管を半裁にしたようで一方端近くには鉾で止める穴がついている。324-24は長い針状を呈し、基部に溝が切られ、それから螺旋状の線刻が施されている。こうがいであろうか。

c) 鉄原材料

325-6は鍛造して製品を作る前のものであろう。両端は細長くなっているが、上下非対称である。8は鍛造によって叩かれ平らになっているが、叩かれた痕跡が明瞭に認められる。9は細長い紡錘状を呈するが、一方が細くなっている。326-1~9、26はこれが加工される前の段階のものである。1は直線的。2等は曲がっており、形状はさまざまである。保管のされ方で形が決まってくるのであろう。そして、326-26は微妙なアールを持っており針金束のように丸められて保管されていた可能性がある。

d) 銅原材料

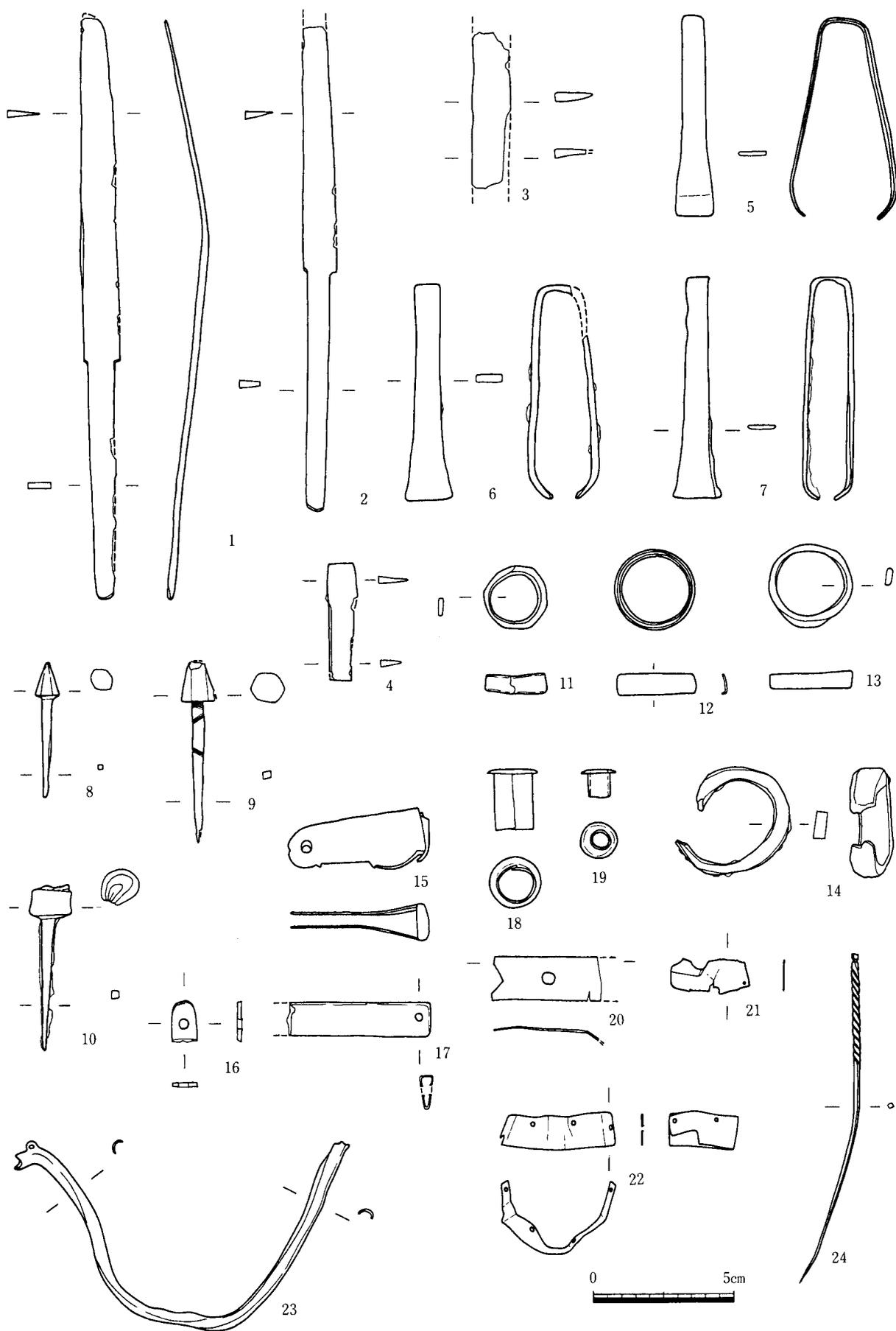


Fig. 324 白鳥堀調査区出土遺物 (金属器1) (1/2)

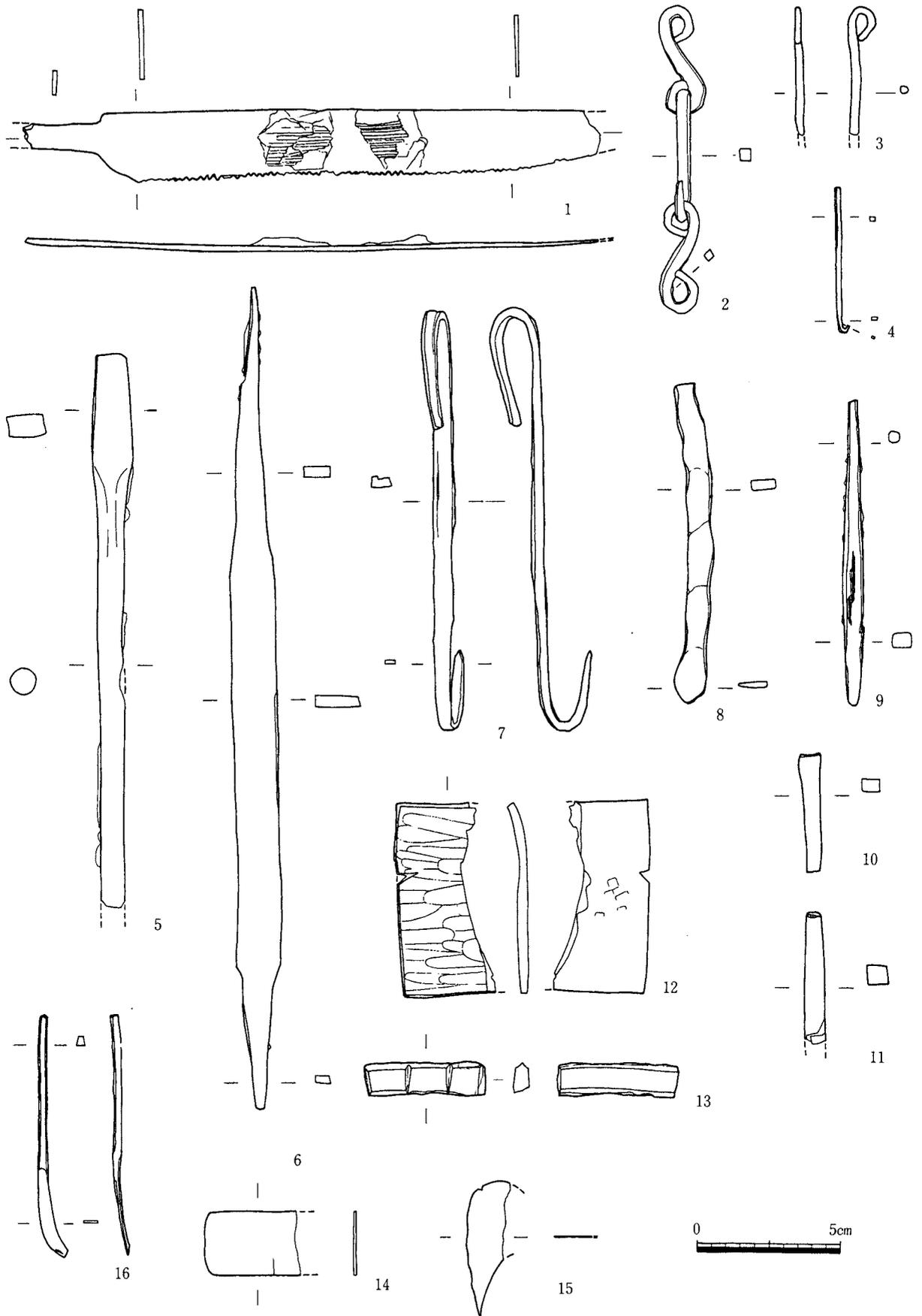


Fig. 325 白鳥堀調査区出土遺物 (金属器2) (1/2)

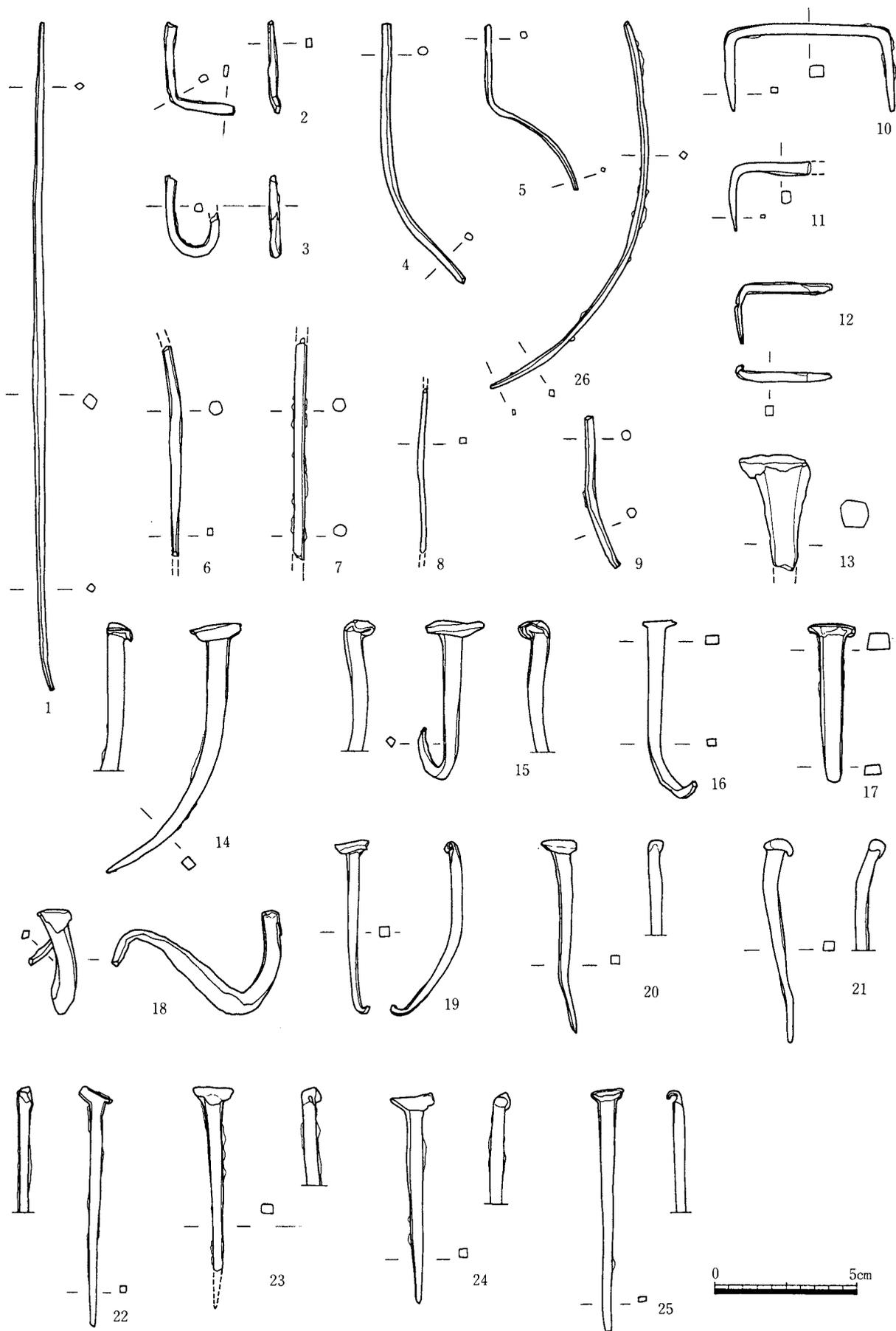


Fig. 326 白鳥堀調査区出土遺物 (金属器 3) (1/2)

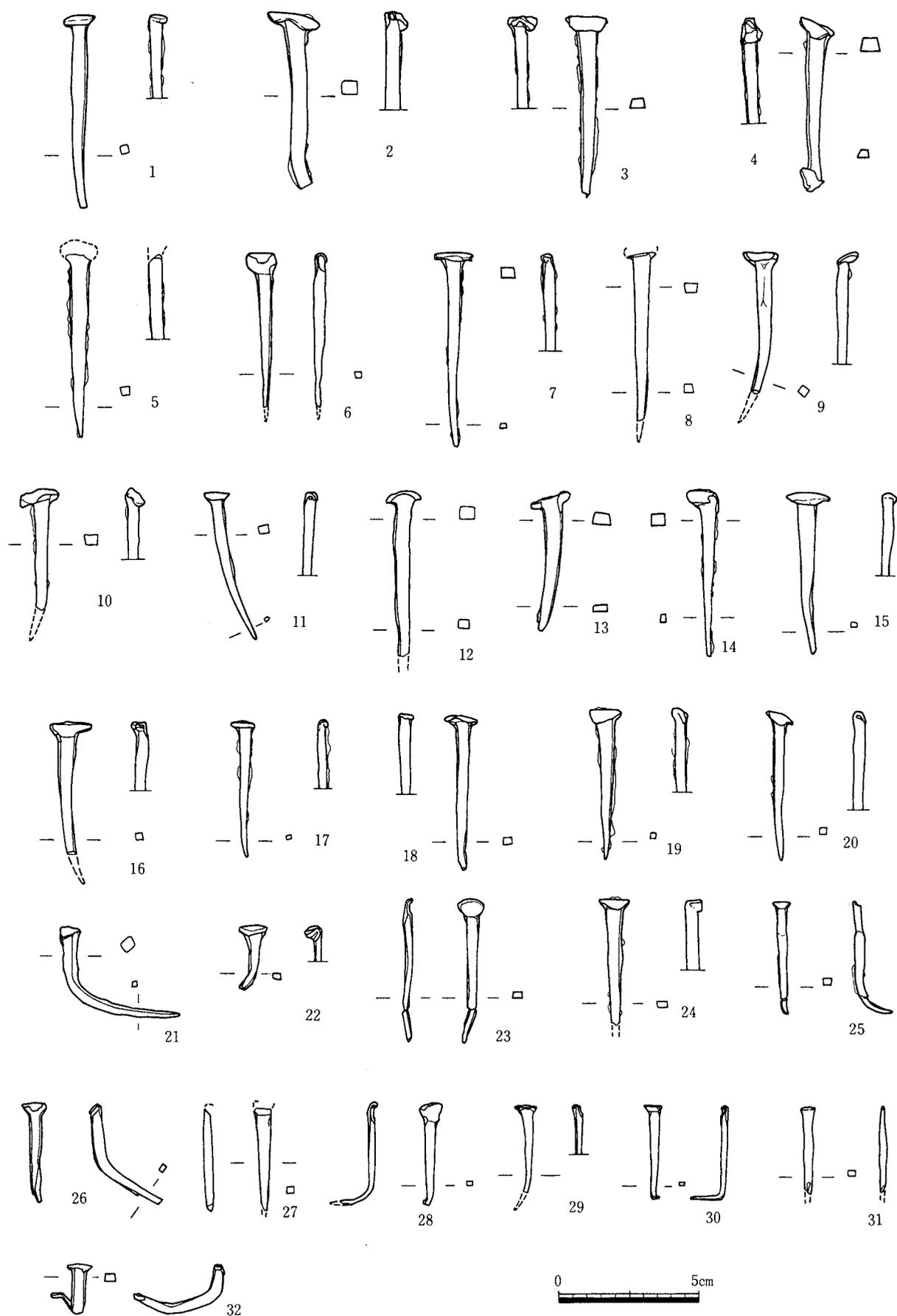


Fig. 327 白鳥堀調査区出土遺物 (金属器4) (1/2)

鉄に比べて多くが出土している。

325-10 と 11 が角棒状の銅である。10 には一端が切断された痕跡がある。12 が銅の厚板である。一面のみこてのようなものでなでつけられたような痕跡があり、小口面をきれいに成形しているので、もしかすると何かの製品かもしれない。325-13 は横長で、等分量分になるように、切れ目が入れている。以上のものは、銅を溶かすいわばインゴットである。それが多様な形態を示しているのは、供給元が違うのであろうか。それとも成分が違うのであろうか。

325-14 と 15 は薄い銅板で、切断されている。これもインゴットと同じように溶かす原料であろう。ともに、表面には 325-12 でみられたような、こてでなでつけられた痕跡がある。16 は細い棒状の一端が叩きつぶされて、あたかもホッケーのスティックのようである。

e) 銭貨 (Fig. 329 ~ 331)

36 枚出土している。このうち、12 枚が SX03 石組み際から出土し、地鎮に関わるものである。元寶通寶と元祐通寶が各 3 枚、祥符通寶が 2 枚、景德元寶、至和元寶、皇宋通寶が各 1 枚である。2 の開通元寶は背下に「越」の字と思われるものがある。21 は 2 文字しか残されていないが、政和通寶か宣和通寶のいずれかであることがわかる。20 は政和通寶の模鑄銭と思われる、左右に約 3 mm の小孔が 2 つ開けられている。22~24 は無文銭である。いずれも包含層である。遺物出土状況で述べてたように、北側の一群から出土している。これは模鑄銭である 20 が北側の一群から出土していることから、いわゆる渡来銭ではない銭が北側に集中することが非常に重要である。

f) 鍛冶関係遺物 (Fig. 328)

280-1~4 はとりべである。1 は把手がついて、内外面全体に鉍滓が付着している。2~3 は、使い古したものでなく、ほとんど未使用のものに近い。5~10 はふいご羽口である。よく使われ、7 や 8 は炉の先端から剝脱したものである。

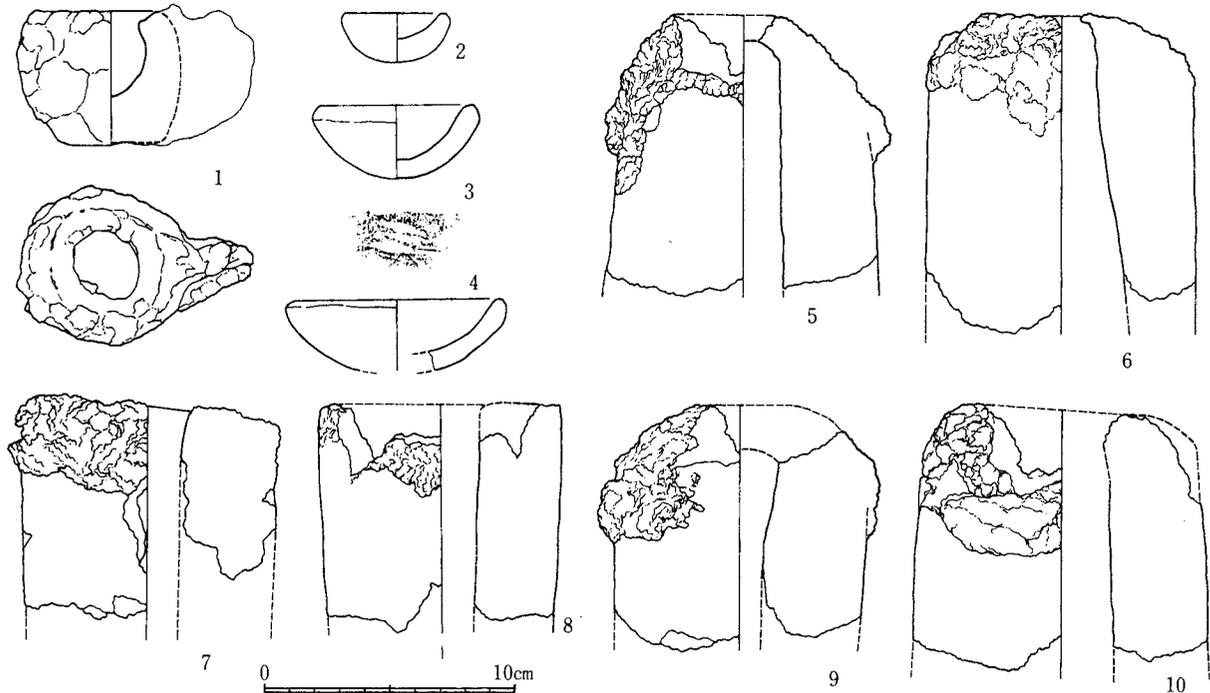
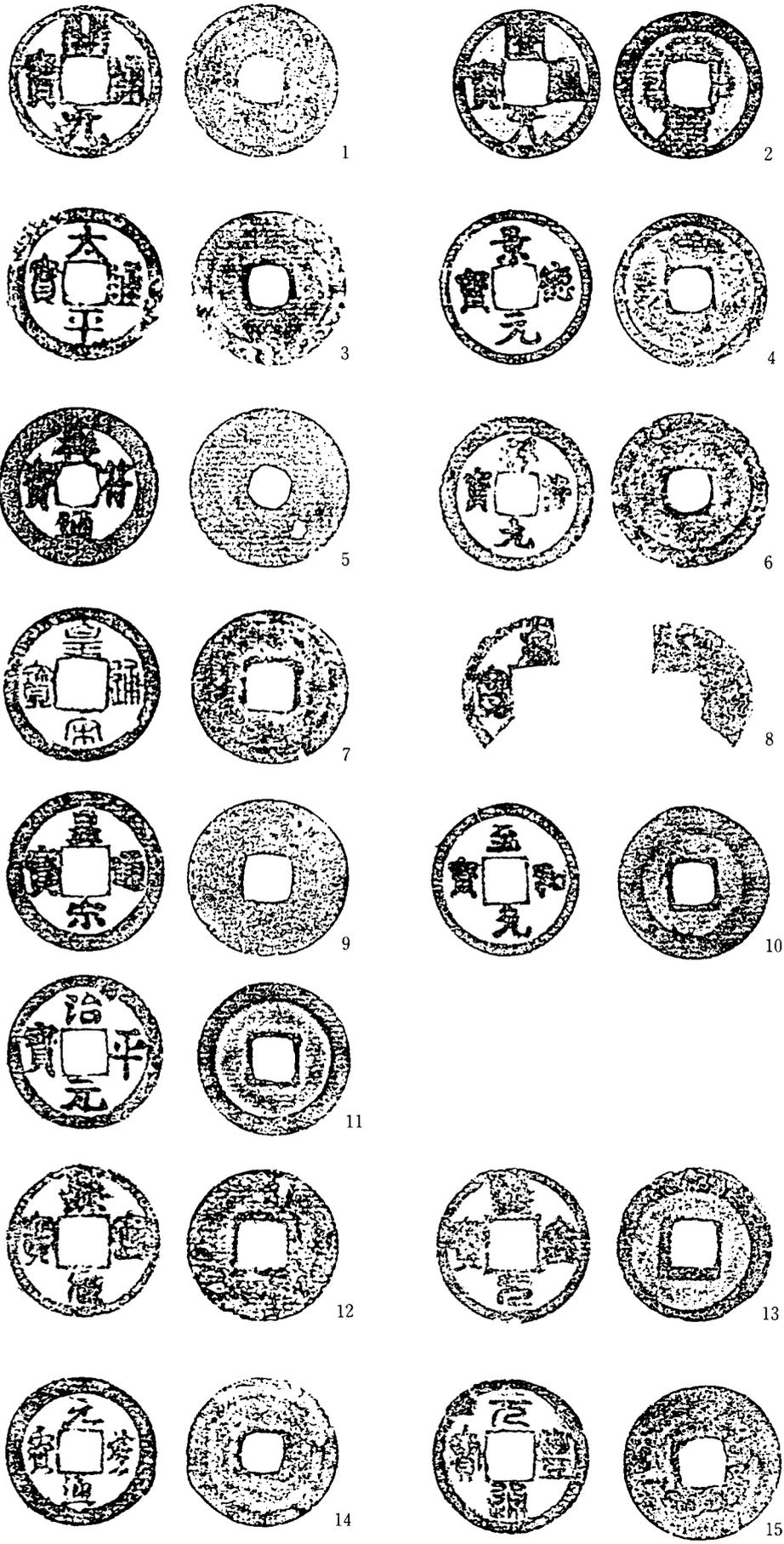
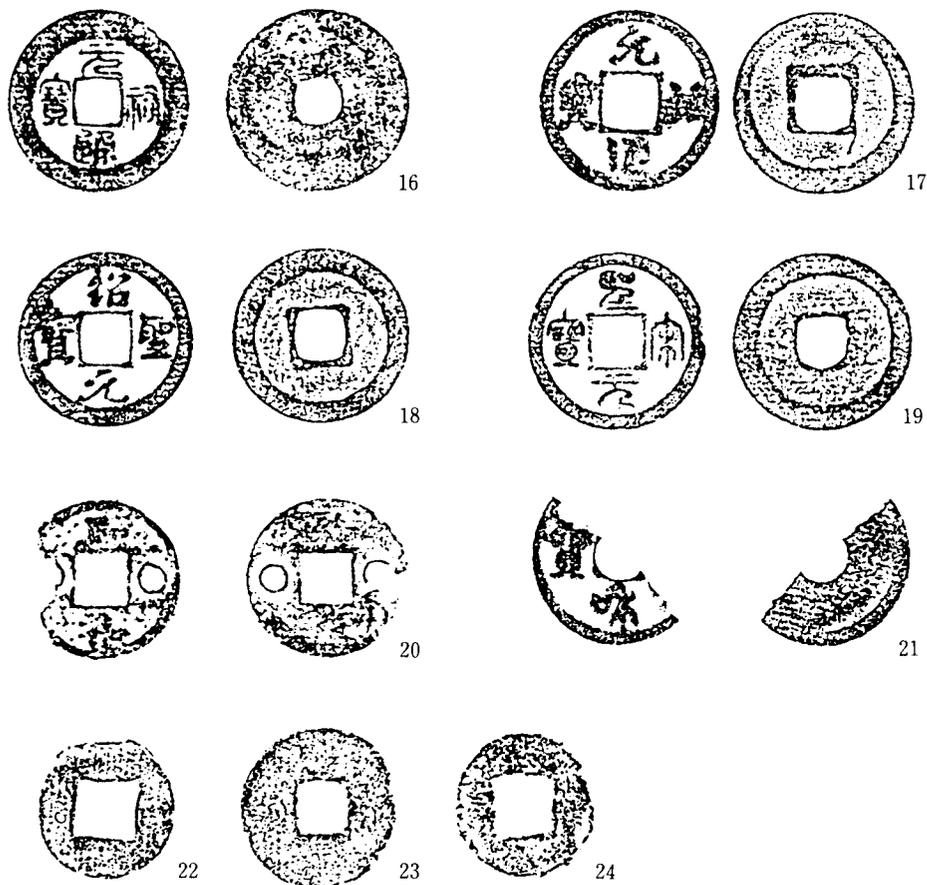


Fig. 328 白鳥堀調査区出土遺物 (鍛冶関係) (1/3)



1. 開通元寶一隸
(唐 武德 5年-621)
2. 開通元寶一隸
(唐 會昌 5年-845)
3. 太平通寶一楷
(北宋 太平興國元年-976)
4. 景德元寶一楷
(北宋 景德 2年-1005)
5. 祥符元寶一楷
(北宋 大中祥符元年-1008)
6. 祥符元寶一楷
(北宋 大中祥符元年-1008)
7. 皇宋通寶一篆
(北宋 寶元 2年-1039)
8. 皇□□寶一篆
(北宋 寶元 2年-1039)
9. 皇宋通寶一楷
(北宋 寶元 2年-1039)
10. 至和元寶一楷
(北宋 至和元年-1054)
11. 治平元寶一楷
(北宋 治平元年-1064)
12. き寧元寶一篆
(北宋 き寧元年-1068)
13. 紹聖元寶一行
(北宋 元豐元年-1094)
14. 元豐通寶一行
(北宋 元豐元年-1078)
15. 元豐通寶一行
(北宋 元豐元年-1078)

Fig. 329 白鳥堀調査区出土銭貨1 (原寸)

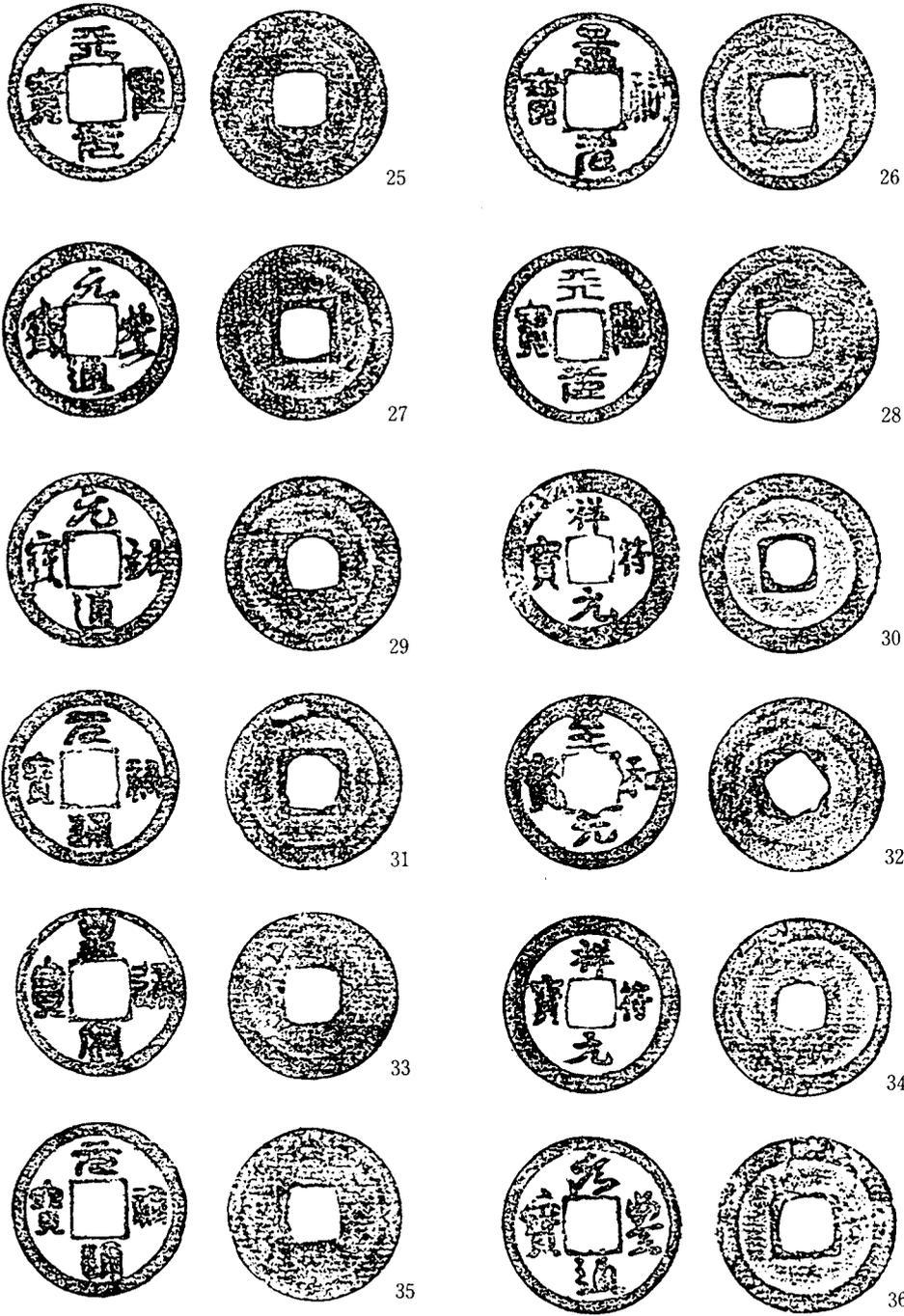


- 16. 元祐通寶一篆
(北宋 元祐元年-1078)
- 17. 元祐通寶一篆
(北宋 元祐元年-1078)
- 18. 紹聖元寶一行
(北宋 紹聖元年-1094)
- 19. 聖宋元寶一篆
(北宋 建中靖国元年-1101)
- 20. 政和通寶一楷
(北宋 政和元年-1111)
- 21. □和□寶一篆
(北宋 政和通寶か宣和通寶
政和元年-1111又宣和元年-1119)
- 22. 無文銭
- 23. 無文銭
- 24. 無文銭

Fig. 330 白鳥堀調査区出土銭貨2 (原寸)

番号	古銭名	径	厚さ	重さ	出土位置	出土日
1	開元通寶	24.21	1.23	2.74	SX01砂層下	940111
2	開元通寶	23.31	1.3	3.75	No.No.112	940218
3	太平通寶	24.4	1.56	3.03	平成3年度調査盛土下黑色土	930119
4	景德元寶	24.43	1.25	3.14	SX03周辺	
5	祥符元寶	25.2	1.19	4.06	包含層	931214
6	祥符元寶	24.54	1.3	3.06	No.139	940228
7	皇宋通寶	24.55	1.2	2.66	SX03周辺	931216
8	皇宋通寶		1.08		盛土5下部	940715
9	皇宋通寶	25.03	1.01	2.68	No.143	940302
10	至和元寶	23.81	1.31	3.5	No.63	940118
11	治平元寶	24.21	1.35	3.24	SX03周辺	
12	き寧元寶	24.11	1.64	3.15	SX03上面	931221
13	紹聖元寶	24.325	1.42	3.56	盛土5下部	940708
14	元豊通寶	23.96	1.3	2.92	No.103	940216
15	元豊通寶	24.68	1.13	3.1	第4遺構面	940727
16	元祐通寶	24.51	1.89	3.17	包含層	931215
17	元祐通寶	24.38	1.25	3.21	第1遺構面	940713
18	紹聖元寶	23.6	1.26	3.48	SX201	940715
19	聖宋元寶	23.84	1.42	3.79	盛土5下部	940708
20	政和通寶	21.35	1.08	1.39	第2遺構面	940721
21		23.81	0.95	1.14	包含層	931213
22	無文銭	18.22	0.75	0.85	包含層	931213
23	無文銭	20.97	0.84	1.48	平成3年度調査盛土下黑色土	930119
24	無文銭	18.88	0.85	0.88	包含層	931215
25	元豊通寶	24.51	1.19	3.21	SX03 1枚目	940312
26	景德元寶	24.57	1.41	3.67	SX03 2枚目	940312
27	元豊通寶	24.45	1.39	3.79	SX03 3枚目	940312
28		24.61	1.47	4.11	SX03 4枚目	940312
29	元祐通寶	24.85	1.37	3.45	SX03 5枚目	940312
30	祥符元寶	24.12	1.1	3.08	SX03 6枚目	940312
31	元祐通寶	24.4	1.2	3.37	SX03 7枚目	940312
32	至和元寶	24.29	1.25	3.6	SX03 8枚目	940312
33	皇宋通寶	23.4	1.1	2.89	SX03 9枚目	940312
34	祥符元寶	24.77	1.31	3.94	SX03 10枚目	940312
35	元祐通寶	24.13	1.27	3.45	SX03 11枚目	940312
36	元豊通寶	25.18	1.26	3.43	SX03 12枚目	940312

Tab. 20 古銭計測一覧



- 25. 元豐通寶 最上面
- 26. 景德元寶 2枚目
- 27. 元豐元寶 3枚目
- 28. 元祐通寶 4枚目
- 29. 元祐通寶 5枚目
- 30. 祥符元寶 6枚目
- 31. 元祐元寶 7枚目
- 32. 至和元寶 8枚目
- 33. 皇宋通寶 9枚目
- 34. 祥符通寶 10枚目
- 35. 元祐通寶 11枚目
- 36. 元豐通寶 最後

Fig. 331 白鳥堀調査区出土銭貨3 (原寸)

番号	名 称	材質	法 量	特 徴	出土位置	実測No.
1	小柄	鉄	全長20.8、刃長12.3、刃幅1.3、背幅0.3、茎幅0.9	刃部途中で曲がる、両関、目釘なし	No.209	36
2	小柄	鉄	全長17.4、刃長8.7、刃幅1.2、背幅0.3、茎幅0.7	切先欠損、目釘なし	SX03上面	35
3	小柄	鉄	全長5.6、幅1.4、背幅0.3	刃部のみ	包含層	85
4	小柄	鉄	全長4.2、幅1.0、背幅0.2	刃部のみ	SX06	76
5	毛抜き	鉄	全長7.2、幅1.7~3.8		SX02	79
6	毛抜き	鉄	全長7.7、幅1.5~2.5		包含層	38
7	毛抜き	鉄	全長8.0、幅1.4~2.8		盛土下黒色土	80
8	鉄鍬	鉄	全長4.8、刃部長1.2、刃部幅0.8、茎長3.6	刃部円錐形	No.111	41
9	鉄鍬	鉄	全長6.6、刃部長1.5、刃部幅1.2、茎長5.1	刃部先端欠損、茎部に糸の痕跡	No.106	39
10	鉄鍬	鉄	全長6.0、茎部径1.4、茎長4.2	基部で先端のものを固定。巻き締めるよう	SX01	43
11	責金具	鉄	径2.2、厚さ0.15	合わせ目あり		11
12	責金具	鉄	外径2.8、内径2.3	鑄造か？板の合わせ目見いだしがたい	No.38	66
13	責金具	鉄	径2.9、厚さ0.2		包含層	67
14	責金具	鉄	長さ3.8、幅4.0、厚さ0.4		包含層	69
15	飾り金具	銅	長さ5.1、幅2.0	下端に折り曲げのような爪あり	No.105	62
16	金具	銅	長さ1.5、幅0.9、厚さ0.15	穴開け後未処理	第3面	93
17	小柄柄？	銅	長さ5.1、幅1.2、0.5		SX201	82
18	筒状金具	銅	長さ2.2、径1.85、孔径1.2		No.18	68
19	筒状金具	銅	長さ1.0、径1.25、孔径0.5		包含層	64
20	飾り金具	銅	長さ3.9、幅1.5、孔径0.4		包含層	65
21	飾り金具	銅	長さ2.8、幅1.2	周囲破断面	No.189	47
22	飾り金具	銅	長さ4.1、幅2.7		No.102	34
23	縁金具	銅	幅0.6		包含層	63
24	ピン状	銅	長さ12.0、径0.3		No.177	56

Tab. 21 白鳥堀調査区出土金属属性表 (Fig. 324)

番号	名 称	材質	法 量	特 徴	出土位置	実測No.
1	鋸	鉄	全長20.3、刃長16.3、刃幅2.4	目釘なし	SX201上面	81
2	鎖	鉄	全長10.7、幅1.9、0.5	3連	No.15	42
3	鎖？	鉄	全長4.5、幅0.9、厚さ0.3		SX201	84
4	針状	鉄	全長5.1、幅0.2	先端曲がる	包含層	59
5	こて状工具	鉄	全長19.5、幅1.4	未製品か	No.37	37
6	鑄造原料	鉄	全長29.0、幅1.5		No.30	46
7	鉤状工具	鉄	全長14.8、鉤長4.2、鉤幅1.7、幅0.7、厚さ0.4		包含層	40
8	鑄造原料	鉄	全長11.2、幅0.9、厚さ0.35		SD02	44
9	鑄造原料	鉄	全長10.8、幅0.7		No.191	72
10	鑄造原料	銅	全長4.2、幅0.7、厚さ0.5		SX02	48
11	鑄造原料	銅	全長4.7、幅0.7、厚さ0.7		包含層	53
12	鑄造原料	銅	全長6.9、幅3.3、厚さ0.3		No.74	54
13	鑄造原料	銅	全長4.3、幅1.1、厚さ0.5	分割用の溝あり	No.132	49
14	鑄造原料	銅	長さ3.2、幅2.25、厚さ0.1	金鍬の切断痕あり	SD02西	51
15	鑄造原料	銅	全長4.9、幅1.3		No.195	52
16	鑄造原料	銅	全長8.6、幅0.3、0.5		SX01西	58

Tab. 22 白鳥堀調査区出土金属器属性表 (Fig. 325)

番号	名 称	材質	法 量	特 徴	出土位置	実測No.
1	鑄造原料	銅	全長24.0、幅0.4		包含層	45
2	鑄造原料	銅	全長3.4、幅0.3、厚さ0.2		No.123	60
3	鑄造原料	銅	全長3.0、厚さ0.3		包含層	57
4	鑄造原料	銅	全長9.7、幅0.3		SX01西タチワリ	75
5	鑄造原料	銅	全長6.7、幅0.2		SX01西	74
6	鑄造原料	銅	全長7.5、幅0.4		SX01下	70
7	鑄造原料	銅	全長8.0、幅0.4		SE01北	73
8	鑄造原料	銅	全長5.9、幅0.2		第1遺構面	90
9	鑄造原料	銅	全長5.6、幅0.3		SX01西	71
10	鋸	鉄	全長6.9、幅3.0、厚さ0.4		SE01	10
11	鋸	鉄	全長2.9、幅2.4、厚さ0.4	赤色顔料	SX03	32
12	鋸	鉄	全長3.4、幅2.2、厚さ0.3		盛土5下部	101
13	釘	鉄	全長4.2、幅2.5	赤色顔料	盛土5下部	97
14	釘	鉄	長さ10、頭幅1.9		包含層	5
15	釘	鉄	全長5.7、頭幅2.2		包含層	13
16	釘	鉄	全長6.4、頭幅1.2	赤色顔料	包含層	16
17	釘	鉄	全長5.7、頭幅1.8		包含層	17
18	釘	鉄	全長6.2、頭幅1.3		包含層	22
19	釘	鉄	全長6.4、頭幅1.3		P-2	99
20	釘	鉄	全長7.0、頭幅1.3		SE01	30
21	釘	鉄	全長7.3、頭幅1.1	赤色顔料	SX201	88
22	釘	鉄	全長8/6、頭幅1.2		No.97	25
23	釘	鉄	全長6.5、頭幅1.5	赤色顔料	SE01北	20
24	釘	鉄	全長7.5、頭幅1.6		包含層	7
25	釘	鉄	全長6.5、頭幅1.2		包含層	27
26	鑄造原料	銅	全長14.2、幅0.3		SX01	55

Tab. 23 白鳥堀調査区出土金属器属性表 (Fig. 326)

番号	名称	材質	法量	特徴	出土位置	実測No.
1	釘	鉄	全長6.9、頭幅1.3		SD01	1
2	釘	鉄	全長6.3、頭幅1.9		包含層	23
3	釘	鉄	全長6.5、頭幅1.4	赤色顔料	SE01北	28
4	釘	鉄	全長6.3、頭幅1.4		SX05	9
5	釘	鉄	全長6.5	赤色顔料	SD01	15
6	釘	鉄	全長5.5、頭幅1.1		SE01北	89
7	釘	鉄	全長8.0、幅0.4		SE01北	33
8	釘	鉄	全長5.9		SX201上面	96
9	釘	鉄	全長5.1、頭幅1.3		SX201	86
10	釘	鉄	全長4.3、頭幅1.5		第3遺構面	95
11	釘	鉄	全長5.5、頭幅1.0	赤色顔料	SE01	26
12	釘	鉄	全長5.9、頭幅1.3		No.188	3
13	釘	鉄	全長5.1、頭幅1.5		SX01西	31
14	釘	鉄	長さ6.0、頭幅1.0		SX05	2
15	釘	鉄	全長5.8、頭幅1.6		No.85	24
16	釘	鉄	全長4.7、頭幅1.5		第3面	95
17	釘	鉄	全長4.9、頭幅0.9		包含層	29
18	釘	鉄	全長5.5、頭幅1.2		盛土5下部	102
19	釘	鉄	全長5.4、頭幅1.1	赤色顔料	SE01	18
20	釘	鉄	全長5.4、頭幅1.1		SD01	19
21	釘	鉄	全長5.5		SX05	4
22	釘	鉄	全長2.5、頭幅1.1			78
23	釘	鉄	全長5.1、頭幅0.9	頭部折り曲げ前、未使用	第1遺構面	91
24	釘	鉄	全長4.5、頭幅1.1		SE01北	6
25	釘	鉄	全長4.0、頭幅0.6	赤色顔料	SE01	21
26	釘	鉄	全長4.2、頭幅0.9	赤色顔料	包含層	12
27	釘	鉄	全長3.7		SE01北	100
28	釘	鉄	全長3.7、頭幅0.9		第3遺構面	94
29	釘	鉄	全長3.2、頭幅0.8		P-2	98
30	釘	鉄	全長3.4、頭幅0.7		第1遺構面	92
31	釘	鉄	全長3.2、頭幅0.5	赤色顔料	包含層	11
32	釘	鉄	全長3.5		No.119	61

Tab. 24 白鳥堀調査区出土金属器属性表 (Fig. 327)

通号	発掘番号	種別1	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考	
304	1 A-34	中国	磁器	碗	白鳥堀		包含層	高台径4.7、器高3.3	外：高文、内：枝折花文、饅頭心	素地は明灰色	大明年造、2次的被熱	
	2 A-46						No.197	口径12.3、器高4.1	外：芭蕉葉文、	素地は明灰色	表面の釉が少し溶ける	
	4 A-36						包含層	高台径4.6、器高2.5	外：鳳凰			
	5 A-42						包含層	口径3.6、器高2.1	外：芭蕉葉文	素地は灰色	暮け底、礫れ砂	
	7 A-41						包含層	口径4.0、器高1.8	外：唐草、内：十字花文	素地は黄灰色	暮け底	
	8 A-114					拡張区	包含層	口径8.8、高台径5.7、器高2.1	外：唐草、内：十字花文、端反り	素地は灰色		
	9 A-35						包含層	口径10.1、底径3.1、器高2.1		素地は灰色	暮け底	
	10 A-47						SE01北整地土	口径13.0、器高1.8	外：宝相草唐草文、端反り	素地は灰色		
	11 A-32					SX03		口径13.0、器高1.8	薄い器壁		外面の釉が少し溶ける	
	12 A-45					SE01北整地土		口径14.4、器高2.1	薄い器壁			
	13 A-48						No.77	口径15.9、高台径8.8、器高3.6	薄い器壁、外：波寿状文			
	14 A-44						SE01北整地土	高台径7.3、器高1.6	外：唐草、端反り	素地は明灰色		
	16 A-33						SX04周辺	口径17.2、器高2.5	薄い器壁、外：唐草、端反り	素地は灰色	字款あり	
	17 A-37						包含層	口径12.8、器高5.9	青磁の技法で作られ、貫入が入る。白磁。玉縁状口縁	素地は明灰色	貫入、漆継ぎ	
	18 A-43						SE01周辺	高台径6.6、器高2.1	型作り、内面に溝	素地は明灰色		
	20 D-240				白磁碗	白鳥堀		No.136	口径12.2、高台径6.2、器高2.8	型作り	素地は明灰色	漆継ぎ、底に墨書
	21 D-51				白磁皿	白鳥堀		No.70	口径11.8、高台径6.9、器高3.1		素地は明灰色白磁の釉	
	22 A-30				青磁皿	白鳥堀		No.63	高台径9.0、器高2.4		全面せ釉、釉の掻き取りなし、内面輪花	漆継ぎ、貫入
	23 D-52				青磁大皿	白鳥堀	拡張区	No.65	口径12.4、高台径6.1、器高2.7	型作り	漆継ぎ	
	24 D-50				白磁皿	白鳥堀		No.64	口径3.1、器高1.6		全面施釉、釉の掻き取りあり	見込み灰かぶり
	25 A-31				白磁小杯	白鳥堀	SE01	たちわり	口径15.0	底部少し上げ底、噴出物あり	明灰色、焼膨れ顕著、黒色	
	26 D-207				瓶	白鳥堀		No.83	口径11.6、器高3.6	明灰色、砂っぽい	連弁の彫刻	
	28 D-211		朝鮮	陶器		白鳥堀		包含層	口径5.8、器高1.4	見込み饅頭心的	底面に目あと	
	29 A-38		瀬戸美濃	磁器	青磁碗	白鳥堀		包含層	口径5.6、器高1.3	素地は磁器的、灰色、釉は茶色	底面無釉	
	30 A-40				灰軸皿	白鳥堀		包含層	口径9.2、底径5.0、器高2.3	全面施釉	2次的被熱、灯明皿に転用	
	31 D-235				灰軸皿	白鳥堀		包含層				
	32 D-241											

Tab. 25 白鳥堀調査区出土遺物観察表

表割番号	種別1	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考
304	瀬戸美濃	陶器	灰釉皿	白鳥堀		No187	口径9.4、底径5.4、器高2.2	端反り	全面施釉	目あとあり
306	越前	土器	擂鉢	白鳥堀		No19	口径31.5、底径14.4、器高11.5	口縁下内面に段状の凹線	淡褐色、長石、褐色粒含む	2次の被熱
				白鳥堀		No194	口径22.9、器高5.2	口縁下内面に段状の凹線	暗灰色	
				白鳥堀	SX03	下	口径37.0、底径16.5、器高11.9	口縁内面下に凹線	淡黄褐色、長石	2次の被熱
				白鳥堀		No64	口径34.0、器高6.1	外面に凹線状	暗褐色、海綿骨片、小礫多く含む	
	備前系							口縁に3本の凹線	明灰色、焼膨れあり	内外面すすす付着、口縁上端が欠損、重ね焼のためか
					SX201			口縁に凹線?	明灰色、焼膨れあり	内外面すすす付着、口縁下端が欠損、重ね焼のためか
	越前	陶器	擂鉢	白鳥堀		包含層	底径11.0、器高4.3		淡赤灰色、長石多く含む	おろし目すり減り
						No10	底径14.3、器高5.9	底面にすす多く付着	灰色	2次の被熱
						包含層	底径13.3、器高5.5	底面にすす多く付着	淡褐色	2次の被熱
305	瀬戸美濃	陶器	天目碗	白鳥堀		包含層	口径11.6、器高5.5		素地は淡黄色	
						No不明	口径11.1、器高5.3		素地は白色、釉はいぶしたような灰褐色	
						盛土下包	口径11.6、器高5.7		素地は淡黄色、ス、黒色粒	
						含層	口径11.4、器高4.8		素地は淡灰色、スがはい	
						No19	口径11.2、器高4.0		素地は淡灰色、スがはい、胎釉	
						包含層	口径11.4、器高5.3		素地は白色、釉は暗い胎色	
						No128	口径12.4、器高5.5		素地は白色、釉は茶色	
						No82	口径11.7、器高3.8		素地は淡明灰色	小型品すぐに高台
						包含層	口径9.3、器高3.5		素地は淡黄色	漆継ぎ
				白鳥堀		No168	底径3.4、器高4.5	底部回転糸切り	素地は淡黄色、ス、黒色粒、釉は茶色と黒褐色のまだら	
				白鳥堀		SE01北整	口径13.5、器高2.0		素地は淡黄色、釉は褐色	
				白鳥堀		地土				
				白鳥堀		No108	底径12.0、器高5.4	底面、外面けずり	灰色、長石、黒色粒多く含む	鉢に再利用、墨書
	越前	陶器	鉢	白鳥堀		No198	底径8.4、器高1.9			
				白鳥堀		SE01石組	底径13.5、器高3.0			
					SX05	中				
					セクション	A	口径31.9、器高18.0、体部最大径41.4	口縁に2本の凹線	暗灰色	鉄錆釉
						包含層				灰釉が体部上半
					SX03		底径27.0、器高21.8、口径9.4、器高2.2、		黒褐色、底面に煤	灯明油痕強い
307		土器	皿	白鳥堀		No119				

図号	器物番号	種別1	種別2	器種	調査区	遺構	出土位置	法量	器形・文様の特徴	胎土・色調	備考				
307	2 D-54	土器	皿	白鳥塚	SD01	№71	口径7.3、器高2.1、								
3	D-407					口径9.2、器高2.2、									
4	D-56					包含層	口径10.7、器高2.9、底径4.5								
5	D-58					包含層	口径9.6、器高2.5、底径5.6							灯明油痕	
6	D-55					包含層	口径8.2、器高1.8、底径2.8							淡褐色、金雲母含む	
7	D-53					包含層	口径9.9、器高1.9、底径6.0							淡褐色、石英、赤色粒含む	
8	D-48					上層	口径11.0、器高2.3、底径6.0		SE01					石英小粒含む	
9	D-406					盛土5下	口径10.0、器高2.6、底径5.5							淡赤灰色、海綿骨片含む	灯明油痕
10	D-50					SE01北整地土	口径8.3、器高1.9、底径4.5								
11	D-46					№151	口径9.6、器高2.1、底径4.2							淡褐色	全面ススで黒い
12	D-154					P-1	口径9.8、器高2.2、底径4.5		SD01					灰白色、	灯明油痕僅か
13	D-44					SE01北整地土	口径7.6、器高2.1、底径4.9							石英、海綿骨片、赤色粒含む	灯明油痕
14	D-404					SX401横たわり	口径11.7、器高2.5、		第4面						
15	D-57					包含層	口径11.6、器高2.5、底径6.3							淡赤色、	灯明油痕
16	D-156					包含層	口径11.6、器高2.5、底径6.0							灰白色、海綿骨片多く含む	見込みに布痕跡
18	D-59					包含層	口径14.5、器高2.2							明褐色、金雲母、海綿骨片、赤色粒含む	
19	D-389						口径14.0、器高2.4		SD01						
20	D-61						口径15.3、器高2.3							淡赤灰色、海綿骨片含む	京都系、底面未調整、
21	19					土製品	紡鐘車	白鳥塚						黒褐色	2次の極熱
22	D-60						パントコ	白鳥塚							
23	D-49						土鈴	白鳥塚						頂部内面に絞り痕	
												長さ4.1、幅3.4		淡褐色、	

第9節 小結

調査区の割に多くの遺物を出土した。この多くは、整地土中に埋め込まれたものであり、いわば2次的に動かされた遺物群である。その性格については前章に於いて論及した

遺物の出土量のうち、多くを占めるのは木製品である。陶磁器類は221点で遺物箱4ケース分であり、金属器関係では113点で遺物箱2ケース分にすぎない。一方木製品は、約129点で遺物箱40ケース、漆塗り製品は37点の出土である。木製品や漆塗り製品が目立つのは、地下水位が高く保存に適した状態であったことばかりでなく、遺跡から持ち帰ったもののうち、サンプル的に持ち帰った杭がかなりの数に上っていることに起因する。したがって実際整地土に埋め込まれた遺物の比率では、それほど突出したものとはいえない。また、金属製品の多さは、調査地が鑄造鍛冶作業場であることから当然である。このような中において、36枚出土した古銭の多さ、そして無文銭と模鑄銭の多さが気になるところである。

杭以外の木製品のうち、建築部材とともに多くを占めるのは、用途不明の板材や曲物などに推定される容器類であるが、下駄の出土量も顕著である。かなり完形に近いものや未使用のものなど、特徴的である。また、漆塗り製品でも作りのよい優品が含まれているほか、材料を入れていた道具や塗りに使用した器具などが見られるという特徴がある。各遺物の廃棄される動機はさまざまであろうが、その供給元を暗示するようである。つまり、前章小結でも想定したような、付近一帯が手工業地域であったと考える。

そして、陶磁器の出土が相対的に少ないのは、基本的な生活領域ではなかったことを示していよう。輸入陶磁器や瀬戸美濃系茶器の数は、全体の40%を占め、土師器皿が33%を占めるという状況であり、一乗谷朝倉氏遺跡での土師器皿が70%を越えているのと対照的である。この組成比は、豊臣前期(1580~1598)の大阪城の一地点の組成と類似する。注意しなければならないのが、整地土中に廃棄された遺物群であり、遺構の性格の類似性を示すものではない。

上層と下層遺構の年代的な把握は困難であるが、陶磁器の年代幅の中である程度類推できようか。

陶磁器類の中に、志野や唐津製品、瀬戸美濃折縁灰釉皿、および黄瀬戸を含んでいないことを確認したい。志野は、瀬戸美濃大窯編年4期には生産され、文禄二年(1593)には大窯四段階が成立しているということである。消費地においても大阪城で豊臣前期に遡るものは無いという。また、唐津の生産は、天正頃と推定されており、慶長七年(1602)の茶会記に唐津焼きが記されているものの、大阪城豊臣前期の遺構面からごく少量の唐津が出土するにすぎず、唐津の消費地での出土は基本的に豊臣前期にはないと考えられている。このような点から、出土遺物群は16世紀末を下ることはないとする。そして、出土遺物群の全体的な印象は、大阪城石山本願寺期から豊臣前期の遺物層に類似し、豊臣後期(1599~1614)まで下らないと考える。さらに、金沢城では、文禄元年(1592)の石垣普請には、当該場所も改変されている可能性もあり、遺物の年代の下限をとらえることができよう。

輸入陶磁器は、出土土器量の14%強を占める。青花は41個体の出土である。304-1は饅頭心で小野編年第3期(16世紀後葉)に属し、見込み枝折花文や外面に濃みの技法が多用され、年代的にやや下ろうか。304-9の端反口縁の皿や青磁白磁の菊皿も同時期の遺物群豊臣前期に相当しよう。上層から伴っておりその年代の一端を示すものである。また、碁笥底の小碗(304-7)や皿は、16世紀中頃から後半にかけてよく見られるものである。また、304-8は陶胎である。白磁の占める割合が青磁よりも大きく、この点でより新しい傾向といえようか。朝鮮製のものには焼締陶器大型の瓶である。白磁類は確認できなかった。

瀬戸美濃系陶器は17%を占め、輸入陶磁器量よりも多い。その内訳は、天目碗と茶入れで70%近くにも達しており、茶陶の占める割合が高い。それ以外では、304-29青磁碗は金沢御堂期まで遡ってもよい遺物である。304-30は菊皿風になっており、天正初期に属するものである。丸皿には、直口縁と端反り口縁があるが前者の方が個体数が多い。見込みに印花を押すものがあり、これらもまた金沢御堂期に属してもよい遺物である。多くを占める天目碗のうち全形のわかるものは少ない。未実

測品で輪高台が1点見られ、大窯第4段階相当と考えられる。また筆者は天目碗の編年をよく理解していないが、編年図から見ると、大窯第3に相当すると考える。瀬戸市史によると、大窯第3段階を1555～1590年と考えており、概ね輸入陶磁器の時期幅に収まるようである。

播鉢のうち作見窯の可能性のある備前系が2個体出土している。備前系はこれ以降ほとんど出土せず、特徴的である。また、土師器皿では、京都系を写したものが数個体見られ、このタイプには灯明油痕が残されていないが、小形の一群には灯明油痕が少なからず見られる。用途の違いであり、前者が儀礼に使うような「かわらけ」である。30%強を占める土師器皿の割合が、他地域と比べて多いのか少ないのか判断できないが、少なくとも越前一乗谷朝倉氏遺跡の総体とは違うようである。むしろ大阪城三の丸の中央体育館に伴う発掘調査地点に類似する。時期的な要因であろうか。

以上のように、出土土器は、16世紀第3から4四半期にかかる年代が想定され、最終末を1592年と考えることができる。つまり、金沢御堂建立から金沢城築城までの年代幅に収まる鑄造鍛冶活動を示す遺構群である。

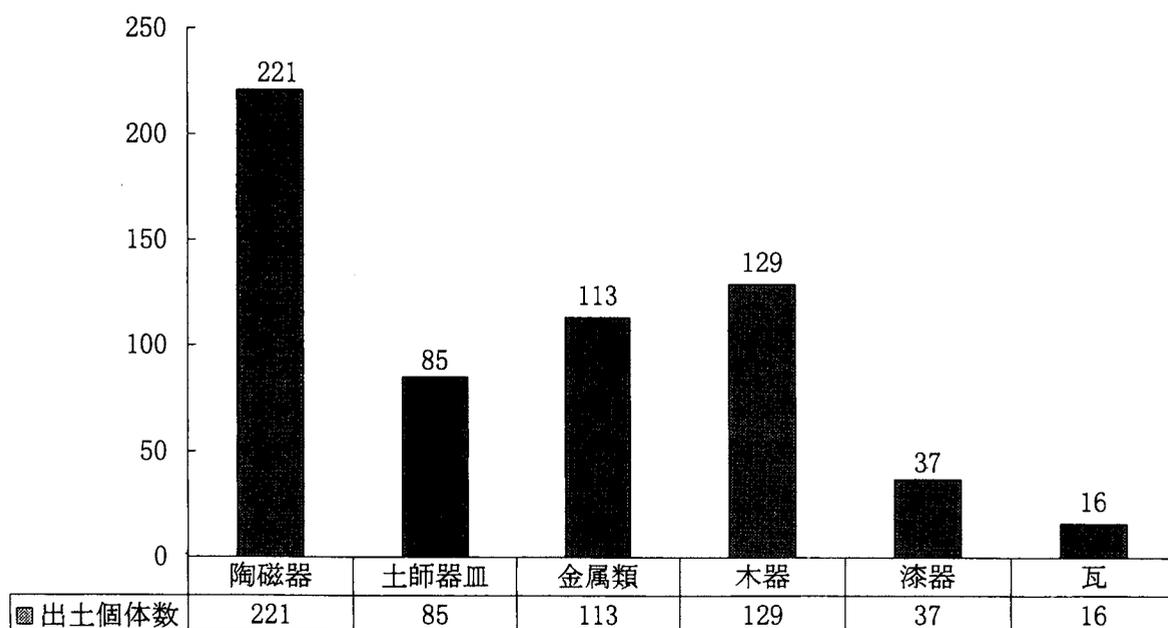


Fig. 332 白鳥堀調査区出土遺物の数量

POS. NO. 1

COMMENT : KSJ-142
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

29-JUL-96

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIP			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	199	*****	TI-k	2.75	1164	*****	BI-1	1.14	50	*****
RE-m	6.73	371	*****	BA-1	2.78	107	*****	PB-1	1.18	49	*****
SR-1	6.86	203	*****	CS-1	2.89	77	*****	TL-1	1.21	51	*****
W -m	6.98	239	*****	SC-k	3.03	82	*****	HG-1	1.24	58	*****
SI-k	7.13	14879	*****	I -1	3.15	67	*****	AU-1	1.28	51	*****
TA-n	7.25	174	*****	TE-1	3.29	51	*****	PT-1	1.31	52	*****
RB-1	7.32	129	*****	CA-k	3.36	1879	*****	IR-1	1.35	42	*****
HP-m	7.54	88	*****	SB-1	3.44	118	*****	OS-1	1.39	50	*****
LU-m	7.84	78	*****	SN-1	3.60	35	*****	ZN-k	1.44	37	*****
YB-n	8.15	80	*****	K -k	3.74	1109	*****	CU-k	1.54	35	*****
AL-k	8.34	4517	*****	IN-1	3.77	35	*****	NI-k	1.66	29	*****
BR-1	8.37	396	*****	U -m	3.91	26	*****	TM-1	1.73	30	*****
ER-m	8.82	48	*****	CD-1	3.96	34	*****	CO-k	1.79	33	*****
SE-1	8.99	53	*****	TH-m	4.14	28	*****	FE-k	1.94	3089	*****
HO-m	9.20	41	*****	AG-1	4.15	25	*****	GD-1	2.05	17	*****
DY-m	9.59	41	*****	PD-1	4.37	18	*****	MN-k	2.10	24	*****
AS-1	9.67	38	*****	RH-1	4.60	15	*****	EU-1	2.12	16	*****
MG-k	9.89	533	*****	CL-k	4.73	18	*****	SM-1	2.20	8	*****
TB-n	10.00	45	*****	RU-1	4.85	14	*****	CR-k	2.29	12	*****
GE-1	10.44	22	*****	S -k	5.37	14	*****	ND-1	2.37	8	*****
GA-1	11.29	27	*****	MO-1	5.41	10	*****	PR-1	2.46	6	*****
NA-k	11.91	184	*****	NB-1	5.72	6	*****	V -k	2.50	8	*****
**	14.72	6	*****	ZR-1	6.07	6	*****	CE-1	2.56	8	*****
F -k	18.32	5	*****	P -k	6.16	4	*****	LA-1	2.67	4	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

NA MG AL SI K CA TI PE SB ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

SE Y

Fig. 381 鉄製品 (KSJ-14、その2) 鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 21と対応)

POS. NO. 4

COMMENT : KSJ-151
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

29-JUL-96

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIP			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	307	*****	TI-k	2.75	150	*****	BI-1	1.14	105	*****
RE-m	6.73	255	*****	BA-1	2.78	139	*****	PB-1	1.18	93	*****
SR-1	6.86	220	*****	CS-1	2.89	113	*****	TL-1	1.21	86	*****
W -m	6.98	219	*****	SC-k	3.03	108	*****	HG-1	1.24	95	*****
SI-k	7.13	887	*****	I -1	3.15	100	*****	AU-1	1.28	84	*****
TA-n	7.25	188	*****	TE-1	3.29	85	*****	PT-1	1.31	81	*****
RB-1	7.32	159	*****	CA-k	3.36	158	*****	IR-1	1.35	76	*****
HP-m	7.54	108	*****	SB-1	3.44	74	*****	OS-1	1.39	81	*****
LU-m	7.84	85	*****	SN-1	3.60	63	*****	ZN-k	1.44	67	*****
YB-n	8.15	83	*****	K -k	3.74	103	*****	CU-k	1.54	63	*****
AL-k	8.34	252	*****	IN-1	3.77	47	*****	NI-k	1.66	55	*****
PR-1	8.37	88	*****	U -m	3.91	51	*****	TM-1	1.73	45	*****
ER-m	8.82	52	*****	CD-1	3.96	46	*****	CO-k	1.79	68	*****
SE-1	8.99	55	*****	TH-m	4.14	34	*****	FE-k	1.94	10987	*****
HO-m	9.20	53	*****	AG-1	4.15	37	*****	GD-1	2.05	31	*****
DY-m	9.59	44	*****	PD-1	4.37	30	*****	MN-k	2.10	26	*****
AS-1	9.67	45	*****	RH-1	4.60	28	*****	EU-1	2.12	22	*****
MG-k	9.89	57	*****	CL-k	4.73	18	*****	SM-1	2.20	16	*****
TB-n	10.00	34	*****	RU-1	4.85	22	*****	CR-k	2.29	20	*****
GE-1	10.44	29	*****	S -k	5.37	26	*****	ND-1	2.37	15	*****
GA-1	11.29	31	*****	MO-1	5.41	15	*****	PR-1	2.46	12	*****
NA-k	11.91	32	*****	NB-1	5.72	8	*****	V -k	2.50	22	*****
**	14.72	9	*****	ZR-1	6.07	8	*****	CE-1	2.56	9	*****
F -k	18.32	11	*****	P -k	6.16	20	*****	LA-1	2.67	8	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

MG AL SI P K CA PE ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

S NI GD HO BI

Fig. 382 鉄製品：釘 (KSJ-15、その1) 鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 22と対応)

POS. NO. 1

COMMENT : KSJ-152
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
 STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

29-JUL-86

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -l	6.45	277	*****	○ TI-k	2.75	209	*****	BI-l	1.14	81	*****
RE-m	6.73	315	*****	BA-l	2.78	115	*****	PB-l	1.18	79	*****
SR-l	6.86	214	*****	CS-l	2.89	108	*****	TL-l	1.21	71	*****
W -m	6.98	227	*****	SC-k	3.03	93	*****	HG-l	1.24	77	*****
◎ SI-k	7.13	6807	*****	I -l	3.15	86	*****	AU-l	1.28	66	*****
TA-m	7.25	170	*****	TE-l	3.29	72	*****	PT-l	1.31	76	*****
RB-l	7.32	140	*****	○ CA-k	3.38	903	*****	IR-l	1.35	71	*****
HP-m	7.54	109	*****	○ SB-l	3.44	93	*****	OS-l	1.39	73	*****
LU-m	7.84	89	*****	SN-l	3.60	53	*****	ZN-k	1.44	82	*****
YB-m	8.15	81	*****	○ K -k	3.74	557	*****	CU-k	1.54	53	*****
◎ AL-k	8.34	2128	*****	IN-l	3.77	52	*****	NI-k	1.66	52	*****
BR-l	8.37	218	*****	U -m	3.91	39	*****	TM-l	1.73	38	*****
ER-m	8.82	52	*****	CD-l	3.98	42	*****	CO-k	1.79	50	*****
SE-l	8.99	53	*****	TH-m	4.14	42	*****	◎ FE-k	1.94	8159	*****
HO-m	9.20	48	*****	AG-l	4.15	30	*****	GD-l	2.05	22	*****
DY-m	9.59	41	*****	PD-l	4.37	22	*****	○ MN-k	2.10	42	*****
AS-l	9.87	39	*****	RH-l	4.80	27	*****	EU-l	2.12	18	*****
○ MG-k	9.89	215	*****	CL-k	4.73	25	*****	SM-l	2.20	19	*****
TB-m	10.00	39	*****	RU-l	4.85	20	*****	CR-k	2.29	15	*****
GE-l	10.44	29	*****	S -k	5.37	13	*****	ND-l	2.37	14	*****
GA-l	11.29	23	*****	MO-l	5.41	13	*****	PR-l	2.46	11	*****
○ NA-k	11.91	103	*****	NB-l	5.72	6	****	V -k	2.50	21	*****
**	14.72	10	****	ZR-l	6.07	9	*****	CE-l	2.56	8	*****
F -k	18.32	6	****	P -k	6.16	8	*****	LA-l	2.67	9	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 NA MG AL SI K CA TI MN PE SB ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 NI SE CS

Fig. 383 鉄製品：釘 (KSJ-15、その2) 鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

注

- ① 広岡公夫、田中彰子、影山久美子「金沢城跡炉跡の考古地磁気測定」『石川県立埋蔵文化財センター年報』 第15号（平成5年度） 石川県立埋蔵文化財センター 1995
- ② 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』 1968。ウスタイトの硬度値は、450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvとある。
- ③ 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘年報 15』（シンポジウム 古代製鉄研究の現状：記録集） 千葉県立房総風土記の丘 1992
- ④ 伊藤雅文、金山哲哉「金沢城跡石川門前土橋下検出の炉跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報』 第15号（平成5年度） 石川県立埋蔵文化財センター 1995 原文に対して筆者加筆がある。
- ⑤ 調査担当者の伊藤雅文氏の遺跡調査概要と分析調査試料説明の私信。
- ⑥ 岸本定吉「炭」
- ⑦ 大澤正己「岡山城二ノ丸遺構出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『岡山城二ノ丸跡』（岡山県埋蔵文化財報告 78） 岡山県教育委員会 1991
- ⑧ 大澤正己「いわき市タタラ山遺跡出土鉄滓と鉄塊系遺物の金属学的調査」『常盤自動車道遺跡調査報告4』（福島県文化財調査報告 316集）（助福島県文化センター・福島県教育委員会 1955
大澤正己「長崎遺跡出土鍛冶滓の金属学的調査」『長崎遺跡 IV 遺物・考察編』（助静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第59集。助静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995
大澤正己「姥久保遺跡出土椀形鍛冶滓の金属学的調査」『姥久保』（多摩川中流域における低地遺跡の調査） 日野駅北区整理地区遺跡調査団 1997
大澤正己「諏訪町C遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『諏訪町C遺跡』 諏訪町C遺跡発掘調査団（神奈川県平塚市） 1997
大澤正己「神正遺跡・鍛冶屋河内地区出土鉄滓の成分分析報告」 パリノ・サーヴェイ株式会社提出（山口県阿知須町教育委員会） 1998

第8章 「文献・絵図からみた石川門前」

濱岡 伸也

はじめに

1983年（昭和58）の「金沢御堂・金沢城調査」が始められた頃から、「金沢城に関しては、文献資料や絵図資料は非常にたくさん残っている」と、一般にはよくいわれてきた。確かに数量的には豊富であるが、内容的には同一或いは類似のものも多く、具体的なテーマにしたがって調査を始めたとき、関係する資料に出会う確立が極めて低いことも、研究者の間では「自明の理」のようになっている。また、文献資料の内容と絵図資料の内容の食い違いが指摘されることもしばしばであった。これらは、金沢城研究に関わった人たちが幾度となく立往生を余儀なくされた「大きな壁」となりつつあったのである。そのころから、金沢城における埋文調査の必要性が重要な課題としてより多くの人々に認識されるようになった。

そして、さきの調査に伴う「金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ（文献史料編）」が刊行された翌92年からこの金沢城跡石川門前の発掘調査が始まったのである。調査は、金沢の中で最も人目に付く場所という条件に加えて、「金沢城に対して公が行う初めての発掘調査」という認識から、県市民・観光客に加えて県内外の研究者も含めて大きな期待と関心を寄せるものとなった。その発掘の調査報告書Ⅰが今年3月に刊行され、石川門前の土橋（通称石川橋）について興味深い事柄が報告されている。

本稿は、その成果を受けて、絵図資料と文献資料からこの「石川門前」に迫ろうとするものである。

1. 江戸前期における「石川橋」の構築

発掘調査によって、「石川橋」は四回の大工事を経て、現在から遡りうる最古の写真資料である明治10年代のその姿になったことが示された⁽¹⁾。1回目は16世紀前半、金沢御堂の通路として整備されたもの。2回目は16世紀末から17世紀初頭、佐久間盛政や前田利家が反対勢力を鎮圧して入城し整備したもの。3回目は17世紀前半、寛永8年（1631）の火災をうけて整備されたもの。最後は18世紀末から19世紀前半、世の近代化への流れのなかで整備されたものである。それぞれ盛土の重なり具合や含まれる遺物などによって比定されたものである。

この指摘に対し、文献や絵図資料による通説との確認を行ってみたい。

金沢城の歴史は、現在のところ、宝暦9年（1759）の火災を画期として二期に分けられており、その歴史を念頭に置きながら「石川橋」の構築について見ていくこととする。

（ア）16世紀前半

この時代は指摘されるとおり金沢御堂創建の時期であり、諸説はあるものの現在では天文15年（1546）創建説が有力視されている。発掘調査では、この期の路面が明治末からの路面より約6mほど下がることが確認された。また、「石川橋」北側（白鳥堀側）から鑄造遺構や石組井戸など町をイメージさせる遺構が確認され、「石川門前には堀が広がる」という通説的理解に新たなページを加えることとなった⁽²⁾。

ところが、この時期の資料はまったくといっていいほど残っていない。時代的には新しいが、当時のことを記録しているものとしては下記のような記録がある⁽³⁾。

「七里参河下向して山崎山に御堂建居住す、今の御本丸の地なり。杉浦壹岐御堂衆として道場を建、今の二之丸の地也。三林善四郎同道場を建、三之丸の地也。」

『金城深秘録』にみえるもので、文政8～9年（1815～6）の写本であり、原本の成立年代は分からない。同様の記載は『金沢古蹟志』にもみえるが、そこには「老人道塗謂焉」とあり、老人たちの間で語り継がれてきたものという曖昧な表現になっている⁽⁴⁾。もちろん、『古蹟志』の成立も新しく

明治 24 年 (1892) のことである。

また、富田景周の「来因概覧附録」(寛政11年=1799)には、「極楽橋は、古へ本源寺御山城中に在りしとき、此の橋下より死人の葬棺を送りしゆゑの遺名と云ふ。⁽⁵⁾」や「二丸は、天正の初賊魁坪坂伯耆居す。⁽⁶⁾」とある。

同時代の資料ではないので、どの程度真実に近い描写かということは論じがたいが、少なくとも藩政期に認識されていた金沢御堂時代の「城域」の景観は下記のようなものであった。

- ・本丸、二之丸、三之丸というようなエリアの使い分けがなされていた。

(そのエリアは、明確に区画されていたものかどうかははっきりしないが)

- ・本丸と二之丸は塹濠のようなもので分かれており、底が通路になっていた。
- ・その通路を跨いで本丸と二之丸を往来したのが極楽橋である。

(イ) 江戸初期 (16世紀末から 17世紀初頭)

発掘報告では、この時期に「石川橋」の現在への基盤ができたとする。幅が非常に広くなり、盛土の量も最大である。辰巳用水の木樋が確認されたのもこの層である。また、城内鶴之丸から百間堀、白鳥堀へと谷地形が巡っていたとし、埋めたのは佐久間盛政かと推定している。

この時代は、金沢御堂から佐久間盛政居城、さらに前田利家(以降前田氏)居城としてその地の主が替わっていったのであり、当時を論じた記述も多い(しかし、ここでも同時代の記述となると皆無に等しいのであるが)。

まず、天正 8 ~ 11 年 (1580 ~ 3) の佐久間時代についての記述からみていこう。「盛政みづから城縄を改め、東方に塹を掘り、西町口を正門となし、居城とす。然れども斯の時未だ単垣列柵のみと云ひ伝えて⁽⁷⁾とあり、「道場を改め、石垣を築き、御山を尾山と改字す⁽⁸⁾や、「初めて城郭の形勢をなし、惣構・一二の曲輪を別ち、本丸の周囲に塹濠を鑿ち、西町口を大手となし、御山を改めて尾山と称したりといはる⁽⁹⁾と記されている。また、「甚だ狭少の城下にて、漸く初めて市街を建て、町名を呼ばしめたりといふ。博伽雑談に云ふ。佐久間玄蕃尾山在城の頃、本町を尾山八町と云ふ⁽¹⁰⁾とも記されている。

これらの記述から窺えることは、金沢城跡の地が佐久間によって初めて城としての形勢をみたと認識されていたということである。惣構えを意識し、大手(西町口)を定め、尾山八町を作り、御山を尾山と改称したという。なかに「東方に塹を掘り」とあることからこのとき百間堀が作られたとされてきた。残念ながら谷地形を窺わせる記録は見つからない。

次に、天正 11 年以降元和頃までの前田初三代についての記述をみていこう。天正 19 年 (1591) 11 月には、「西の丸に村井豊後守在住〔古き当城の図の屋布割のあるにて可見、暗には慥に不覚〕⁽¹¹⁾とあり、翌文禄元年 2 月にも「二三の丸・西の丸・北の丸まで人持衆並居て、屋敷相渡り、屋形々々美々敷ぞ立られければ、大坂・駿河に相続き、名城とこそ申けれ⁽¹²⁾と記され、この頃には金沢城の内部がいくつかの曲輪に分けられ、それぞれに重臣の屋敷が建てられていたことがわかる。

また、「佐久間玄蕃しばらく居城して、かきあげて城の形になし、夫より御取立ありて、山城に被成、惣構・一二の曲輪・本丸の廻り堤をほりけり⁽¹³⁾とあって、前田の時代になって各曲輪の廻りを堀で囲んだとし、文禄元年 2 月に前田利長が篠原出羽守に命じて東の丸高石垣の積み直しをさせたとあり、「出羽守承りて、石垣を八歩通りつき立て、少えんを出してつき、成就しければ、利長公以の外御腹立にて、高石垣に段をいたしたる事は、沙汰の限りと被仰出けれども、出来の上は是非に不及して、御堪忍ぞ被成ける⁽¹⁴⁾と記す。よく知られた逸話であり、百間堀から東の丸卯辰櫓・辰巳櫓へ立ち上がっている高石垣がこのとき完成したとする。

さらに、慶長 4 年 (1599) には、「此年之浮沈ニ依て、金沢の御城廻り惣構堀普請、此年十月五初翌年三月迄ニ御出来、尤土普請之由⁽¹⁵⁾として、内惣構堀がつくられた。

一方、この時期の一連の城普請の関係をすべて高山南坊の縄張りとする見方もあり、「高山南坊〔伝詳本記慶長四年。〕に経始を命じ、改めて小坂口〔今の河北門。〕を正門となし、より、世々相承けて動くことなし。蓋し当城は子丑の間に向ふ。(中略)文禄元年壬辰国祖の命にて、世子瑞龍公当城

の壘石を編築せしめ、〔相伝ふ、是までは土築のみにて、石櫓にする所僅かに其の要害のみにてありしと云ふ。〕小立野の方を斫りぬき、地底に陰樋を設けて水條を引き通す。是より尾山を改めて金沢城と号す。〔此の時改称のこと古説に従うて茲に記す。但し新たに改号するには有るべからず。金沢の古称に本づきて尾山を改むるならん。○三壺記に此のとき二三の丸・西北の丸まで人持の居第並列也と云ふ。〕慶長四年己亥の冬、浪華に於て増田長盛等姦計の讒により、国祖と東照大君と寡ありて、俱に疑団を生ずるによりて、瑞龍公越中より金沢へ還城あり。〔時に公富山巡見の為に越中にあり。〕再び高山南坊に命じて城堅を修め、城下の羅郭をなし内壘を掘らしむ。僅に二十有七日〔一説僅為七日。〕にして盡く成る。〔是土普請にて成ると云ふ。〕¹⁶⁾と記されている。

さらにこの後、慶長にはいると、慶長7年(1602)10月晦日には落雷により天守閣が炎上・焼失し、¹⁷⁾天守に替わるものとして三階櫓が設けられたり、同10年からは利長隠居・利常襲封に際して生じた歪みの修正の一環としての城下町再編整備が行われていくのである。

そして、この時期にいたって初めて絵図が存在する。原図の作成年代は不明であり、描かれた形は大きく異なっているが、内容はいずれも慶長期のものと考えられ、「東大図」¹⁸⁾は慶長10年頃、「京大図」¹⁹⁾は慶長16~19年頃の様子を描いたものと推定している。この二図を比較検討することによって、当時の築城に関する興味深い事柄が読み取れる²⁰⁾。そのなかから次の3点を指摘しておきたい。

- ・石川門の向き(枡形)
- ・尾坂門(大手門)の向き(枡形)
- ・二の丸と三の丸を区画する内堀の有無

まず、石川門であるが、枡形の向きがいずれも現在とは異なり、一の門を入れて左折する形になっていることである。これは、城内に重臣屋敷が入っていることと密接に関わっているものであり、現存する多くの絵図(重臣屋敷が城外へ出された後のもの)が現在と同じ配置を描いていることとは大きく異なっている。加えて、「東大図」では一の門が「石川橋」側に迫り出した形の単立で描かれてお

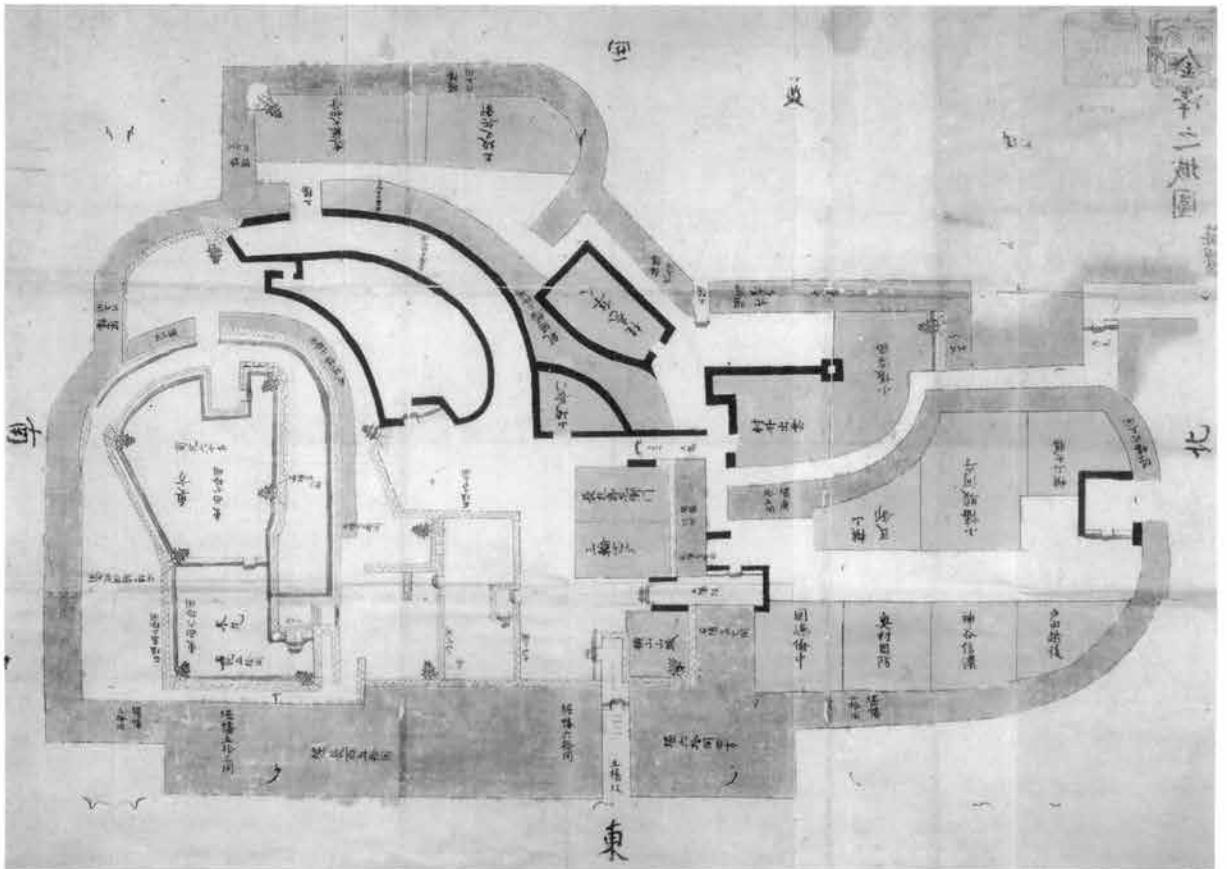


Fig. 384 加州金沢城図(東京大学附属図書館)

り、発掘調査からの「辰巳用水の木樋を延長していくと石川門北側の多聞櫓東側面に衝突する」という指摘と併せて石川門の改築時期の確定が待たれる。

尾坂門の向きと内堀の有無は、二種の慶長図の大きな相違点であり、その相違が起こった時期が「近世の金沢城」の確立時期と考えられる。この視点から論じてみたい。尾坂門付近は、「東大図」では門内の通路の両側に侍屋敷が並んでいるが、「京大図」では西側の区画の屋敷が跡地の扱いで描かれている。この地は後に作事所が置かれたところであり、侍屋敷の撤去・門の付け替え（向きの変更）・作事所の設置が一連の整備事業として行われたものと考えられる。ところが、寛文8年（1668）に幕府へ提出した絵図の写しである「加賀国金沢之図」（通称、寛八図²¹）に描き込まれた金沢城図では、城内で唯一この地にのみ「侍屋敷」との表記が有り、門の向きは現在の向きに替わっている。このことは、「東大図」で横山大膳ら3名の屋敷として描かれた地が、「京大図」で跡地となり、「寛八図」で新たな侍屋敷が設置されていたということを示すものであろうか。否、とするならば、「京大図」の記述はさておくとして、慶長から寛文までは同じ侍屋敷が存在していたということであろうか。この地に設置された作事所の創設年代がはっきりしない今、疑問の提示にとどめておく。

次の、二之丸と三之丸を区画する内堀（三之丸御堀という）についてもいくつかの疑問が存在する。絵図内容の比較検討から、「京大図」に描かれたのが初見とされてきた。年代が確定できる図としては「寛八図」に描き込まれているのが初見である。また、元禄以降18世紀初頭の絵図とされる「金沢城図」（金沢市立玉川図書館²²）や「金沢城中総絵図」（石川県立歴史博物館²³）にも描かれており、これ以降の絵図には必ず描かれている。この内堀で問題になるのが菱櫓下のその形である。「京大図」以降ずっと描かれている堀は、橋爪門下から北上し、菱櫓下で一折りして西へ走る。ところが、18世紀初頭の二図だけは、菱櫓下で二折りしているのである。この二図は、内容的には非常によく描かれており、文献記録との照合でもいくつかの一致をみており、あやふやな概念図とは程遠いものであるだけに、この相違点は大きな障害となっている。この点も解明していかねばならない課題であ

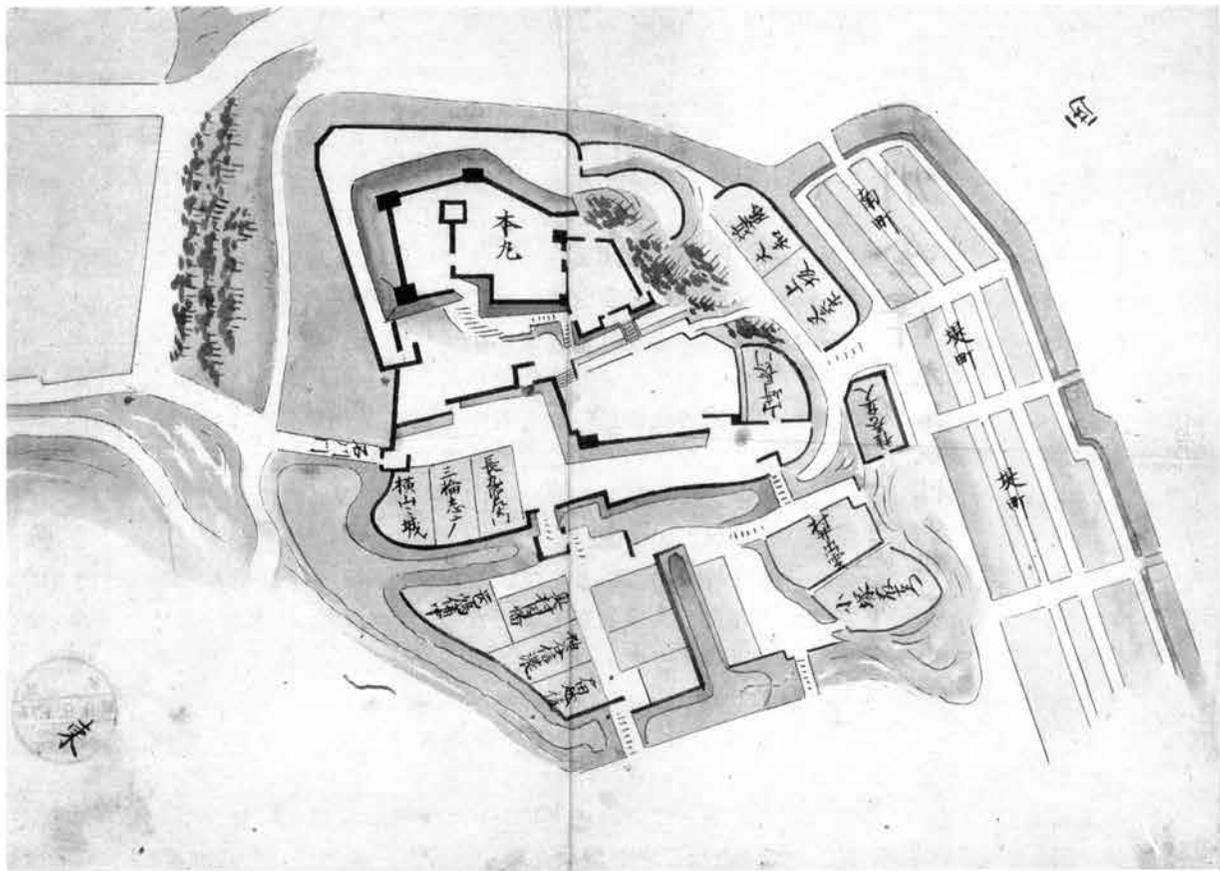


Fig. 385 加州金沢城図（金沢市立玉川図書館）

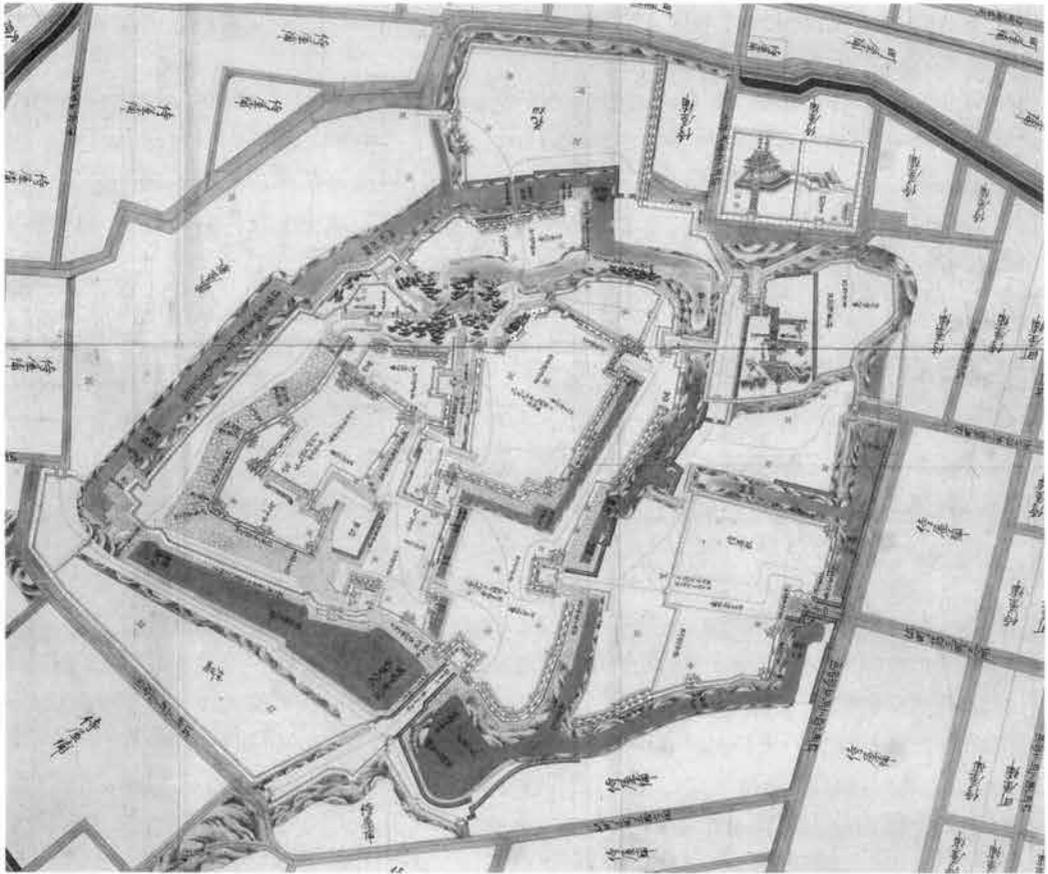


Fig. 386 加賀国金沢之図 (部分) (金沢市立玉川図書館)

る。

これだけを確認してもう一度二種の慶長図に戻ろう。

内容的検討によって得た「京大図」は慶長16~19年頃の様子を描いたものとの推定は概ね的を得ていると考えられる。しかし、数点確認される「京大図」の元図ともいふべき「加州金沢城図」(金沢市立玉川図書館)が、元禄5年(1692)有沢永貞によって描かれた「諸国居城之図集」(164枚)のなかの1枚であるという事実²⁴を指摘しておかねばならない。これは、一つの可能性として、「東大図」を考証した有沢が、現状地形に合うように書き改め、その時点で自らの考証による訂正(?)を加えているともみられることである。地形による城地の輪郭がそれ以降の城図と同様実際の地形に準じていることはもちろんのこと、内容においても藤右衛門丸(北之丸とも)の住人が小塚淡路から小塚藤右衛門になっていること、尾坂門西側の屋敷地の住人名が空白になっていること、三之丸御堀の記載があること、城下町の町名があることなどがそうした可能性を想起させている。

この視点にたつと、なおさら「東大図」に記載されている内容が重要視されてくる。石川門一の門の位置、「石川橋」上に記された「土橋坂」の表記、三之丸御堀がない等々は何を意味しているのだろうか。逆に考えれば、少なくとも元禄頃の認識として、石川橋の傾斜が坂と呼ぶほど急なものではなくなっていたこと、三之丸御堀の存在が常識的なものとなっていたことが考えられるのである。

(ウ) 17世紀前半(寛永火災以後)の構築

焼土層の分析や辰巳用水木樋の埋設土層、出土遺物の分析などによって、1620~40年頃の構築と推定し、辰巳用水についても、寛永9年(1632)に敷設したが通水が悪いためにすぐに除去され土樋がかさ上げされたのではとの仮説が示されている。

まず、寛永火災についてみていこう。寛永8年4月14日金沢城下から起こった火災が城内に燃え移ったものである。その記載は、「御城之辰巳之御櫓ニ火懸リ、御本丸御焼失。火之粉ニ而江戸町焼、田井口悉ク焼通、金谷町ニ而火ハ留ル」⁽²⁵⁾とあり、その復興にあたって「二三之丸ひとつに被成、御

作事可在之付、芳春院丸西之堀被成御掘度」⁽²⁶⁾行なったとある。詳細は分からないが、記録されている罹災方向が本丸から江戸町への「石川橋」方面であり、その復興作業の一環としての整備の可能性は十分考えられる。

加えて、同年5月4日にも城下川原町から出火し、「段々大火ニ相成通り町等不残焼失」⁽²⁷⁾した。この焼失した通り町というのが「金屋町」で、これ以後森下へ移転し、跡地が「金谷御屋敷」となったのである。また、「右火事之節、土橋一ノ御門御焼失候哉。御絵図ニ一ノ御門有之所、当時右御門無之、右火事ニ御焼失、其後不被仰付哉。御焼失之儀不詳。公辺江被上候御絵図ニハ重而御書加と申儀者不被為成故、御絵図には謂有之候哉共被存候事」⁽²⁸⁾、「御広式口切手御門、昔之御門有所ハ当時之御門下之方堀ノ中程ニ有之躰也。右火事ニ付切手御門付替り、当時之所ニ相成候与相見江候。往古之切手御門有所者土橋御門入候得者直ニ見江候而大キニ不宣也。何レ御焼失に付付かハリ候儀と相考候」⁽²⁹⁾とあり、二之丸北西方面で、土橋一の門が焼失して再建に至らなかったことや、切手門が火事の後付け替えられたことなどが推察されている。この記録自体は文化年間（19世紀初頭）以降の成立であるが、その頃の認識として、寛永年間の火災以降に二之丸周辺（狭い範囲に限定しても二之丸の北西）部分でかなり大規模な工事が行なわれたものと考えられていたと思われるのである。

さらに、先の寛永火災の後、城内の水利の不便解消のために辰巳用水の敷設が計画され、翌9年に完成したといわれている。しかし、辰巳用水完成の記録の中には、「寛永八辛未金沢町中水不自由に付、水道を取事、小松町人板屋兵次郎巧に仍て、犀川之辰巳と云所より水を掘上、町中へ水道を引」⁽³⁰⁾とあり、「此水町之内を通し、越前福井のごとく有けれ共、餘分は埋樋に成て、所々江水を取。小立野並下段之荒地、其時分より田地と成る。栗林村・セツ屋村・上笠前村之田地はより初まる」⁽³¹⁾とあって、小立野周辺の灌漑用水としての利用は記されているが、金沢城内へ水を引いたとか、城内の堀へ水を入れたというような記述は見られないのである。

しかも、最近の研究では、寛永9年以前から辰巳用水（名称はさておくとしても）の存在が確認できるとされ⁽³²⁾、ますます寛永8年の火災との関係が希薄化されてきており、実際に「石川橋」の上を通水したのがいつのことであるのか、通水が悪くてその施設を捨て土橋を嵩上げしたとの仮説が妥当なものかどうか、文献資料の再調査とともに新たな手がかりの発見が待たれるところである。

2. 江戸後期以降の「石川橋」の構築

江戸後期の金沢城は、宝暦火災の後に再建されたものであるが、本丸が形骸化され、名実ともに城の中心が二之丸に結集したところから始まる。その後は、火災や地震の被害はあるものの、その曲輪ごとでの建て替えが主で、縄張りに大きな変化を見るような修理・改変はないというのが一般的な理解である。「石川橋」周辺を中心にしてみた場合はどうであろうか。

(エ) 江戸末期（19世紀）の構築

報告書では、盛土の時期比定から寛政11年（1799）の地震を取り上げ、それ以降に整備されたものとしている。

この時期の石川門周辺の整備としてまず注目されるのが、天明7年（1787）の石川門普請⁽³³⁾である。石川門は、宝暦9年（1759）の大火によって城のほかの部分と同じように焼失していた。天明3年から再建の普請が始まり、一時中断されたが同7年11月に完成したのである。

次いで、寛政11年の地震である。「（寛政）同十一年五月就地震御城中御石垣数十ヶ所破損仕候ニ付、公辺御届絵図御用被仰渡相勤」⁽³⁴⁾とあるように、城内数十カ所で石垣の破損が見られたという。それ以後この地震による被害の復旧と見られる普請が続く。石川門周辺に限って拾うと、同12年11月紺屋坂上腰懸御門出来⁽³⁵⁾、同年12月石川御門外水御門出来⁽³⁶⁾、享和元年（1801）10月から文化3年（1806）にかけて石川御門続御櫓下の孕んだ石垣の修復⁽³⁷⁾と続いている。

文化5年（1808）には二之丸御殿が火災によって焼失しているが、石川門付近の目立った被害は記されていない⁽³⁸⁾。

安政2年（1855）になると、寛政よりもさらに大きな地震が起こった。2月1日の地震によって、

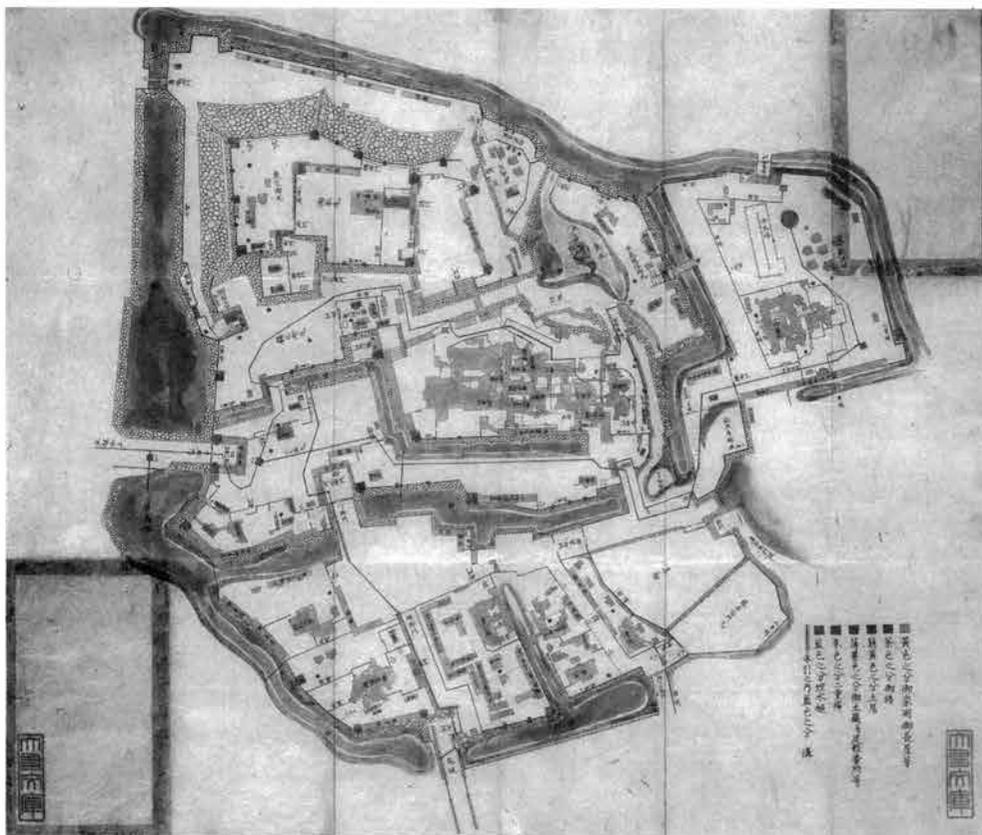


Fig. 387 金沢城図
金沢市立玉川図書館

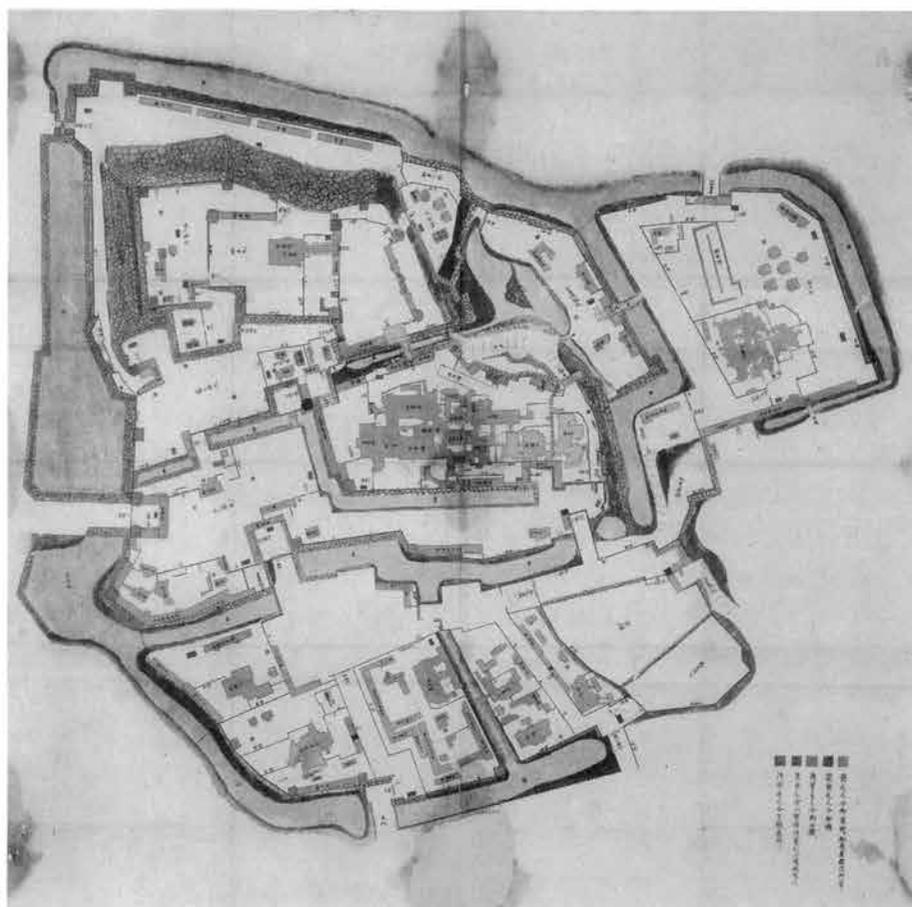


Fig. 388 金沢城中総絵図
石川県立歴史博物館

「石川御門一之御門前より水御門迄迄之間百間堀之方、地割目出来、夫より水御門より蓮池之方三・四間計退き、百間堀縁五・六間計余程地割、御堀御石垣茂孕出申候。」状態となった⁽³⁹⁾。さらに翌日には「百間堀縁水御門続御石垣併駒除共御堀江崩落」するところとなった⁽⁴⁰⁾。

これを、加賀藩が幕府へ提出した「加賀国金沢城石垣破損絵図」⁽⁴¹⁾によってみると、さらに詳しい状況がわかる。

まず、「石川橋」の百間堀側石垣について「此所石垣高三間長拾三間孕居候処今度地震ニ而孕増申候」とあり、すでに孕みつつあった石垣の孕みが増大した。また、兼六園側角にも「此所石垣高三間長八間今度地震ニ而崩申候此続長拾間余孕申候」とあり、崩落や孕みの被害が大きかったことを記している。

さらに、反対側の白鳥堀側にも、石川門側の角付近に寛政11年の地震と文化5年の火災の際に破損したまま普請できていない箇所が書き入れられている。

これらの修復がきちんとなされたのかどうかの記録はない。さらに、「石川橋」構築との因果関係もこれらの資料だけでは分からない。しかし、これだけの崩落、孕み、火災、普請が続いているのであるから、計画的にしる、偶然的にしる、「石川橋」の形態や構造に少なからず影響を与えたことは十分に考えられることである。

また、前項で研究課題を提示するにとどめた辰巳用水についても、この当該時期である天保期(1830~44)に順次石管に置き換えられていったといわれており、「石川橋」で確認された石管の埋設が、上記の出来事とどのように関わっているのか、あるいはまったく独自の事業として行なわれたものか、といった新しい課題も生じてきている。殊に、「石川橋」上の辰巳用水を含めた金沢城内の水路については、興味深い事が指摘される。城内の水路を記した絵図は非常に少ないが、幸い「金沢城図」(金沢市立玉川図書館)に江戸前期の水路が、「金沢城全図」(成巽閣)⁽⁴²⁾に江戸末期の水路が記されており、異なる時期の比較が可能となる。そして、この3枚の絵図に記された水路は大きく異なっている。概略を述べれば、前期に石川門内の三之丸で分岐され二系統の水路が走っていたものが⁽⁴³⁾、末期では一系統になり北側の水路(二之丸外周の水路)が記されなくなっているのである。使用されなくなって記さなかったのか、すでに廃止(あるいは撤去)されて時間が経ちその存在さえも忘れ去られるほどであったのか、また単なる書き落としか、さまざまな可能性が考えられる。しかし、ここまでに見てきた「石川橋」の形態の変遷が、単に通路としてのみならず、石川門や辰巳用水の設置という金沢城の築城史とも密接に関わっていることが改めて確認された今、この水路の問題も、まだ明かされていない部分の歴史を探る重要な鍵の一つであるといえる。この点からも、前期・末期と漠然と捉えられているそれぞれの絵図の内容年代の絞り込みが待たれるところであり、筆者の研究課題の一つでもある。

おわりに

発掘調査によって多くの成果が報告されてきた。それに応えるべき絵図や文献の研究蓄積は、残念ながら十分とはいえない。絵図でいえば、その存在が確認されたことや類似の絵図の有無の確認に留まり、絵図自身の内容年代の絞り込みが不足していることが指摘される。文献においては、複数ある写本の比較から筆写履歴や成立時期を検討し信頼度の軽重等の論及が不足していることが指摘される。この二つのことは密接に関連しており、お互いの研究が補完し合って前進していけるものとする。

その観点から、また発掘調査の成果を活かす上でも、今求められるのが「東大図」の相対的な評価である。「慶長10年代の内容を持つ」との考察が妥当なものとして、他の絵図とは異なり、現在の地形からは想像もできないほどに歪に描かれていることは何を意味するのであろうか。

「石川橋」周辺に限っても、「土橋坂」と表記し、石川門一の門の位置が「石川橋」の方へ出てきた形に描かれていることは何を意味するのか。何段階にもわたって構築されてきた「石川橋」は、時期の確定はともかくとしても、坂地形であったことは確認されたのである。ならば、石川門一の門の発掘・場所確認を願うのは早計であらうか。

さらに、「東大図」と「寛八図」の間にある約60年の空白をどのように埋められるのか。「石川橋」の平面的な形の変化、石川門の位置・形態の変化、三之丸御堀の出現など画期となるべき多くの変化が実にこの間に集中しているのである。

十分な論考を果たせないままに紙面を費やしてきた感がありもどかしい限りであるが、絵図・文献研究の立場からいえば、発掘成果によって自分たちが解明して行かなければならない課題を整理していく方向性を示されたといえる。とりわけ絵図を調査している自分たちにとっては、絵図自身が視覚的に捉えやすい史料であるがゆえに、個々の絵図に描かれた内容の年代幅をできる限り絞り込んで示していくこと、内容の実虚を区別していくことが再認識させられた。石川門と辰巳用水の歴史を追ってその姿が明らかにされたとき、より真実に近い「石川橋」の姿が浮かび上がってくるであろう。

注

- (1) 『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書』（石川県立埋蔵文化財センター、1997年）。
- (2) これまで、歴史研究者の間では、「石川橋」をはさんで白鳥堀と百間堀の二つの堀があるという認識から離れるということは、思いもつかないことであった。大きさや水堀か空堀かといった違いはあるが、自然地形として窪んでいたというのが共通の認識であったように思う。そこへ、白鳥堀の前身として人為的につくられた家（工場、あるいは職人町？）を想起させる構造の検証は、今後の絵図や文献の調査・理解に対する新たな可能性を提示したといえよう。
- (3) 「加州国府」（『金城深秘録』石川県図書館協会、1937年刊、1971年復刻）のうち、4P。
- (4) 「府城濫觴」（『金沢古蹟志』金沢文化協会、1933年刊、巻二のうち）のうち、4P。元禄十五年石川郡御供田村老農土屋義休撰述の「金城隆盛私記」を掲載しており、その中に見える文章である。また、『金沢古蹟志』の著者であり郷土史家でもあった森田柿園良見も、自らの調査の結論として「古老の伝説区々として一ならず。」と記している（同書、3P）。
- (5)(6) 「来因概覽附録卷之一」（『越登賀三州志』石川県図書館協会、1932年刊、1973復刻）のうち、446P。
- (7) 注（4）に同じ、2P。
- (8) 「鞆囊餘考卷之八」（『能登賀三州志』所収）のうち、145P。
- (9) 『石川縣史』第貳編、第二章第九節「金沢城及び城下」のうち、363P。
- (10) 「市中沿革」（『金沢古蹟志』巻一のうち）のうち、28P。
- (11) 「新山田畔書」（『加賀藩史料』第壹編所収）432～3P。
- (12)(13)(14) 「三壺記」（『加賀藩史料』第壹編所収）438～9P。
- (15) 「文禄年中以来等之旧記」（『金沢城郭史料』石川県図書館協会、1976年）のうち、167P。
- (16) 注（5）に同じ、441～2P。
- (17) 拙稿「金沢城の「慶長火災」について」（『石川県立歴史博物館紀要』第10号、1997年）に記録類の諸説について論じた。
- (18) 「東大図」は、東京大学附属図書館の「南葵文庫」に含まれていた「加州金沢之城図」の調査からはじめてその存在が注目されたことによる同系統の絵図の通称である。国立公文書館「内閣文庫」の「加州金沢城図」、文字の書き込みはほとんどないが「主図合結記」に収録されている「加州金沢（城図）」もこの系統である。
- (19) 「京大図」も、これまでの概説書によく登場する「慶長期の金沢城絵図（京都大学蔵）」と同系統図の通称である。本文にも触れておいたが、この系統のはじめは金沢市立玉川図書館の有沢永貞編「諸国居城之図」（元禄5年）所収のものが元図と見られる。
- (20) 拙稿「二系統の「慶長金沢城図」について」（『石川県立歴史博物館紀要』第8号、1995年）に各系統の諸図、内容検討を論じているので参照されたい。そこでは「京大図」を、先学と同じく人物の検討から内容は慶長末頃の図と考えたが、三ノ丸御堀の形態や辰巳用水との関連などから、内容時期の再検討の必要が生じたことを指摘しておかねばならない。

- (21) 「加賀国金沢之図」(金沢市立玉川図書館蔵)。城下町を描いた絵図であるが、住人の名前は記されていない。しかし、他の城下町図が城域を空白にするものが大部分という状況の中で、城と城下との関り合いを探る上で重要な位置を占めている絵図。幕府へ提出したものの控えという点からも信頼度は高いと考えられている。
- (22) 「金沢城図」(金沢市立玉川図書館蔵)。この図は、『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ(文献史料編)』(石川県教育委員会、1991年)の付図としても広く紹介されている。
- (23) 「金沢城中総絵図」(石川県立歴史博物館蔵)。この図は、『金沢城』(石川県立歴史博物館展覧会図録、1994年)の付図である。
- (24) 有沢永貞は、17世紀後半から18世紀初めの人で、叔父である関屋政春について甲州流の兵法を学び、子供の武貞・致貞の活躍もあって、「有沢流」と称される加賀藩軍学を形成した人である。「諸国居城之図集」の金沢城図には「此図武江ニ流布ス、元和以往ノ粗図歟」との注記があるが、管見の限り単独のこの内容の絵図は確認することができない。
- (25) 「三壺記」(『加賀藩史料』第貳編所収) 641～2 P。
- (26) 「国初遺文」(『加賀藩史料』第貳編所収) 650～1 P。
- (27)(28)(29) 「城中建物焼失旧新記帳」(『金沢城郭史料』所収) 247 P。
ただし、この火災と思われる記録が「政隣記」には寛永12年5月9日のこととされており(『加賀藩史料』第貳編所収、752 P)、今後論証していかなければならないことの一つである。いまは、記載内容が具体的で関連記事も多い「城中建物焼失旧新記帳」に従っておく。
- (30) 「螢廻光」(『加賀藩史料』第貳編所収) 692～3 P。
- (31) 「御城中御門々之事」(『金沢城深秘録』所収) 66 P。
- (32) 荒木澄子「兼六園と文化・水の文化」(『特別名勝 兼六園 —その歴史と文化—』橋本確文堂、1997年所収)に詳しい。
- (33) 注(15)に同じ、198 P。
- (34) 「文政五年後藤彦三郎先祖由緒一類附帳」(注(15)書所収)のうち、後藤彦三郎和睦由緒による、5 P。
- (35)(36)(37)(38) いずれも「政隣記」による。『加賀藩史料』第拾編・第拾壹編参照。
- (39)(40) 「御用方手留」(『加賀藩史料』藩末編上巻所収) 670～2 P。
- (41) 「加賀国金沢城石垣破損絵図」(金沢市立玉川図書館「後藤文庫」のうち)は、『金沢城郭史料』の付図の一つとして、翻刻印刷されている。
- (42) 「金沢城全図」(成巽閣)は、『加賀藩御細工所の研究(一)』(金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1989年)の口絵写真3として収載され、また、『金沢城跡』(石川県教育委員会、1993年)の付録「金沢城遺構現況図」の元図とされている。
- (42) 「加賀国金沢之図」(寛八図)に記された水路は、各曲輪内の建物が全く描かれていないので、実際に埋設した場所を記したものではないと考えられる。しかし、通水の順路については、これが正しいのか単なる計画図で実際は異なるのかといった判断が必要となる。現状では、その判断を下すべき材料を持っていないが、「寛八図」は幕府へ提出したものであるため信頼度が高いという概念は、少し距離をおいて再検討する必要があるようである。

第9章 結 語

第1節 問題の所在

平成4年10月から始まった、シンボルロード寺町今町線道路整備事業にともなう石川門前周辺の発掘調査は、平成6年12月の車橋門跡発掘調査をもって終了したが、その後の資料整理・報告書刊行は、平成10年3月刊行の本報告書で全ての事業を完了することとなった。

辰巳用水木樋の検出や金沢御堂期の遺構の検出、初年度に遭遇した瓦たまりと「寛永の大火」との結びつけ、さらには発掘ニュースの発刊や雪降る中の発掘など話題に事欠かない調査であった。調査中は金沢城の発掘ということで、地元マスコミは争うように調査成果の報道にあけてくれたが、それが終わると何事も無かったような静けさとなる。調査成果の分析には、このくらいがよい。

従来からの歴史的認識を前提にして、それと発掘成果との整合をはかることが、あらたな歴史認識の構築となるはずである。そこには当然文献史学との認識の違いがあろう。考古学ひとりが発掘調査の事実関係に固執して、その成果を声高らかに話すことを良しとしようか。否。むしろ考古学が持つ事実関係の限界を知るべきである。考古学的成果には、幾つかの前提がつく。ひとつは、土器が示す年代はあくまで相対的なものであり、絶対的なものではなく、しかも基準が時の経過とともに動く可能性がある。たとえば弥生時代研究をみると、大きな問題が内在していることに気がつくであろう。また、検出される遺構や遺物出土状況から人間行動の意志を見つけることは非常に困難であり、近世史学における人間性重視の方法と大きく異なる。つまり遺物遺構から人の姿が見えにくいのである。さらに残された痕跡が全て歴史認識及び時代像の把握に有為なものであるとは限らないこともある。つきつめれば、考古学的資料は、自分では語る言葉を持たず、特別な方法論で翻訳するのである。その翻訳の仕方によって色々な認識が生まれてくるであろう。

このような考古学の限界を前にして、発掘調査をおこなった成果を考えると、結論的に断言できる性格のものではないことに気づく。それは、考古学的に考えられた結論にあまりにも多くの前提がつくからである。この前提が少なくなるためには、調査事例の増加による確率の増加が必要である。また、他の関連学問との学際的研究も必要である。ともかく、本報告書第1・2分冊で示した調査成果を、十分に批判していただいて新たな金沢城の歴史の構築に役立てればと思う。

第2節 遺物整理の方法と問題点

3ヶ年度にわたる発掘調査による出土遺物は、約1000箱を上っている。この多くが、盛土3の瓦たまりから出土した瓦類である。発掘調査終了後、この遺物群をどのように資料化するのが大きな課題であった。おりから、他府県での城郭から発掘される瓦類が野ざらしになって問題となりつつあった時期であった。「遺物だから」という論理で出土品を持ち帰ることが通らない世界になってきたのは、文化庁からの「遺物の選別」の通知から明らかである。なぜ出土遺物を整理するのか、そして資料化することの意味、遺物を実測することの意味を改めて考えねばなるまい。すなわち、地中から収集した「物」から、如何に当時の社会あるいは人間行動の復元を行うために、各種の方法論を駆使することが考古学の研究である。埋蔵文化財行政が単に「発掘すればよい」「報告書をだせばよい」という今日的な環境では、考古学の方法と理念的に遊離していると考えるのである。

すなわち、行政発掘調査であっても考古学的資料を有為なものにするために、そこからえられる発掘調査データが考古学研究者にとって活用できねば意味がない。高い発掘調査費で、その成果を学会に提供できねば、何のために調査したのか意味を成さなくなってしまう。現在、膨大な数の発掘調査報告書が刊行されているが、その多くが研究者の目に触れることなく存在しているのである。考古学研究の深化のためにも、報告書が活用されるような物にするために工夫する努力が必要であろう。

さて、遺物の洗浄は、基本的に発掘現場でおこなった。これは、微妙な時期を知るために陶磁器類

を調査と平行して観察できる必要があったのである。したがって、現地では、陶磁器類をまず洗浄、そしてネーミングをおこない、観察できるようにした。しかし、これを行えたのは、12月までであり白鳥堀調査区の発掘調査時には出土遺物をかえりみる余裕がなかったのである。瓦類は、現地では洗い終えることができた。

平成6年度に瓦類のネーミングを行った。これは、大量にある瓦の接合のために全ての破片、つまり小さな破片にいたるまでのネーミングをする必要があったのである。通常ネーミングでは大幅に時間を費やしてしまうので、今回、「筆ペン」を使って簡略なネーミングを行った。つまり、盛土3瓦たまり資料ならば、出土地区のみのネーミング等である。これによって、器種ごとに集める作業が可能となり、接合・分類作業を可能とした。

平成6年度の春から出土遺物の整理作業にかかった。(財)石川県埋蔵文化財保存協会への委託業務だが、前年度までにある程度ネーミング作業が済んでいたため、接合ネーミングなどの基礎的な整理作業は、白鳥堀調査区の土器群を対象とした。同時に、同調査区の大量の木器と漆器の洗浄と分類作業および鉾津の分別に伊藤が従事した。また、大型木器などを自然乾燥しようと試みたが、途中でカビがはえてしまった。大量の遺物を伊藤が抱えてしまう状況となり、担当者の伊藤個人では把握しきれなかった結果が、大型木器の破損であろう。遺物整理から報告書までどうするか、は担当者個人でのみ責任を負わされており、発掘至上主義的な本県にあっては、遺物整理を軽くみる傾向があると考えられる。

委託した整理内容は次の通りである。

- | | |
|-------------------|------|
| ・染付け等の文様を持つ陶磁器の実測 | 130点 |
| ・土器や文様のない陶磁器の実測 | 250点 |
| ・瓦の実測 | 400点 |
| ・石器、金属器、木器の実測 | 330点 |
| ・大型で特殊な遺物の実測 | 10点 |

これらの作業は、分類した結果実測遺物を選び出すという通常の方法で行ったが、この他に800箱以上の瓦の接合を行った。層位・地区ごとの軒丸瓦・軒平瓦等の仕分けを行いながら、出土点数の多い丸・平瓦類の分類作業を平行しておこなった。この時の観点は、丸瓦についてはあまり持っていなかったが、平瓦については焼成具合や厚さを中心に分類した。これは、熨斗瓦がないかを探すためであった。また、そのほかの道具瓦の抽出も平行しておこなった。この作業の難点は、一回の選別に十数箱の遺物を観察できるものの、次の選別のサイクルあるいは以前おこなった選別での所見をフィードバックすることができないのである。したがって、個体数の把握は、丸瓦と平瓦は無理である。ただし、未実測の分については、破片個数を数えているので、いつでも資料化できるようにした。本報告では、瓦の出土量を箱単位でみることによって比較した。また遺物箱への収納も分類毎におこなった。直接的に報告書の中で丸・平瓦の整理作業を反映することはできないが、基礎的な遺物整理をおこなったのである。

遺物実測については、できるだけ一括性の高いものを優先しておこない、あとは年代を知るためと個体差を知るために実測した。輸入陶磁器については、古いものも多く含まれていたため、できる限り実測した。土師器皿については、時期的特徴が出るように各出土地点から選び出したが、盛土3出土資料については、残りのよいものを中心にかなりの数を実測した。これは、個体差が少ないものの製作手法を観察するためであった。正直なところ、そこまでじっくり観察できる時間がない、そこまで手が回らなかったため、実測作業を通して個体差を確認した、ということである。

瓦の実測は断面図作成と拓本作成に分けられ、断面図に拓本のコピーを貼りつけてそれに観察事項を記入する形式にした。軒瓦では、それでカードになるようにしたのである。観察事項は、范傷の確認や文様の復元、范成形の観察などである。丸・平瓦等では、実測図が大きくなって扱いに苦慮した。むしろ、縮小して観察カードのようなものにすればよかった。

このような整理作業によって、持ち帰った全ての遺物を分析の対象とした。発掘調査報告書刊行後

も資料整理できるように整理作業を進める必要もあろう。これから数十年先の考古学研究の深まりに対応できるようにしなければならない。なぜなら、報告書の刊行は、その遺跡の研究の到達点ではなく、考古学研究の始まりだからである。

第3節 金沢における近世初頭の陶磁器

発掘調査の原因となった事業は異なるが、石川門周辺で近世初頭にかかる発掘調査成果が1990年頃から注目されてきた。それは兼六園江戸町跡の発掘調査である。これによって、金沢の17世紀第1四半期のまとまった遺物群とともに、明確な遺構を検出できたのである。そして、今回の発掘調査によって、16世紀後半から17世紀中頃近くにかけての多くの遺物群の出土をみた。それは、白鳥堀調査区の遺物群、石川門調査区での盛土中資料群、車橋門調査区での焼土廃棄層である。これらは、城郭の関係の遺構という性格から、当時の城下町の生活ぶりを示すとは考え難いが、近世社会の一端を示し、大阪城や他の諸都市との比較研究の材料を提供できよう。本節では、これら一連の遺物群を概観し、近世初頭における金沢の陶磁器についてみてみたい。

なお、陶磁器類の数え方は、基本的に個体識別法によっているが、小さな破片となった染付けや土師器皿については、結果的に破片に近い数を読んでいる場合が多い。しかし、壺甕類の出土が少なかったため、破片数のカウントと個体識別による場合と数値の差が少なくなったと考えている。また、向付は碗類に、大皿は皿に入れて数えたので、相対的に鉢類の数が少なくなっている。

a) 天正頃の陶磁器類

種別	碗	皿	壺・甕類	揺り鉢	その他	埴塙等瓦	合計
色絵							0
青花	20	26					46
中国青磁	1	3	1		1		6
中国白磁	1	15			6		22
李朝朝鮮					5		5
瀬戸美濃	51	18	4		4		77
国産青磁	1						1
越前			47	11			58
備前系				2			2
土器類		85				5	106
産地不明			4	1			5
合計	74	147	56	12	16	5	326

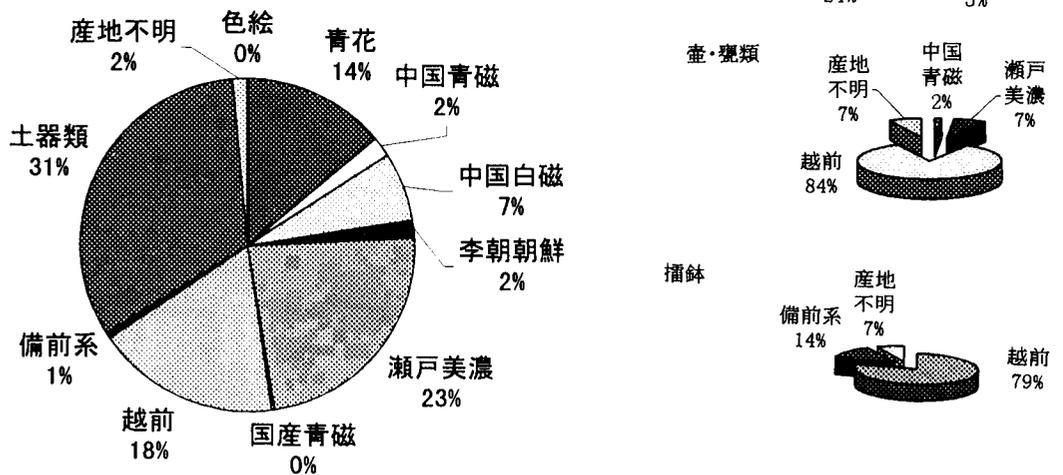


Fig. 389 白鳥堀調査区出土土器の構成

正確に天正頃（1573～1591）とはいえないが、金沢御堂期に土橋が作られ次に嵩上げされるまでの遺物相に代表される。16世紀中頃に遡る遺物もあるが、整地土中出土という性格から全般的な遺物の投棄はやや下る時期である。また、1580年に金沢御堂陥落後すぐに埋め込まれた可能性は少ないので、時間的な下限を慶長まで入るかもしれない。しかし、全般的な遺物相は大阪城という豊臣前期（1580～1598）に類似していることから、年代的な近さを示すものである。ここでは、白鳥堀包含層と沈床園第6・7層がそれにあたる。

白鳥堀包含層

326個の土器類が出土している。土師器皿が41%（85個）と半数近くを占めている。土師器皿については、灯明油痕を残すものが少なからず認められ、中世的「かわらけ」の使い方と灯明具としての使い方が、半ば拮抗している状態である。大阪城豊臣前期の土師器皿の占める割合が約35%と本調査区の割合に類似する点に注意しなければならないであろう。

輸入陶磁器のうち色絵の出土はなく、青花14%（46個）、白磁7%（22個）、青磁2%（6個）、李氏朝鮮2%（5点）で、碗皿類がほとんどである。碗では瀬戸美濃天目碗の占める割合が高く、碗の中で青花と同じ程度の比率で認められるが、皿では青花や白磁が主体を占めている。特に、瀬戸美濃の灰釉丸皿が一定量見られるが、灯明具に使用されているものもあり輸入陶磁器での使われ方と違うことが予想される。一般的な食膳に供される道具として輸入陶磁器があると考えられる。朝鮮製品は瓶類である。

瀬戸美濃の陶磁器は、青磁1点をのぞいて天目碗や茶入れが中心であり、7割も占めことからわかるように、茶陶中心に出土していることがあげられる。これが時期的なものでないことは、第2章

種別	碗	皿	壺・甕類	摺り鉢	その他	瓦	合計
色絵		1					1
青花	2	1					3
中国青磁							0
中国白磁		1					1
李氏朝鮮							0
瀬戸美濃	3	1					4
国産青磁							0
越前			2	1			3
備前系							0
土師器		2					2
産地不明			2	1			3
合計	5	6	4	2	0	0	17

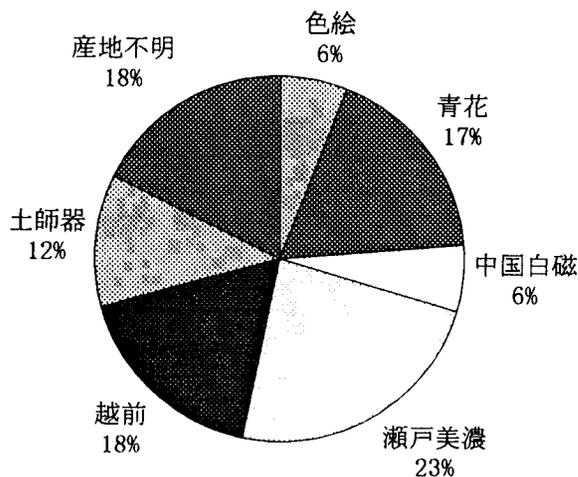
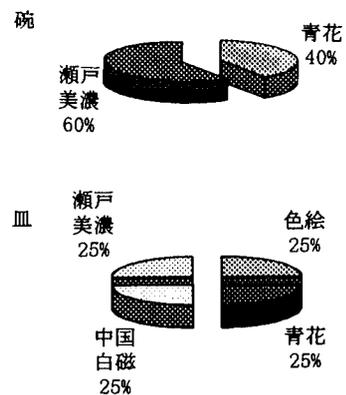


Fig. 390 沈床園調査区第6・7層出土土器の構成

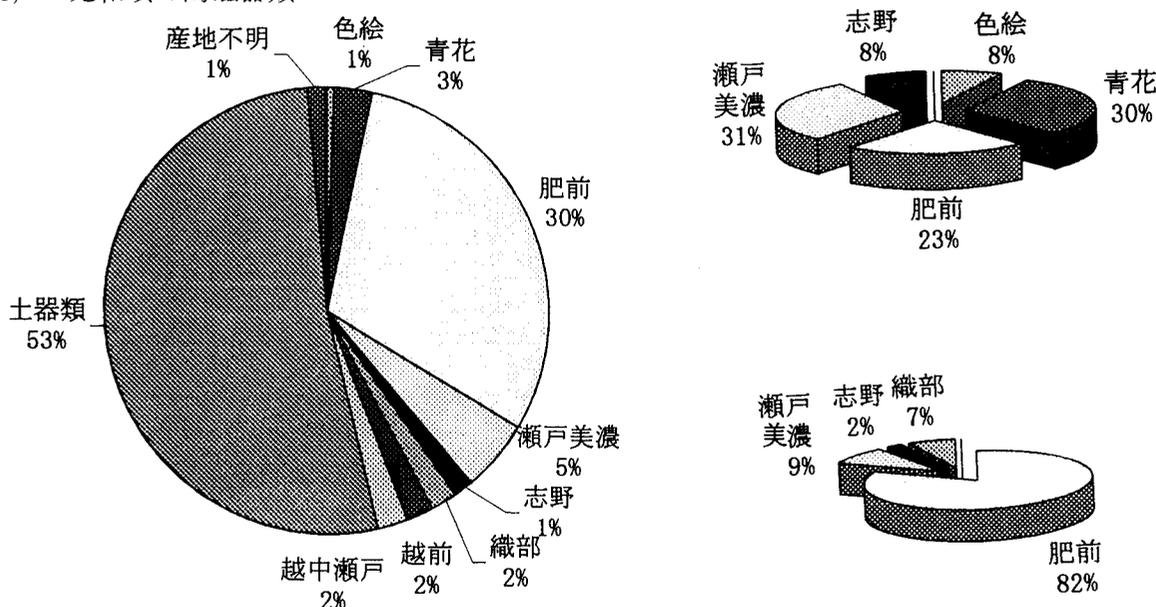
で述べたとおりである。したがって、金沢御堂期から茶湯がそれなりに盛んであったことを示すものであろう。播鉢・壺甕類については北陸地元産である越前が卓越している。壺甕類は14%、播鉢は4%近くを占めている。壺甕類については、大きな個体であるために破片数が多く出てしまうことに起因するのであろう。実際はもっと少ない割合であろう。播鉢のうち備前系が2点ある。加賀市作見窯の可能性もある。もしそうすると、作見窯では茶壺も生産しているが播鉢のみの出土を過大評価すれば、それぞれの販路が異なるものであることが予想される。

なお、鍛冶遺構群の割りには埴塙やとりべ、炉壁などの出土量が少なく、わずかに2%（5個）のみである。一方ふいごの羽口や鉢滓はいたるところから出土し、これらと同じ所に捨てられていないのは、特別な片づけがあったのであろうか。

沈床園 6・7層

僅か17個の土器しか出土していない。輸入陶磁器が29%（5個）で、瀬戸美濃碗皿類もほぼ同量出土する。この中には天目碗も含む。壺類は国産品ばかりである。土師器皿が12%（2個）だが、この構成がどれほど実体をいしているか疑問である。ただし、土師器皿の量が少ないものの、色絵、青花、白磁、瀬戸美濃、越前という基本的な枠組みと量比については、白鳥堀調査区包含層と同じであり、当時の傾向を示しているといえよう。

b) 元和頃の陶磁器類



種別	碗	皿	鉢	壺・甕類	播り鉢	その他	埴塙など	合計
色絵	1							1
青花	4							4
肥前	3	32	4	2	1	3		45
瀬戸美濃	4	2	2					8
志野	1	1						2
織部			3					3
越前				1	2			3
越中瀬戸					3			3
土器類		78						78
産地不明		1					1	2
合計	13	113	9	3	6	3	0	147

Fig. 391 江戸町跡出土土器の構成

石川門前に展開していたといわれている江戸町跡土器群がこれにあたる。江戸町は、慶長6年(1601)に前田利常に輿入れしてきた徳川家康の孫の珠姫の付き人が住んだ町であり、元和8年(1622)の珠姫の死去に伴って付き人も江戸に帰り、町がさびれたということである。したがって、江戸町跡出土土器群は、1622年を上限とする一群であると理解される。また、検出遺構が台所付近と考えられ、しかも埋没状況から攪乱などは考えにくく、この屋敷の陶磁器組成の実体に近いと考えられる。

土器類は、遺物箱で4箱で、147個体の遺物が出土している。景德鎮色絵が1点、青花碗が4点でそれ以外は全て国陶磁器類である。つまり、輸入陶磁器が僅かに4%のみである。国産陶磁器のうち唐津が碗皿類を中心に30%(45点)の大部分を占め、一方志野・織部の茶陶と瀬戸美濃雑器で約1割である。このように、碗皿類は圧倒的に唐津が主流であるが、茶器などに関しては志野・織部も少なからず見られ、未実測品だが唐津の鉄釉茶入れを1点確認した。このように前代までの輸入陶磁器の世界から一気に唐津の世界となるのは、豊臣後期大阪城(1600~1614)と同じである。唐津の優位性は碗皿類のみならず壺や瓶類についても認められ、製品がまとまった状態で流入していることをうかがわせる。

播鉢は、越前と越中瀬戸がほぼ同数、唐津がわずかである。調理用具では碗皿類と異なって、北陸の在地産の陶磁器が主体である。土師器皿の土器類の生産は、金沢近郊でおこなっていたものと考えられ、遺物量の半数以上を占める。多くの土師器皿が口縁全体に灯明油痕を厚く残し、中世的な「かわらけ」として使って廃棄されたものではなく、灯明具として使用され廃棄されたものである。大阪城での土師器皿の占める割合が約20%であるのに対し、江戸町跡の灯明具が半数も占めるのは、異常に多い量といえよう。これは台所付近という、ものを保管する場所としての遺構の性格の反映であろうか。

目を引くような優品は少なく、わずかに唐津鉄絵大皿程度である。ただし報告書で朝鮮製とした施釉鉄絵皿や同瓶は肥前系の可能性が高い。また、極端な輸入陶磁器の割合の少なさが、この遺跡の特徴であるが、これが敷衍化できるかこれからの課題である。

c) 寛永頃の陶磁器類

盛土3、盛土4、沈床園第4層、車橋門跡石垣2・3間焼土層の土器群である。これは、盛土5上面で敷設されていた木樋を寛永9年(1632)の辰巳用水とすることを前提にしている。

車橋門跡石垣2・3間焼土層

この層は、寛永8年(1631)におこった金沢城本丸をはじめ大半を焼き尽くした法船寺の大火による焼土層に対応していると考えている。層中から焼土・炭灰に混じって細片と化した陶磁器や完全に釉が溶けて陶石に戻っている陶磁器が多く見られる。この層は本丸側から堆積しており、本丸周囲の焼土の片づけに伴い、さらに遺物群も本丸周辺で使われたものであろう。また、一応226個とカウントしたが、微少な破片となってしまったものを十分に量を数えることができなかつたことや、種別不能の個体が少なからずあり、さらに遺跡から持ち帰らなかつた微小破片も多い。これらの多くは青花を中心とするようなので、輸入陶磁器類の比率が実際にはより多いと考えられる。

出土量の割には非常に多彩な遺物群である。色絵青花をはじめとして、交ち三彩、ベトナム製陶器、信楽茶壺等が見られ、この出土地点・層位の特色となっている。また、土師器皿の占める割合が僅か11%(18個)にすぎず、陶磁器種別不能分を勘案するとさらに割合が低くなる。これは、城内中枢部からの廃棄物という特殊条件のためであろうか。

輸入陶磁器は色絵3%(8個)、青花40%(93個)、青磁6%(13個)、白磁6%(12個)、華南産三彩0.1%(1個)、ベトナム0.1%(1個)で、全体の55%以上も占めており、実体は6割以上を占めていると考えられる。特徴的なのは、ベトナム陶器壺の出土や、色絵の占める割合が大きいこと、青花でも漳州窯系とともに景德鎮窯系も多く見られること、青磁の中で壺類が多く見られ骨董的価値のあるものもあること、さらに碗皿類の他に小杯が多く見られること等から、他地点の陶磁器の内容よりも奢多的内容となっている。

種別	碗	皿	小杯	鉢	壺・甕類	播り鉢	その他	埴塙など	合計
色絵	1	6					1		8
青花	14	37	15	1			26		93
中国青磁	4	3			2		4		13
中国白磁		10	2						12
三彩		1							1
李朝朝鮮									0
ベトナム					1				1
伊万里	1								1
肥前	1	8		3	10	1	10		33
瀬戸美濃	4	5				1	5		15
志野		2		3					5
織部				2					2
信楽					13				13
越前						1	1		2
越中瀬戸									0
土器類		18					1	4	23
産地不明					5		7		12
合計	24	84	17	9	31	3	54	4	226

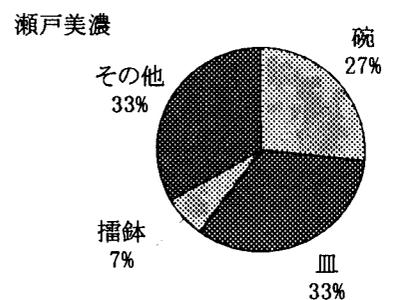
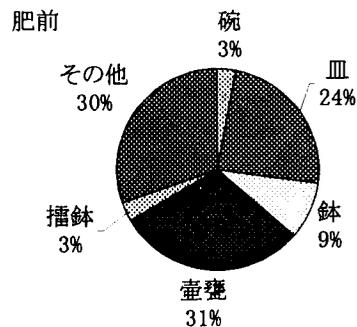
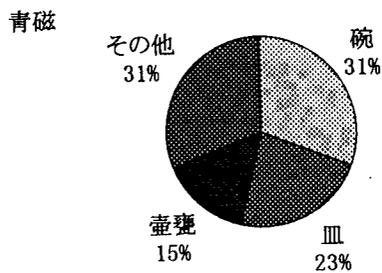
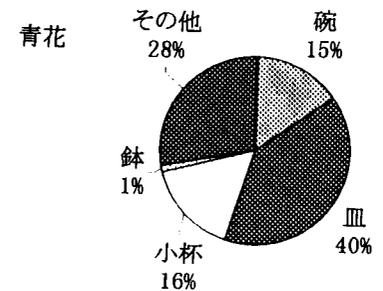
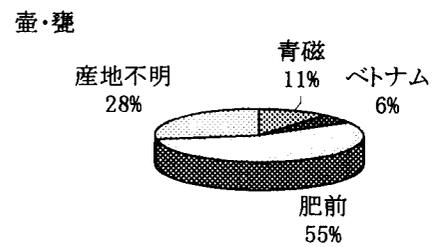
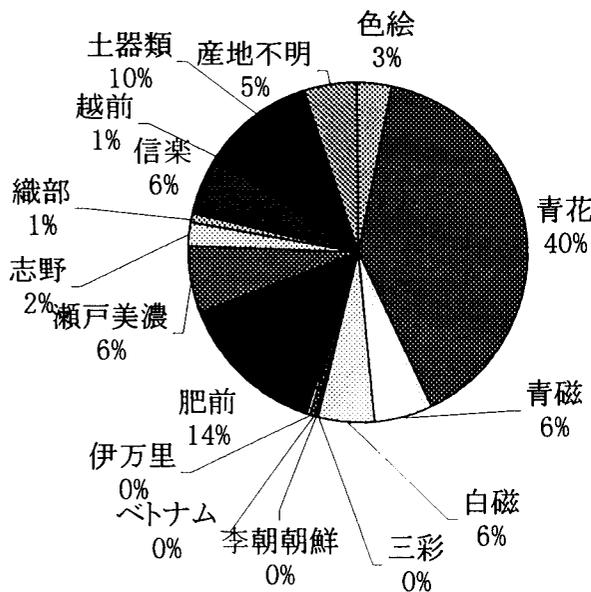
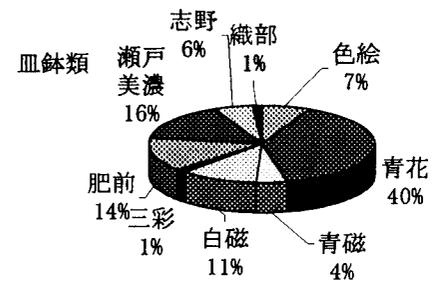
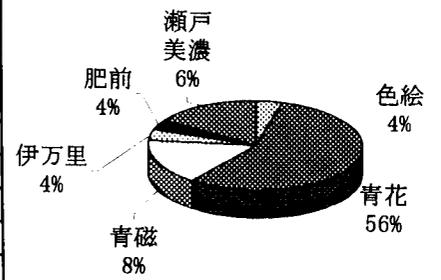


Fig. 392 車橋門跡出土土器の構成

種別	碗	皿	小杯	鉢	壺・甕類	搦り鉢	その他	坵	合計
色絵									0
青花	21	10	10					9	50
中国青磁		4			1				5
中国白磁		2							2
三彩など									0
李朝朝鮮			1						1
ベトナム									0
伊万里	3								3
肥前	15	59	1	7	4	30	6		122
瀬戸美濃	4	1			1				6
志野									0
織部		1							1
信楽					3				3
国産青磁									0
越前					3	7			10
越中瀬戸		5				5			10
土器類		1264							
産地不明	4				2	1			7
合計	47	1347	11	7	14	43	15	0	220

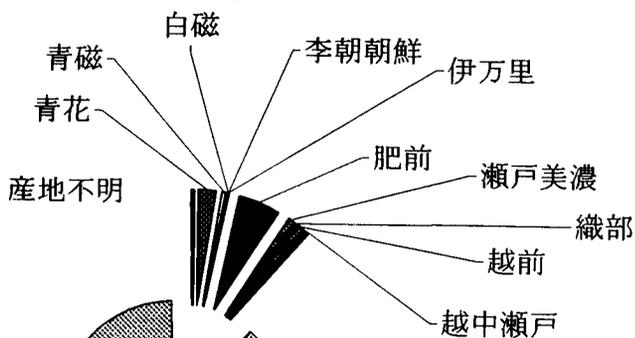
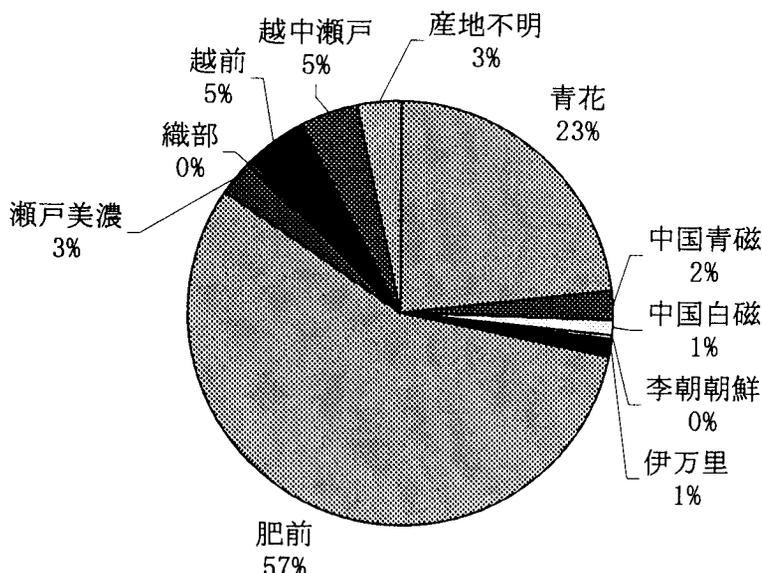
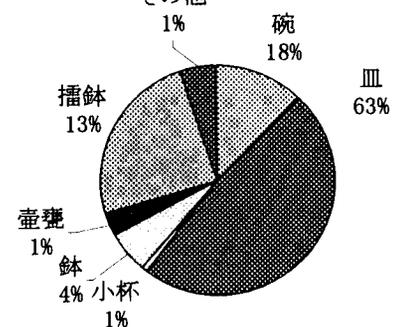
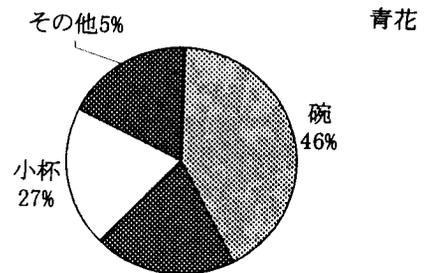
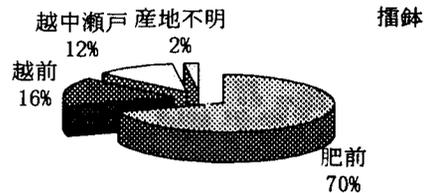
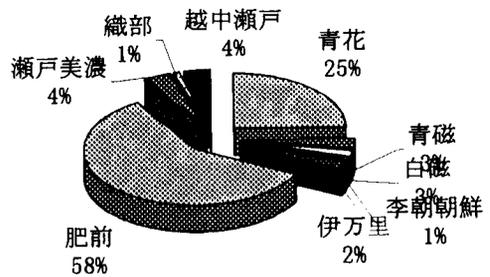


Fig. 393 盛土3出土土器の構成

国産陶磁器類では、初期伊万里碗を1点のみ確認している。唐津は、14% (33個) を出土しているものの、碗皿類は相対的に少なく壺甕瓶類が半数近くを占めている。瀬戸美濃系も多く6% (15個) がある。碗は天目碗、皿は黄瀬戸あるいは灰釉皿だが、壺甕、播鉢等の器種がある。このような多様な器種があるのは、唐津、瀬戸美濃に共通した事象である。また、信楽壺が6% (12破片) もあるのは、破片となって相対的に個体数が増えたことによるが、それよりも他地点で出土していないものであることを重視しなければならない。そして瀬戸美濃天目碗の数はそれほど多くはないが、織部・志野が一定量あることや朝鮮・ベトナム陶器の存在、唐津でも瓶類が多いことから、当時の茶湯を考える上に重要である。このように、器種が多彩でしかも数量に偏りのある資料群である。

盛土3

1300 個体近くの土師器皿が出土しているが、この土器に地鎮の祭祀性を見いだしているのでは組成比に入れて検討しないことにする。破片数ではさらに数量が増すことになるが、ちなみに、

種別	碗	皿	小杯	壺・甕類	播り鉢	その他	合計
色絵		1		1			2
青花	24	16	1				41
中国青磁	1	3		2			6
中国白磁		8	1				9
三彩など		1				1	2
李朝朝鮮		1					1
伊万里	1						1
肥前	2	5	1	4	2		14
瀬戸美濃	3			1			4
志野							0
織部		1					1
信楽				1			1
国産青磁							0
越前				4	3	2	9
越中瀬戸							0
土師器							0
産地不明							0
合計	31	36	3	13	5	3	91

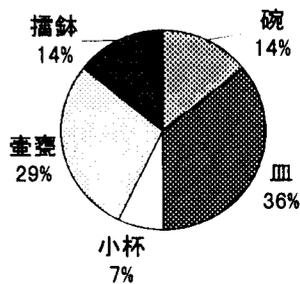
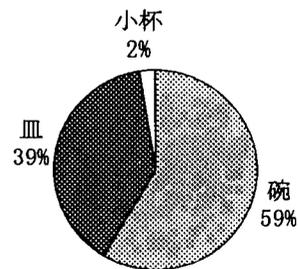
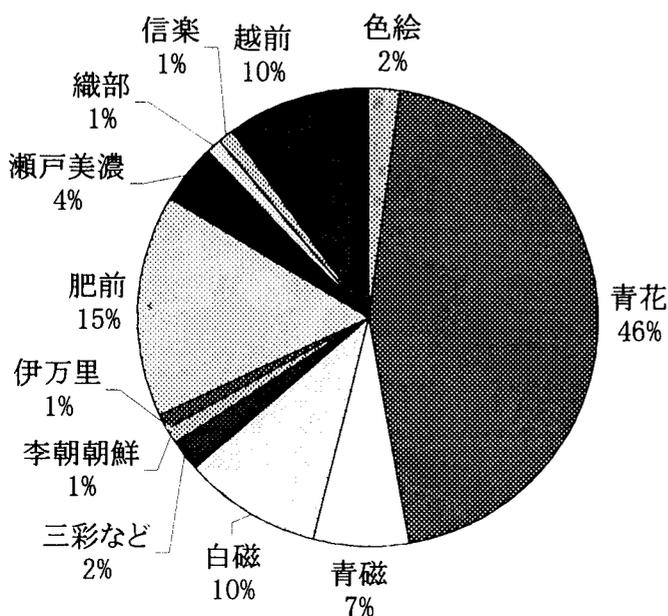
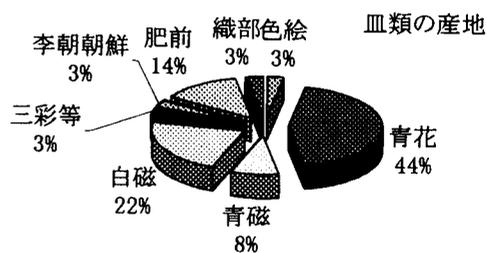
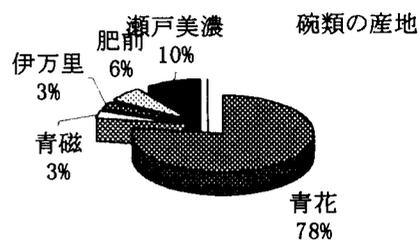


Fig. 394 盛土4 出土土器の構成

土師器皿は土器群の85%も占めており、いずれにしてもその特殊性が伺える。

220個を確認している。特徴的なことは、①色絵がないこと、②青花などの輸入陶磁器が26%程度しか占めないこと、③肥前系が58%も占めること、④瀬戸美濃系が僅か3%しかないこと、⑤茶湯に関係するものの出土がないこと、であろう。①は②とも関係するが、質の高い染付け等の陶磁器が少ないことであり、輸入陶磁器が碗皿類の日常使用器物が多くを占めていることからわかる。小杯は僅かに27%(10個)にすぎない。一方、国産陶磁器のうち肥前系が圧倒的多数を占めるものの、碗皿類で81%も占めるが、播鉢も少なからざる量が出土しており、日常的な器物といえよう。一方、③のように肥前系が圧倒的多数を占める中に、初期伊万里染付け3点の出土があり、金沢でも最も古い例である。これは、最先端の焼物が入っていることを示し、大阪での初期伊万里の使用、遺跡か

種別	碗	皿	小杯鉢	壺・甕類	播鉢	その他	埴塙など	合計
色絵								0
青花	5	8	1			1		15
中国青磁								0
中国白磁		2						2
三彩								0
季朝朝鮮								0
ベトナム								0
伊万里								0
肥前	4	16	1	1		4		26
瀬戸美濃	5	5	1			2		13
志野		1						1
織部								0
国産青磁	1							1
信楽								0
備前系				3				3
越前								0
越中瀬戸								0
土器類		45					4	49
産地不明				1				1
合計	15	77	3	0	5	0	7	111

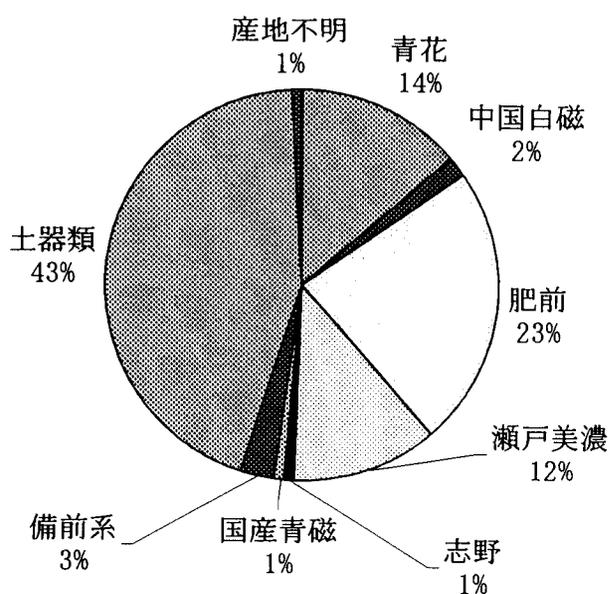
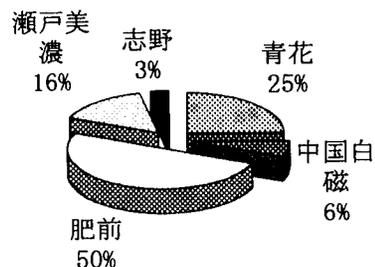
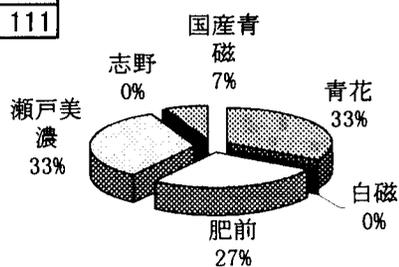
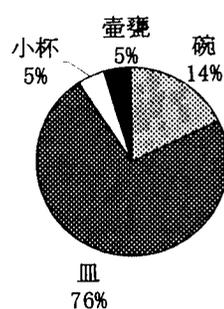
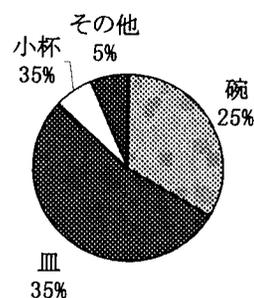


Fig. 395 沈床園調査区4層出土土器の構成

らの出現時期に大差ないことが伺われる。④と⑤は関係するが、これらは特殊な骨董的なものとしての遺物や茶湯のような特定目的に使われる遺物がないことである。

このように、日常使われていた器物が出土していると考えられる。しかし、壺甕類や鉢類が非常に少ないという特徴もまたある。その日常性をどのようなものとしてイメージできるであろうか。正直なところ妙案は浮かばない。寛永頃近くまで三の丸や新丸に武家屋敷があったことがわかっているので、そこで使用されていた遺物であろうか。この理解に立てば城下の武家屋敷の陶磁器組成の参考になろう。しかし、あくまで城内の特殊な状況を重視すると、城下の生活を反映しているとは言い難い。寛永前後に城下の再編が行われているので、今後城下町遺跡の発掘の進展に伴って良好な資料群の出土が期待される。

盛土 4

91個体の出土である。土師器皿がなく、青花が半数近くを占めている。色絵、青花、青磁、白磁、三彩で68%も占めており、輸入陶磁器がほとんどを占めている。輸入陶磁器の中でも色絵皿や小壺、交ち三彩など高級なものが幾つか見られるほか、青磁酒会壺の骨董的遺物もある。特徴的な遺物群であり、初期伊万里碗の存在も、金沢における出土の嚆矢をなすものである。そして、唐津が15% (14個) や越前10% (9個) などの日常雑器の比率が低い。この状態は、日常使用形態を反映しているとは思えず、城内の特定場所からの混入と考えられる。具体的には、盛土に使用した土の採取場所が、城内のどこかの地点からと考える。このように、車橋門石垣2・3間の資料と非常によく似ていることが特徴である。

沈床園 4層

111個体が出土しており、土師器皿が43% (49個) と半数近くを占めている他、青花が14% (25個)、唐津が23% (26個) と組成に大きな偏りが見られる。この組成が生活実態を反映していないことは容易に察せられる。越中瀬戸の壺甕類が3個体ある。初期伊万里や色絵、三彩などの高級輸入陶磁器がない、茶陶関係が少ない、という内容である。これは、ある意味で一般庶民の所有する陶磁器の内容を示していると考えられるものの、土師器皿の割合から見ると江戸町出土土器の割合に近いものである。さらに特に、初期伊万里が1630年代に城郭関係施設で廃棄できる状況であっても、城下においてはそれを可能にすることはできない状況と考えられる。

d) 陶磁器の組成の変化とその評価

簡単にそれぞれの資料群を概観したわけだが、寛永頃の時期の資料は各地点ごとの個性が強く、城下町に居住した人々の生活を彷彿とさせるものかどうか、難しいところである。本稿では総体的に土器の量比の比較をおこなう。

天正頃の土器組成は、中国色絵、青花、青磁、白磁の輸入陶磁器と、瀬戸美濃系陶器、越前や備前系の播鉢などとなっており、輸入陶磁器が24%、瀬戸美濃系陶器24%、越前18%、土師器皿が32%となっている。調査地点がいわゆる町屋の中に位置することから、当時の組成をある程度反映していると考えられる。一乗谷朝倉氏遺跡のように、越前甕類の数量が高くなく、むしろ碗皿類の数量がまさっているため、貯蔵具をも含めた数量比がどのようになるか興味のもたれるところである。しかし反対に見れば、壺甕類は1個体当たりの破片数が碗皿に比べものにならないくらい多くなるので、この数量比の方が実体に近いのかもしれない。

一乗谷朝倉氏遺跡では、輸入陶磁器の比率が約6%で、山岳寺院の勝山市平泉寺では約9%、浄土真宗系寺院跡の永平寺町興行寺では約32%も占めている。これらのデータの取り方と本調査と同じでないので単純な比較は困難で、しかも一乗谷朝倉氏遺跡では大量の「かわらけ」としての土師器皿が出土していることからわかるように、日常的な使用する器物としての数量比を求めがたい側面もある。大阪城豊臣前期における出土量比は、輸入陶磁器が約33%、土師器が35%、瀬戸美濃が約16%と、本調査区や興行寺に近い比率を示している。このように、輸入陶磁器が3割も占める状態が、いかなる状況を示すものなのか、今後検討する必要がある。

種別	白鳥堀	沈6・7層	合計
色絵	0	1	1
青花	46	3	49
中国青磁	6	0	6
中国白磁	22	1	23
李朝朝鮮	5	0	5
瀬戸美濃	77	4	81
国産青磁	1	0	1
越前	58	3	61
備前系	2		2
土器類	106	2	108
産地不明	2	3	5
合計	325	17	342

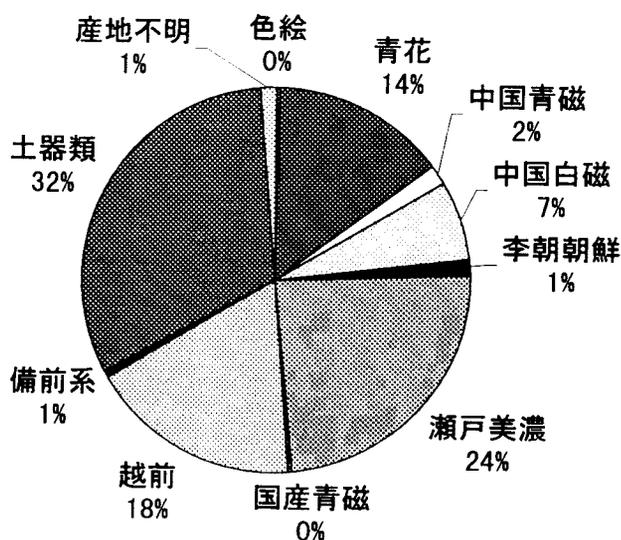


Fig. 396 天正頃の土器組成比率

すなわち小野正敏氏は、土器組成を細かく見ることによって、それを纏めた単位の階層性やその性格を把握できるとしたが、遺構単位ではなくむしろ遺跡単位で見た場合の組成の共通性、あるいは相違点、そして前提となる遺跡の性格との関わり合いもまた考える必要があろう。

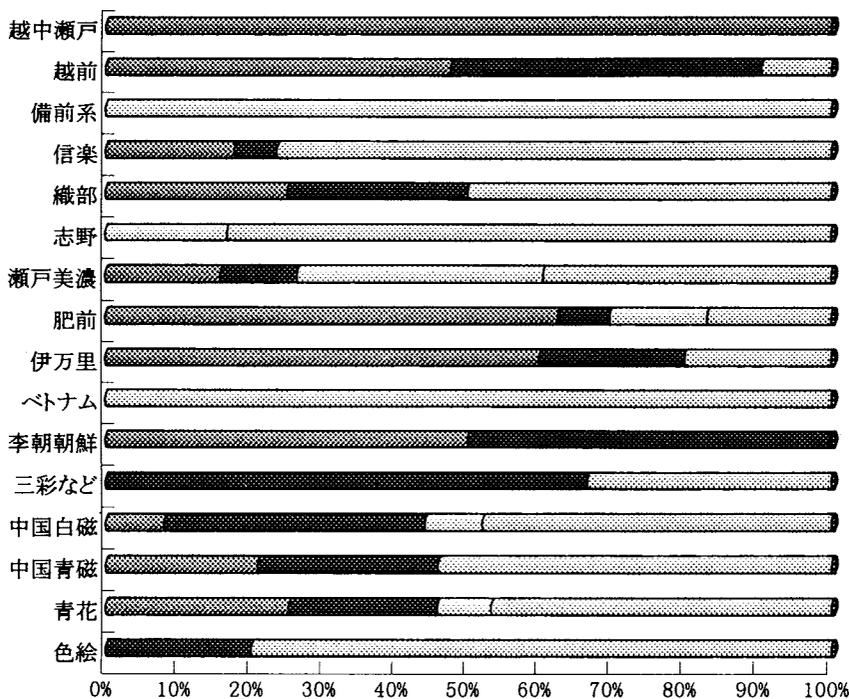
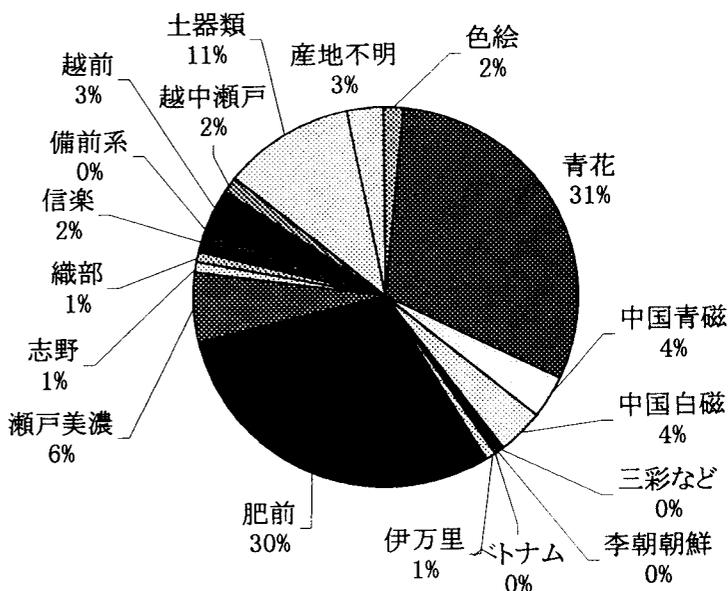
以上のように、天正頃の16世紀後半の金沢では、輸入陶磁器を食膳に使う器とし、隣国で生産される焼物で調理なり貯蔵し、近郊で生産される土器器皿を用いていた。ただし、武家社会と違って宴会は少ないようである。そして、多くの漆器の出土が示すように木製器物の占める割合が少なくなかったと考えられる。

元和頃は、江戸町跡資料しかない。本資料の土器組成は、天正頃と劇的に異なるのは、前項で記したとおりである。それは、肥前系の陶磁器が、30%の比率を占めていることからわかるように、新来の陶磁器が大阪と同じような比率で出土することは、西日本全体の物の動きに連動するものと理解できる。それと同時に、古代から知られる日本海ルートという交易の流れを反映するのであろうか。いずれにしても、新たな陶磁器を中心とする物の動きに機敏に反応していることを評価したい。すなわち、肥前系の唐津陶器から染付けの初期伊万里にスムーズに移行していると考えられるのである。慶長から元和ころの細かな変化については、大手門前で発掘調査された成果を採用することによって、より細かいそして確かな遺物相の変化を知ることができる。調査報告書の刊行に期待したい。

寛永頃の資料数は多い。ところが発掘調査地点ごとに個性が際だっており、当時の陶磁器組成を知ることが非常に困難である。これらをトータルでみた場合（但し、盛土3の土師器皿を統計資料中に入れていない）、Fig. 397のようになる。中国製染付け（青花）が31%、初期伊万里が1%、肥前系陶器が30%、瀬戸美濃が6%、土師器皿が11%、となる。特徴的なのは、これらの他に、中国の色絵（五彩）青磁・白磁、三彩、李朝朝鮮製陶器と白磁、ベトナム製陶器、志野・織部・信楽、備前系、越前、越中瀬戸など多彩な遺物群が出土していることである。このような特徴は、金沢城本丸からの遺物の廃棄層を確認した車橋門調査区資料のみならず、1630年頃までの遺物の流通をよく示すものである。そして、大阪城後期の陶器組成に近いものであり、前代の流通形態を受け継いだ状態であることを示しているといえよう。

このような陶磁器組成が、金沢城下でどれほど敷衍ができるかが課題であり、同時に金沢城の特殊性を浮きだたせることもできよう。城内と城下と遺物の様相の違いがあるのか、それとも消費社会となる江戸中期以降に遺物相の違いが出るのか、そしてそれらの違いに内在すると予想される「物」の流通がそれぞれの階層で違うのか、違いがないのか、等々波及する問題点も多々ある。

種別	盛土3	盛土4	沈4層	車橋門	合計
色絵	0	2	0	8	10
青花	50	41	15	93	199
中国青磁	5	6	0	13	24
中国白磁	2	9	2	12	25
三彩など	0	2	0	1	3
李朝朝鮮	1	1	0	0	2
ベトナム	0	0	0	1	1
伊万里	3	1	0	1	5
肥前	122	14	26	33	195
瀬戸美濃	6	4	13	15	38
志野	0	0	1	5	6
織部	1	1	0	2	4
信楽	3	1	0	13	12
備前系	0	0	3	0	3
国産青磁	0	0	1	0	0
越前	10	9	0	2	21
越中瀬戸	10	0	0	0	10
土器類	-	0	49	23	72
産地不明	7	0	1	12	20
合計	220	91	111	234	656



	色絵	青花	中国青磁	三彩など	李朝朝鮮	ベトナム	伊万里	瀬戸美濃	志野	織部	信楽	越前	越中瀬戸
☐ 車橋門	8	93	13	1	0	1	1	15	5	2	13	2	0
□ 沈4層	0	15	0	0	0	0	0	13	1	0	0	0	0
■ 盛土4	2	41	6	2	1	0	1	4	0	1	1	9	0
▨ 盛土3	0	50	5	0	1	0	3	6	0	1	3	10	10

Fig. 397 寛永頃の土器組成比率

第4節 結語

陶磁器組成が派生する問題を前節で報告したが、石川門前土橋の発掘調査で新たになった知見も非常に多く存在する。今までの調査を総合して問題となる部分を整理したい。

・旧地形の問題

金沢城は、従前、兼六園と金沢城が台地で続いていたが、織田方による金沢御堂占領によってそこを断ち割って堀とした、と理解されていた。しかし、本調査によってその部分が本丸相当部分であることが推測された。石川門前は谷地形となっており、金沢御堂時代にそれを横断する土橋が作られている。さらに江戸期の盛土中から旧石器が出土している。このような点から金沢市街地域が、金沢城築城以前の地形を反映していつもののではないことが確実であり、どのように地形を変形しているのであろうか。さらに、想定される旧地形がどのような金沢城前史を物語ってくれるか、これからの課題である。

・金沢御堂の問題

金沢城は、一向一揆寺院である金沢御堂を改修して作られたといわれており、城内の各所にその名残がある。それは、二の丸から本丸にわたる「極楽橋」や水の手門付近の「お千代が池」、百間堀の別名である「蓮池堀」等である。金沢城の下に金沢御堂が隠れていることは確実であるものの、その実体ははなはだ不明確である。今回の発掘調査によって石川門前の土橋が金沢御堂の時代に作られ、その背後に鍛冶集団の工房を確認し、金沢城内あるいはその周辺で金沢御堂の実体をほんの少し窺い知ることができたものの、その全容解明には程遠い。これから城内の発掘調査の進展によって、金沢御堂の様子が次第に明らかになるものと期待されると同時に、今回の調査成果が金沢御堂の理解するための大きな一助になると同時に、研究の大きな第一歩であると考えている。

・金沢城築城の問題

金沢城は、前田利家や利長が原形を作り、宝暦の大火以後に現在の姿にほぼ定まったといわれている。しかしながら、本報告の濱岡伸也氏の考察にもあるように、石川門の枡形が築造当初、左に入っていたのが何時のころからか右に入るように作り変えられており、しかも土橋の形状も違うという指摘がある。百間堀といもり堀を区画する車橋門も当初にはなく、百間堀の水堀化に伴って構築されたと考えている。しかも城内にあった家臣の屋敷を寛永頃までに順次金沢城かに出している。このような変化は、金沢城にとって城の各所の機能を大きく変えることであり、戦略的な面を含めて、金沢城の構造が大きく変化していると評価できよう。このような改造が、城内のどの部分に対してどのように行われたのか、そしていかなる動機で行われたのか興味あるところである。

・辰巳用水をめぐる問題

辰巳用水は、藩命により寛永9年に板屋平四郎が城内に引き込む上水道の目的で作ったといわれており、直接的な建設動機は前年の寛永の大火を教訓とした水の確保であるといわれている。それがどれほど真実に近いか考古学からは証明し得ないが、その遺構を確認できた意義は大きい。完成？してもしくは作り直しているようであり、前条の築城の問題とも絡んでくる。

これら4つの問題は主に遺構から見た問題点の提起だが、さらに多くの検討を加えねばならないことが存在する。個々の遺物については、枚挙に暇がないほどの問題点がある。今回の調査によって金沢城の新たな研究の展開を可能にし、基準資料を多く提示できたものである。



P L A T E



PL
50

白鳥調査区 1



上層全体



上層全体



上層中央部

PL
51

白鳥堀調査2

上層 SX02-03



上層 SX01、
SE01



上層遺構面の下
がり状況と江戸
期白鳥堀



下層全体



下層全体と地形
の上がり



下層 (最下面)



PL
53

白鳥調査区
4



SX01とSE01



SX01



SX01たちわり
状況

PL
54

白鳥調査区
5

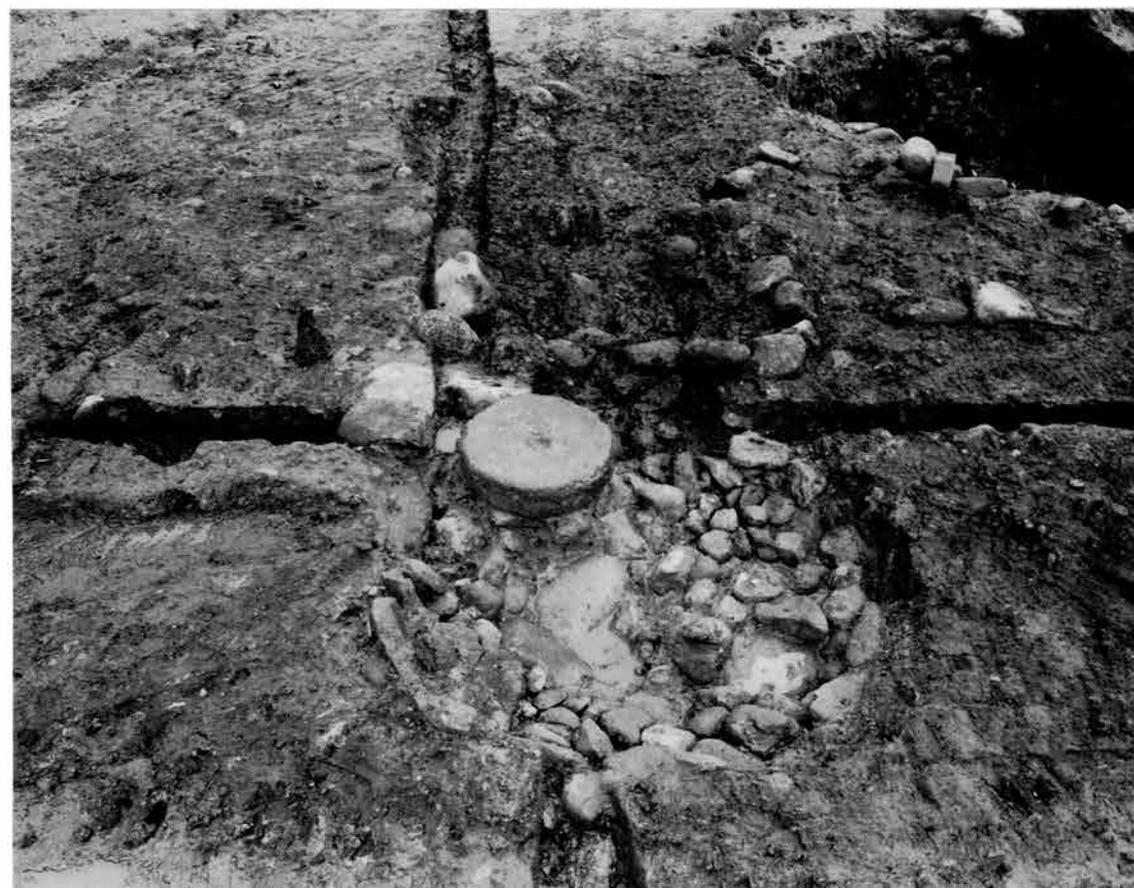
SX01断面



SX01炉壁内



SX01下の炉





SX01下の炉



SX01下の炉



SX01下の炉

PL
56

白鳥堀調査区
7

SX01下の炉



SX01下の炉



SX01下の炉





SX02上面



SX02と03

PL
58

白鳥堀調査区 9



SX02全体



SX02



SX02



SX02断面



SX02断面



SX02と03の
断面



SX02断面

PL
60

白鳥堀調査区II

SX03上面



SX03全体



SX03全体





SX03



SX03



SX03

PL
62

白鳥堀調査区
13

SX03断面



SX03断面



SX03断面



SX03断面



SX03
断面



SX03断面



SX03断面



SX03遺物出土
状況



PL
64

白鳥堀調査区
15

SX03断面



SX03下部



SX03下部





拡張区



杭検出状況



杭検出状況

PL
66

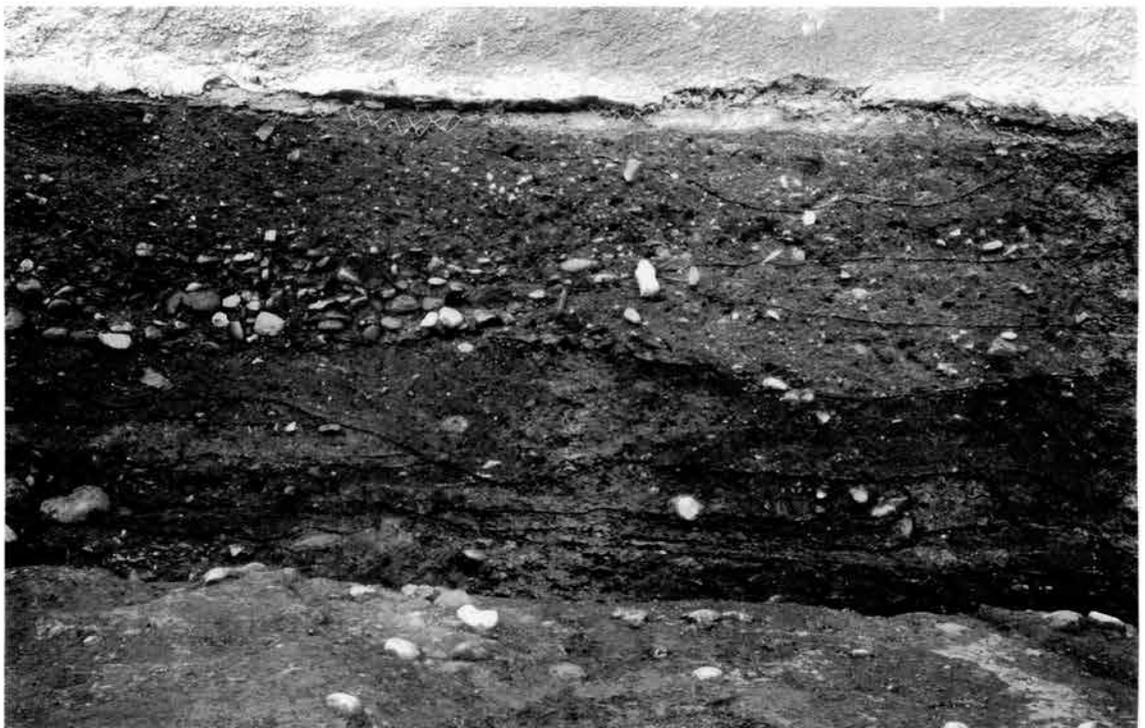
白鳥堀調査区
17



調査区土層断面



調査区土層断面



調査区土層断面



調査区土層断面



調査区土層断面



調査区土層断面



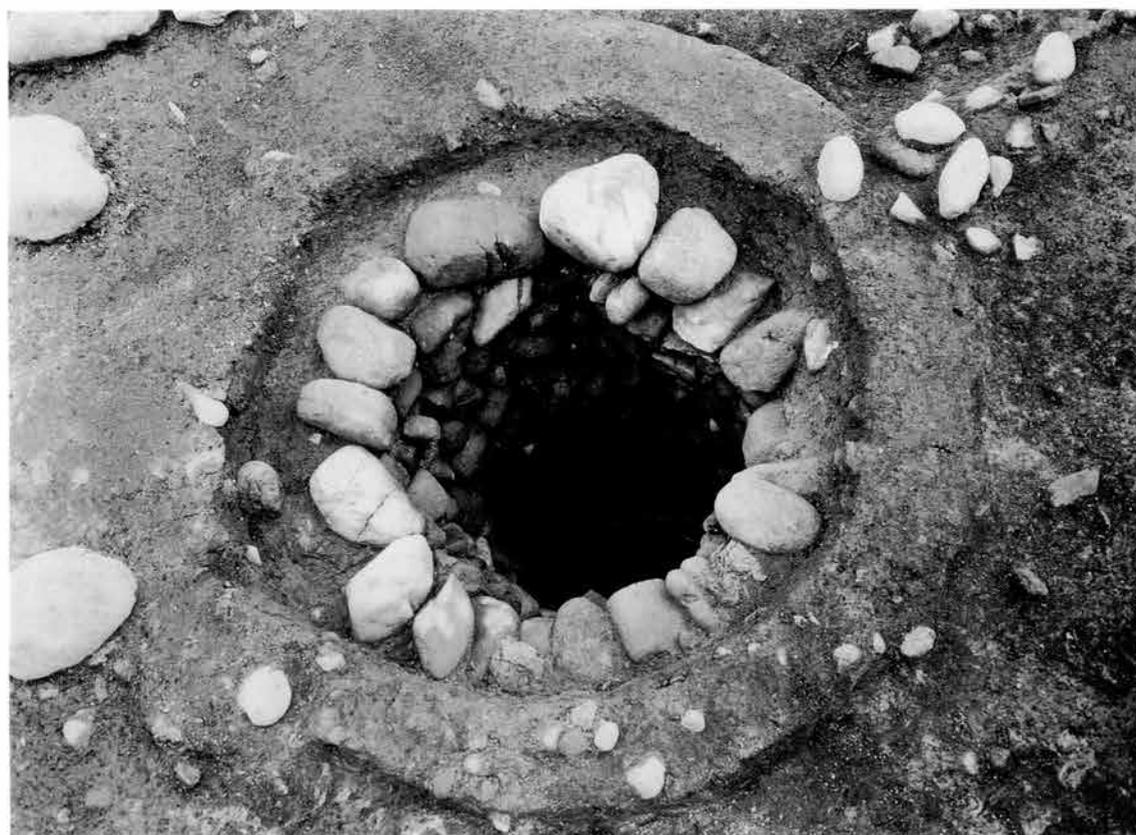
調査区土層断面

PL
68

白鳥堀調査区
19



SE01とSX01



SE01



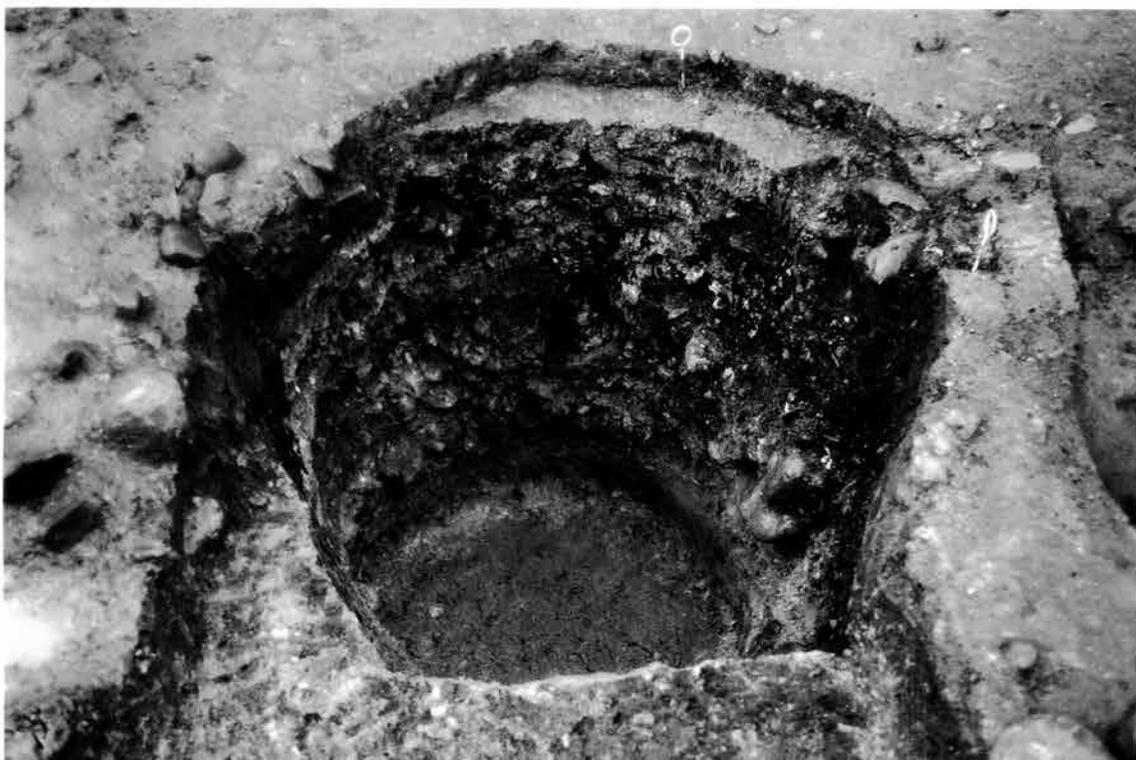
SE01石組中の
石臼



SE01石組み



SE01半截



SE01掘り方

PL
70

白鳥堀調査区
21

SX02・03南
鉾澤たまり



土台石と柱



SK01



SD01



SD01石列



SD01石列



SD01石列と杭



PL
72

白鳥堀調査区
23

下層



下層の杭列



下層の杭列



下層の杭列



下駄



櫛



曲物



漆器碗



漆器碗



漆器皿



土鈴



金具



小柄





金沢城遠景



最終面全景



調査区土層

第1面



第1面



SD01と土師器
皿



PL
76

平成6年度白鳥堀調査区3

ピット



第2面

PL
77

平成6年度白鳥堀調査区4

第3面全景



SK301



SX401上面と3
面の関係

PL
78

平成6年度白鳥堀調査区5

第4面全景



SX401上面検出
状況



SX401



SX401



SX401

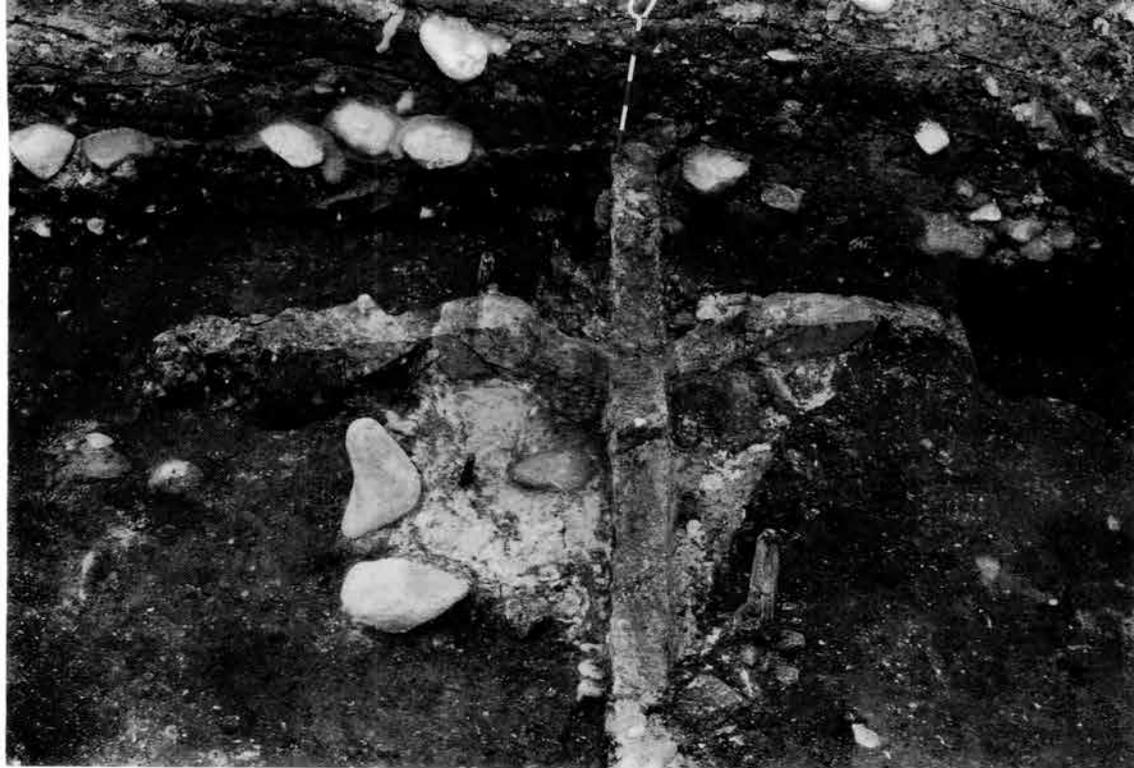


SX401土層

PL
80

平成6年度白鳥堀調査区7

SX401構造



SX401



SX401下部



SX401土層



SX401



SX401と土層断面



PL
82

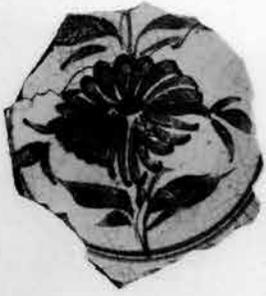
平成6年白鳥堀調査区9



SX402



卯辰山から
遠景



83-3



83-7



83-4



83-9



83-8



84-13



83-11



83-14



83-19



87-1



87-2



91-5



87-6



91-1



91-3



91-4



91-7



91-8



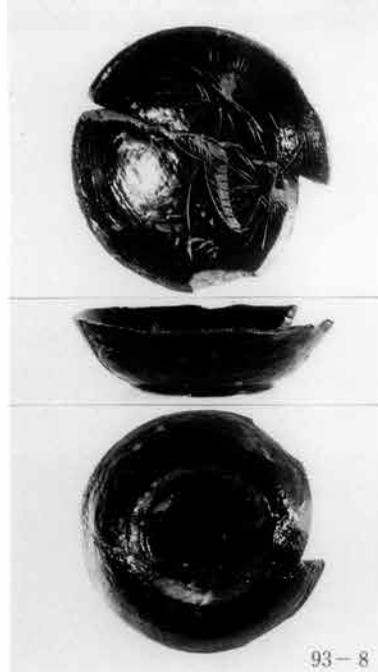
91-9



93-6



93-4



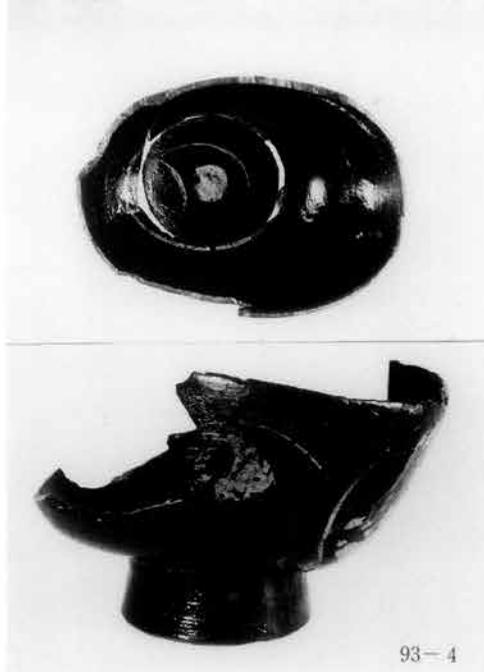
93-8



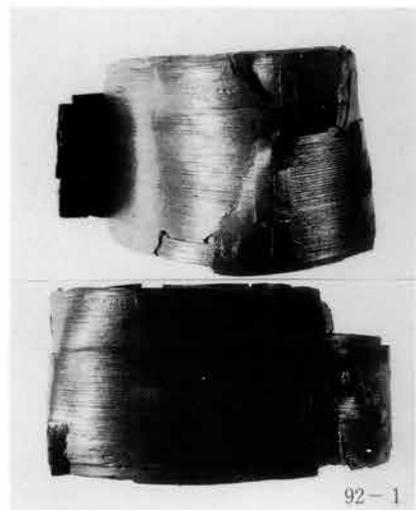
93-2



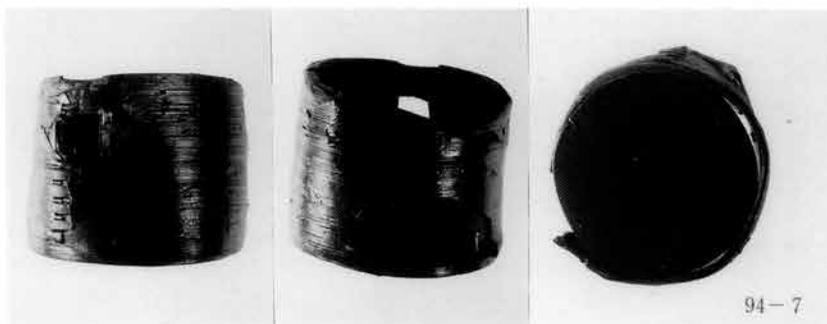
93-3



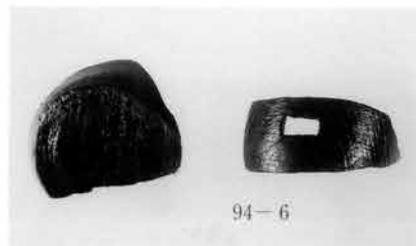
93-4



92-1



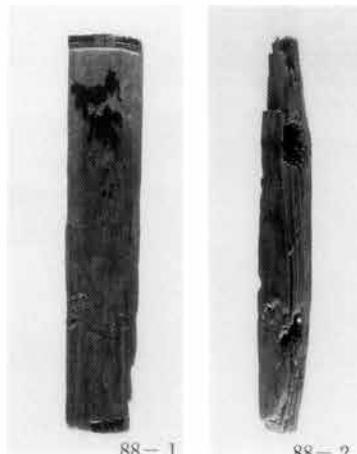
94-7



94-6

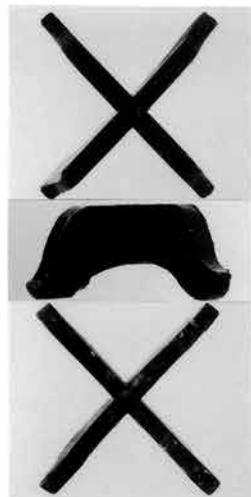


94-2



88-1

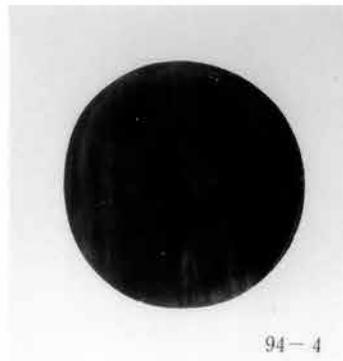
88-2



94-10



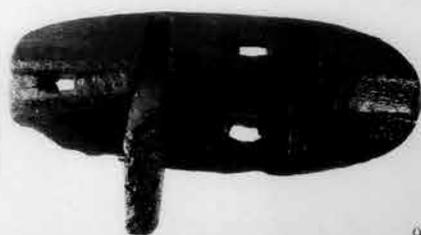
94-9



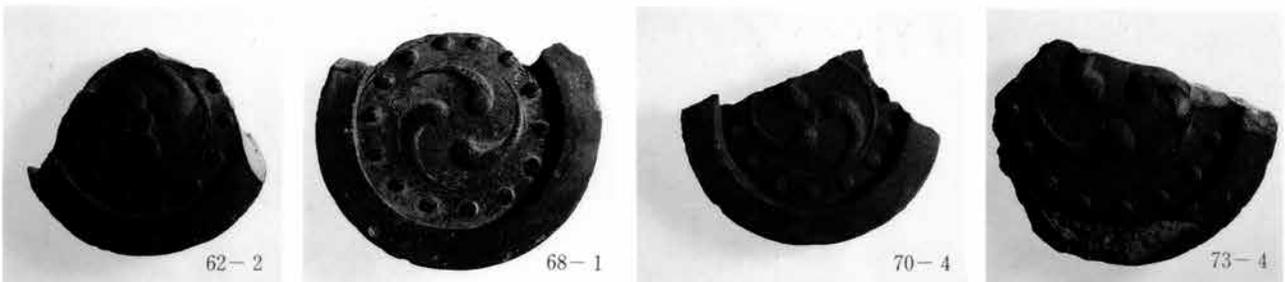
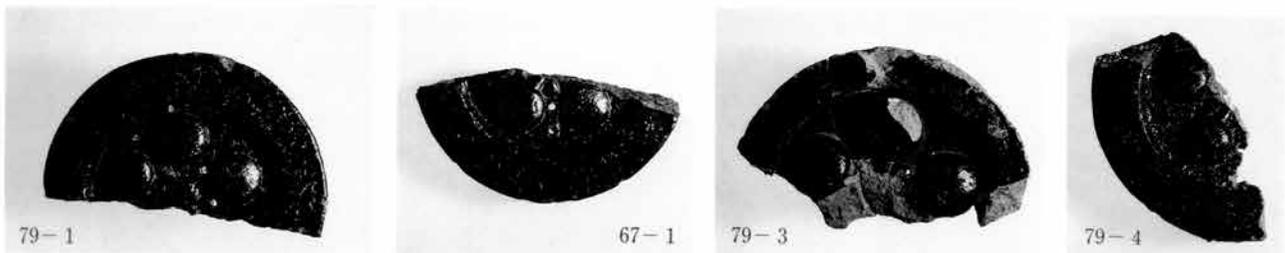
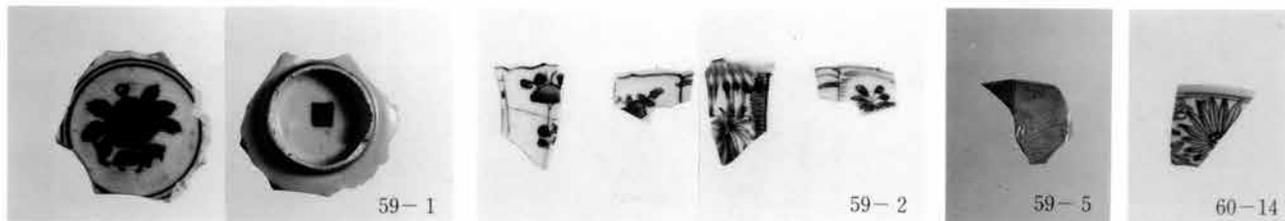
94-4

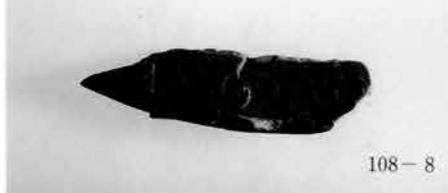
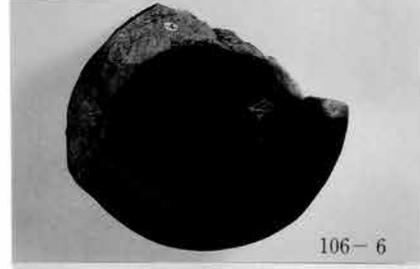
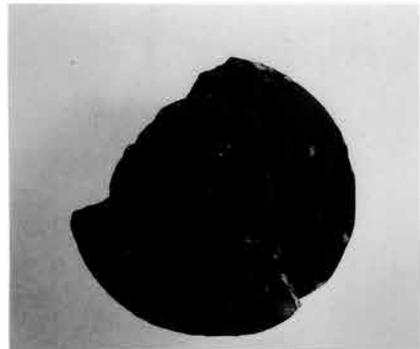
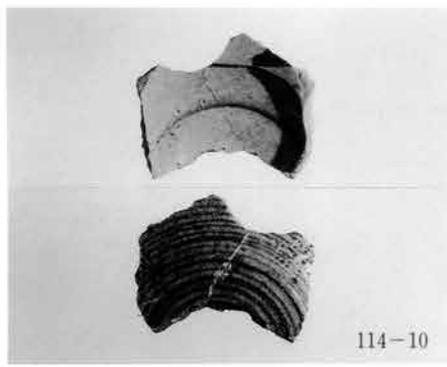
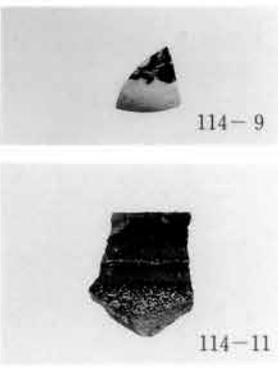
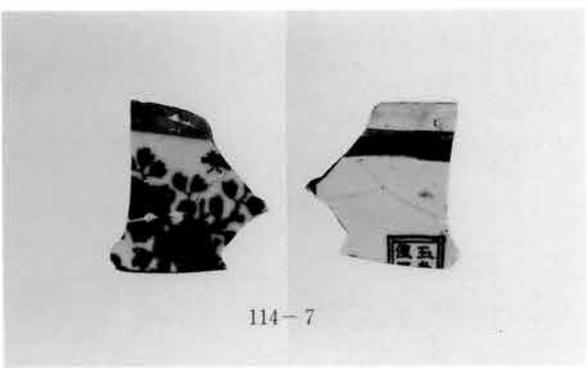
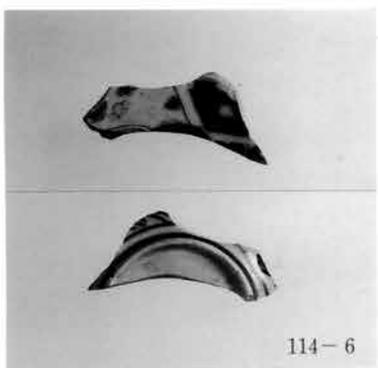
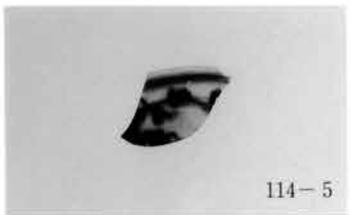
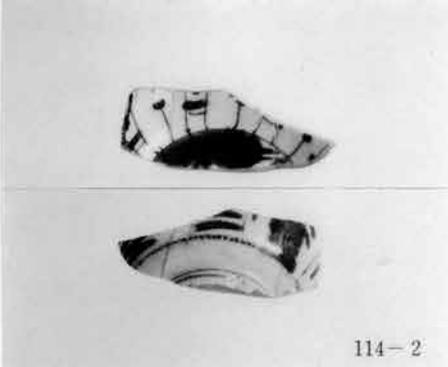
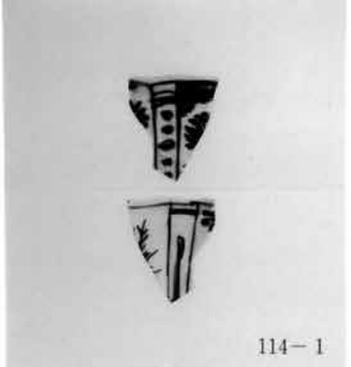
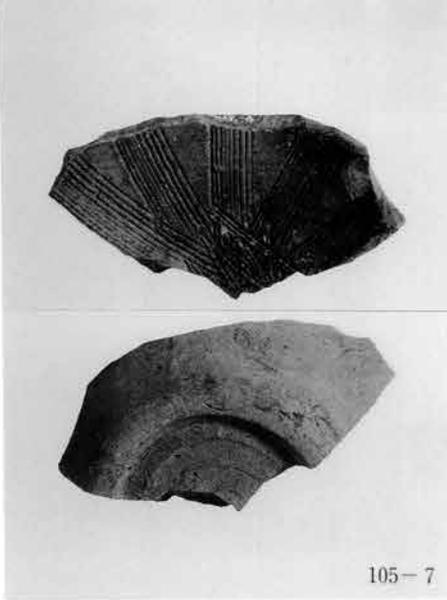


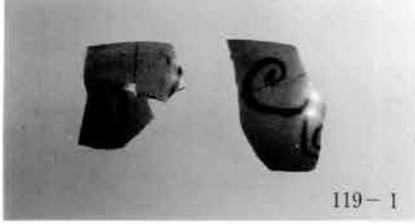
94-16



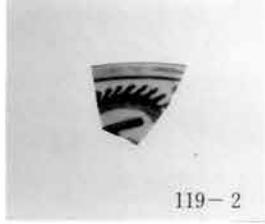
94-1







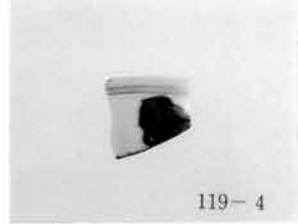
119-1



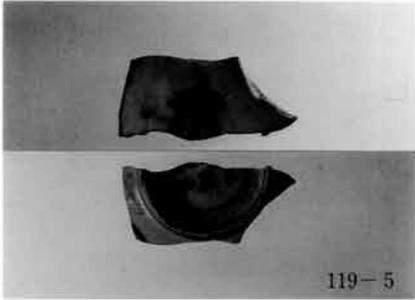
119-2



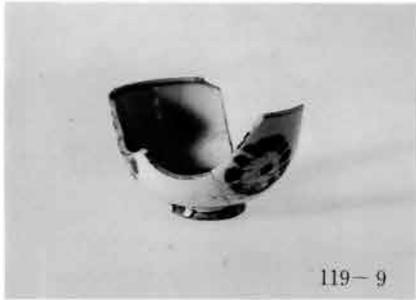
119-3



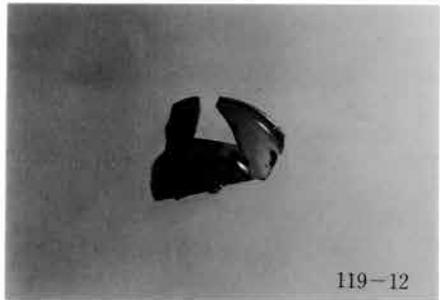
119-4



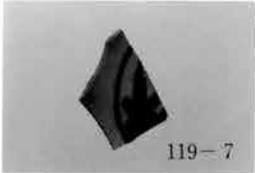
119-5



119-9



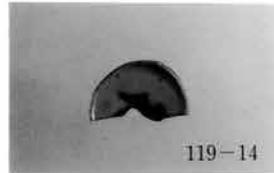
119-12



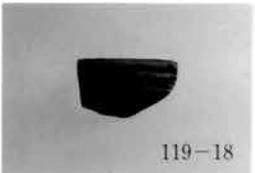
119-7



119-8



119-14



119-18



119-15



119-21



119-19



119-16



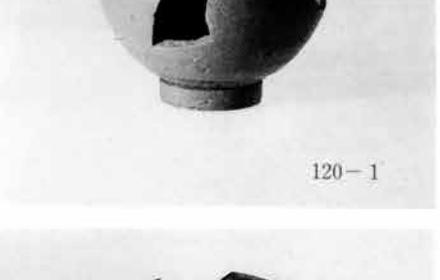
119-22



120-2



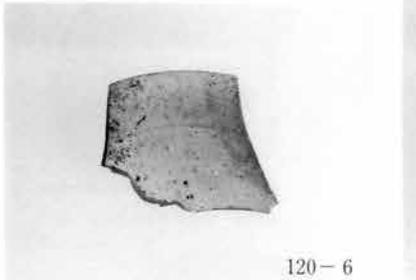
120-3



120-1



120-5



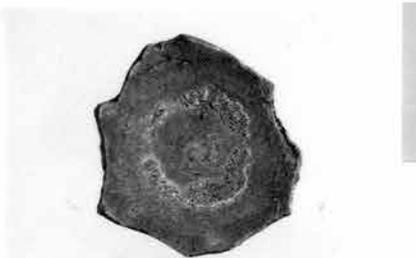
120-6



120-13



120-8



120-7





120-14



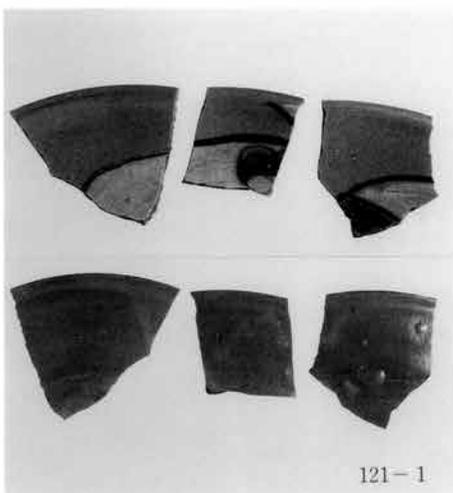
120-10



120-11



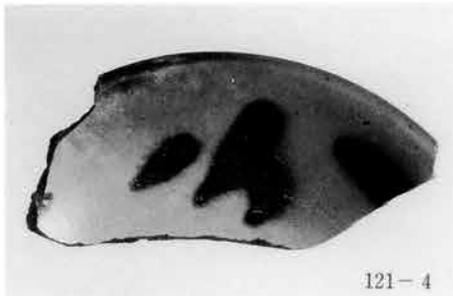
120-12



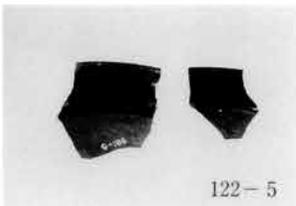
121-1



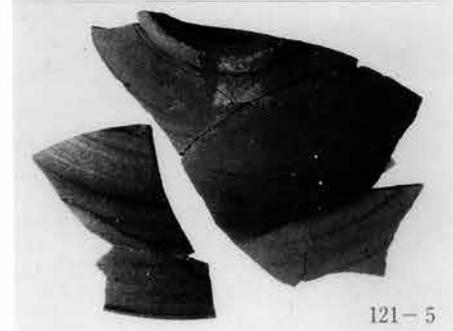
121-3



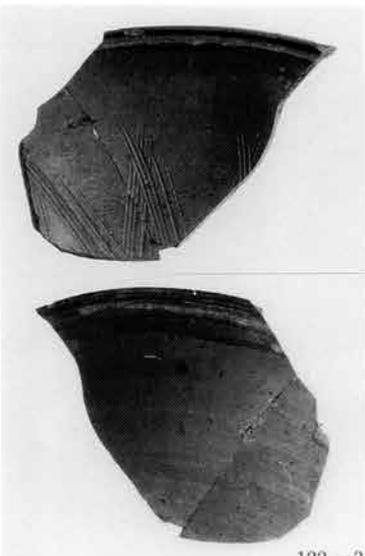
121-4



122-5



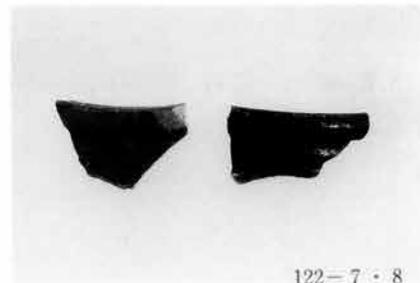
121-5



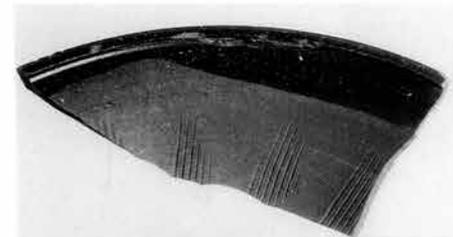
122-3



122-4



122-7・8



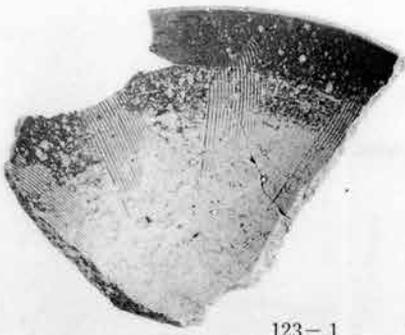
122-1



123-3



123-4



123-1



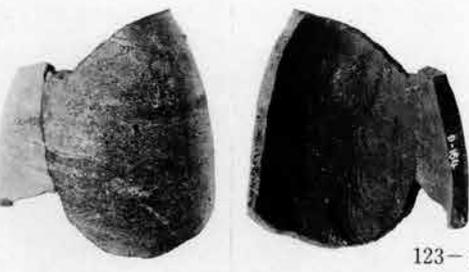
123-2



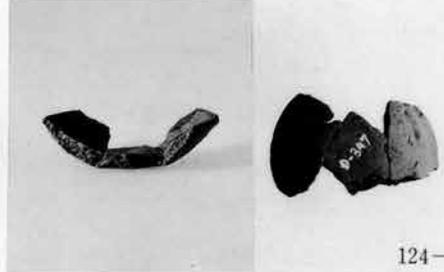
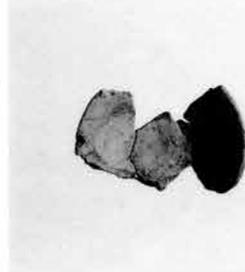
123-5



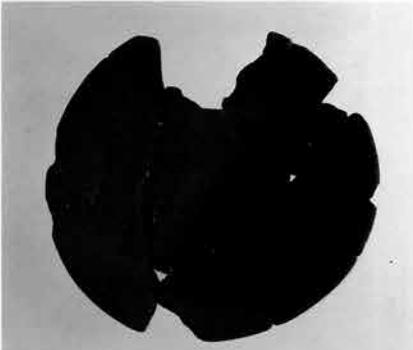
123-6



123-7



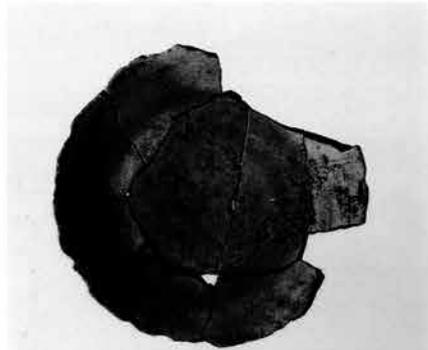
124-14



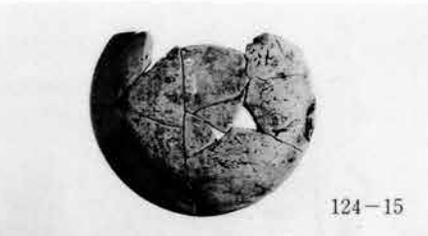
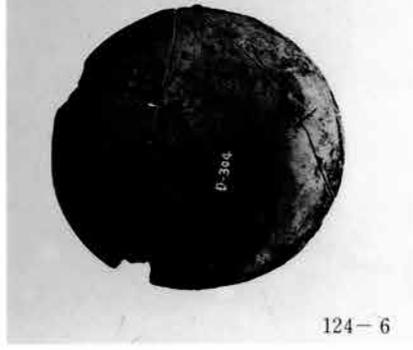
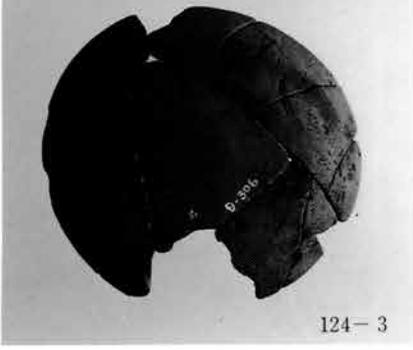
124-3



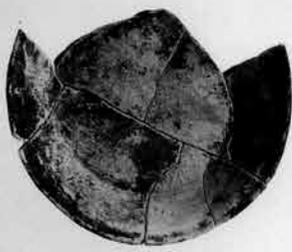
124-6



125-11



124-15



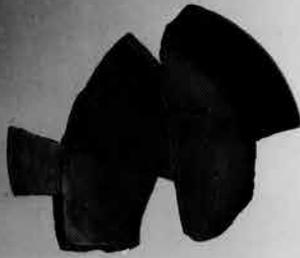
125-15



125-19



125-17



127-5



127-7



127-10



130-6



130-7



131-2



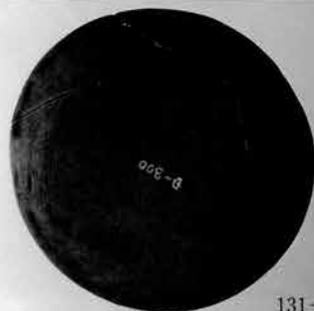
131-2



132-7



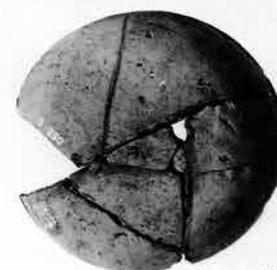
132-8



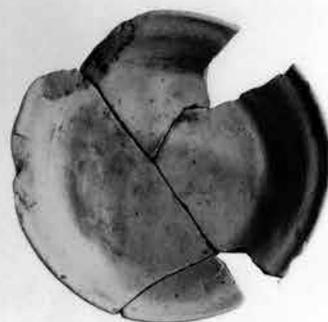
131-12



131-14



132-5



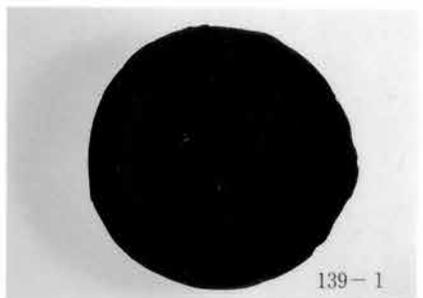
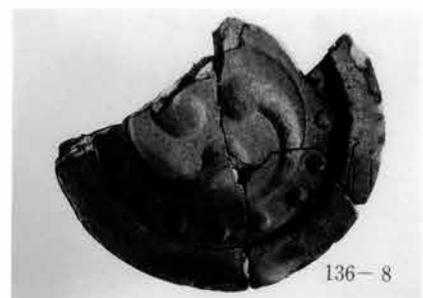
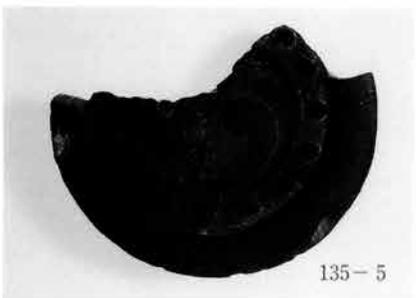
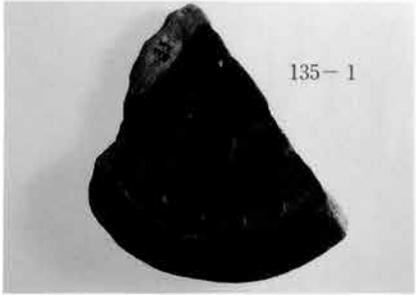
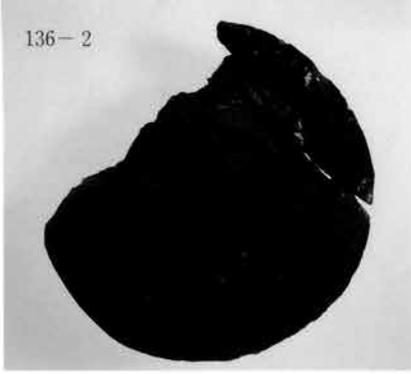
133-11



133-2



130-11





139-3



139-5



139-6



139-7



140-1



140-2



140-3



140-4



140-5



140-6



169-1



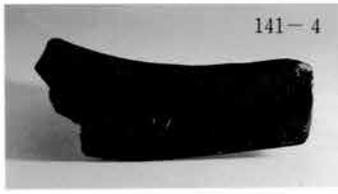
169-2



169-7



141-2



141-4



142-1



142-3



142-2



143-1



142-1



143-2



142-2



143-4



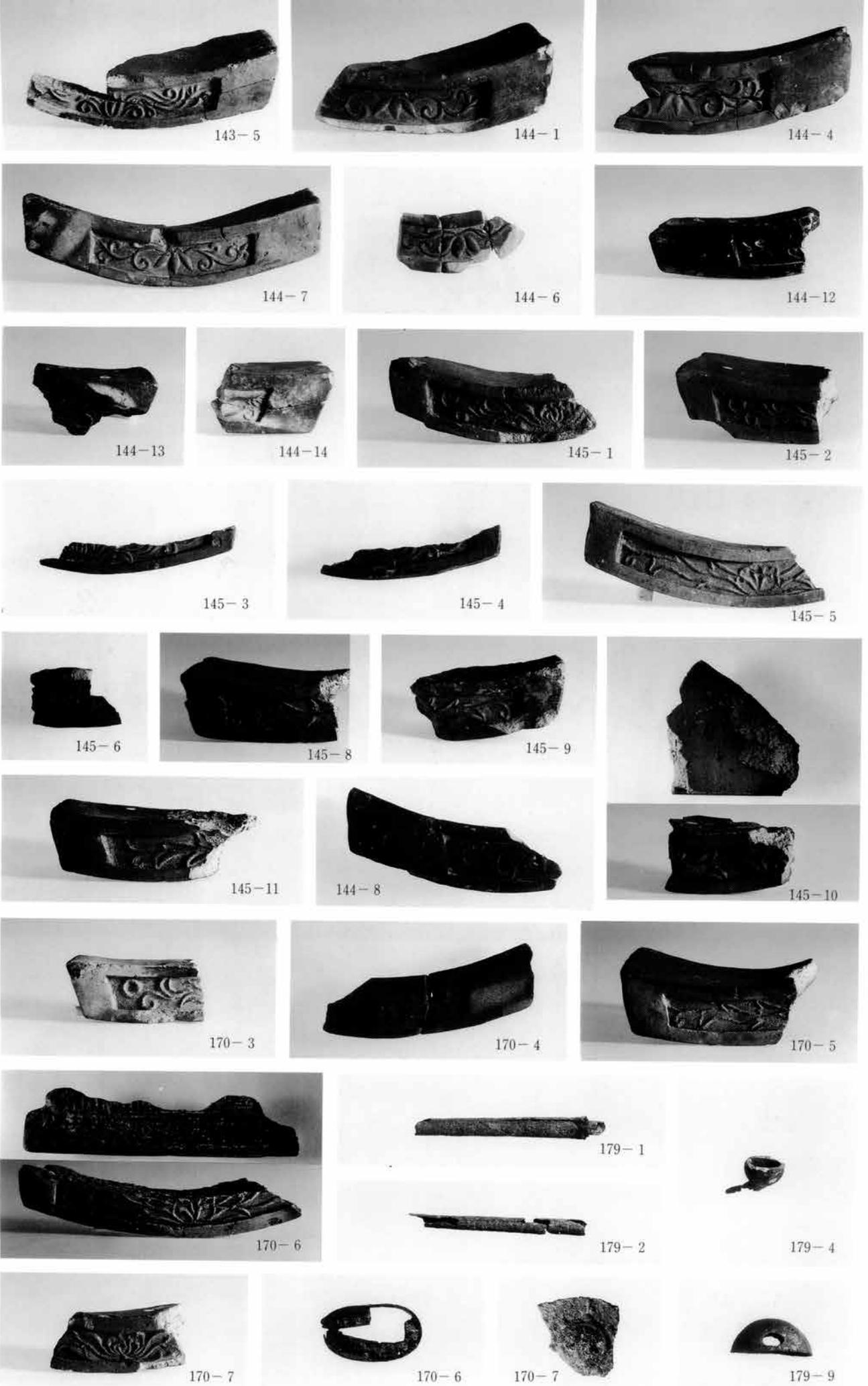
143-3

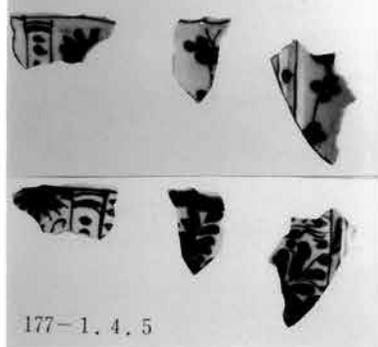


143-1



143-3

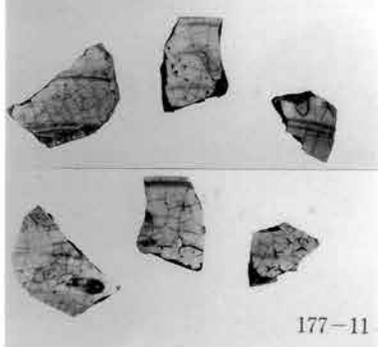




177-1, 4, 5



177-2



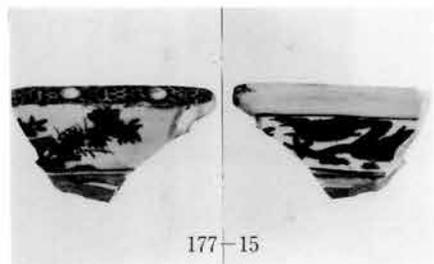
177-11



177-12



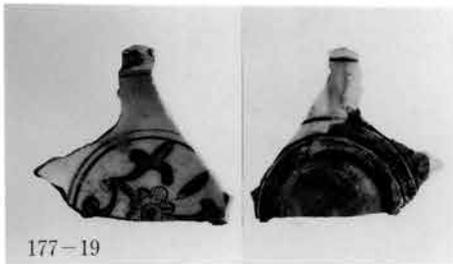
177-14



177-15



177-18



177-19



177-20



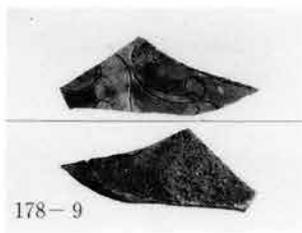
178-5



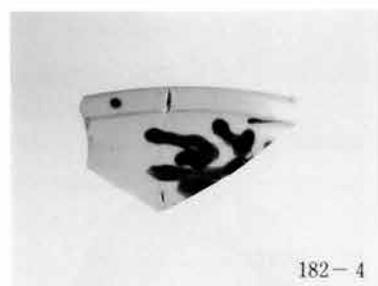
178-6



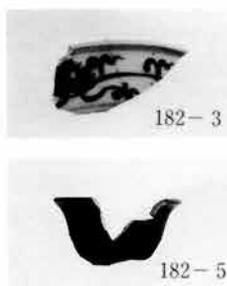
178-8



178-9

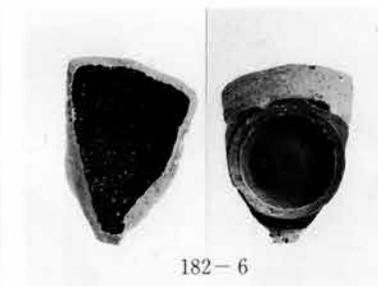


182-4



182-3

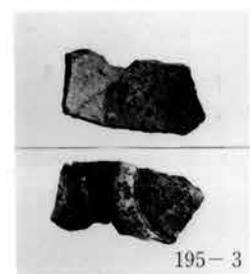
182-5



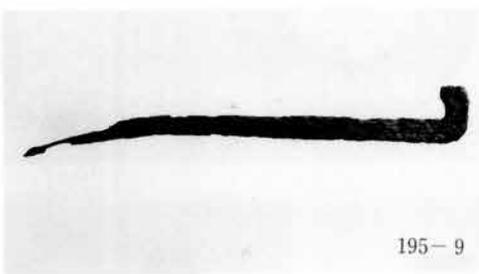
182-6



182-7



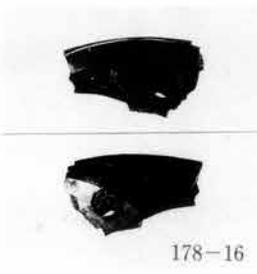
195-3



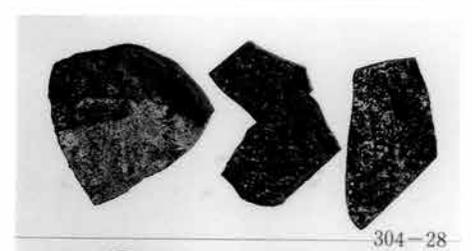
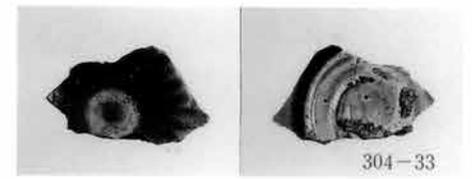
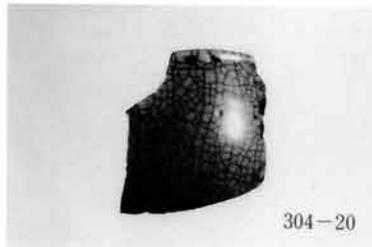
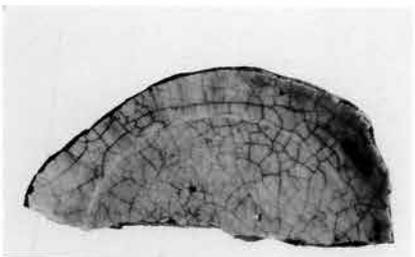
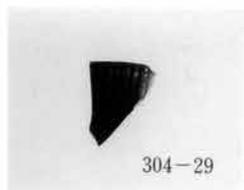
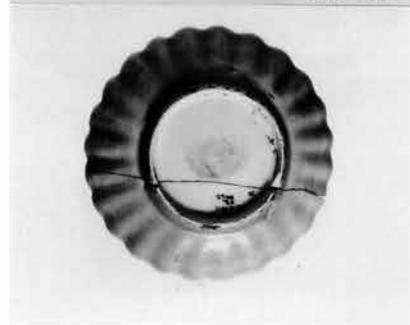
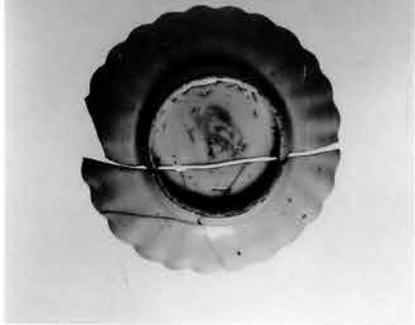
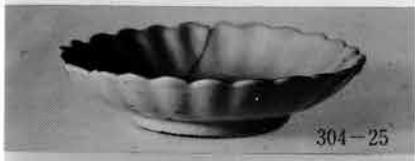
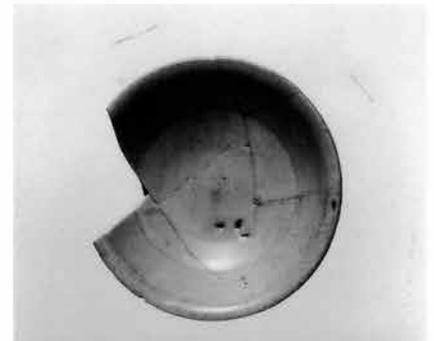
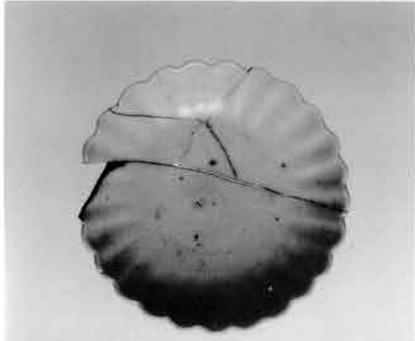
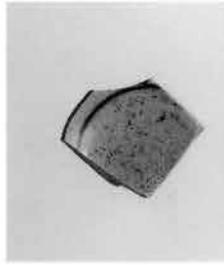
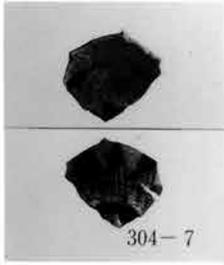
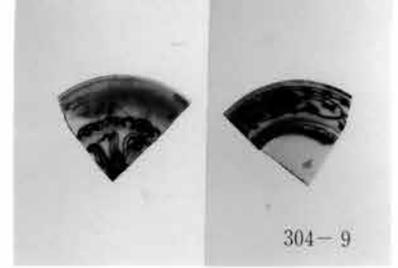
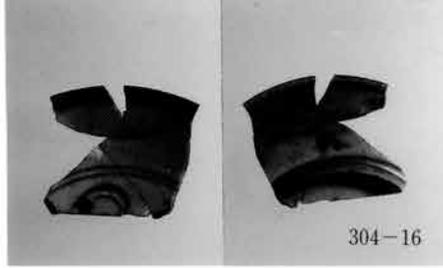
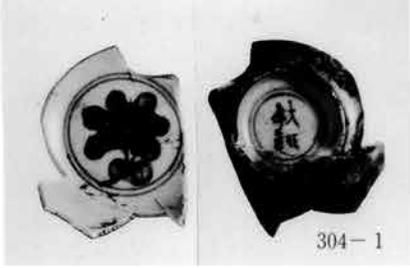
195-9

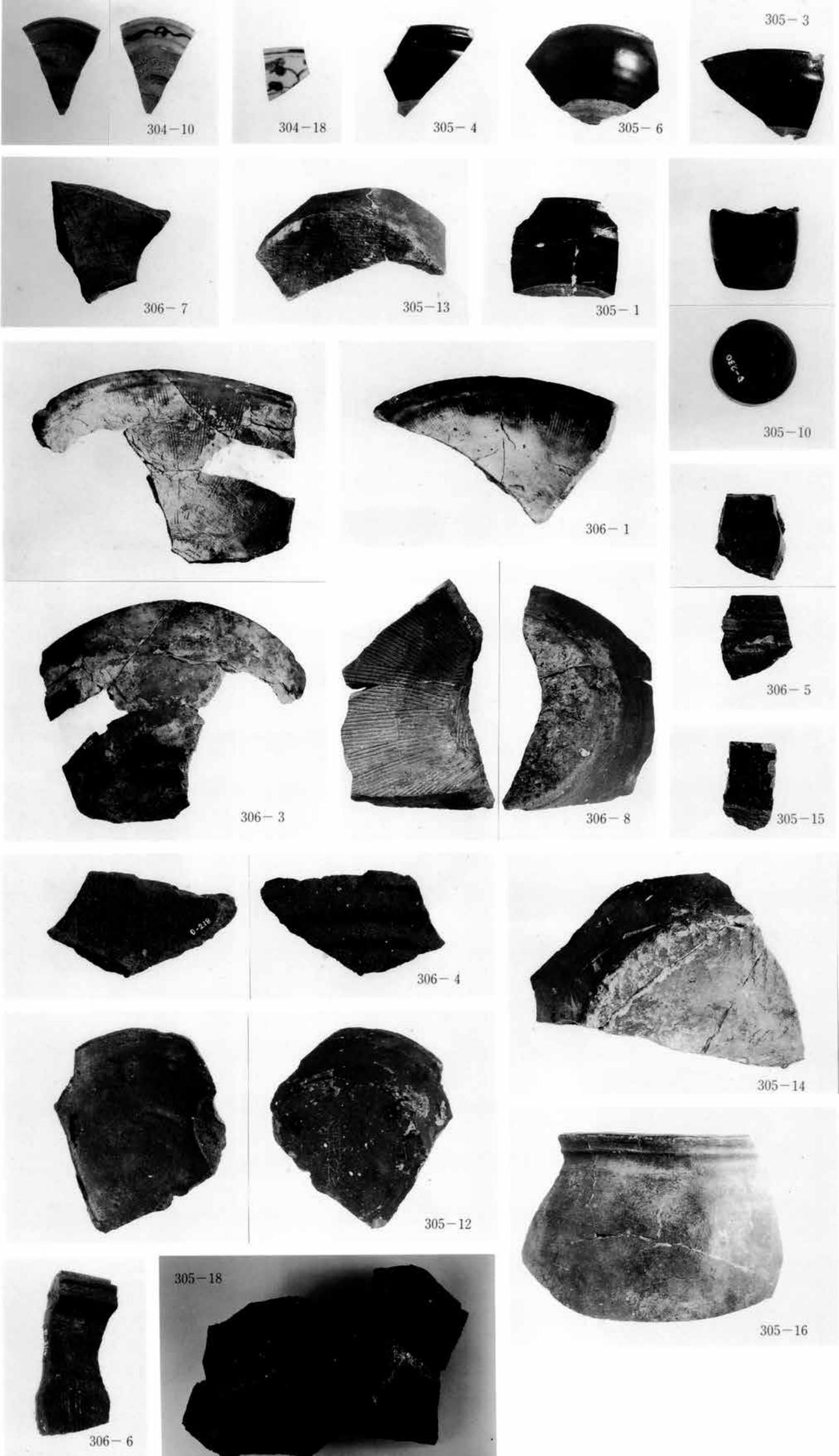


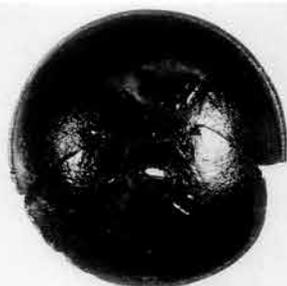
178-17



178-16



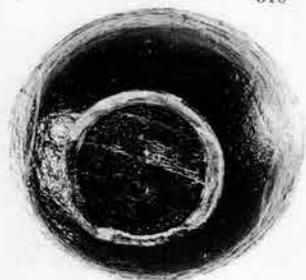




310-3

310-8

310-7



311-8



310-4



311-4



310-6



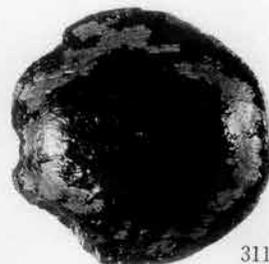
310-2



310-5



310-9



311-3



311-1



311-10



311-6



311-5



311-9



311-12



311-12



237



311-11



311-7



312-4



312-3



312-2



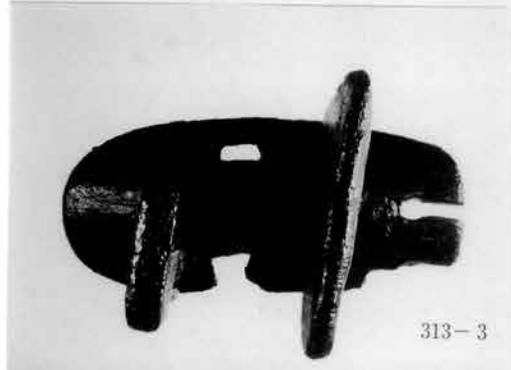
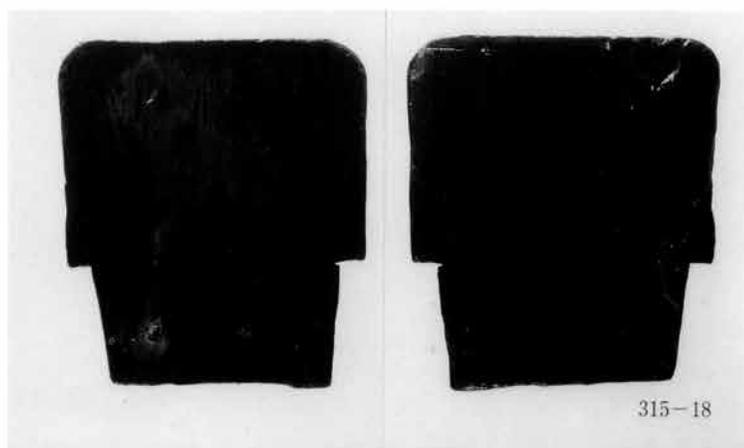
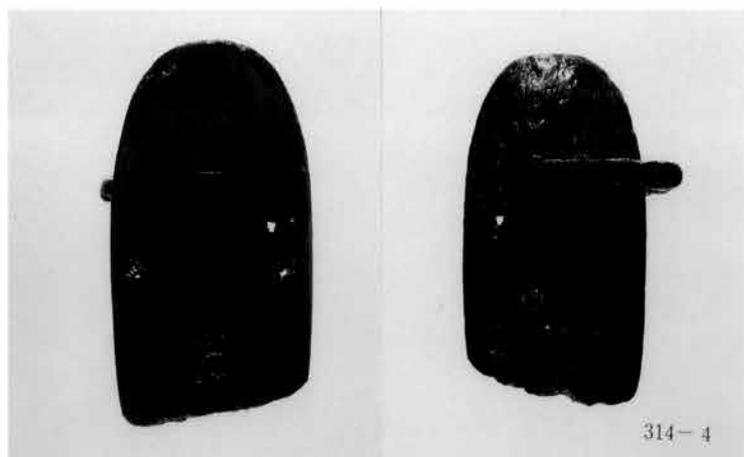
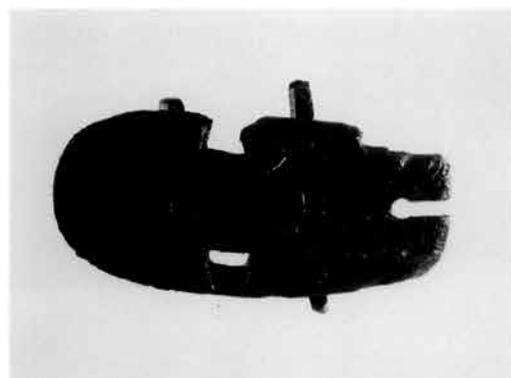
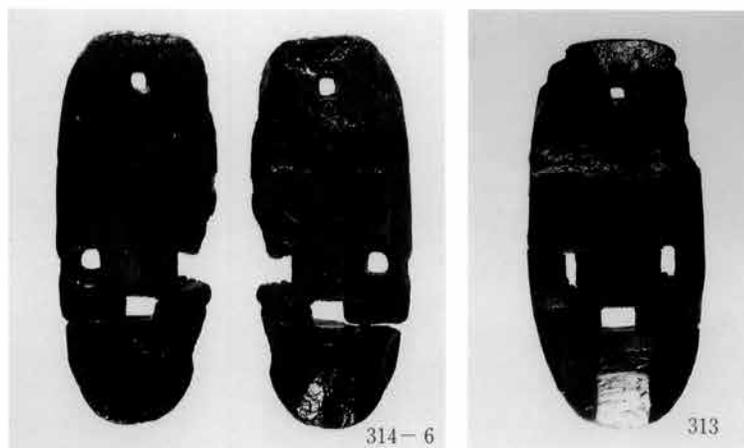
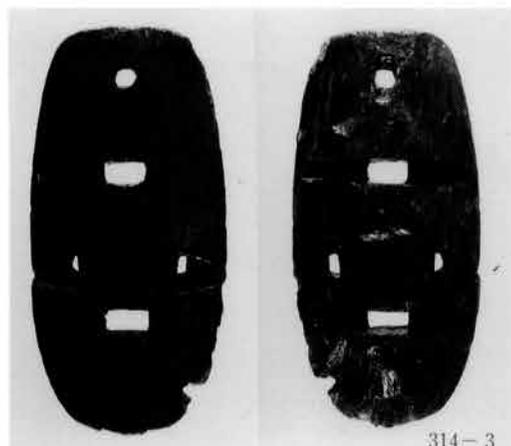
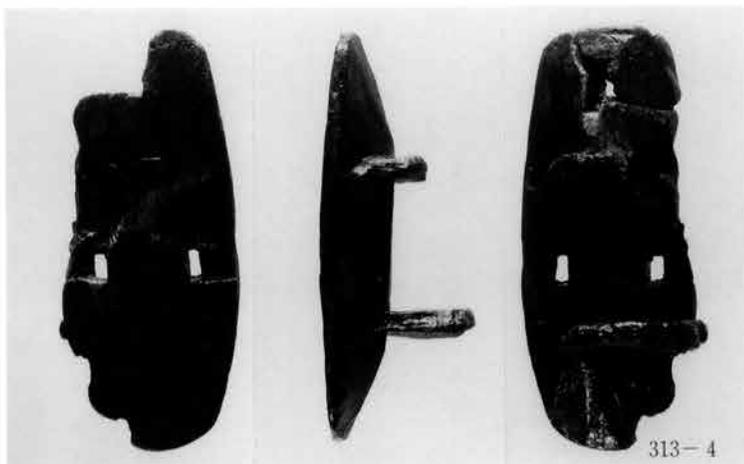
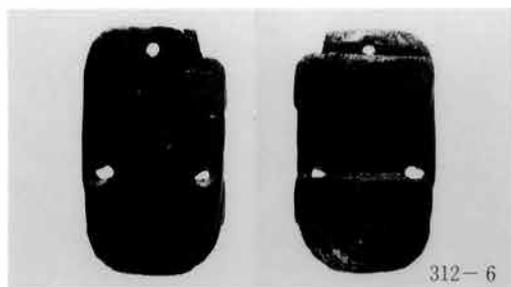
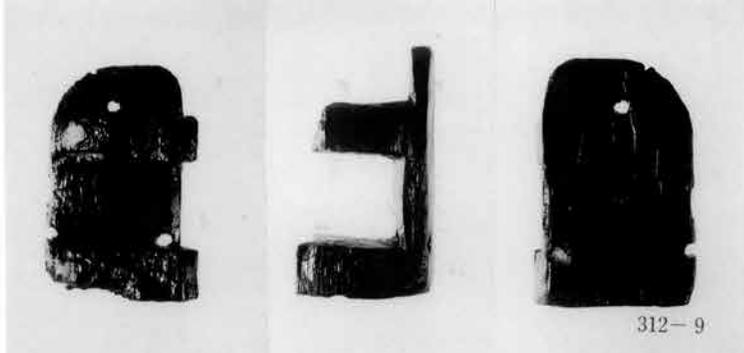
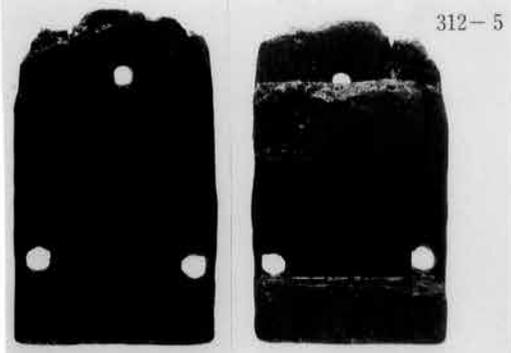
312-1



312-7



312-8





315-19



315-16



315-10



315-17



315-15



315-13



315-14



315-8



315-11



315-7

315-6



315-1



315-3



315-2



316-1



315-0



315-4



316-2



316-4



316-7



316-6



316-5



316-13



316-9



316-10



316-14



317-5



317-10



317-6



317-17



317-13



317-18



317-7



318-12



317-14



318-1



318-3



318-7



318-2



318-16



318-17



318-11



318-13



318-10



318-15



287-1



287-2、3



319-3



319-4

319-2



319-7



319-1



319-6



319-5



319-8



319-12



321-8



321-6



321-11



319-11



321-4



320-13



320-1



320-2



321-7



321-10



322-1



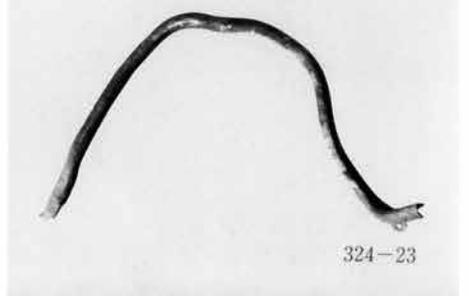
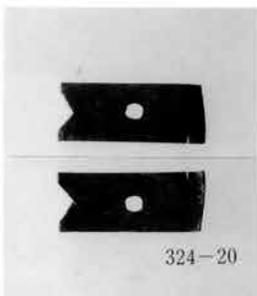
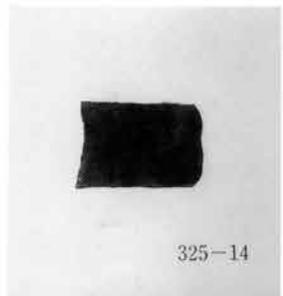
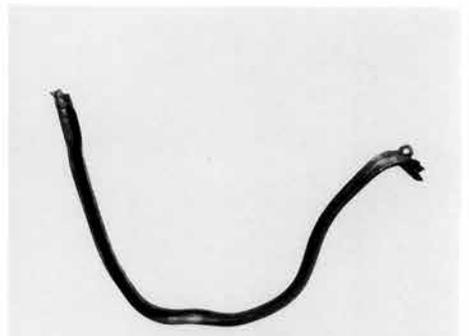
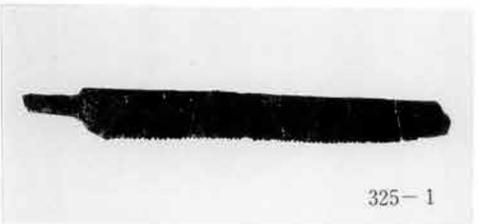
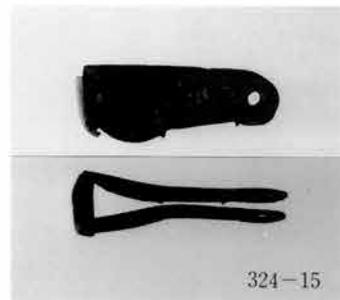
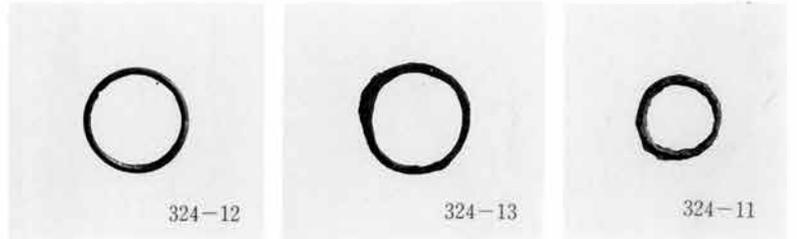
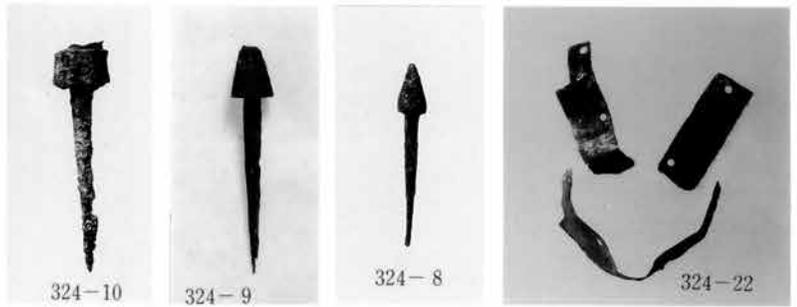
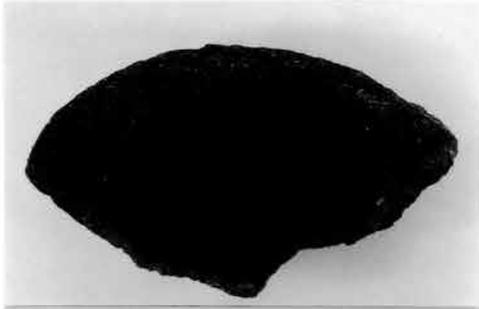
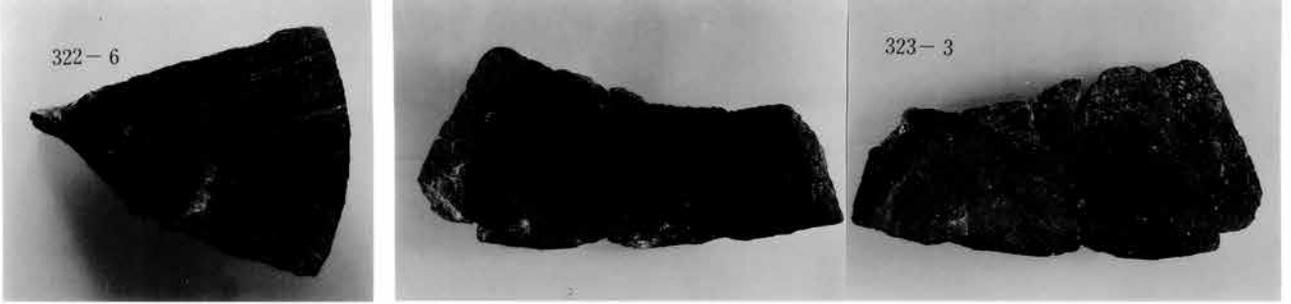
322-4



322-2



322-5





325-7



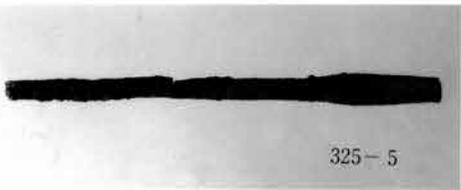
325-6



326-1



325-13



325-5



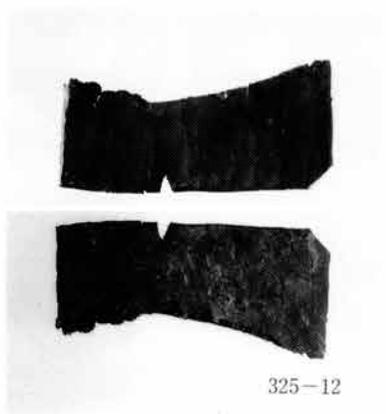
325-8



325-16



325-9



325-12



325-11



326-26



326-4



326-2



326-9



326-5



326-3



326-7



326-6



326-11



326-13



326-15



326-22



326-10



326-18



327-8



327-20



326-16



327-1



327-3



327-11

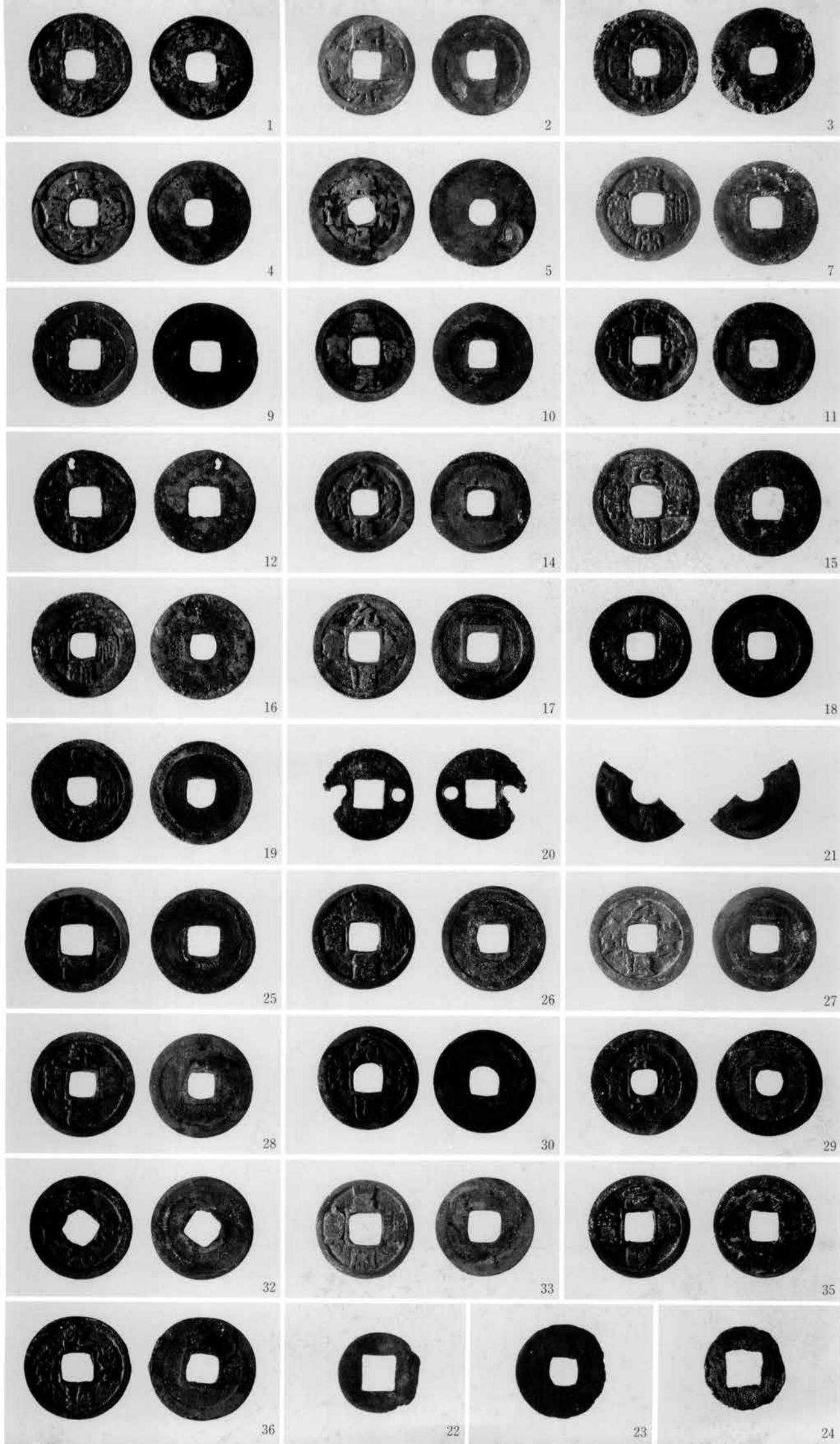


327-23



327-29





金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)
発掘調査報告書Ⅱ

平成10年3月20日 印刷
平成10年3月30日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地1号
〒921 電話 (076) 243-7692 番代

印刷 株式会社橋本確文堂
